財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第31集

曽川１号遺跡（Ｌ・Ｍ地区）

一般国道486号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１０

財団法人　広島県教育事業団

a　遺跡調査前遠景（空中写真，南西から）

b　遺跡調査前遠景（空中写真，北から）

a　ＳＫ 238 出土遺物

b　籠目痕跡（ＳＫ 238 出土壺）

例　言

1　本書は平成17（2005），18（2006）年度に調査を実施した一般国道486号道路改良工事に係る曽川（そがわ）１号遺跡Ｌ・Ｍ地区（尾道市御調町大町字曽川・米田所在）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は広島県尾三地域事務所との委託契約により，財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。

3　発掘調査は次のものが担当した。

Ｌ地区（平成17年度）　岩本正二・鍜治益生・山田繁樹

Ｍ地区（平成18年度）　渡邊昭人・大上裕士・唐口勉三，森原聖（財団法人　安芸高田市地域振興事業団から派遣）

4　出土遺物の整理・復元は，平成18年度に岩本，賃金職員の奥平幸男・田村直子・濱沖美都子が行い，平成19年度に鍜治・渡邊，賃金職員の有原ひろみ・氏房晃子・木村和美が行った。実測は，平成18年度に岩本，平成19年度に鍜治，平成20年度に渡邊が行った。図面の整理は，平成18年度に岩本，平成19年度に古瀬裕子・渡邊・有原，平成20年度に渡邊・有原，平成21年度に渡邊が行った。写真撮影は，平成19年度に渡邊が中心となって行った。

5　本書の執筆は，Ⅰを岩本，Ⅱを古瀬，Ⅲを岩本，Ⅳを岩本・渡邊，Ｖ１～４を渡邊，Ｖ５を岩本が行い，編集は渡邊が行った。

6　本書で使用した遺構の表示記号は次のとおりである。

ＳＢ：竪穴住居跡・掘立柱建物跡，ＳＫ：土坑，ＳＤ：溝，ＳＸ：性格不明の遺構，

Ｐ：柱穴

7　図版と挿図の遺物番号は同じである。

8　本書に使用した北方位は，平面直角座標第Ⅲ系座標北（日本座標系）である。

9　第１図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000地形図（府中・垣内・甲山・三成）を縮小して使用した。

目　次

Ⅰ　はじめに …… （１）

Ⅱ　位置と環境 …… （３）

Ⅲ　調査の概要 …… （７）

Ⅳ　遺構と遺物 …… （16）

　１　縄文時代の遺構と遺物 …… （16）

　２　弥生時代から古墳時代初頭の遺構と遺物 …… （18）

　３　古墳時代から古代の遺構と遺物 …… （71）

　４　中世の遺構と遺物 …… （99）

Ⅴ　まとめ …… （122）

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図（１：50,000） …… （５）
第２図　遺跡位置図及び周辺地形図（１：2,000） …… （10）
第３図　グリッド配置図（１：1,000） …… （11）
第４図　遺構配置図①（１：300） …… （12）
第５図　遺構配置図②（１：300） …… （13）
第６図　遺構配置図③（１：300） …… （14）
第７図　遺構配置図④（１：300） …… （15）
第８図　ＳＫ222実測図（１：40） …… （16）
第９図　出土縄文土器実測図（１：３） …… （17）
第10図　ＳＢ２実測図（１：80） …… （19）
第11図　ＳＢ11炉跡実測図（１：40） …… （20）
第12図　ＳＢ11実測図（１：80） …… （21）
第13図　ＳＢ16実測図（１：60） …… （22）
第14図　ＳＢ19実測図（１：60） …… （23）
第15図　ＳＢ20炭化物・焼土範囲実測図（１：60） …… （24）
第16図　ＳＢ20実測図（１：60） …… （25）
第17図　ＳＢ21実測図（１：60） …… （27）
第18図　ＳＢ23Ｐ22及び土坑１・２実測図（１：40） …… （28）
第19図　ＳＢ23実測図（１：80） …… （29）

第20図　ＳＫ136・191実測図（１：40）……（30）
第21図　ＳＫ142実測図（１：40）……（31）
第22図　ＳＫ213実測図（１：40）……（31）
第23図　ＳＫ219実測図（１：30）……（33）
第24図　ＳＫ227・229～231・233～235・242実測図（１：40）……（35）
第25図　ＳＫ238実測図（１：30）……（36）
第26図　ＳＤ44実測図（１：80）……（36）
第27図　ＳＤ45実測図（１：80）……（37）
第28図　ＳＤ49実測図（１：80）……（37）
第29図　ＳＸ23実測図（１：80）……（38）
第30図　ＳＸ26実測図（１：30）……（39）
第31図　ＳＸ32実測図（１：60）……（39）
第32図　ＳＸ33実測図（１：60）……（39）
第33図　Ｌ－Ｐ７実測図（１：20）……（40）
第34図　ＳＢ２・11・20・21・23出土土器実測図（１：３，34は１：４）……（41）
第35図　ＳＢ23，ＳＫ136・142出土土器実測図（１：３）……（45）
第36図　ＳＫ142・213・219出土土器実測図（１：３，67は１：４）……（49）
第37図　ＳＫ219出土土器実測図（１：３）……（51）
第38図　ＳＫ229・230・234・235・238出土土器実測図（１：３，109・110は１：４）……（53）
第39図　ＳＫ238出土土器実測図１（１：４）……（57）
第40図　ＳＫ238出土土器実測図２（１：３）……（59）
第41図　ＳＫ238出土土器実測図３（１：３）……（60）
第42図　ＳＫ238出土土器実測図４（１：３，135は１：４）……（61）
第43図　ＳＫ238出土土器実測図５（１：３）……（63）
第44図　ＳＤ44・45，ＳＸ23・26，Ｌ－Ｐ７出土土器実測図（１：３）……（65）
第45図　調査区内出土土器実測図（１：３）……（67）
第46図　ＳＢ２・11・20・21・23出土石器（石）実測図（１：３，172は1：６）……（69）
第47図　ＳＸ32，調査区内出土石器実測図（２：３）……（70）
第48図　ＳＢ23出土鉄器実測図（１：２）……（70）
第49図　ＳＢ６実測図（１：60）……（71）
第50図　ＳＢ22実測図（１：60）……（72）
第51図　ＳＢ18実測図（１：60）……（73）
第52図　ＳＢ24実測図（１：60）……（74）
第53図　ＳＢ25実測図（１：60）……（76）
第54図　ＳＫ141・155・157・158実測図（１：40）……（77）
第55図　ＳＫ145・156・224～226・232実測図（１：40）……（79）
第56図　ＳＫ239・240実測図（１：40）……（80）
第57図　ＳＤ19実測図（１：80）……（81）
第58図　ＳＤ42実測図（１：80）……（82）
第59図　ＳＤ43実測図（１：80）……（82）
第60図　ＳＸ19・20実測図（１：60）……（83）
第61図　ＳＸ30実測図（１：60）……（84）
第62図　ＳＸ21実測図（１：80）……（85）

第63図　ＳＸ34実測図（１：60）……（86）
第64図　Ｌ－Ｐ１・５・６，Ｍ－Ｐ１実測図（１：30）……（87）
第65図　ＳＢ18・22・25，ＳＫ145・155～157・232・240，ＳＤ19・42・43出土土器実測図（１：３）
……（89）
第66図　ＳＸ19・21・30・34，Ｌ－Ｐ１・５・６，Ｍ－Ｐ１出土土器実測図（１：３）……（93）
第67図　調査区内出土土器実測図（１：３）……（96）
第68図　ＳＢ25，ＳＫ240，ＳＸ21，調査区内出土鉄器実測図（１：２）……（97）
第69図　ＳＫ134・139・161実測図（１：40）……（100）
第70図　ＳＫ144・146・147・152実測図（１：40）……（101）
第71図　ＳＫ148～151実測図（１：40）……（103）
第72図　ＳＫ236・237実測図（１：40）……（104）
第73図　ＳＫ241実測図（１：30）……（105）
第74図　ＳＸ27実測図（１：60）……（106）
第75図　ＳＸ31実測図（１：60）……（107）
第76図　Ｌ－Ｐ２～４・８実測図（１：30）……（107）
第77図　ＳＫ134・139・146・147・150～152・161・236・237・241出土土器及び土製品実測図（１：３）
……（109）
第78図　ＳＸ27・31，Ｌ－Ｐ２・８出土土器及び土製品実測図（１：３）……（114）
第79図　調査区内出土土器実測図（１：３）……（115）
第80図　ＳＫ236出土鉄製品実測図（１：２）……（115）
第81図　Ｌ－Ｐ３・４，調査区内出土古銭拓影（２：３）……（115）
第82図　曽川１号遺跡　縄文時代　遺物出土地点配置図（１：1,000）……（131）
第83図　曽川１号遺跡　弥生時代中期，後期前葉，後期中葉　遺構配置図（１：1,000）……（132）
第84図　曽川１号遺跡　弥生時代後期後葉　遺構配置図（１：1,000）……（133）
第85図　曽川１号遺跡　弥生時代後期末葉・古墳時代初頭　遺構配置図（１：1,000）……（134）
第86図　曽川１号遺跡　古墳時代前半　遺構配置図（１：1,000）……（135）
第87図　曽川１号遺跡　古墳時代後半　遺構配置図（１：1,000）……（136）
第88図　曽川１号遺跡　古代　遺構配置図（１：1,000）……（137）
第89図　曽川１号遺跡　中世　遺構配置図（１：1,000）……（138）

表目次

第１表　曽川１号遺跡に関する発掘調査一覧……（２）
第２表　主要遺構一覧表……（８）
第３表　縄文土器一覧表……（117）
第４表　出土土器計測表１（弥生時代～古墳時代初頭）……（117）
第５表　出土土器計測表２（弥生時代～古墳時代初頭）……（118）
第６表　出土土器計測表３（弥生時代～古墳時代初頭）……（119）
第７表　出土土器計測表（古墳時代～古代）……（120）
第８表　出土土器計測表（中世）……（121）

図版目次

巻頭図版

1 a 遺跡調査前遠景（空中写真，南西から）
b 遺跡調査前遠景（空中写真，北から）

巻頭図版

2 a ＳＫ238出土遺物
b 籠目痕跡（ＳＫ238出土壺）

図版１ a 遺跡遠景（空中写真，北から）
b 遺跡遠景（空中写真，西から）
図版２ a Ｌ地区遺構全景（空中写真，北西から）
b Ｌ地区北部遺構（北から）
図版３ a Ｉ（－５・－６）区周辺遺構完掘状況（南東から）
b Ｋ・Ｌ（－３），Ｌ（－４）区周辺遺構完掘状況（南西から）
c Ｍ・Ｌ（－３）区周辺遺構完掘状況（北西から）
図版４ a Ｏ・Ｐ（－２），Ｏ・Ｐ・Ｑ（－１），Ｑ０区周辺遺構完掘状況（南から）
b Ｎ・Ｏ（－２），Ｏ（－１）区周辺遺構完掘状況（南西から）
c Ｐ（－２），Ｐ・Ｑ（－１），Ｑ０区周辺遺構完掘状況（南西から）
図版５ a Ｒ・Ｓ０区周辺遺構完掘状況（南西から）
b Ｔ・Ｕ０，Ｔ・Ｕ１区周辺遺構完掘状況（北西から）
c Ｕ・Ｖ０区周辺遺構完掘状況（西から）
図版６ a Ｍ地区北西部遺構完掘状況（北から）
b Ｍ地区中央付近遺構完掘状況（西から）
c Ｋ・Ｌ０区周辺遺構完掘状況（南西から）
図版７ a Ｍ地区南東部遺構完掘状況（北西から）
b Ｒ・Ｓ１，Ｒ・Ｓ２，Ｒ３区周辺遺構完掘状況（西から）
c Ｓ・Ｔ３，Ｒ・Ｓ・Ｔ４，Ｓ・Ｔ５区周辺遺構完掘状況（北西から）
図版８ a ＳＫ222完掘状況（北から）
b ＳＢ２完掘状況（北西から）
c ＳＢ２完掘状況（南西から）
図版９ a ＳＢ11完掘状況（北西から）
b ＳＢ16完掘状況（南西から）
c ＳＢ19完掘状況（南から）
図版10 a ＳＢ20炭化物出土状況（北西から）
b ＳＢ20完掘状況（北西から）
c ＳＢ20有孔砥石出土状況（北西から）
図版11 a ＳＢ21完掘状況（南西から）
b ＳＢ23完掘状況（北から）
c ＳＢ23完掘状況（南西から）
図版12 a ＳＫ142遺物出土状況（東から）
b ＳＫ191完掘状況（南東から）
c ＳＫ213遺物出土状況（東から）
図版13 a ＳＫ219遺物出土状況・上～中層（北東から）
b ＳＫ219遺物出土状況・中層（北から）
c ＳＫ219完掘状況（北東から）
図版14 a ＳＫ227石検出状況（南西から）
b ＳＫ230完掘状況（東から）
c ＳＫ229土層断面（南東から）
d ＳＫ229完掘状況（南東から）
e ＳＫ231完掘状況（北西から）
f ＳＫ233完掘状況（北西から）
g ＳＫ234遺物出土状況（北から）
h ＳＫ235完掘状況（北西から）
図版15 a ＳＫ238遺物出土状況（西から）
b ＳＫ238完掘状況（北西から）
図版16 a ＳＤ44・45完掘状況（南西から）
b ＳＸ23完掘状況（北東から）
図版17 a ＳＸ26遺物出土状況（北東から）
b ＳＸ32完掘状況（北西から）
c ＳＸ33完掘状況（南西から）
図版18 a ＳＢ６完掘状況（西から）
b ＳＢ18完掘状況（東から）
c ＳＢ22完掘状況（南西から）

図版19　a　ＳＢ24完掘状況（西から）
　　b　ＳＫ224～227完掘状況（北西から）
　　c　ＳＫ232完掘状況（南西から）
図版20　a　ＳＤ19完掘状況（北東から）
　　b　ＳＤ43完掘状況（南西から）
　　c　ＳＸ34完掘状況（西から）
図版21　a　ＳＫ236完掘状況（北東から）
　　b　ＳＫ237完掘状況（北西から）
　　c　ＳＫ241完掘状況（南西から）
図版22　a　ＳＸ27完掘状況（北西から）
　　b　ＳＸ27土坑１・２完掘状況（北西から）
　　c　ＳＸ31完掘状況（南西から）
図版23　出土遺物１　縄文時代，弥生時代～古墳時代初頭①
図版24　出土遺物２　弥生時代～古墳時代初頭②
図版25　出土遺物３　弥生時代～古墳時代初頭③
図版26　出土遺物４　弥生時代～古墳時代初頭④
図版27　出土遺物５　弥生時代～古墳時代初頭⑤
図版28　出土遺物６　弥生時代～古墳時代初頭⑥
図版29　出土遺物７　弥生時代～古墳時代初頭⑦
図版30　出土遺物８　弥生時代～古墳時代初頭⑧
図版31　出土遺物９　弥生時代～古墳時代初頭⑨
図版32　出土遺物10　弥生時代～古墳時代初頭⑩
図版33　出土遺物11　弥生時代～古墳時代初頭⑪
図版34　出土遺物12　弥生時代～古墳時代初頭⑫
図版35　出土遺物13　弥生時代～古墳時代初頭⑬，古墳時代～古代①
図版36　出土遺物14　古墳時代～古代②
図版37　出土遺物15　古墳時代～古代③，中世①
図版38　出土遺物16　中世②
図版39　出土遺物17　中世③

Ⅰ　はじめに

1　調査の経過

中国横断自動車道尾道松江線は瀬戸内海沿岸の尾道市から世羅町・三次市・庄原市を経て日本海側の松江市に至る延長約137kmの高速自動車国道である。山陽自動車道・中国自動車道・山陰自動車道及び西瀬戸自動車道と接続して中国・四国地方の広域的な交通ネットワークを形成し，沿線地域の産業・経済・文化の発展に重要な役割を果たすことを目的として計画された。この道路に対して，沿線の各拠点で一般道路との結合が図られ，尾道市御調町大町において，御調インターチェンジが計画された。そのため，一般国道486号の道路改良工事が行われることとなった。

事業者である広島県尾三地域事務所（以下「地域事務所」という。）と広島県教育委員会（以下「県教委」という。）は，平成11（1999）年７月から工事予定地内の文化財等の有無及び取扱いについて協議を始めたが，多くの埋蔵文化財の存在が予想された。県教委の踏査及び試掘調査の結果，御調郡御調町（現尾道市御調町）内の工事予定範囲について曽川１号遺跡の存在が明らかとなった。

遺跡の取扱いについては，県教委，御調町教育委員会（現尾道市教育委員会），地域事務所と協議を重ねたが，路線変更等による現状保存は困難であるとの結論になった。地域事務所は県教委に対し平成16年12月27日付で文化財保護法第57条の３の通知を行い，県教委は平成17年１月24日付で工事着手に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。

曽川１号遺跡の発掘調査は，中国横断自動車道の本体工事及び一般国道486号道路工事の日程等の都合により，一体として調査することが困難なことから，一般国道486号については，２期に分け実施することになった。地域事務所は，平成17年２月15日付で財団法人広島県教育事業団（以下「事業団」という。）に発掘調査を依頼した。事業団は地域事務所と平成17年５月19日付で委託契約を結び，平成17年７月11日～10月７日まで，西側部分（Ｌ地区）の発掘調査を実施した。また，東側部分（M地区）に関しては，地域事務所は，平成18年２月16日付で事業団に発掘調査を依頼した。事業団ではこれを受けて地域事務所と平成18年６月１日付で委託契約を結び，平成18年９月15日～12月22日まで発掘調査を実施した。また，平成17年９月17日にはＬ地区の遺跡見学会を行い，150名の参加があった。

なお，発掘調査にあたっては，西日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）中国支社尾道工事事務所，国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所に大変お世話になった。また，地域事務所，尾道市教育委員会及び地元の方々から多大なるご協力を得た。記して感謝の意を表します。

2　曽川１号遺跡の既往の調査

曽川１号遺跡は，今回報告する発掘調査以外に，中国横断自動車道尾道松江線の建設工事等に伴い，平成14年度からすでに発掘調査が行われてきた。本書で報告する発掘調査区と密接な関連があるので，発掘地区，発掘調査期間，位置等を第１表・第２図で紹介しておく。

第１表　曽川１号遺跡に関する発掘調査一覧

発掘地区名	発掘調査期間	事業名	報告書
Ａ地区	平成14年10月21日～平成15年１月17日	中国横断自動車道尾道松江線建設事業	（2）
Ｂ地区	平成15年４月７日～平成15年５月23日		
Ｃ地区	平成15年４月７日～平成15年５月23日		
Ｄ地区	平成16年１月５日～平成16年２月５日		
Ｅ地区	平成15年12月１日～平成15年12月19日		（3）
Ｆ地区	平成16年４月14日～平成16年４月28日	大町地区防火水槽設置事業	（1）
Ｇ地区	平成16年６月７日～平成16年８月６日	中国横断自動車道尾道松江線建設事業	（4）
Ｈ地区	平成16年６月７日～平成16年８月６日		
Ｉ地区	平成16年６月７日～平成16年８月６日		
Ｊ地区	平成17年１月11日～平成17年３月４日		
Ｋ地区	平成17年４月11日～平成17年７月１日		（5）
Ｌ地区	**平成17年７月11日～平成17年10月７日**	**一般国道486号道路改良工事**	**本書（6）**
Ｍ地区	**平成18年９月15日～平成18年12月22日**		

（1）財団法人広島県教育事業団『曽川１号遺跡　大町地区防火水槽設置事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 2005年

（2）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）曽川１号遺跡（Ａ～Ｄ地区）』 2006年

（3）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（4）城根遺跡・曽川１号遺跡（Ｅ地区）・牛の皮城跡（第４次）』 2008年

（4）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（5）曽川１号遺跡（Ｇ～Ｊ地区）』 2008年

（5）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（6）曽川１号遺跡（Ｋ地区）』 2008年

（6）財団法人広島県教育事業団『曽川１号遺跡（Ｌ・Ｍ地区）　一般国道486号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 2010年

Ⅱ　位置と環境

曽川１号遺跡は，尾道市御調町大町に所在する。

尾道市は県東南部に位置し，平成17（2005）年３月に旧御調郡の二町（御調町・向島町）を，平成18（2006）年１月に因島市・豊田郡瀬戸田町を編入合併して面積285平方キロメートル，人口15万人を超える市となった。御調町は尾道市の北部にあり，東は府中市，西は三原市，北は世羅郡世羅町と接している。町の北部に宇根山，南部に木頃山を中心とした標高300～400mの丘陵が連なり，御調川（芦田川の支流）が形成した東西に細長い平野部とそこに開いた谷部に集落が形成されている。

町内には二方向の主要交通路があり，府中から御調川沿いに安芸に至る山陽道と，尾道から大田庄（中世荘園・世羅町）を経て三次・出雲に抜ける道が大きな存在であった。特に交点である市（いち）周辺は重要な集落として栄えた。

旧石器時代～縄文時代　町内では旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代では，曽川１号遺跡Ｅ地区[(1)]の調査で後期前半から中頃の土器がまとまって出土し，今回報告のM地区では，土坑が確認されているので，この付近に集落が形成されていたことは間違いないが，実態は不明である。

弥生時代　弥生時代になると，御調川北岸を中心に，弥生土器や磨製石斧が採集された遺跡が数多く存在する。しかし調査例は少なく，丸門田の本郷平廃寺の調査によって中期の土器が出土している[(2)]ほかは各所で採集された土器の時期は後期のものがほとんどである。曽川１号遺跡[(3)]では，弥生時代後期～終末期の円形や隅丸方形の竪穴住居跡や土坑を検出し，この時期には集落が形成されていたことをうかがわせ，備後固有の土器のほかに吉備や山陰からの搬入品とみられる土器が出土していることから，他地域との交流も行われていたと考えられる。曽川１号遺跡と御調川を挟んだ北側の貝ヶ原遺跡[(4)]では古式の特殊器台が出土しており，御調川流域でも墳丘墓に葬られる有力な首長が現れたことを示している。曽川１号遺跡の南約500mに位置する大町の城根遺跡[(5)]では，弥生時代終末から古墳時代前半頃の箱式石棺２基が検出され，曽川１号遺跡との関連が考えられている。

古墳時代　古墳時代になると，数多くの古墳が確認されているが調査例は多くない。古墳は，御調川の北側で多く確認されている。交通の要衝である市周辺では埋葬施設が箱式石棺をもつ古墳と横穴式石室をもつ古墳が混在しているが，その他の地域では横穴式石室をもつ古墳がほとんどである。前半期の古墳としては，埋葬施設として竪穴式石室をもつ津蟹の天神山第２号古墳，埋葬施設に箱式石棺をもつ高尾の高尾第１・２号古墳，高尾西第３・４号古墳，市の後口山古墳，丸門田の明神山古墳群，徳永の高神古墳群，正尺山古墳群などがある。後半期の古墳としては，本の狐岩古墳群，貝ケ原の貝ケ原古墳群，むかで岩山口古墳群，高尾の高尾第４・９号古墳，高尾西第１・２号古墳，神古墳群，大山田の梅ノ木第４号古墳・小猿古墳，綾目の七ツ塚古墳群，

神の神西古墳群，公文の土井古墳などがあり，埋葬施設は横穴式石室である。

これらの古墳を生み出した集落については，調査例が少なく明らかにしがたいが，曽川１号遺跡[6]では６世紀の方形の竪穴住居跡を検出している。

また，御調町から三原市久井町にかけては御調古窯跡群とよばれる須恵器の生産地で，津蟹の隠れ迫窯跡や切堤第１号窯跡など須恵器の窯跡が確認されており，古墳築造の背景として考えられよう。

調査が行われた古墳は数基ある。高尾第１号古墳[7]は直径13.5m，高さ1.5mの円墳で，墳丘裾に１～２段の葺石を廻らす。蓋石や側石に赤色顔料が塗られた箱式石棺から人骨が出土した。後口山古墳[8]では箱式石棺から人骨と碧玉製の管玉やガラス小玉が出土した。両古墳とも５世紀代の築造と考えられる。高尾第４号古墳[9]・高尾第９号古墳[10]・狐岩第１～４号古墳[11]・梅ノ木第４号古墳[12]・小猿古墳[13]は，いずれも横穴式石室を埋葬施設とし，規模は全長3.85～6.1mである。出土した須恵器から築造時期は６世紀後半から７世紀後半と考えられる。高尾第４号古墳・狐岩古墳群・梅ノ木第４号古墳から出土した須恵器のなかには御調古窯跡群で生産されたものがある[14]。

古　　代　古代山陽道は，備後国府があったと推定されている府中市から芦田川・御調川沿いを西に進み，当地域を通って安芸国に向かったと考えられている。町内には地名にも古代の御調郡を思わせるものがあるが，郡衙や山陽道に関する調査は行われていないため，詳細は不明である。古代の遺跡としては，昭和60～63（1985～1988）年度に本郷平廃寺[15]が調査されている。調査の結果，「四天王寺式」に近い伽藍配置で，７世紀末に創建された備後南部地域で最も古い寺院のひとつであることが確認された。

集落跡では平成14年に調査した曽川２号遺跡[16]がある。曽川２号遺跡では掘立柱建物跡１棟，土坑１基，多数の柱穴を検出し，土坑から柱状高台付皿が備後地域では初めて出土した。12世紀前後の遺跡と考えられる。曽川１号遺跡[17]では８～９世紀頃の製塩土器の破片が出土している。

中世以降　中世になると，この地域は現在の世羅郡世羅町を中心とした地域に所在した高野山領大田庄とその倉敷地である尾道とを結ぶ南北の交通路となり，近世の石州街道へと発展していく。また山陽道も御調川沿いを東西にとおっているため，交通の要衝として栄えた。

中世の遺跡としては，山城跡が多く存在する。末近城跡[18]と牛の皮城跡[19]で発掘調査が行なわれている。また，上田城跡及び福丸城跡で牛の皮城跡と同様の畝状竪堀がみられる。

末近城跡は，平成13年に調査した御調川の支流野間川を臨む丘陵上に位置する小規模な城跡である。調査の結果，領主の支配拠点というより「村の城」として築かれた可能性が高いとされた。牛の皮城跡は南北の郭群からなり，北郭群を平成14・15・17年度に調査した。建物跡は確認されていないが，北西側に14本の畝状竪堀，東側に９本の畝状竪堀，南東側に堀切２本，西側に竪堀１本を配置している。出土遺物は，土師質土器などの生活用具，輸入磁器や小石（碁石？）などの奢侈品，鉄鏃・小札・鉛玉（鉄砲玉？）などの軍事関係品，鉄滓・土錘・釣針などの生産関係品など多様な構成で，北郭群でさまざまな活動がなされていたことがうかがえる。

城跡以外の中世の遺跡は，津蟹の天神遺跡，丸門田の明神沖遺跡，千堂の上千堂遺跡[20]がある。

第１図　周辺遺跡分布図（１：50,000）

1　**曽川１号遺跡**
2　曽川２号遺跡
3　牛の皮城跡
4　城根遺跡
5　本郷平廃寺跡
6　貝ヶ原遺跡
7　天神山古墳群
8　高尾古墳群
9　後口山古墳
10　高神古墳群
11　正尺山古墳群
12　高尾西古墳群
13　明神山古墳群
14　梅ノ木古墳群
15　小猿古墳
16　七ツ塚古墳群
17　神古墳群
18　神西古墳群
19　貝ヶ原古墳群
20　ムカデ岩山口古墳群
21　狐塚古墳群
22　河崎古墳
23　隠れ迫窯跡
24　末近城跡
25　上田城跡
26　福丸城跡
27　天神遺跡
28　明神沖遺跡
29　上千堂遺跡

上千堂遺跡は平成８年の調査で掘立柱建物跡１棟を検出したが，詳細な時期は不明である。

註

（１）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（４）城根遺跡・曽川１号遺跡（Ｅ地区）・牛の皮城跡（第４次）』 2008年

（２）川越哲志「本郷平廃寺跡出土の弥生土器」御調町教育委員会『本郷平廃寺』 1989年

（３）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）曽川１号遺跡（Ａ～Ｄ地区）』 2006年

財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（５）曽川１号遺跡（Ｇ～Ｊ地区）』 2008年

財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（６）曽川１号遺跡（Ｋ地区）』 2008年

（４）潮見　浩「貝ケ原遺跡出土の特殊器台形土器」『広島県文化財調査報告』第17集　広島県教育委員会　1991年

（５）（１）に同じ

（６）（３）に同じ

（７）河瀬正利編『御調郡御調町高尾山古墳発掘調査報告』付御調町後口山古墳発掘調査概報　御調町教育委員会　1971年

（８）（７）に同じ

（９）尾道市教育委員会『御調川流域の古墳』 2007年

(10)（９）に同じ

(11)（９）に同じ

(12)（９）に同じ

(13)（９）に同じ

(14)（９）に同じ

(15) 御調町教育委員会『本郷平廃寺』 1989年

(16) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曽川２号遺跡』 2005年

(17)（３）に同じ

(18) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『末近城跡』 2002年

(19)（１）・(16) に同じ

(20) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『上千堂遺跡』 1997年

Ⅲ　調査の概要

曽川１号遺跡は尾道市御調町大町字曽川・米田に所在する。遺跡は御調川の南側，牛の皮城が築かれた丘陵の裾部に立地し，調査前は竹藪・果樹園・畑地・宅地として利用されていた。西側には御調川に注ぐ江国川が北流し，標高は75～85mで，御調川との比高は15～25mである。

曽川１号遺跡の発掘調査は，対象となる事業が大きく３事業に別れ，しかも工事の優先順に調査を行ってきたため，調査個所が散在している。このため，平成15年度から調査地区名を順番に付して，調査を行ってきた（第１表及び第２図参照）。今回報告する地区は，Ｌ地区，Ｍ地区の２地区である。

調査は平成17年度にＬ地区から開始し，平成18年度にＭ地区の調査を行った。試掘調査や隣接する発掘地区の状況を基に，盛土・表土を重機によって掘削作業した後，人力による遺構検出作業と掘り下げ作業をおこなった。旧地形が東から西へ傾斜しており，西側を盛土によって整地していることが確認できていた。また，現状は畑地，宅地部分が多く，長期間の定住集落のため，削平が著しく，残存状況が悪い箇所が多い。遺構検出面はベースが粘土層，砂利層，粘土・砂利層の互層など，場所によって複雑に変化している。遺構検出面は，原則１面である。遺構は深く掘られた土坑・柱穴・貯蔵穴などを除いて，全体に攪乱を受けていた。

Ｌ地区は南北に細長く，またＭ地区も同様であり，しかも分断されている。発掘調査にあたっては，平面直角座標第Ⅲ系座標北（日本座標系）を基準に10m×10mのグリッドを設定した。南北方向はアルファベットで，東西方向は数字で表し，北西隅の杭名称を，たとえばＫ３のように各グリッドの名称とした（第３図）。なお，Ｋ３杭の座標値はＸ＝－163800，Ｙ＝91800である。遺構番号はＡ～Ｌ地区の番号を引き継いでいる。また，遺構の位置は，グリッドを基準に述べる。

調査の結果，竪穴住居跡22軒（拡張・縮小を含む），掘立柱建物跡２棟，土坑41基，溝状遺構７条，性格不明の遺構10基のほか多数の柱穴などを確認した。検出した柱穴の数からすると，復元できなかった建物跡も多かったと思われる。なお，このほかに近世以降の遺構も確認した。竪穴住居跡の時期は弥生時代中期から古墳時代後期，掘立柱建物跡の時期は古代，中世と思われる。土坑の時期は弥生時代後期～古墳時代初頭，古墳時代後期及び中世で，溝状遺構の時期は古代，中世と思われる。縄文時代後期の土器片が出土した土坑，柱穴もあり，遺跡一帯は，縄文時代から長期間にわたり集落が営まれたと考えられる。

出土遺物は，土器類（縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，土師質土器，瓦器，瓦質土器），陶磁器，土製品，石製品，鉄器，古銭，鉄滓などが出土している。

第２表　主要遺構一覧表

（１）竪穴住居跡（単位：規模＝m）

調査区	遺構番号		時期	平面形	規模※１	床面積※１	柱構造※２	炉跡	備　　考
C・M	SB２	a	弥生時代後期末葉頃	円形	径4.3	13.2㎡	４本柱(３)	－	e→d→c→a→b
		b	－	円形	径5.6	21.2㎡	２本柱(２)	○	
		c	－	円形	径6.7	32.5㎡	７本柱(７)	－	
		d	－	隅丸方形	－	－	－	－	
		e	－	円形	径8.6	52.0㎡	－	－	
B・M	SB６		６世紀？	方形	6.5×6.4以上	－	－	－	
G・M	SB11	a	弥生時代後期末葉頃	楕円形	径9.7×9.0	(62.4)㎡	12本柱(10)	○	拡張(c→b→a)
		b	－	－	－	－	－	－	
		c	－	－	－	－	－	－	
L	SB16		弥生時代後期（後葉）頃	円形？	径(6.0)	－	－	－	
L	SB18		古墳時代後期後半（６世紀末～７世紀前半頃）	不整方形	4.8×4.5	21.0㎡	４本柱(４)	△	
L	SB19		弥生時代後期（後葉）頃	円形	径6.0	(28.0)㎡	６本柱(５)	○	
M	SB20	a	弥生時代後期後葉頃	円形	径6.7×6.4	(30.0)㎡	９本柱(９)	○	拡張（c→b→a）
		b	－	円形	－	－	－	－	
		c	－	円形	径5.2	19.1㎡	７本柱(７)	－	
M	SB21		弥生時代中期中葉～後葉頃	隅丸方形	－	－	－	○	
M	SB22		６世紀後半頃	方形	－	－	－	－	作業小屋か？
M	SB23	a	弥生時代後期末葉頃	楕円形	径(8.0)×(7.8)	(48.0)㎡	８本柱(８)	○	拡張(d→c→b→a)
		b	－	楕円形	径(7.4)×(7.0)	(40.0)㎡	８本柱(８)	－	
		c	－	楕円形	径(7.4)×(6.4)	(35.0)㎡	９本柱(９)	－	
		d	弥生時代後期後葉頃	楕円形	径(6.4)×(6.0)	(27.0)㎡	５本柱(５)	－	
M	SB24		古墳時代前期？	方形	3.8×3.5	11.3㎡	２本柱(２)	○	

※１　カッコ内の数値は推定。
※２　カッコ内の数値は確認した柱穴。

（２）掘立柱建物跡（単位：建物規模・柱間距離＝m）

調査区	地　区	遺構番号	時期	主軸方位	間　数 桁行×梁行	建物規模 桁行×梁行	柱間距離 桁行	柱間距離 梁行	備　　考
K・L	N(－3･-2)，O(－3)	SB17	16世紀代	N37°E	３×２	6.5×4.8	2.0～2.3	2.4	SK103・104は付属施設か。
M	O(－１)	SB25	８世紀代	N６°W	４×２	7.2×3.6	0.7～2.5	1.6～2.0	柱穴から鉄斧出土，地鎮祭祀か。

（３）溝状遺構（単位：規模＝m）

調査区	地　区	遺構番号	時　期	主軸方位	規　模	備　　考
L	U０・１	SD19	８世紀代		長さ33，幅0.55	
L	T０	SD21	古墳時代後期？			SX20に含まれる
M	L(－３)	SD42	古墳時代後期	N35°W	長さ3.4以上，幅1.1	
M	M(－１)・０，N０	SD43	古墳時代後期後半		長さ5.14以上，幅0.47	
M	N(－１)・０	SD44	弥生時代後期中葉	N43°E	長さ9.3，幅0.97	
M	N・O０	SD45	弥生時代後期中葉	N36°E	長さ11.3，幅1.32	
M	S４	SD49	弥生時代？	N44°W	長さ2.0，幅0.5	

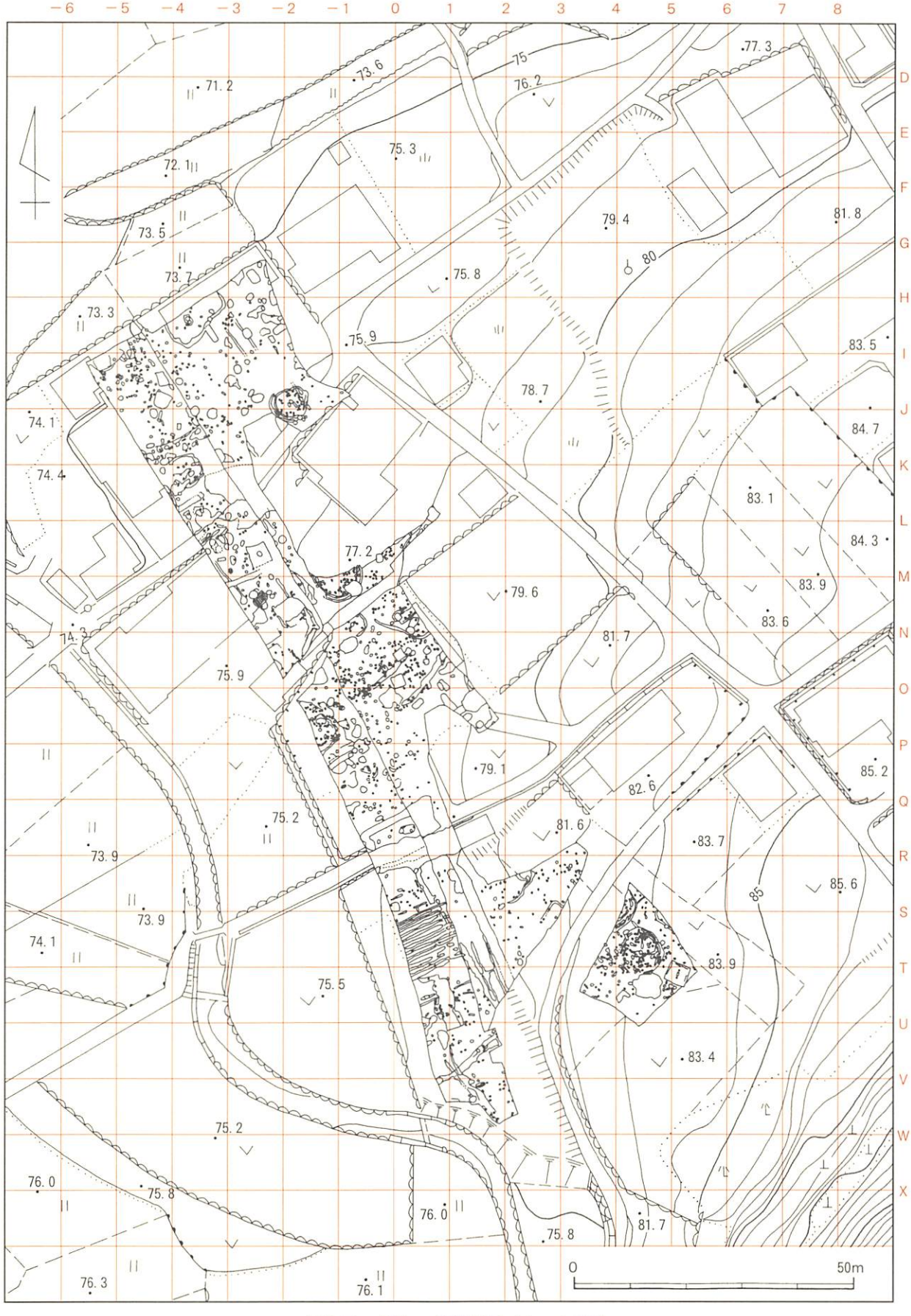
（4）土坑（単位：規模＝m）

調査区	地　区	遺構番号	時　期	平面形	規　模	備　考
L	N(－3)	SK104	16世紀代	隅丸方形	2.5×2.4	SB17に伴う？
L	V1	SK134	14世紀後半～15世紀前半	円形	径1.1	
L	U0	SK136	弥生時代後期中葉	不整形	1.8×3.5	
L	Q(－1)	SK139	15世紀後半～16世紀代	長方形	1.5×0.75	
L	Q(－1)	SK141	古墳時代後期	不整形	3.4×1.6	
L	P(－1)	SK142	弥生時代後期末葉（庄内並行）	円形	径1.25	
L	P(－1)	SK144	—	楕円形	現存規模(0.8×0.76)	
L	P・Q(－1)	SK145	古代（8世紀）	不整形	1.32×1.15	
L	P(－2・－1)	SK146	中世（15～16世紀）	長方形	2.58×2.8	
L	P(－1)	SK147	中世（15～16世紀）	不整形	現存規模(1.4×1.0)	
L	P(－1)	SK148	中世（15～16世紀）	楕円形	現存規模(0.8×0.72)	
L	P(－1)	SK149	中世（15～16世紀）	円形	径0.85	
L	P(－1)	SK150	中世（15～16世紀）	円形	径0.7	
L	O・P(－1)	SK151	中世（15世紀後半～16世紀）	長方形	2.62×2.0	竪穴状
L	P(－2・－1)	SK152	中世（15～16世紀）	不整形	現存規模(1.2×1.05)	
L	O(－1)	SK155	古墳時代後期後半（6世紀末～7世紀前半）	不整形	2.32×1.7	
L	O(－1)	SK156	8世紀代	楕円形	1.05×0.75	
L	O(－1)	SK157	古墳時代後期	不整形	2.0×1.5	
L	O(－2)	SK158	古墳時代後期？	長方形	1.9×1.0	埋土の状況から年代比定
L	N(－2)	SK161	中世（15～16世紀）	楕円形	現存規模(2.9×2.4)	
L	J(－5)	SK191	弥生時代後期頃	円形	径1.32	
M	H(－4)	SK213	弥生時代後期末葉	不整隅丸方形	1.83×1.05	東西に土坑
M	J(－4)	SK219	弥生時代後期末葉～古墳時代初頭	不整円形	径2.0	貯蔵穴
M	J3	SK222	縄文時代後期初頭	不整形	1.32×1.23	貯蔵穴
M	J(－2)	SK224	古墳時代	楕円形	0.74×0.43	
M	J(－2)	SK225	古墳時代	不整楕円形	0.75×0.56	
M	J(－2)	SK226	古墳時代後期	円形	0.85×0.83	
M	J(－2)	SK227	弥生時代？	円形	0.77×0.73	
M	L(－3・－2)	SK229	弥生時代後期末葉	楕円形	1.3×1.12	貯蔵穴
M	L(－1)	SK230	弥生時代後期末葉	隅丸方形	1.5×1.15	
M	M0	SK231	弥生時代？	不整楕円形	2.1以上×1.29	
M	N0	SK232	古墳時代後期後半（6世紀末～7世紀前半）	円形	1.45以上×0.4以上	
M	N0	SK233	弥生時代？	方形	1.27×1.14	
M	N0	SK234	弥生時代後期末葉	円形	径0.88	
M	N0	SK235	弥生時代後期前葉	方形	1.35以上×0.8	
M	N0	SK236	中世（15～16世紀）	不整隅丸方形	1.47×0.7	
M	O0	SK237	中世（15～16世紀）	不整隅丸方形	1.8～2.05×1.05～1.1	
M	S2	SK238	弥生時代後期末葉	不整円形	1.21×1.1	貯蔵穴
M	S4	SK239	古墳時代後期	不整楕円形	1.2×0,68	
M	S4	SK240	古墳時代後期	楕円形	1.2以上×0.5以上	
M	S3	SK241	中世（13～14世紀）	不整楕円形	1.2×0.5	
M	S4	SK242	弥生時代？	楕円形	0.82×0.68	

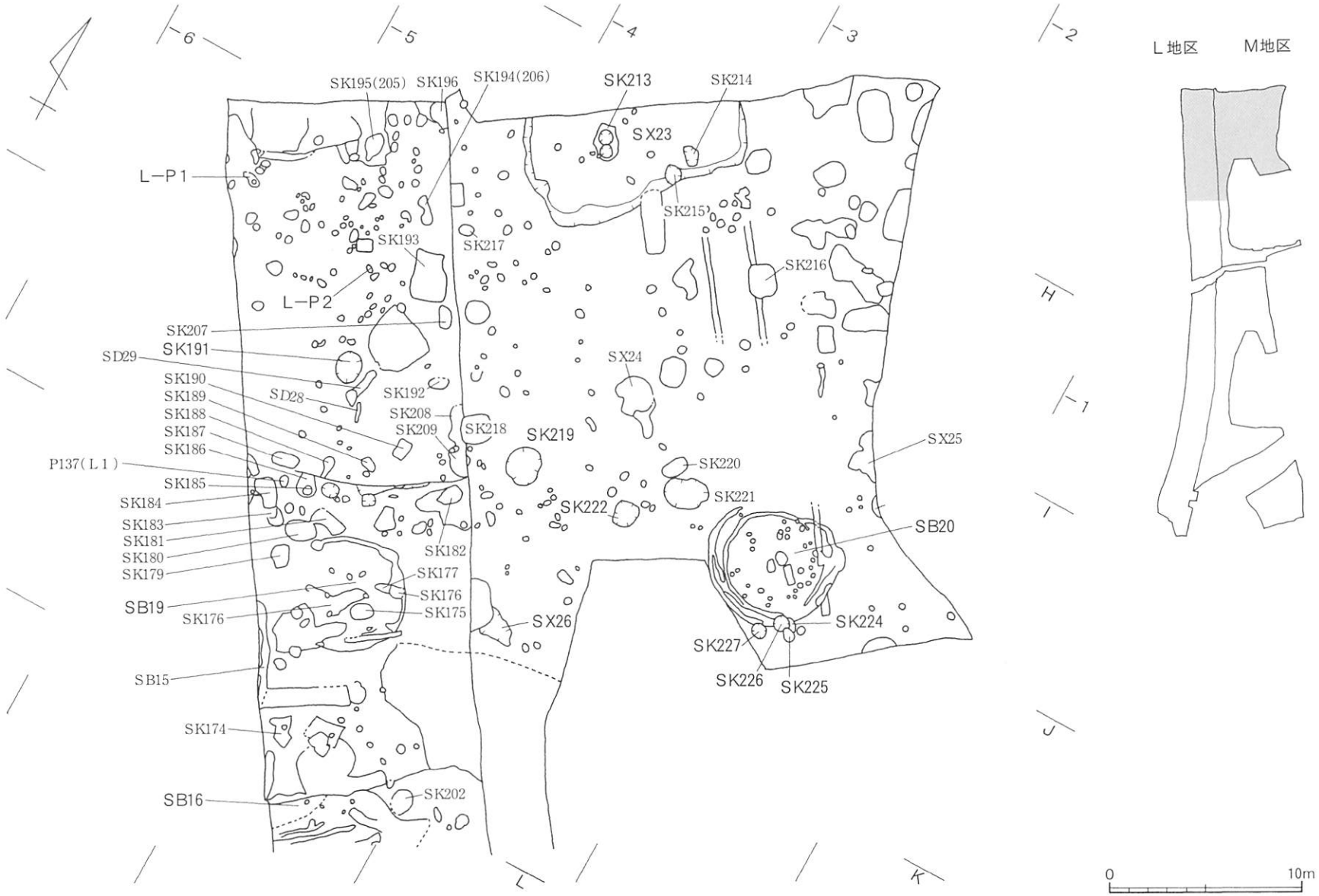
（5）性格不明の遺構（単位：規模＝m）

調査区	地　区	遺構番号	時　期	平面形	規　模	備　考
L	T・U0	SX19	平安時代後半（10世紀代）	不整形	3.5×2.7	
L	T0・1	SX20	古墳後期	不整形	12.0×4.0	埋土の状況から年代比定
L	O(－2)	SX21	古墳時代後期後半	不整形	12.6×4.8	
M	H(－5・－4)	SX23	弥生時代後期末葉	不整隅丸方形	11.7以上×6.0以上	竪穴状の落ち込み
M	J(－4・－3)	SX26	弥生時代後期末葉	不整形	1.8以上×1.45以上	土坑
M	L・M(－2)	SX27	中世（15～16世紀）	不明		焼失建物に伴う落ち込み
M	K・L0	SX30	古墳時代後期後半（6世紀末～7世紀前半）	不明	2.1以上×2.4以上	自然流路の可能性あり
M	R2	SX31	中世（16世紀後半）	不整形	現状規模(7.2×2.8)	
M	R2・3，S2	SX32	弥生時代？	方形	4.2以上×2.0以上	竪穴住居状
M	R4	SX33	弥生時代？	方形？	1.9以上×？	竪穴住居状
M	T4	SX34	古墳時代後期後半	不整形	5.4×4.7	

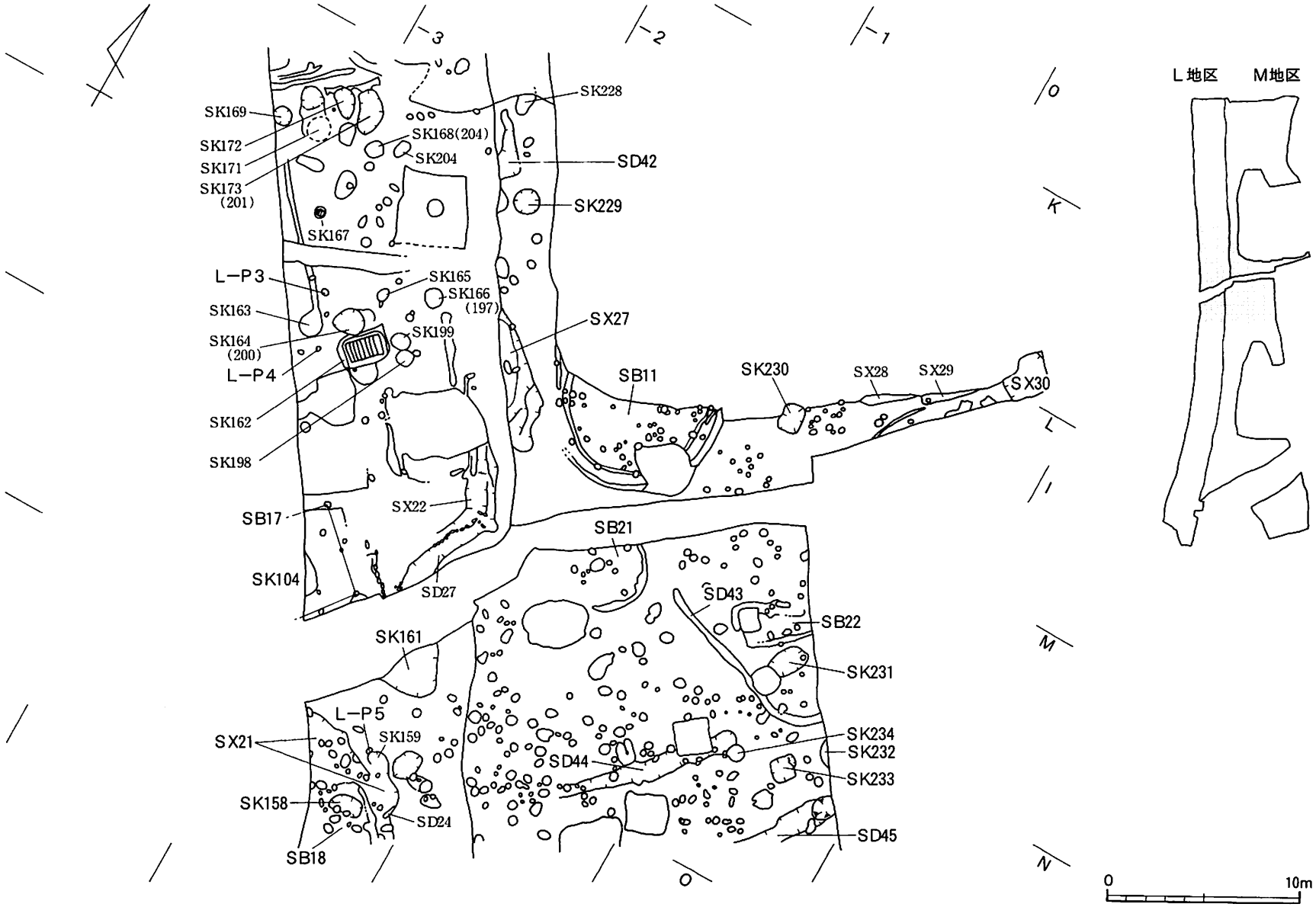
第2図　遺跡位置図及び周辺地形図（1：2,000）アミ目はL・M地区



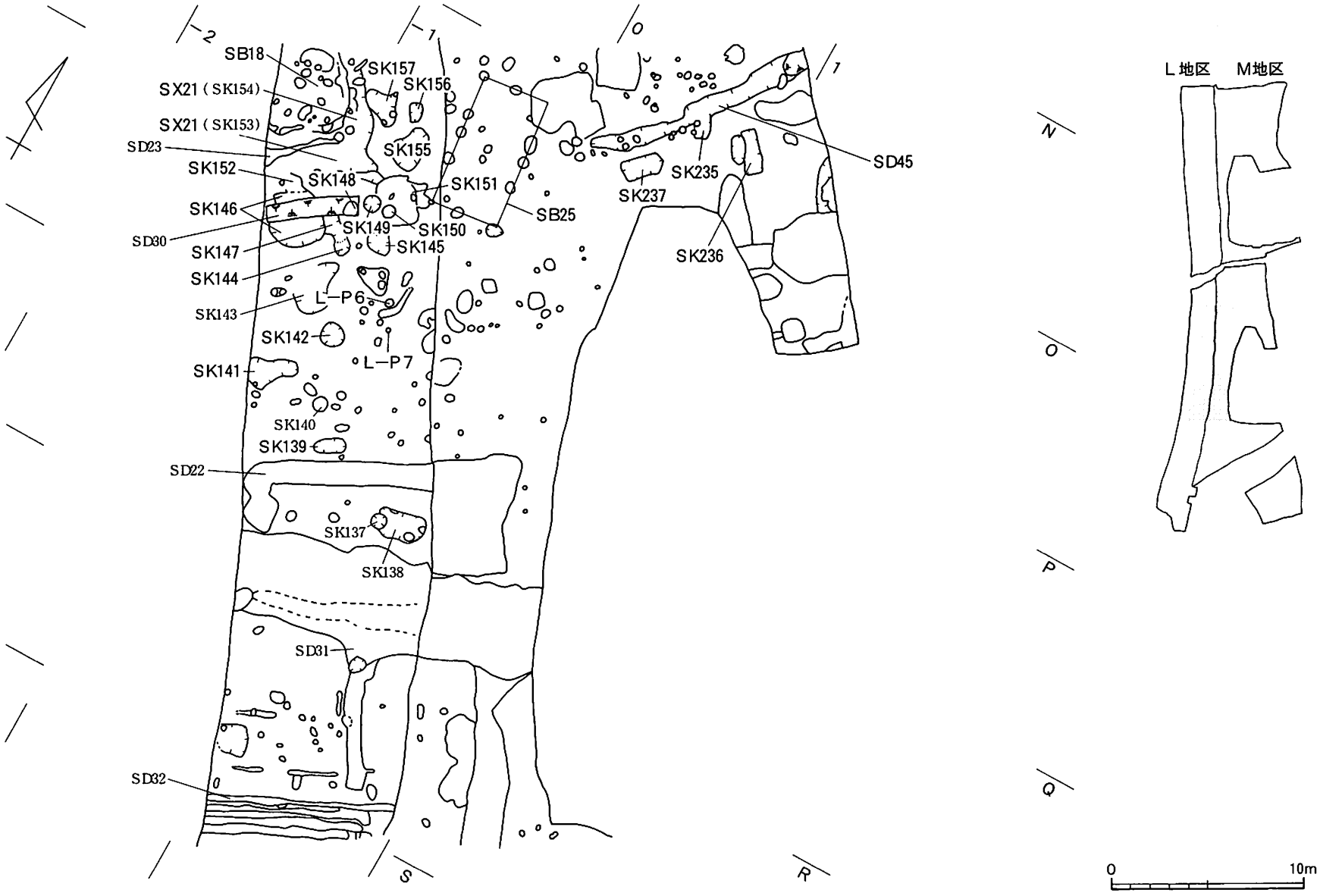
第３図　グリッド配置図（１：1,000）



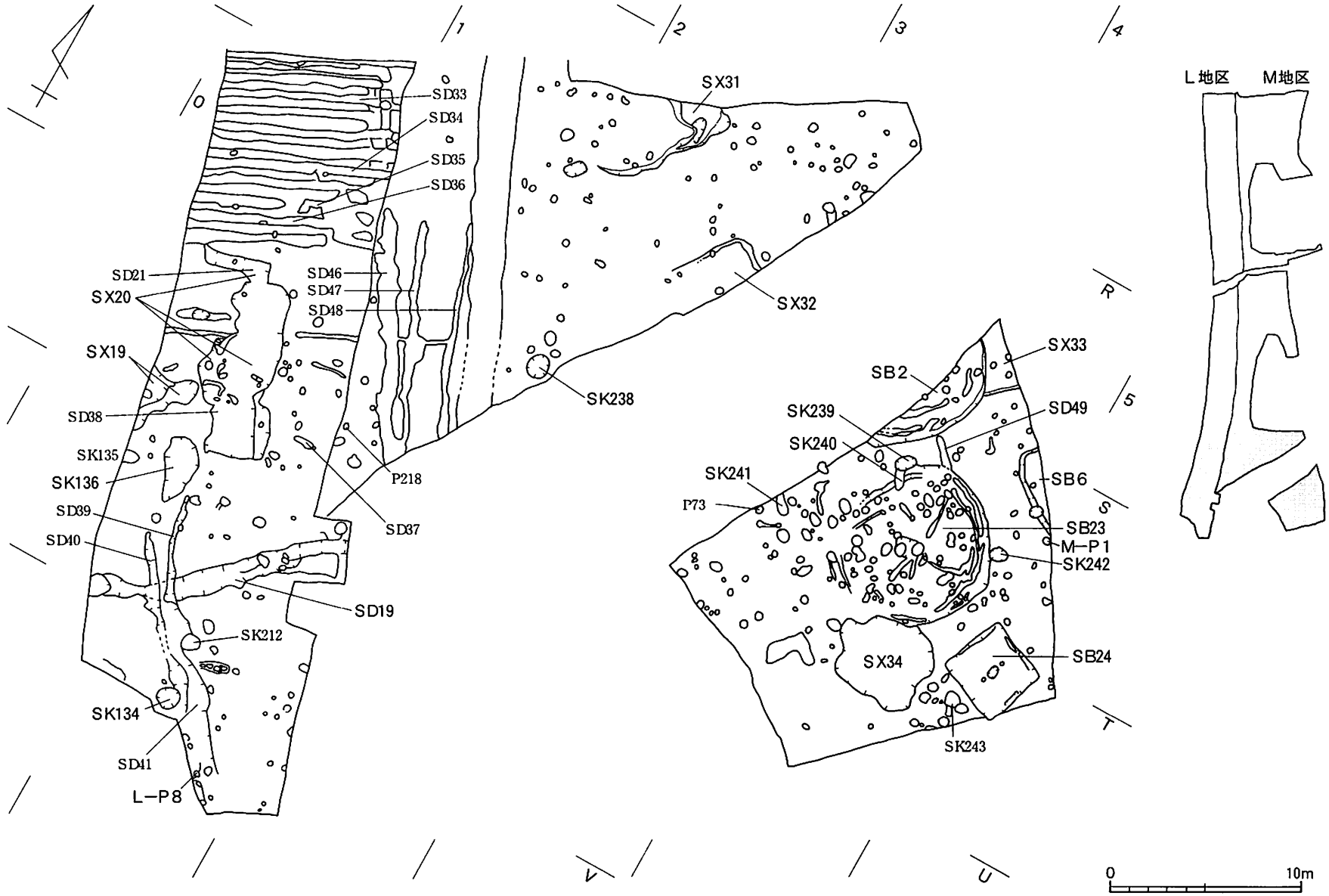
第４図　遺構配置図①（１：300）



第５図　遺構配置図②（１：300）



第６図　遺構配置図③（１：300）



第７図　遺構配置図④（１：300）

Ⅳ　遺構と遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

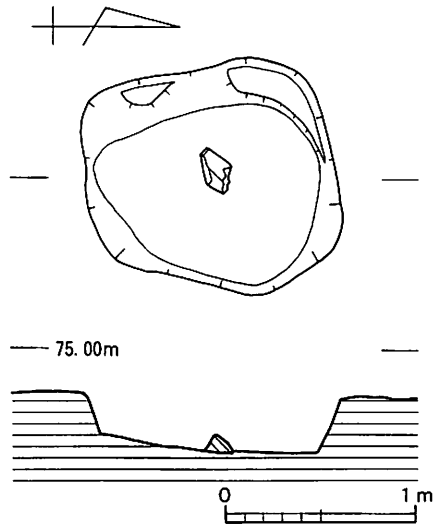
縄文時代の遺構としては，M調査区南側の土坑１基がある。該期の遺物はピットや土坑などからも出土しているが，それらは混入である。

（1）遺構

1　土坑

ＳＫ222（第８図，図版８ａ）

M調査区北側の緩斜面に立地し，Ｊ（－３）区に位置する。平面形は丸みを帯びた不整形で，南北にやや長い。規模は1.32m×1.23mで，深さ（最大）は32cmである。北西側及び西側に段をもち，北西側の段は底面から16～20cmの高さのところにあり，長さ70cm，最大幅13cmの規模である。西側の段は底面から11～12cmの位置で，長さ28cm，最大幅９cmの規模である。底面は南から北西へ緩やかに下傾する。底面中央で自然石が底面に密着した状態で出土した。自然石の規模は長さ25cm，幅15cm，厚さ９cmである。埋土から縄文土器片（３～５）が数点出土した。



第８図　ＳＫ222実測図（１：40）

（2）遺物

縄文時代の遺物には縄文土器と石器がある。石器については時期が不明確であることから，弥生時代の遺物で扱うこととし，ここでは縄文土器について記述する。

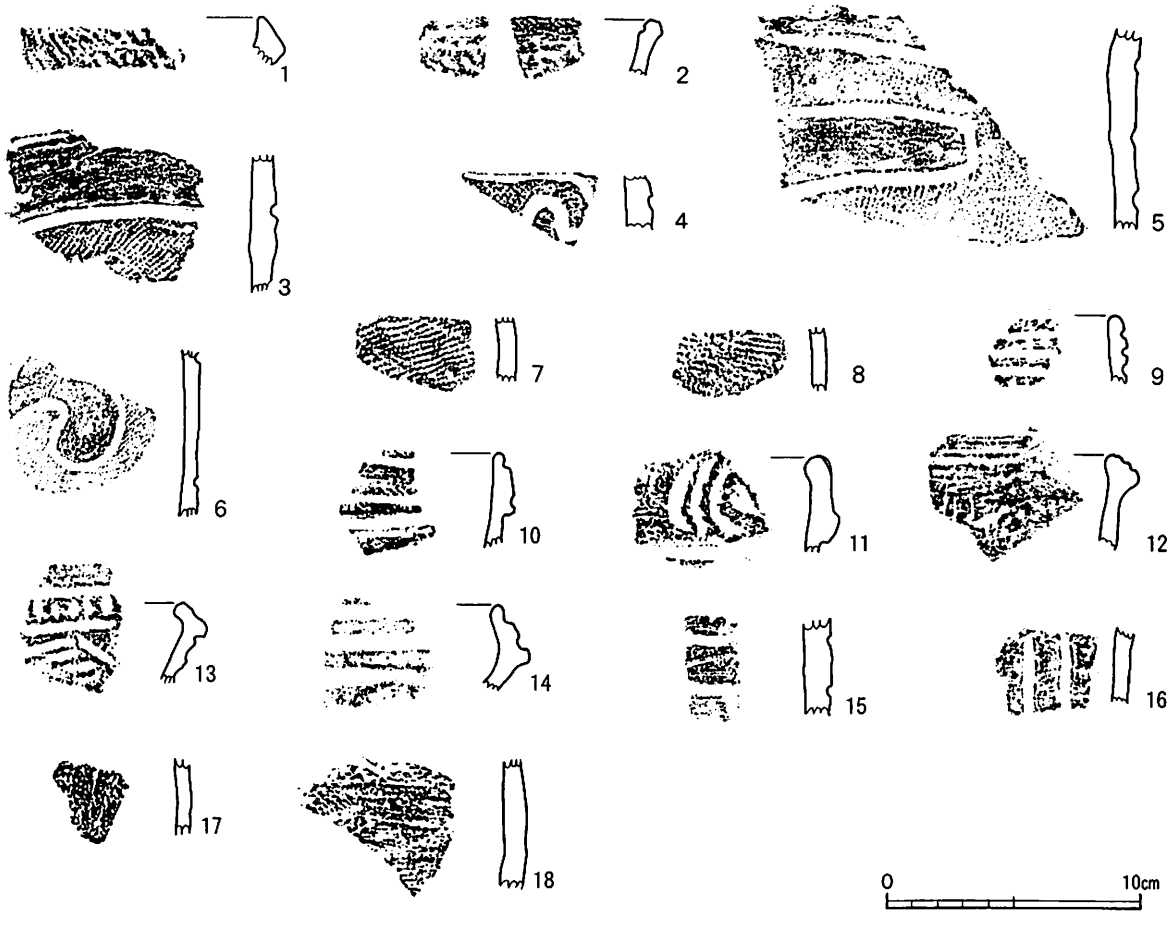
1　縄文土器（第９図，図版23）

ＳＫ222出土の縄文土器は遺構に伴うが，その他の遺物は伴っていない。Ｌ調査区ではＩ（－５）区，Ｊ（－５）区，M調査区ではＪ（－２～－４）区，Ｌ（－２・－３）区，Ｎ０区，Ｓ２・４区の遺構の埋土に縄文土器が混入していた。またM調査区北側の検出面でも出土した。

縄文土器は少量しか出土せず，また細片が多い。そのため器形を明確にできる資料は少ない。縄文土器は主に文様を施した有文土器と，文様を施さない無文土器がある。この２つに分けて報告する。

有文土器（**1～16**）

1～8は縄文を有するもので，**1・2**は口縁部片，**3～8**は体部片である。**1**は口縁端部を上方に肥厚させ，縄文を施す。**2**は口縁部をわずかに肥厚させ，口縁端部のやや外側下方に縄文を施す。また口縁部内面に１条の細い沈線を廻らせる。**3～6**は外面に曲線や直線的な沈線がみら



第９図　出土縄文土器実測図（１：３）

れる。沈線で区画された部分は縄目痕を擦り消している。３～５は同一個体で，「Ｊ」字文らしき文様と思われるが明確でない。６は「Ｊ」字文である。なお６は器壁が薄く，焼成も良好で赤褐色を呈し，縄文の目が細かい。７・８は沈線がみられない。

９～16は縄文を有さないもので，９～14は口縁部片，15・16は体部片である。９は口縁部外面に３条の沈線を廻らせる。また小片のため明らかではないが，口縁端部に斜位の刻み目を入れている可能性がある。10は口縁部を外方にやや肥厚させ，その部分に２条の沈線と肥厚部分下端に１条の沈線を施す。11は口縁部を外方にやや肥厚させ，その部分に同心円文を施す。12は口縁端部を内側斜め上方と外側斜め下方に肥厚させ，肥厚した口縁端部に３条の沈線を施す。また，外面に３条以上の沈線を縦方向に施す。13・14は口縁部を内側斜め上方に折り曲げる。13は外面の屈曲部を中心に２条の沈線を廻らせ，その沈線に区画された屈曲部に縦位の刻み目を施す。またその下に直線的な沈線文を斜位に施す。14は折り曲げられた口縁部外側に２条の太い沈線を廻らせる。15は外面に屈曲する沈線，16は直線的な縦位の沈線が施される。

無文土器（17・18）

沈線や縄文を有さない土器で，17・18は外面の調整が条痕文の粗製品である。

2　弥生時代から古墳時代初頭の遺構と遺物

（1）遺構

1　竪穴住居跡

ＳＢ２（第10図，図版８ｂ・ｃ）

Ｒ４区，Ｓ３・４区に位置する。東側でＳＸ33と重複し，南東側にはＳＤ49が近接する。なお，ＳＸ33との新旧関係は明らかではない。ＳＢ２は隣接するＣ地区の調査で確認されていたが，今回の調査で前回未確認だった住居跡の東側（ＳＢ２－ｄ・ｅ）を確認した。ＳＢ２は建替や縮小が行なわれた住居跡で，《ＳＢ２－ｅ》→《ＳＢ２－ｄ》→《ＳＢ２－ｃ》→《ＳＢ２－ａ》→《ＳＢ２－ｂ》と考えられる。

最も古い時期のＳＢ２－ｅは径8.6m程度の平面形が円形の住居跡（推定床面積52.0㎡）である。住居跡の中央でＳＢ２－ｄと重複し，床面西側および住居跡西壁をＳＢ２－ｃによって壊される。壁高は最も残存状況の良い東部で70cmである。壁溝は住居跡の北側と南東側で部分的に確認できた。壁溝の規模は残存状況の良い北側で長さ2.45m，上端幅33～38cm，深さ４cmである。なお住居跡の南東側に壁溝と並行する溝があり，規模は長さ1.65m，幅17～30cm，深さ10cm程度である。ＳＢ２－ｅは拡張もしくは縮小した可能性がある。主柱穴は不明である。

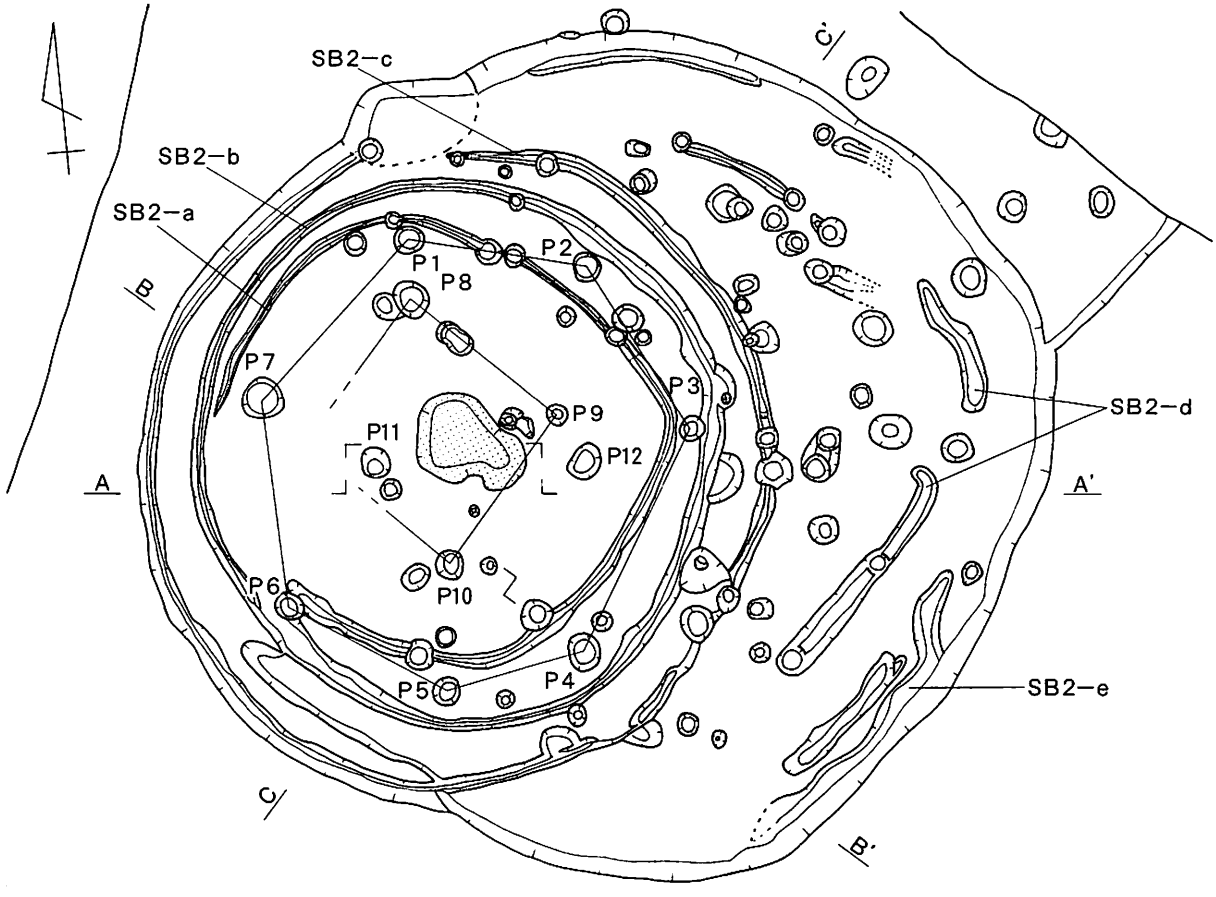
次に古い時期のＳＢ２－ｄの平面形は隅丸方形で，規模は不明である。住居跡東側の壁溝が確認された。壁溝は部分的に途切れるが，住居跡の東隅が確認できる。壁溝は上端幅11～32cm，深さ10～15cmの規模である。住居跡の西側をＳＢ２－ｃにより壊される。なお主柱穴は不明である。

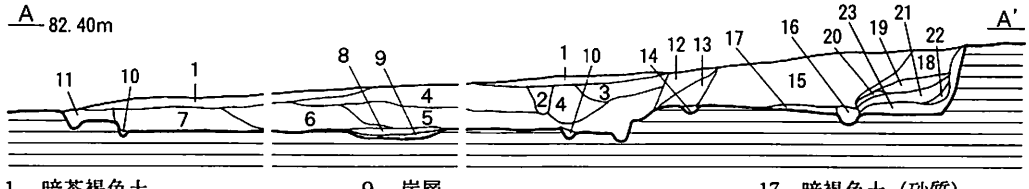
次に新しい時期のＳＢ２－ｃの平面形は径6.7m程度の円形（床面積32.5㎡）である。ＳＢ２－ｄ・ｅの西側と重複し，ＳＢ２－ｅの西壁を壊す。壁高は20～30cm，壁溝は上端幅13～20cm，深さ６cmである。主柱穴は７個で，Ｐ１は径30cm，深さ43cm，Ｐ２は径38cm，深さ30cm，Ｐ３は径35cm，深さ35cm，Ｐ４は径40cm，深さ39cm，Ｐ５は径30cm，深さ41cm，Ｐ６は径30cm，深さ40cm，Ｐ７は径45cm，深さ39cmの規模である。

次に新しい時期のＳＢ２－ａの平面形は径4.3m程度の円形（推定床面積13.2㎡）で，壁溝は南西部を欠くが，上端幅10～15cm，深さ７～10cmである。ＳＢ２－ａはＳＢ２－ｃのほぼ中央を掘り込んで作られる。主柱穴は３個を確認した。各柱穴の規模は，Ｐ８が径35cm，深さ38cm，Ｐ９が径22cm，深さ31cm，Ｐ10が径30cm，深さ34cmである。

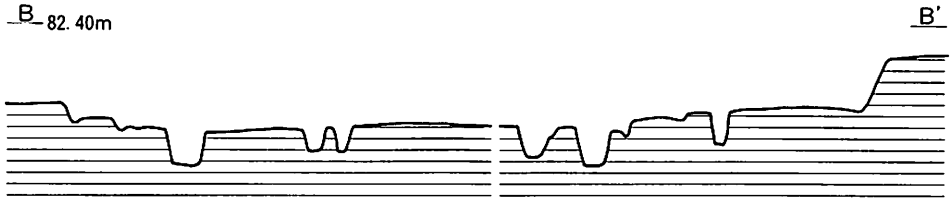
最も新しい時期のＳＢ２－ｂの平面形は径5.6m程度の円形（床面積21.2㎡）である。ＳＢ２－ｃを掘り込み，ＳＢ２－ａを拡張する。壁溝の規模は上端幅10～20cm，深さ12cmである。住居跡中央で炉跡と考えられる土坑を検出した。土層観察からＳＢ２－ｂに伴うものと思われる。平面形は不整形で，規模は長軸130cm，短軸90cm，深さは６cmである。炉跡の東側で，長さ25cm，幅15cm，厚さ10cmの台石が据え置かれた状態で出土した。主柱穴は２個を確認した。Ｐ11は径35cm，深さ25cm，Ｐ12は径40cm，深さ30cmである。

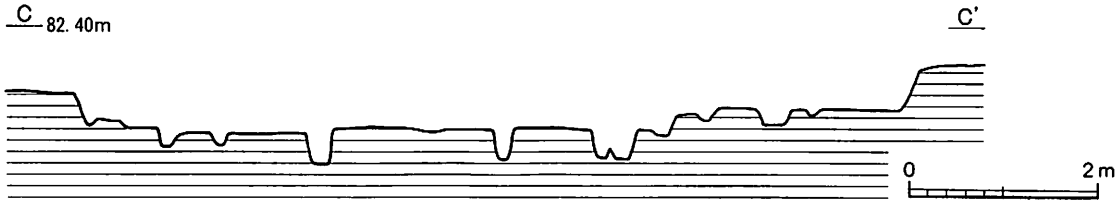
今回出土した遺物は弥生土器の壺（**24**）・甕（**19～21**）・鉢（**22・23**）などがある。なお，遺物はすべてＳＢ２－ｄ・ｅの埋土からの出土で，床面直上では確認できなかった。前回と今回の出





1 暗茶褐色土
2 灰褐色土
3 淡茶褐色土
4 黒褐色土（粗粒子）
5 茶褐色土（遺物包含）
6 黒褐色土（小礫を含む）
7 暗茶褐色土
8 黒褐色土（炭化物を多く含む）
9 炭層
10 暗褐色土（砂質）
11 暗茶褐色土
12 黒褐色土
13 暗茶褐色土（粗粒子）
14 暗茶褐色土（砂質）
15 黒褐色土（砂質，遺物を多く含む）
16 黒褐色土（砂質）
17 暗褐色土（砂質）
18 褐色土（砂質）
19 暗褐色土（砂質）
20 明褐色土（砂質）
21 暗橙褐色土（砂質）
22 明橙褐色土（砂質）
23 黒褐色土（砂質，遺物を多く含む）





第10図　ＳＢ２実測図（１：80）アミ目は焼土

土遺物を考慮すると，この住居跡の時期は弥生時代後期末葉頃と考えられる。

ＳＢ11（第11・12図，図版９ａ）

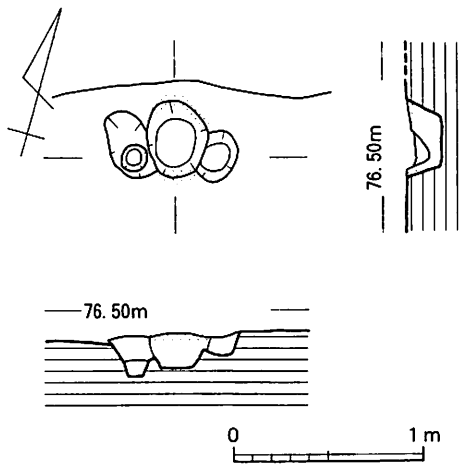
Ｌ（－２・－１）区・Ｍ（－２・－１）区に位置する竪穴住居跡である。本住居跡は２回の拡張が行なわれ，住居の時期は３時期を数える（ＳＢ11－ａ～ｃ）。ＳＢ11は隣接するＧ地区の調査で確認されていたが，今回の調査で前回未確認だった住居跡の南半を確認した。

ＳＢ11－ａは長径9.7m，短径9.0mの南北に長い楕円形で，北西側がやや張り出す。壁高は最も残りの良い東側で72.5cm，壁際には上端幅15～40cm，深さ10cmの壁溝が廻る。幅0.2～1.1m，高さ20cm程度の削り出しのベッド状遺構が壁際を帯状に廻り，ほぼ全周する。なお住居跡の南西部では床面とベッド状遺構の境が溝状となる。溝の規模は長さ3.3m，幅約25cm，深さ４cmである。ベッド状遺構を除く床面積は42.2㎡で，ベッド状遺構を含めると62.4㎡である。ＳＢ11－ｂ・ｃは壁溝が検出されたが，一部であるために住居跡の規模は不明確である。ＳＢ11－ｂの壁溝の規模は幅12cm，深さ６cm，ＳＢ11－ｃの壁溝の規模は幅15cm，深さ12cmである。またＳＢ11－ａは焼失住居跡で，炭化材が住居跡北東側を中心に広がる。炭化材は床面より４cm程度高い位置にあり，その下には炭化物を含まない土層を検出した。ある程度埋まった段階で焼失したものと思われる。

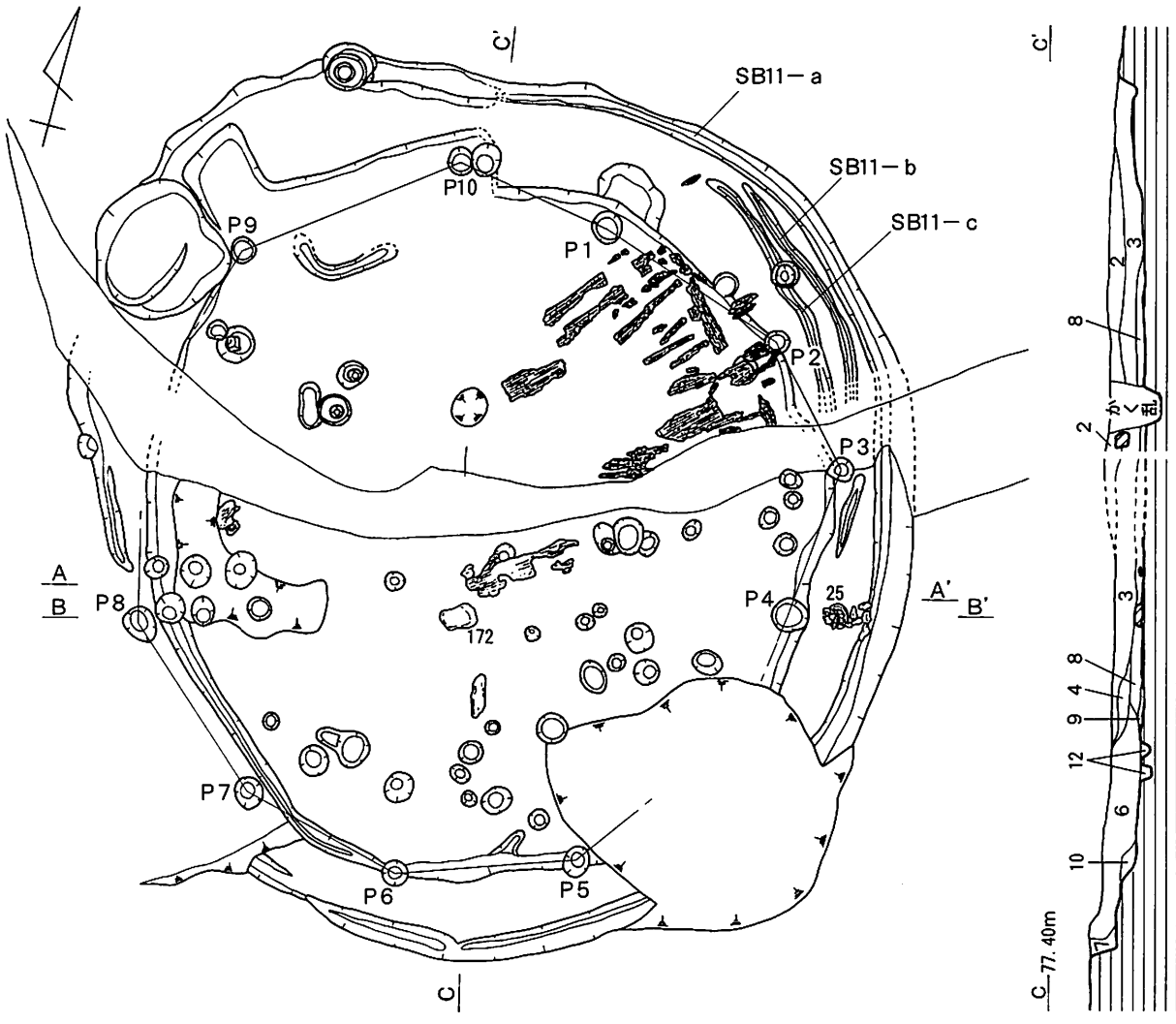
主柱穴と考えられるピットを10個検出した。これら柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２間が2.2m，Ｐ２－Ｐ３間が1.6m，Ｐ３－Ｐ４間が1.7m，Ｐ４－Ｐ５間が3.5m，Ｐ５－Ｐ６間が2.0m，Ｐ６－Ｐ７間が1.85m，Ｐ７－Ｐ８間が2.1m，Ｐ８－Ｐ９間が4.1m，Ｐ９－Ｐ10間が2.55m，Ｐ10－Ｐ１間が1.7mである。Ｐ４－Ｐ５間にはかく乱があり，Ｐ８－Ｐ９間は調査していないことから，これらの柱間に柱穴が存在した可能性があり，12本柱構造の住居と考えられる。各柱穴の規模は，Ｐ１が径約31cm，深さ16cm，Ｐ２が径26cm，深さ25cm，Ｐ３が長径28cm×短径27cm，深さ27cm，Ｐ４が長径42cm×短径35cm，深さ41cm，Ｐ５が長径36cm×短径28cm，深さ21cm，Ｐ６が径27cm，深さ32cm，Ｐ７が長径35cm×短径30cm，深さ28cm，Ｐ８が長径33cm×短径30cm，深さ48cm，Ｐ９が径28cm，深さ37cm，Ｐ10が長径28cm×短径26cm，深さ５cmである。なお，Ｐ10は位置的に北方向にややずれるとともに，深さも浅いことから，主柱穴でない可能性もある。

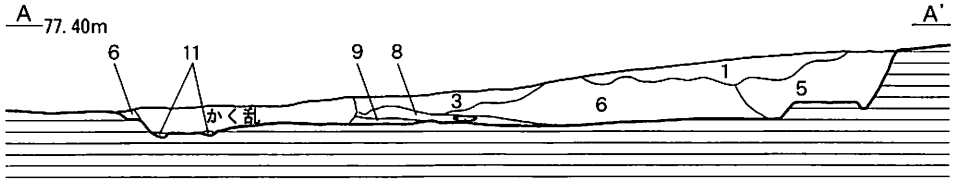
床面の中央東寄りの位置で炉跡を検出した。平面形は楕円形で，規模は長径40cm×短径32cm，深さ18cmである。上端付近は熱により赤変する。埋土は暗褐色砂質土で，炭化物は含まれていない。なお東西両側がピットと重複するが，それらとの新旧関係は不明である。

床面中央では台石（172）を検出し，東側のベッド状遺構の直上で弥生土器・甕（25）が出土した。その他の遺物は埋土からの出土である。出土遺物は弥生土器・甕（25～28）・

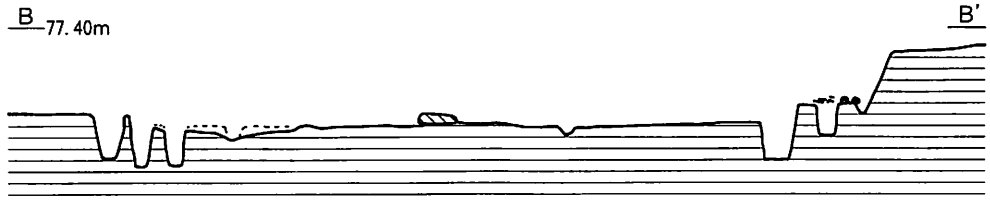


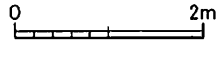
第11図　ＳＢ11炉跡実測図（1：40）アミ目は焼土





1　黒褐色土
2　灰褐色土
3　暗茶褐色土
4　暗褐色砂質土
5　黒褐色砂質土
6　黒褐色砂質土（炭化物をまばらに含む）
7　褐色土
8　黒褐色砂質土（炭化物を多く含む）
9　淡褐色砂質土
10　褐色粘質土
11　灰褐色砂質土
12　暗灰褐色砂質土





第12図　ＳＢ11実測図（１：80）

鉢（29）などがある。この住居跡の時期は出土遺物の特徴から弥生時代後期末葉頃と考えられる。なお，埋土から完形の土師質土器・皿（287～292）が出土した。さらに，このうちの１点（292）は銭種不明の古銭（296）がおかれていた。埋土を掘り込んで何らかの祭祀行為が行われたと推定される。

ＳＢ16（第13図，図版９ｂ）

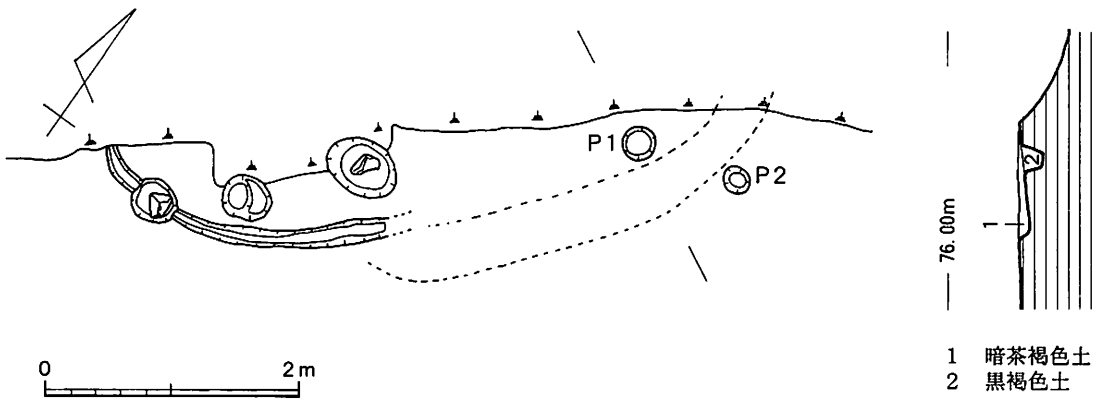
Ｌ（－４）区に位置し，すぐ北側にはＫ（－４）区の竪穴住居跡ＳＢ19がある。残存状況が悪く，痕跡的にしか確認できないが，隣接するＫ地区の調査で壁溝が確認されている。壁溝は確認できなかったが，わずかに残る暗茶褐色土の存在から推定した。平面形態は直径６ｍ程度の円形で，北側の大部分は既に削平され，約１／８程度を確認したことになる。Ｋ地区での壁溝は上端幅15～20cm，深さ５cmである。壁溝は内外２条が想定可能である。柱穴はＰ１，Ｐ２を確認したが，主柱穴ではないと思われる。Ｐ１は径27cm，深さ13cm，Ｐ２は径22cm，深さ４cmである。

出土遺物としては明確に伴うものはないが，埋土等からこの住居跡の時期はＳＢ15やＳＢ19と同じく，弥生時代後期後葉頃と考えられる。

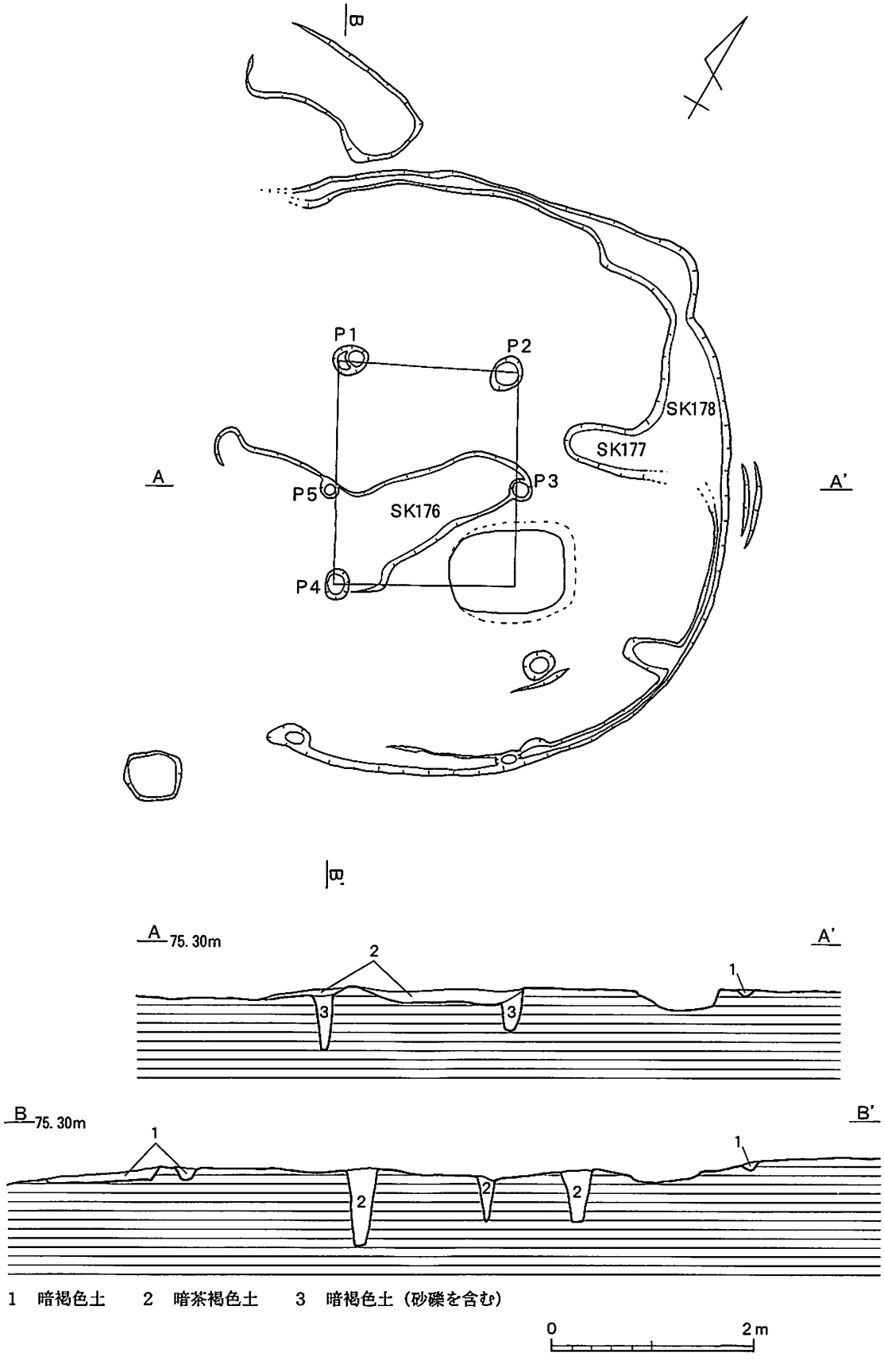
ＳＢ19（第14図，図版９ｃ）

Ｊ・Ｋ（－４）区に位置し，すぐ西側にはＫ（－５）区の竪穴住居跡ＳＢ15がある。平面形態は直径約６ｍの円形（推定床面積28m²）で，西側１／３を除いて壁溝が巡る。残存する壁高は20～50cmで，壁溝は上端幅10～20cm，深さ５～10cmである。

主柱穴は現状で５個，南東隅にさらに１個存在したと考えられる。柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２が1.8m，Ｐ２－Ｐ３が1.15m，Ｐ４－Ｐ５が0.95m，Ｐ５－Ｐ１が1.25mである。柱穴の規模はＰ１が長径35cm×短径30cm，深さは西側が34cm，東側は41cm，Ｐ２が長径38cm×短径30cm，深さは50cm，Ｐ３が長径24cm×短径20cm，深さは40cm，Ｐ４が長径30cm×短径25cm，深さは42cm，Ｐ５が径20cm，深さは52cmである。床面中央に東西0.7m，南北２ｍ，深さ６cmの土坑ＳＫ176があるが，坑底は焼けていない。土坑埋土（暗茶褐色土）に炭を含むので，炉跡の可能性がある。また，東外側に１条壁溝を確認した。建替が認められる。



第13図　ＳＢ16実測図（１：60）



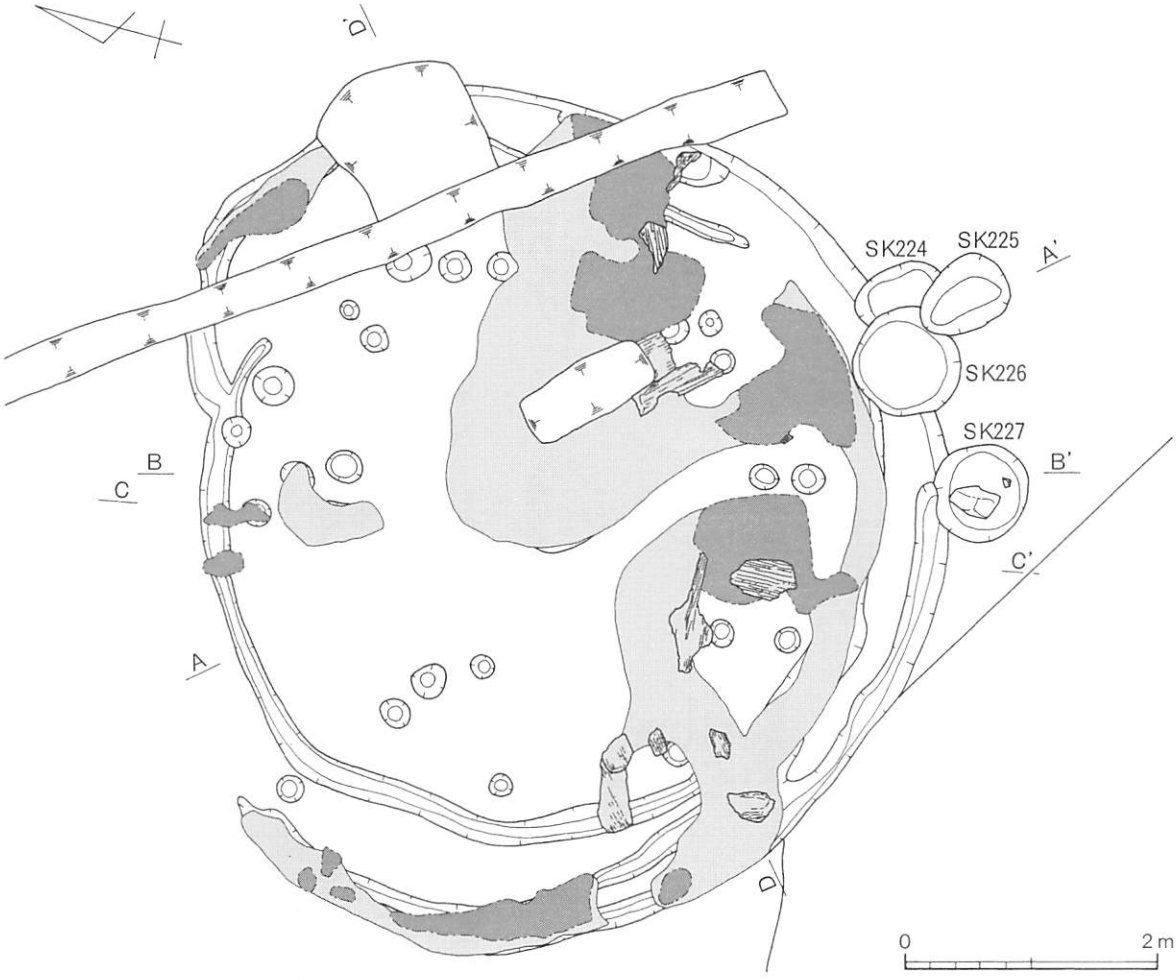
第14図　ＳＢ19実測図（１：60）

出土遺物としては，南側壁溝から弥生土器が少量出土した。また，住居内の土坑ＳＫ176から弥生土器・甕が出土した。いずれの出土遺物も小片のため図示できない。この住居跡の時期は，出土土器の特徴から弥生時代後期後葉頃と考えられる。

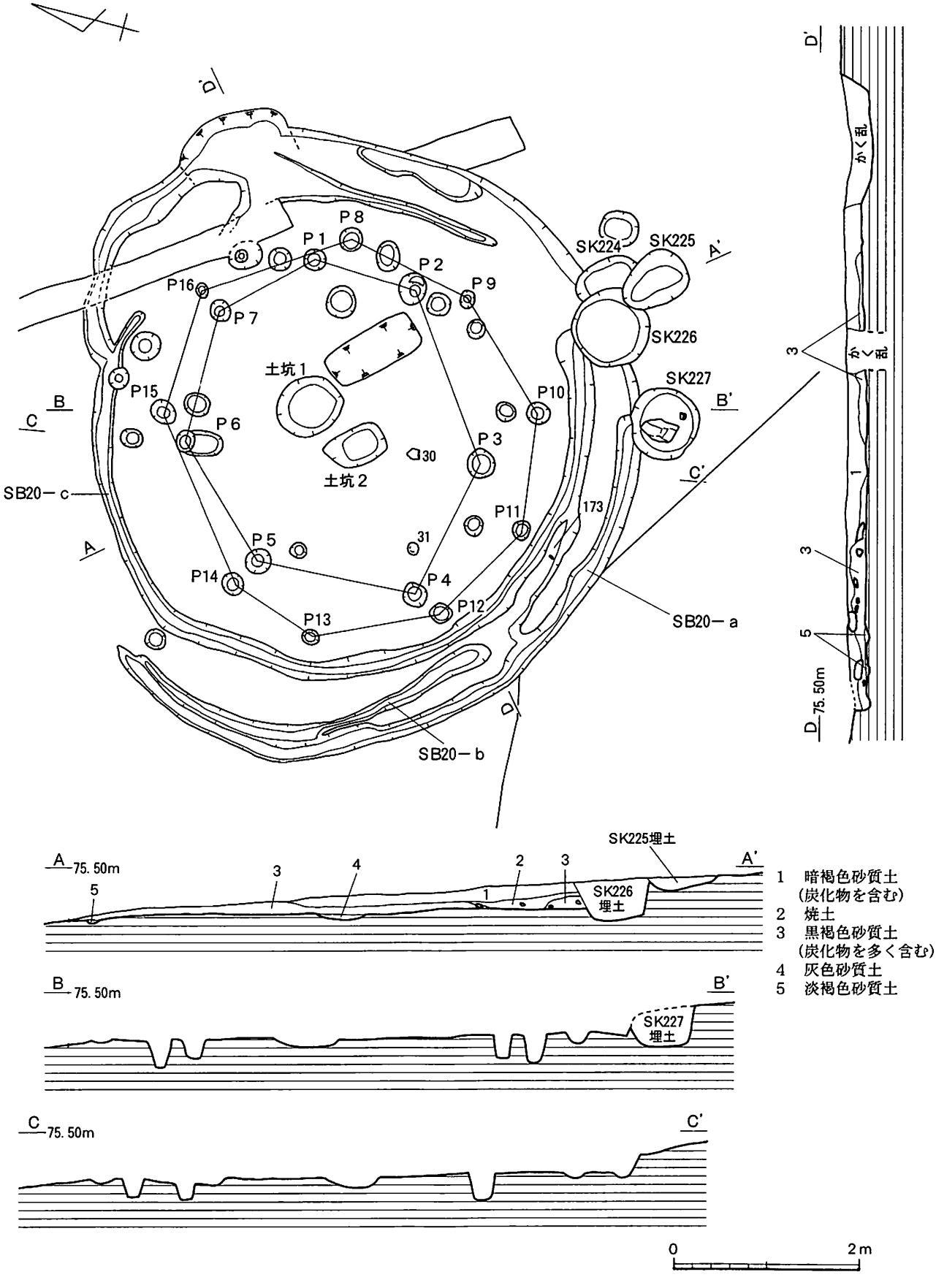
ＳＢ20（第15・16図，図版10ａ～ｃ）

Ｉ・Ｊ（－３・－２）区に位置する竪穴住居跡である。南東側でＳＫ224・226・227と重複する。ＳＫ224～226はＳＢ20よりも新しい時期の遺構であるが，ＳＫ227はＳＢ20との新旧関係は不明である。本住居跡は２回の拡張が行われ，住居の時期は少なくとも３時期を数える（ＳＢ20－ｃ→ｂ→ａ）。

ＳＢ20－ａは長径6.7m，短径6.4mの北東－南西方向に長い不整円形（推定床面積30.1m²）である。緩斜面に立地することから北側を一部流失する。壁高は最も残りの良い南側で33cmである。壁溝は南西側と東側，北東側の三箇所で検出した。壁溝の幅は南西側で上端幅15～27cm，西側で上端幅22～30cm，北東側で上端幅22～38cmである。深さはそれぞれ７cm，５cm，７cmである。ＳＢ20－ｂの壁溝を西側で確認した。東西方向の長い不整円形を呈すると考えられるが，確認でき



第15図　ＳＢ20炭化物・焼土範囲実測図（１：60）アミ目は炭化物，濃いアミ目は焼土



第16図　ＳＢ20実測図（１：60）

た壁溝が一部であるため不明確である。また規模も明らかではない。壁溝の規模は上端幅10～35cm，深さ７cmである。ＳＢ20－ｃは径5.2mの円形（床面積19.1㎡）である。壁溝は南東部及び北東部で一部途切れるが，ほぼ全周する。壁溝の規模は上端幅13～27cm，深さ９cmである。またＳＢ20－ａは焼失住居跡で，炭化材や焼土が住居跡南側を中心に広がる。

ＳＢ20の柱構造は７本柱構造と９本柱構造が考えられる。７本柱構造の主柱穴はＰ１～Ｐ７，９本柱構造の主柱穴はＰ８～Ｐ16がある。Ｐ１～３，Ｐ７の埋土には炭化物や焼土が含まれており，焼失した際の主柱穴であった可能性があり，ＳＢ20－ａに伴うと考えられる。９本柱構造が，ＳＢ20－ａ～ｃのどの時期に対応するか不明である。

７本柱構造の各柱間の距離はＰ１－Ｐ２が1.13m，Ｐ２－Ｐ３が2.0m，Ｐ３－Ｐ４が1.56m，Ｐ４－Ｐ５が1.76m，Ｐ５－Ｐ６が1.5m，Ｐ６－Ｐ７が1.46m，Ｐ７－Ｐ１が1.18mである。各柱穴の規模はＰ１が径24cm，深さ18cm，Ｐ２が長径36cm×短径32cm，深さ36cm，Ｐ３が長径32cm×短径28cm，深さ36cm，Ｐ４が長径26cm×短径24cm，深さ31cm，Ｐ５が長径28cm×短径25cm，深さ22cm，Ｐ６が長径24cm×短径18cm，深さ22cm，Ｐ７が径22cm，深さ18cmである。なお，Ｐ６は長径40cm×短径26cmの楕円形土坑と重複するが，新旧関係は不明である。９本柱構造の各柱間の距離はＰ８－Ｐ９が1.4m，Ｐ９－Ｐ10が1.48m，Ｐ10－Ｐ11が1.3m，Ｐ11－Ｐ12が1.24m，Ｐ12－Ｐ13が1.4m，Ｐ13－Ｐ14が1.0m，Ｐ14－Ｐ15が2.0m，Ｐ15－Ｐ16が1.4m，Ｐ16－Ｐ８が1.7mである。各柱の規模はＰ８が長径24cm×短径23cm，深さ18cm，Ｐ９が長径20cm×短径17cm，深さ23cm，Ｐ10が長径25cm×短径23cm，深さ29cm，Ｐ11が長径18cm×短径17cm，深さ20cm，Ｐ12が長径23cm×短径20cm，深さ29cm，Ｐ13が長径19cm×短径15cm，深さ21cm，Ｐ14が長径24cm×短径22cm，深さ21cm，Ｐ15が長径27cm×短径24cm，深さ31cm，Ｐ16が長径15cm×短径13cm，深さ15cmである。

床面中央には炉跡と考えられる土坑が２基（土坑１・２）ある。土坑1は中央やや東寄りに位置し，長径70cm×短径61cmの楕円形を呈する。深さは８cmである。土坑２は中央やや南寄りに位置し，長軸65cm×短軸42cmの不整方形を呈し，深さは９cmである。いずれも埋土は暗灰褐色砂質土であるが，土坑１は炭化物を多く含み，土坑２はほとんど炭化物が含まれていなかった。土坑１はＳＢ20－ａに伴う可能性がある。

床面から４～６cm程度高い位置で，炭化物や焼土とともに弥生土器・壺（30）の破片と完形の弥生土器・椀（31）が出土した。また，ＳＢ20－ｂの壁溝底面から有孔砥石（173）が出土した。弥生土器・脚部（32）は埋土からの出土である。この住居跡の時期は，出土遺物の特徴から弥生時代後期後葉頃と考えられる。

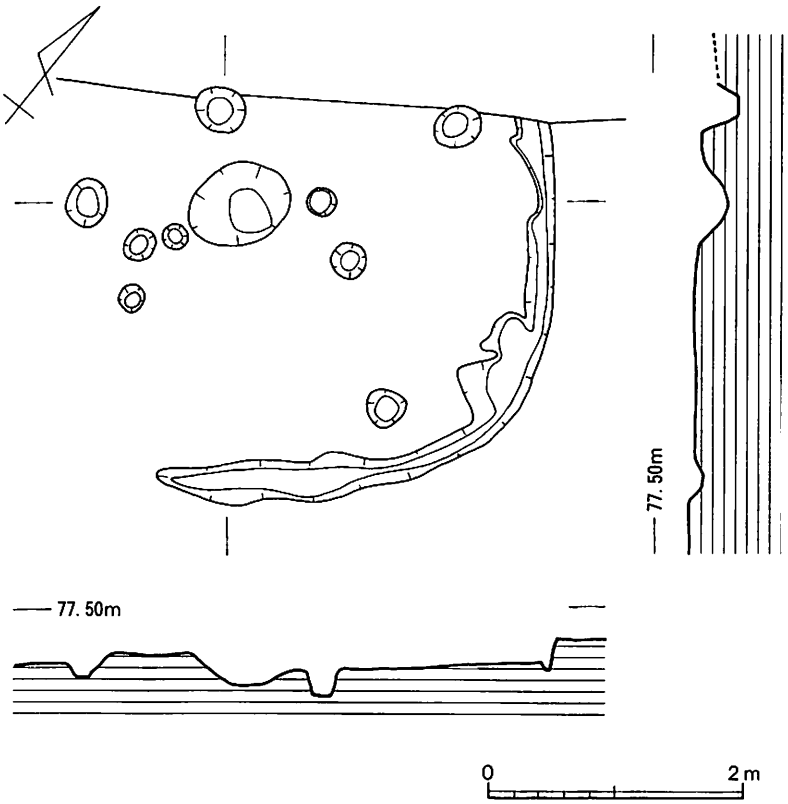
ＳＢ21（第17図，図版11ａ）

Ｍ・Ｎ（－１）区に位置する竪穴住居跡である。緩斜面に立地することから斜面下側にあたる住居跡西側を流失し，さらに住居跡北側を水路により壊される。平面形は丸みを帯びた隅丸方形と考えられるが，規模は不明である。壁高は残存状況の良い住居跡東角で23cmである。壁溝は住

居跡東角を中心として長さ約4.2m残存する。規模は上端幅12～33cm，深さ8cmである。

柱構造及び主柱穴は不明である。床面中央付近に平面形が楕円形の土坑がある。規模は長径80cm×短径63cm，深さ22cmで，埋土はわずかに炭化物を含む黒褐色砂質土である。床面中央付近にあり，炭化物を含むことから炉跡と考えられる。

遺物は床面中央の土坑(炉跡)の埋土から弥生土器・甕（33），壁溝底面から磨石（174・175）が出土した。この住居跡の時期は，出土遺物の特徴から弥生時代中期中葉～後葉頃と考えられる。



第17図　ＳＢ21実測図（１：60）

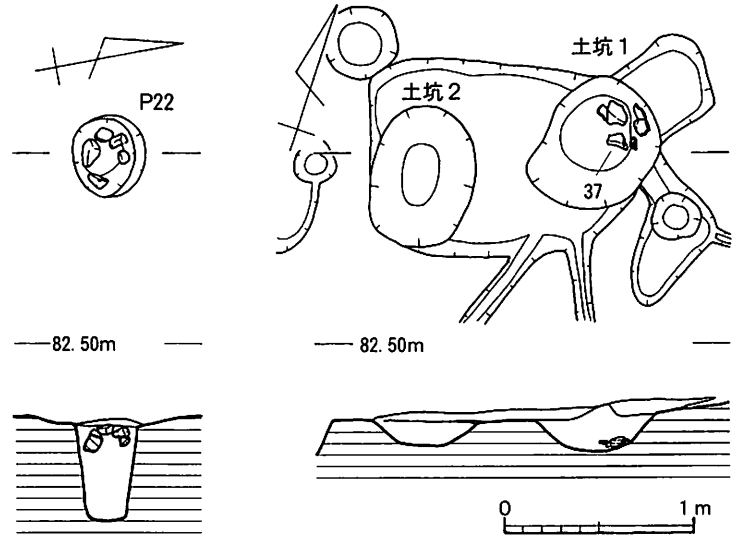
ＳＢ23（第18・19図，図版11ｂ・ｃ）

Ｓ・Ｔ４区に位置する竪穴住居跡である。住居跡北側でＳＤ49，ＳＫ239・240と重複する。住居跡との新旧関係はＳＢ23（古）→ＳＫ239・240（新）である。なお，ＳＤ49との新旧関係は不明である。また，南側ではＳＸ34と重複するが，新旧関係は不明である。ＳＢ23は少なくとも３回にわたって拡張を繰り返してきたと考えられる（ＳＢ23－ａ～ｄ）。ＳＢ23－ａは壁溝をほとんど伴わない最も新しい時期の楕円形の竪穴住居跡で，推定規模は長径8.0m×短径7.8m（推定床面積48m²）である。壁高は最も残存状況の良い東側で45cmである。ＳＢ23－ｂは楕円形の住居跡で，壁溝は途切れながら半周以上廻る。住居の推定規模は長径7.4m×短径7.0m程度（推定床面積40m²）で，壁溝の規模は幅17～35cm，深さ５cmである。ＳＢ23－ｃの壁溝は途切れながら半周程度円形に廻る。住居南側ではＳＢ23－ｂの壁溝とほぼ重なると考えられる。住居跡の推定規模は長径7.4m×短径6.4m程度（推定床面積35m²）で，壁溝の規模は幅17～47cm，深さ22cmである。ＳＢ23－ｄの壁溝は床面東側で確認された。また床面北西側では壁溝の外側上端と考えられる掘り込みがある。以上のことから，ＳＢ23－ｄの推定規模は長径6.4m×短径6.0m程度（推定床面積27m²）と考えられる。なお壁溝の規模は幅15～20cm，深さ５cmである。

柱構造は柱の配置などから５本柱構造，８本柱構造，９本柱構造の３パターンが考えられる。壁溝との距離を考慮すると，ＳＢ23－ａ・ｂはＰ１～８を主柱穴とする８本柱構造，ＳＢ23－ｃ

はＰ１・９～16を主柱穴とする９本柱構造，ＳＢ23－ｄはＰ17～21を主柱穴とする５本柱構造と考えられる。なおＳＢ23－ａ・ｂ・ｃではＰ１を共有することとなる。ＳＢ23－ａ・ｂの各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ２が2.4m，Ｐ２－Ｐ３が2.1m，Ｐ３－Ｐ４が2.3m，Ｐ４－Ｐ５が2.7m，Ｐ５－Ｐ６が2.2m，Ｐ６－Ｐ７が2.1m，Ｐ７－Ｐ８が2.5m，Ｐ８－Ｐ１が1.9mである。各主柱穴の規模は，Ｐ１が長径30cm×短径28cm，深さ22cm，Ｐ２が径30cm，深さ35cm，Ｐ３が長径53cm×短径31cm，深さ48cm，Ｐ４が長径30cm×短径推定（25）cm，深さ44cm，Ｐ５が長径57cm×短径53cm，深さ43cm，Ｐ６が長径50cm×短径40cm，深さ36cm，Ｐ７が径34cm，深さ14cm，Ｐ８が径35cm，深さ33cmである。ＳＢ23－ｃの各主柱穴間の距離は，Ｐ１－Ｐ９は1.7m，Ｐ９－Ｐ10は1.7m，Ｐ10－Ｐ11は1.5m，Ｐ11－Ｐ12は1.6m，Ｐ12－Ｐ13は1.9m，Ｐ13－Ｐ14は1.7m，Ｐ14－Ｐ15は1.9m，Ｐ15－Ｐ16は1.5m，Ｐ16－Ｐ１は1.7mである。各主柱穴の規模は，Ｐ９が長径40cm×短径推定（35）cm，深さ49cm，Ｐ10が径30cm，深さ46cm，Ｐ11が長径49cm×短径推定（32）cm，深さ７cm，Ｐ12が長径38cm×短径33cm，深さ40cm，Ｐ13が長径57cm×短径28cm，深さ28cm，Ｐ14が長径31cm×短径28cm，深さ39cm，Ｐ15が長径68cm×短径46cm，深さ43cm，Ｐ16が長径33cm×短径推定（30）cm，深さ42cmである。ＳＢ23－ｄの各主柱穴間の距離は，Ｐ17－Ｐ18が2.05m，Ｐ18－Ｐ19が1.9m，Ｐ19－Ｐ20が2.4m，Ｐ20－Ｐ21が2.0m，Ｐ21－Ｐ17が2.0mである。各主柱穴の規模は，Ｐ17が長径推定（40）cm×39cm，深さ47cm，Ｐ18が長径推定（37）cm×短径推定（30）cm，深さ53cm，Ｐ19が径33cm，深さ60cm，Ｐ20が長径29cm×短径28cm，深さ９cm，Ｐ21が径39cm，深さ23cmである。

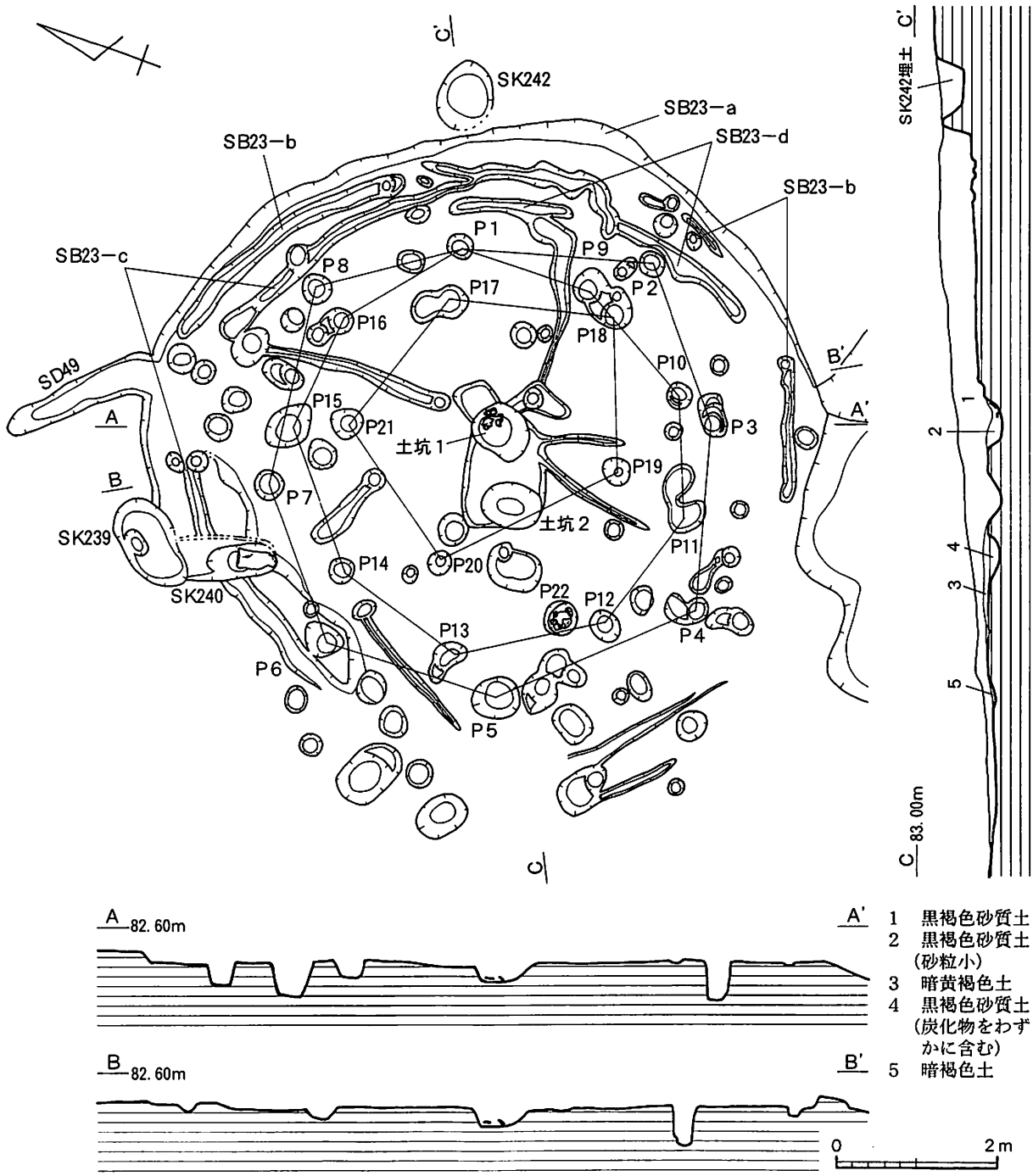
ＳＢ23－ａの床面は東から西へ下傾し，高低差は20cm程度である。また北西壁付近の床が幅１m，長さ3.3mの範囲で周囲より７cm程度高くなっており，削り出しのベッド状遺構の可能性がある。床面中央には長軸推定（1.25）m×短軸1.03mの隅丸方形の土坑（深さ９cm）があり，その土坑の東端と西端にそれぞれ楕円形の土坑が掘り込まれる。東端の土坑（土坑１）は隅丸方形土坑の東辺上端を壊し，規模は長径72cm×短径58cm，深さ25cmである。また西端の土坑（土坑２）の規模は長径推定（75）cm×短径53cm，深さ15cmである。床面東半を中心として土坑１から放射状に溝が延びる。これらの溝は幅７～25cm，深さ２～８cmで，底面の高低差はほとんどない。またいずれの溝も土坑１に接続はしていない。また，住居西側に直線的な溝が数条認められる。これらの溝は幅13～23cm，深さ３～11cmである。規模から壁溝の可能性がある。また，床面西側に位置するＰ22の上層では５～15cm大の礫を円



第18図　ＳＢ23Ｐ22及び土坑１・２実測図（１：40）

形に配していた。礫の平坦な面がピットの中心を向いていたことから，これらの礫は柱を固定するための裏込めに使用されたと考えられる。これらのことからもＳＢ23はさらに住居跡が重複していた可能性が高い。なお，Ｐ22の規模は径44～38cm，深さ53cmである。

土坑１から弥生土器・甕（37）・脚部（44・45）・鉢（46）が出土した。なお46は手づくね土器である。その他の遺物は埋土からの出土で，弥生土器・壺（34・35）・甕（36・38～42）・鉢（43），摘鎌（183）がある。この住居跡の時期は出土遺物から弥生時代後期後葉～末葉と考えられる。



第19図　ＳＢ23実測図（１：80）

3　土坑

ＳＫ136（第20図）

Ｕ０区に位置する土坑で，等高線に平行する。平面形態は不整形で，上面で東西1.8m，南北3.5m。底面では東西1.7m，南北3.37m。深さは10～20cmで，西側の低い斜面側は浅くなっていた。底面は平坦である。埋土は砂を含んだ黒褐色土で，土器が少量出土した。

出土遺物としては，弥生土器・壺（**47**・**48**）・高杯（**49**）や，須恵器高杯，土師器甑などがある。出土した弥生土器の時期は弥生時代後期中葉に納まると思われる。遺構の時期は，出土土器と，埋土が黒褐色土であることなどから判断して，弥生時代後期（中葉）になる。

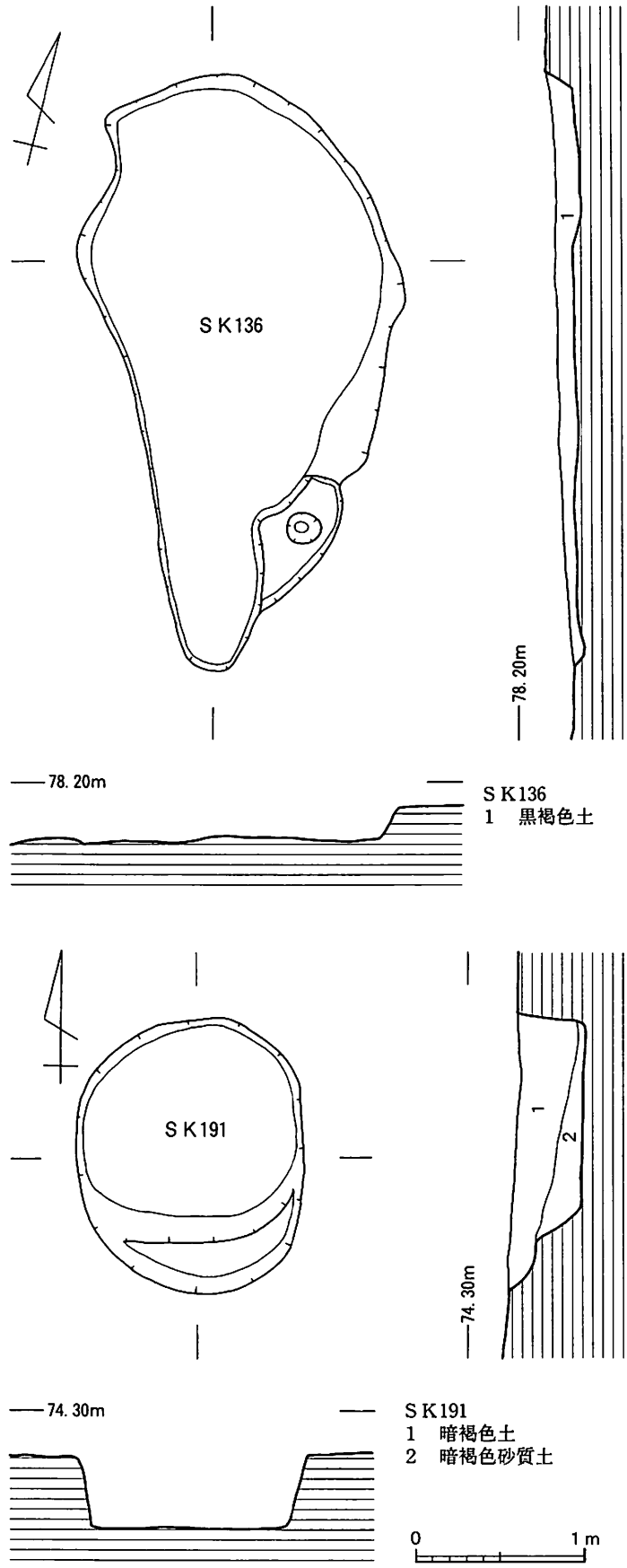
ＳＫ191（第20図，図版12ｂ）

Ｊ（－５）区に位置する。平面形態は楕円～円形で，南部が２段になっており，上面は楕円形で東西1.32m，南北1.6m，中段以下は円形で東西1.32m，南北1.32m，底面は東西1.24m，南北1.12mである。深さは40cmで，坑底面は平坦である。

埋土は大きく２層に分かれ，下層は砂を多く含んでいた。遺物は土器の細片が出土した。縄文土器（**11**），弥生土器などがある。埋土が暗褐色土であり，周囲の状況などから見て，弥生時代後期頃の時期で，貯蔵穴と考えられる

ＳＫ142（第21図，図版12ａ）

Ｐ（－１）区に位置する土坑である。平面形態はほぼ円形で，径1.25m，底面では径1.17m，深さは35～40cmで，底面

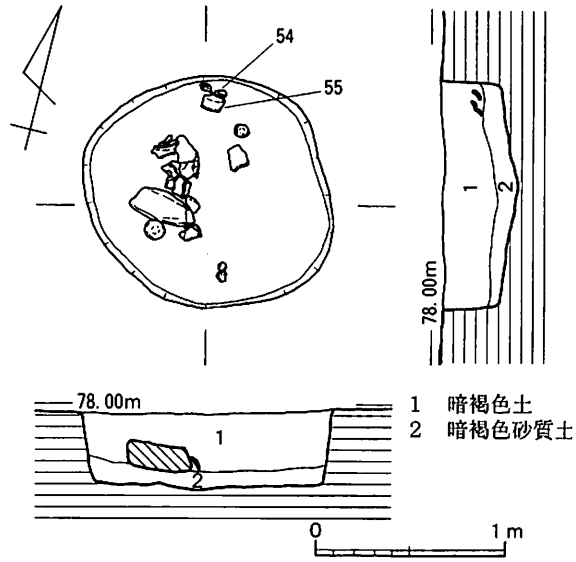


第20図　ＳＫ136・191実測図（１：40）

は平坦である。

ＳＫ１の内部からは多量の土器片とともに，小児頭大の石から拳大の礫が一括して投棄されたと思われる状況で出土した。土層は大きく２層に分かれ，遺物は上層と下層で出土したが，特に上層からまとまって出土した。下層は砂を多く含んでいた。

出土遺物としては，弥生土器の壺（50），甕（51・52），鉢（53～61）などがある。土器は二つの層から出土したが，いずれも時期的には弥生時代後期末葉（庄内式併行）に納まると思われる。



第21図　ＳＫ142実測図（１：40）

ＳＫ213（第22図，図版12ｃ）

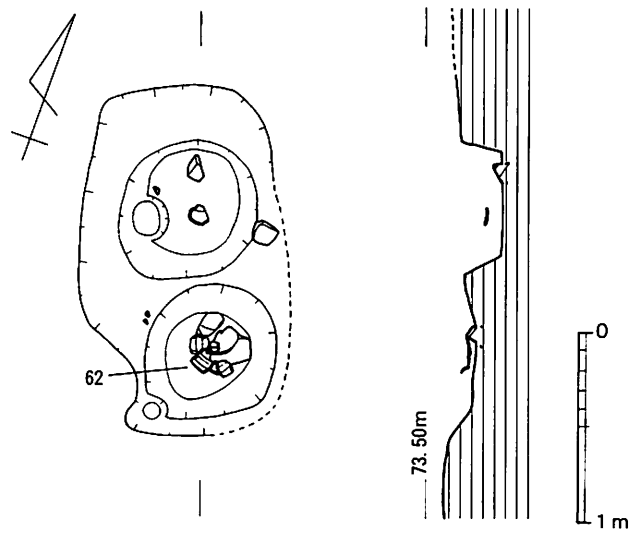
Ｈ（－４）区にあり，ＳＸ23の底面中央やや西側に位置する。ＳＸ23との新旧関係は不明である。規模は長軸1.83m，短軸1.05mの不整隅丸方形で，深さは10cmである。主軸方向はほぼ南北方向を指す（N19°W）。底面はすり鉢状に窪み，長軸に沿って２基のピットが並ぶ。北側のピットは長径80cm×短径70cmの不整円形で，深さ20cm，南側のピットは長径推定（80）cm×短径72cmの不整円形で，深さ５cmである。いずれも埋土は黒褐色砂質土で，底面に地山の石が露出する。北側のピット下層で土器片が出土し，また南側のピットでは石の直上で弥生土器・壺の口縁部（62）が出土した。なお北側ピットには底面南西隅に径25cm，深さ10cmの小ピットが，南側ピットには上端北端に径15cm，深さ15cmの小ピットがある。小ピットの埋土は灰褐色土である。新旧関係は小ピット（古）→南北ピット（新）である。

出土遺物は，弥生土器・壺（62）・甕（63）・鉢（64）がある。この遺構の時期は，出土遺物から弥生時代後期末葉頃と考えられる。

ＳＫ219（第23図，図版13ａ～ｃ）

Ｊ（－４）区に位置する不整円形の貯蔵穴である。規模は径2.0m，深さ77cmで，北東側を除きオーバーハングする。底面は南北に長い楕円形で，規模は長径2.0m×短径1.76mである。底面はほぼ平坦で，西側から東側へ緩やかに６cm下傾する。

出土遺物は大きく三箇所から出土した。上層の中央（68・71・82・86）と，中層の中央～北側（69・72・73・75・78・83・88），



第22図　ＳＫ213実測図（１：40）

底面の東隅および南西隅（67）である。中層から出土した遺物は完形のものが多い。また甕の口縁～頸部（69）を天地逆にし，その中に高杯の杯部（83）をはめ込んだ状態で出土した。出土遺物は，弥生土器・壺（65・66）・甕（67～73）・鉢（74～82・89～92）・高杯（83・84・86）・低脚杯（85）・脚部（87）・鼓形器台（88）・底部（93）などがある。なお89～92は小型で，89は手づくね土器である。この貯蔵穴の時期は，出土遺物から弥生時代後期末葉～古墳時代初頭と考えられる。

ＳＫ227（第24図，図版14ａ）

Ｊ（－２）区に位置する円形の土坑である。ＳＢ20の南端に接するが，ＳＢ20との新旧関係は不明である。規模は長径0.77ｍ×短径0.73ｍ，深さ45cmである。検出面で長さ35cm，幅25cm，厚さ22cmの自然石を検出した。底面の規模は径0.61ｍ×0.55ｍで，中央が３cm程度窪む。

縄文土器（９）と弥生土器の小片が少量出土した。この遺構の時期は，弥生時代と思われる。

ＳＫ229（第24図，図版14ｃ・ｄ）

Ｌ（－３・－２）区に位置する貯蔵穴で，平面形は北西－南東に長い楕円形である。規模は長径1.3ｍ×短径1.12ｍ，深さ85cmで，南西および北東側がオーバーハングする。底面の規模は長径1.33ｍ×短径1.13ｍで，北東－南西に長い楕円形である。底面は平坦で，南から北に向って17cm下傾する。

上～中層では10cm大の石がまばらに出土し，南西側の中～下層で土器片が出土した。出土遺物は，縄文土器（１），弥生土器・壺（94・95）・甕（96～98・101）・鉢（99・100）・器種不明（102）などである。この貯蔵穴の時期は，出土遺物の特徴から弥生時代後期末葉頃と考えられる。

ＳＫ230（第24図，図版14ｂ）

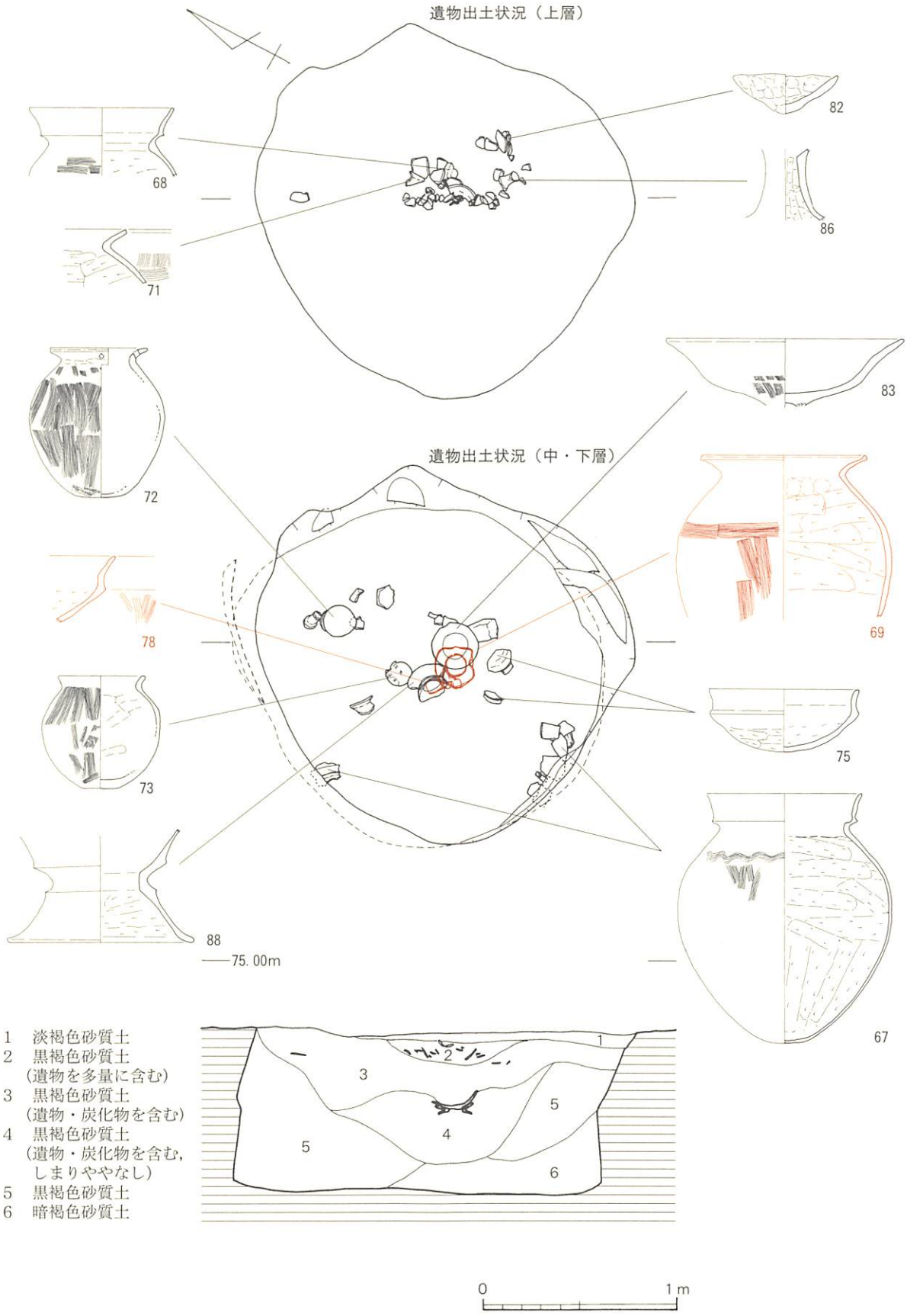
Ｌ（－１）区に位置する隅丸方形の土坑である。北～北西側はかく乱を受けていた。規模は長軸1.5ｍ×短軸1.15ｍ，深さ40cmである。主軸はほぼ南北方向（Ｎ10°Ｗ）で，南側がオーバーハングする。底面の規模は長軸1.43ｍ×短軸0.91ｍで，底面は南から北に向って７cm下傾する。

出土遺物は，弥生土器・甕（103）・鉢（104）などである。出土遺物からこの土坑の時期は弥生時代後期末葉頃と考えられる。

ＳＫ231（第24図，図版14ｅ）

Ｍ０区に位置する不整楕円形の土坑である。南側をかく乱に壊される。規模は径2.1ｍ以上×1.29ｍ，深さ14cmで，主軸方向は北東－南西方向（Ｎ35°Ｅ）である。また，底面の規模は長軸1.7ｍ以上×短軸1.05ｍで，ほぼ平坦な底面は南から北に向って７cm下傾する。なお底面北東隅に径25cm，深９cmのピットがある。ＳＫ231との新旧関係は不明である。

出土遺物は弥生土器・底部の破片などがある。この土坑の時期は弥生時代であろう。



第23図　ＳＫ219実測図（１：30）

ＳＫ233（第24図，図版14ｆ）

Ｎ０区に位置するやや丸みをおびた方形の土坑である。規模は長軸1.27ｍ×短軸1.14ｍ，深さ19cmで，主軸方向は北西－南東方向（N49°W）である。底面の規模は長軸1.13ｍ×短軸1.04ｍで，底面はほぼ平坦である。なお，北角で不整形の落ち込みと重複するが，新旧関係は不明である。

弥生土器の破片が少量出土したことから，ＳＫ233は弥生時代の遺構と思われる。

ＳＫ234（第24図，図版14ｇ）

Ｎ０区に位置する円形の土坑である。規模は径0.88ｍ，深さ43cmである。西側でＳＤ44と重複し，これを壊す。土坑東半はオーバーハングする。底面の規模は長径0.95ｍ×短径0.9ｍで，底面は東端付近が周囲より５cm程度窪む。底面中央付近の底面から５cm程度高い位置で土器（体部）が出土した。またこの土器の直上には長さ25cm，幅20cm，厚さ８cmの自然石があった。

出土遺物は，弥生土器・壺（**105・106**）・鉢（**107**）などである。出土遺物の特徴からこの土坑の時期は弥生時代後期末葉頃と考えられる。

ＳＫ235（第24図，図版14ｈ）

Ｎ０区に位置する方形の土坑である。北側でＳＤ45と重複するが，新旧関係は不明である。規模は長辺1.35ｍ以上×短辺0.8ｍ，深さ25cmである。なお南西辺はピットに壊され，残存状況が悪い。主軸は北西－南東方向（N24°W）である。底面の規模は長辺1.27ｍ以上×短辺0.7ｍで，底面は平坦で北から南へ向って５cm下傾する。

出土遺物は弥生土器・甕（**108**）がある。出土遺物の特徴からこの土坑の時期は弥生時代後期頃と考えられる。

ＳＫ242（第24図）

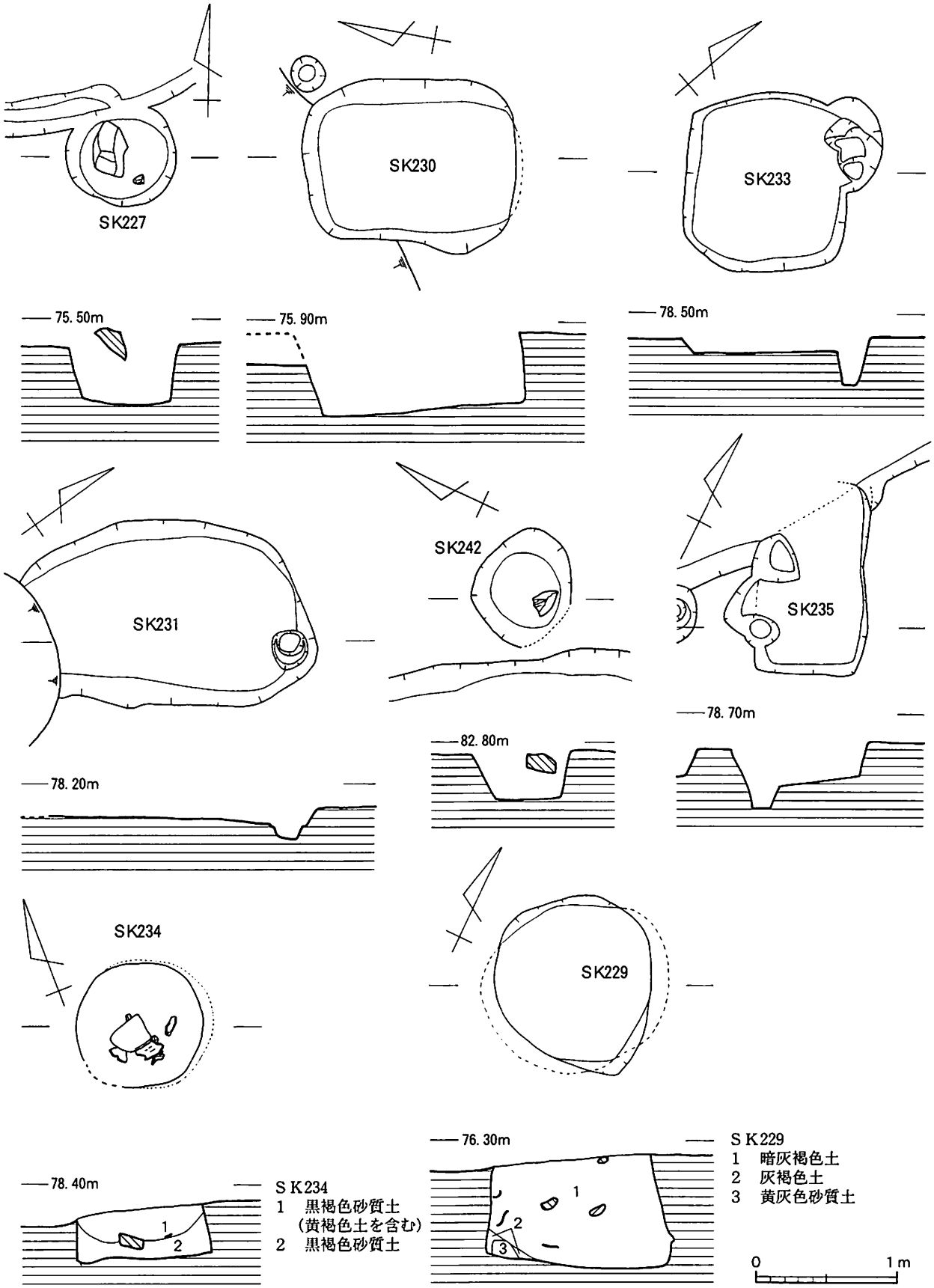
Ｓ４区に位置する楕円形の土坑で，西側にＳＢ23が近接する。規模は長径0.82ｍ×短径0.68ｍ，深さ32cmである。底面の規模は長径0.60ｍ×短径0.48ｍで，南から北に向って５cm下傾する。埋土は黒褐色砂質土で，南側の上層で長さ20cm，幅14cm，厚さ14cmの自然石を検出した。

出土遺物は，縄文土器，弥生土器があるが，いずれも小片のため図示できない。出土遺物からこの土坑の時期は弥生時代であろう。

ＳＫ238（第25図，図版15ａ・ｂ）

Ｓ２区に位置する不整円形の貯蔵穴である。規模は長径1.21ｍ×短径1.10ｍ，深さ58cmである。土坑東半はオーバーハングする。底面は径1.16ｍの円形で，ほぼ平坦である。上層から中層にかけて一括廃棄された土器が大量に出土した。埋土は黒褐色砂質土である。

出土遺物は弥生土器・壺（**109～114**）・甕（**115～133**）・鉢（**134～145**）・蓋（**146・147**）・底部



第24図 SK227・229～231・233～235・242実測図（1：40）

(148) である。出土遺物の特徴からこの遺構の時期は弥生時代後期末葉頃と考えられる。

溝状遺構

ＳＤ44（第26図，図版16ａ）

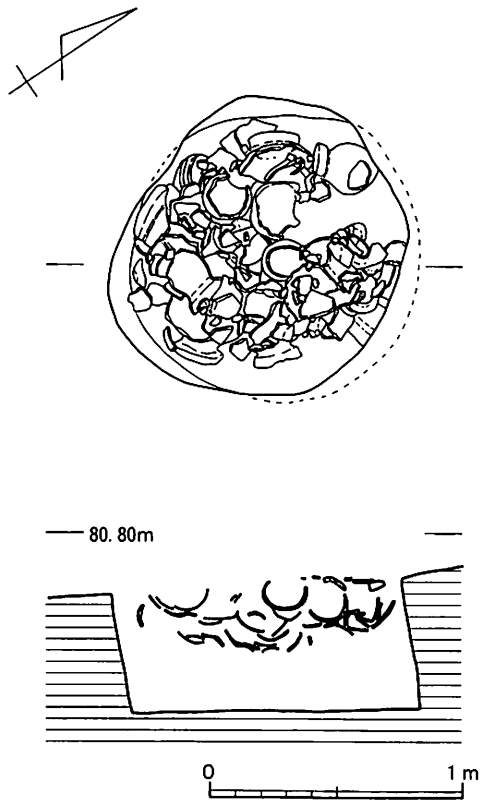
Ｎ（－１）・０区に位置する溝状遺構である。長さ9.3m，幅0.97m，深さ21cmの規模で，北東から南西方向に向って等高線とほぼ並行に直線的に延びる。主軸の方向はN43°Ｅである。底面は北東から南西方向に向って下傾し，高低差は18cmである。北東端部付近をＳＫ234に壊される。また，北東側の一部をかく乱によって壊される。埋土は暗褐色砂質土である。

出土遺物は，弥生土器・高杯（149・150）や壺・鉢の小片などがある。出土遺物の特徴からこの遺構の時期は弥生時代後期中葉頃と考えられる。

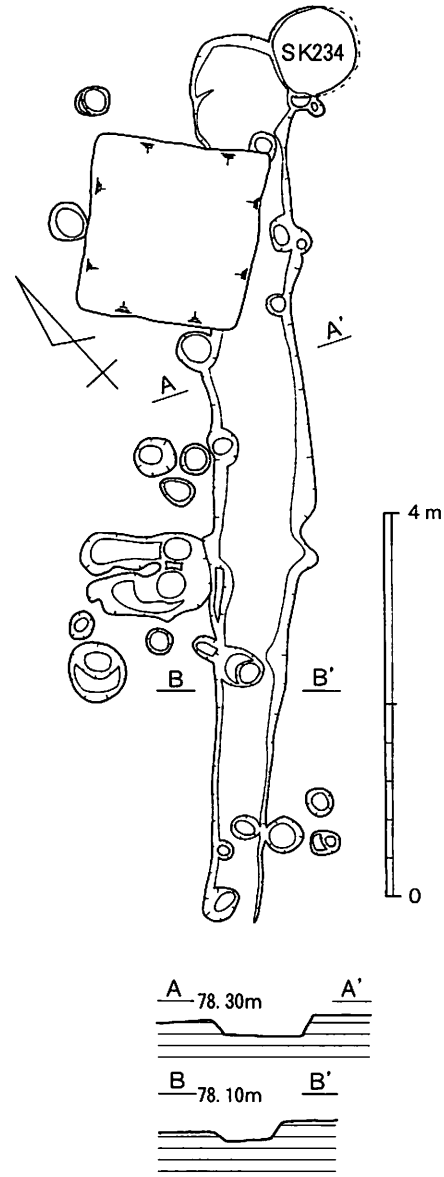
ＳＤ45（第27図，図版16ａ）

Ｎ・Ｏ０区に位置する溝状遺構で，５ｍ北にＳＤ44があり，これとほぼ並行して北東から南西方向に向ってほぼ直線的に延びる。主軸の方向はN36°Ｅである。北東側はかく乱により壊され，不明確であるが調査区外へさらに延びるものと考えられる。現状の規模は長さ11.3m，幅0.48～1.32m，深さ17cmで，底面は北東から南西方向に向って下傾し，高低差は20cmである。遺構の南上端はほぼ直線的であるが，北上端は南西方向に向って幅を減じる。南側でＳＫ235と重複するが，新旧関係は不明である。埋土は暗褐色砂質土で，炭化物を少量含む。

出土遺物は，縄文土器（10），弥生土器・壺（151・152）・甕（153）や鉢の破片などがある。出土遺物の特徴からこの遺構の時期は弥生時代



第25図　ＳＫ238実測図（１：30）



第26図　ＳＤ44実測図（１：80）

後期中葉頃と考えられる。

ＳＤ49（第28図）

Ｓ４区に位置する溝状遺構で，南西側でＳＢ23と重複するが，新旧関係は不明である。ＳＢ23から北方向へわずかに0.2m延び，さらに北西方向へ屈曲して，そのまま直線的に1.8m延びる。幅0.5m，深さ24cmで，底面は南東から北西方向に向って下傾し，高低差は13cmである。主軸方向はN44°Ｗである。埋土は黒褐色砂質土である。

弥生土器の小片が出土することから，弥生時代の遺構と考えられる。

その他の遺構

ＳＸ23（第29図，図版16ｂ）

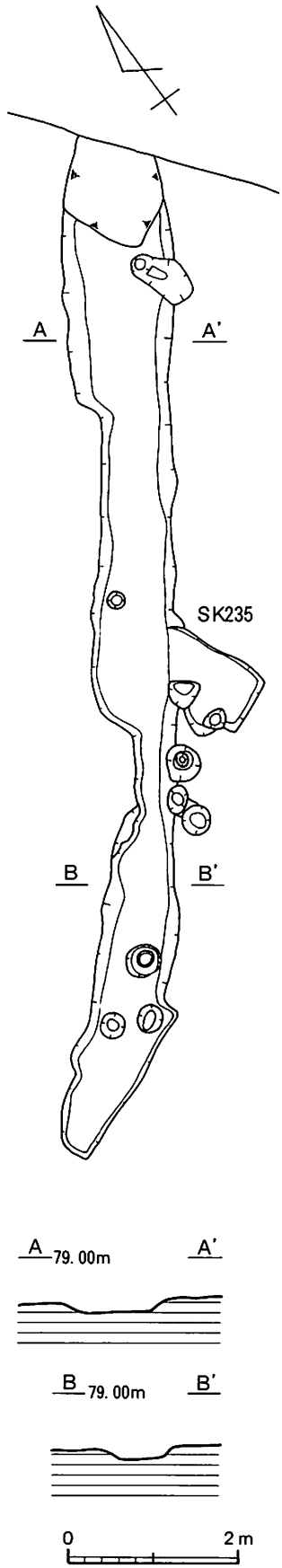
Ｈ（－５・－４）区に位置する竪穴状の落ち込みである。調査区の北端に立地し，遺構の北側は不明である。平面形は不整隅丸方形で，規模は長軸11.7m×短軸6.0m以上で，深さは43cmである。底面は緩やかな凹凸があり，底面中央は周囲の底面より27cm程度低い。ＳＫ213～215と重複するが，新旧関係は不明である。底面西端では長さ4.2m以上，幅0.37m，深さ８cmの溝が壁に沿って廻る。溝の底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色砂質土で溝の埋土は灰褐色砂質土である。

出土遺物は，弥生土器・高杯（**154**）などがある。出土遺物の特徴から弥生時代後期末葉の遺構の可能性がある。

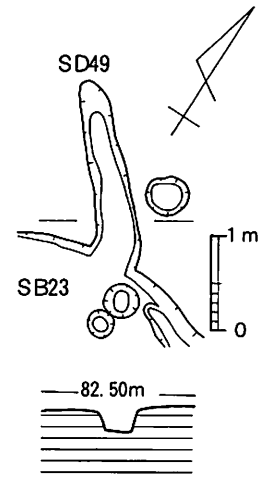
ＳＸ26（第30図，図版17ａ）

Ｊ（－４・－３）区に位置する不整形の土坑である。遺構の西側をかく乱により壊されており，遺構の全容は不明である。規模は長軸1.8m以上×短軸1.45m，深さ18cmである。底面はほぼ平坦で，東から西に向って18cm下傾する。また底面北側には底面より２～６cm高いテラス状の平坦面がある。埋土は黒褐色砂質土である。

遺物は北側上層（**155～159**）で出土した。出土遺物には弥生土器・甕（**155・156**）・鉢（**157～159**）などがある。この遺構の時期は，出土遺物の特徴から弥生時代後期末葉頃と考えら



第27図　ＳＤ45実測図（１：80）

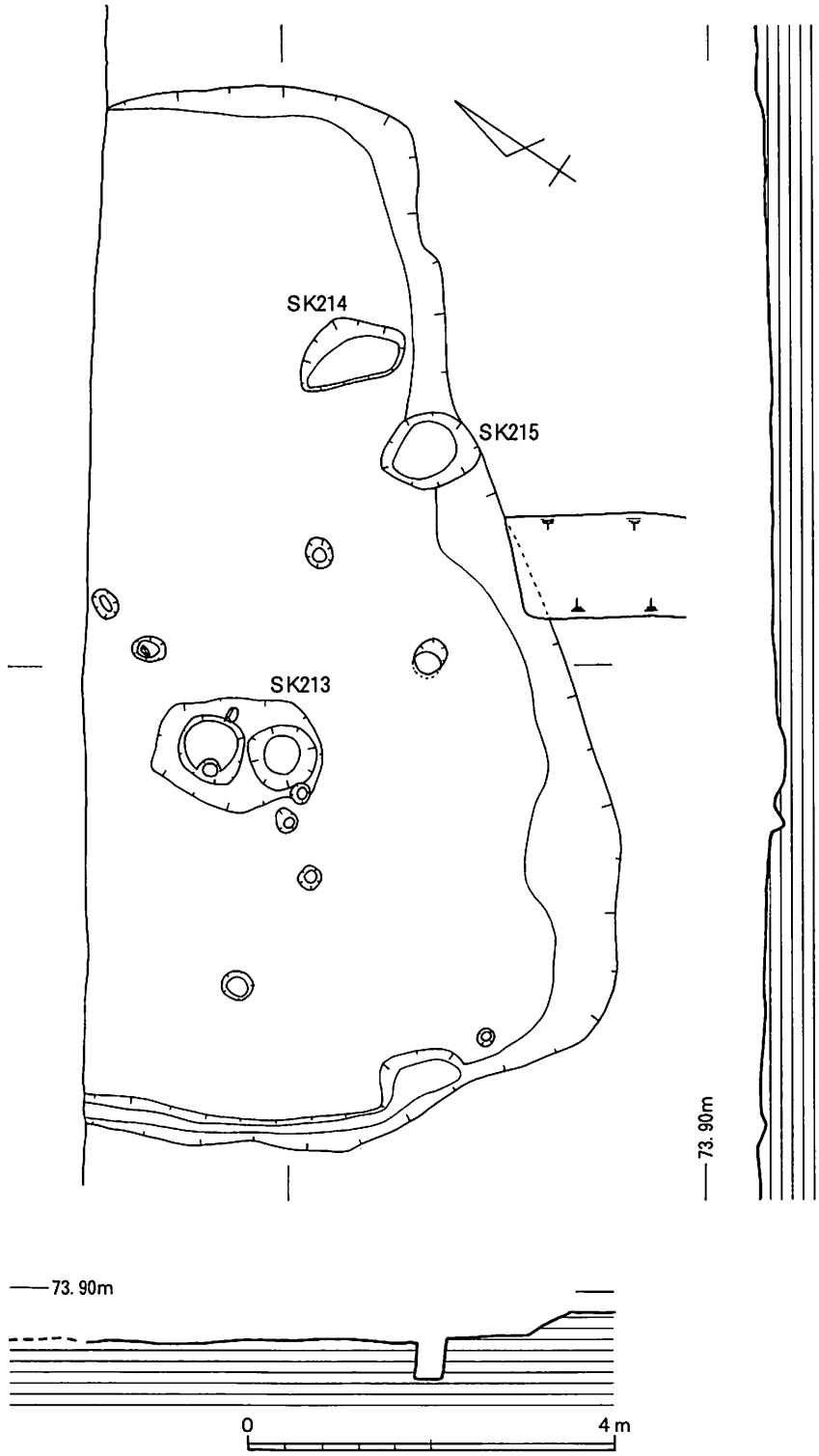


第28図　ＳＤ49実測図（１：80）

れる。

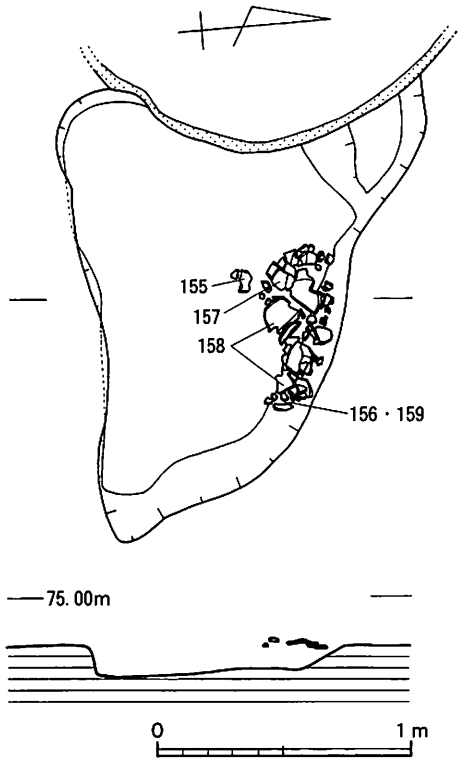
ＳＸ32（第31図，図版17ｂ）

Ｒ２・３区，Ｓ２区に位置する方形の竪穴住居状の遺構である。遺構の南東側は調査区外となり，南西側は緩斜面に立地しているため流失している。規模は長辺4.2m以上×短辺2.0m以上，深さは北東側で19cm，主軸方向はN32°Ｅである。底面はほぼ水平である。また北角を中心に壁に沿って溝がある。北東壁沿いの溝は長さ1.8m以上，幅0.2～0.43m，深さ19cmである。北西壁沿いの溝は長さ2.1m，幅0.16～0.23m，深さ12cmである。北東溝の底面は南東から北西に向って７cm下傾する。北西溝の底面は北東から南西に向って18cm下傾する。なお北東溝底面と北西溝底面には15cmの段差があり，前者が低く後者が高い。底面でピット１基を検出した。規模は長径40cm×短径37cm，深さ60cmである。ＳＸ32の埋土は暗茶褐色砂質土，ピットの埋土は黒褐色砂質土である。遺構の一部しか検出できなかったことや，底面には地山の礫が露出し住居に適さないことを考慮して性格不明の遺構とした。ＳＸ32は簡単な作業小屋であった可能性がある。

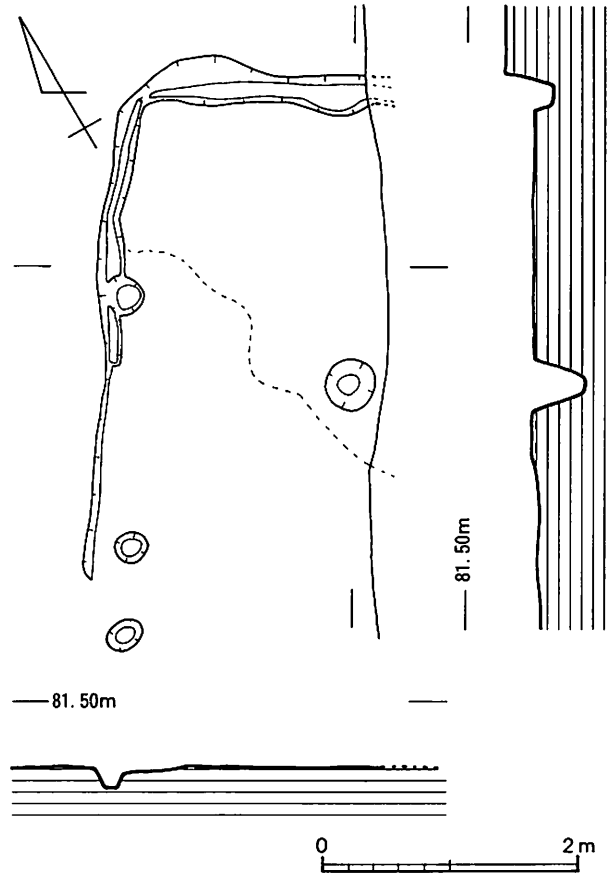


第29図　ＳＸ23実測図（１：80）

ピットから縄文土器が出土し，その他に埋土から弥生土器片や石鏃（177）が出土した。この遺



第30図　ＳＸ26実測図（１：30）



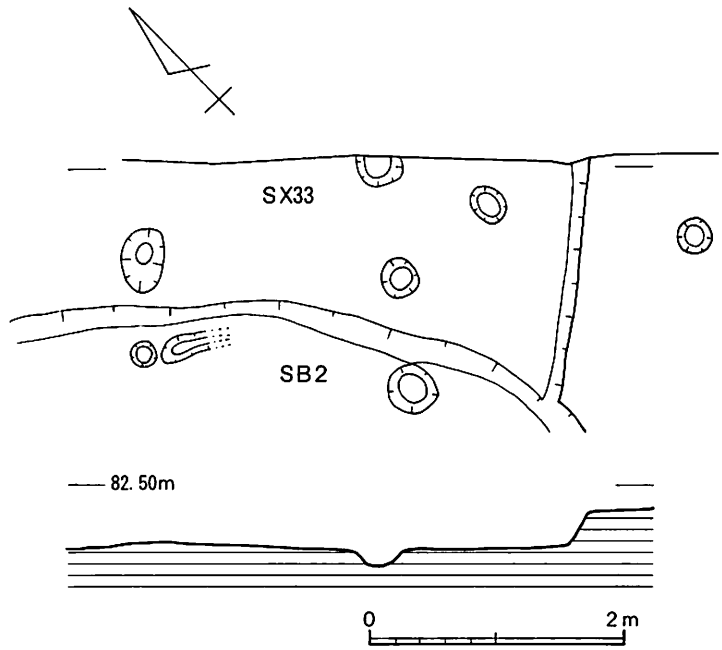
第31図　ＳＸ32実測図（１：60）

構の時期は，出土遺物から弥生時代の可能性がある。

ＳＸ33（第32図，図版17ｃ）

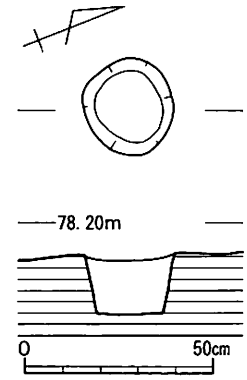
Ｒ４区に位置する遺構である。遺構の北東側および北西側は調査区外になり，南西側はＳＢ２と重複する。ＳＢ２との新旧関係は不明である。遺構の一部しか検出できなかったため，全容は不明である。ＳＸ33は長さ1.9m以上の直線的な落ち込みで，深さは27cmである。底面はほぼ平坦で，北東から南西に向って５cm下傾する。埋土は黒褐色砂質土で炭化物を含む。

出土遺物は弥生土器・甕の破片などがある。しかし，遺物が小片の上に少量であることから，この遺構の時期は弥生時



第32図　ＳＸ33実測図（１：60）

代の可能性があるが，明確ではない。



第33図　Ｌ－Ｐ７
実測図（１：20）

Ｌ－Ｐ７（第33図）

Ｐ（－１）区に位置するピットである。南西方向約2.4mにＳＫ142が位置する。平面形は楕円形で，長径51cm×短径47cm，底面は長径38cm，短径33cmである。深さは33cmで，底面はほぼ平坦である。

出土遺物は弥生時代後期の器台（160）などがある。

（２）遺物

１　弥生土器・土師器

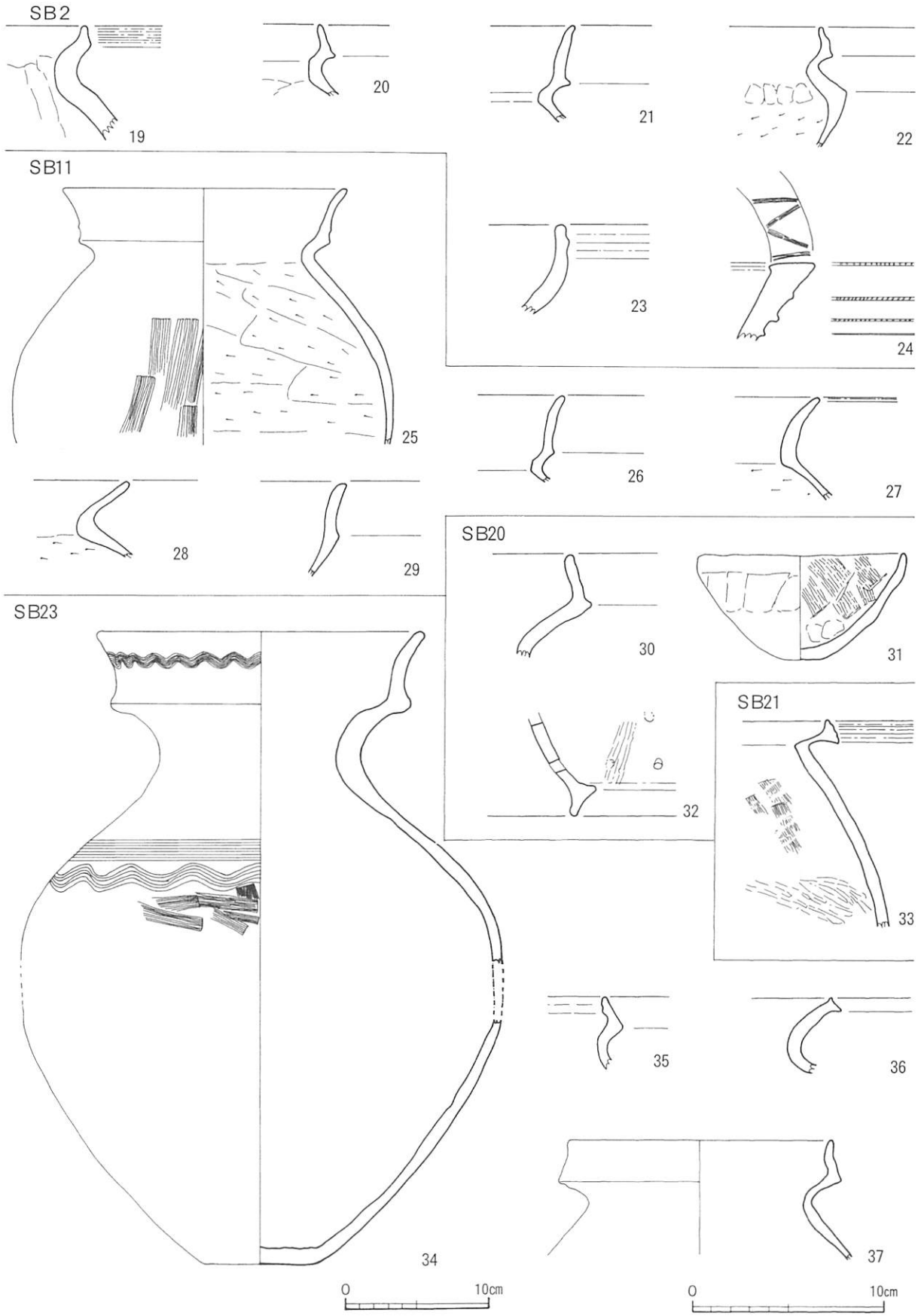
ＳＢ２（第34図，図版23）

弥生時代中期中葉（Ⅲ－１[1]）から後期末葉（庄内式併行期）の壺・甕・鉢が出土しているが，大半の土器は後期後葉（Ⅴ－３）から後期末葉の時期である。

壺（19・24） 19は短頸壺の口縁部～胴部上半の破片である。口縁部はほぼ直角に短く立ち上がり，口縁部外面に５～６条の浅い凹線が施される。口縁部の内外面は横ナデ，外面頸部は横ナデ，内面胴部上半は横位のヘラケズリである。なお，内面頸部および外面胴部上半は調整不明である。24は加飾性の強い広口壺の口縁部片である。口縁端部を水平方向に拡張し，半裁した竹管状の工具により鋸歯状の文様を施す。また，口縁部外面には貼付突帯を３条めぐらし，口縁端部外縁と３条の貼付突帯に刻み目を入れる。調整は，口縁端部および口縁部外面が横ナデ，口縁部内面は不明瞭であるが，ヘラミガキと思われる。24の時期は中期中葉と考えられることから，混入品であろう。

甕（20・21） いずれも口縁部が屈曲する複合口縁の甕で，口縁部～頸部の破片である。20は屈曲した口縁が内傾する。口縁部外面に不明瞭な凹凸があるが，凹線とは認定しがたい。21の口縁は外傾し，長くのびる。いわゆる「山陰系」の土器である。外面には強いナデによる凹凸がある。20・21の調整は，口縁部から頸部の内外面は横ナデ，内面胴部上半は横位のヘラケズリ，外面胴部上半は不明瞭であるがハケ目と思われる。

鉢（22・23） 22は底部を欠く破片，23は口縁部～体部上半の破片である。22は口縁部が屈曲して立ち上がり，体部も「く」の字に屈曲するいわゆる「神谷川式」の鉢である。内傾した口縁部の外面に凹凸があり，２条程度凹線が施された可能性があるが，器表面が著しく摩滅しているため不明である。なお体部下半に煤が付着する。全体に摩滅が著しく調整は不明瞭であるが，内面の調整は，口縁部から頸部が横ナデ，体部上半が指押さえ後横ナデ，体部下半が横位のヘラケズリである。外面の調整は不明である。23は体部が内湾し，口縁部と体部の境が不明瞭な鉢である。口縁部外面に２条の不明瞭な凹線がめぐる。また外面に煤が付着する。調整は内外面ともに口縁部が横ナデ，体部は摩滅が著しく不明である。



第34図　ＳＢ２・11・20・21・23出土土器実測図（１：3，34は１：４）

ＳＢ11（第34図，図版23）

弥生時代後期末葉（庄内式併行期）の甕・鉢が出土している。

甕（25～28） 口縁部が屈曲する複合口縁の甕（25・26）と単純口縁の甕（27・28）がある。25・26は口縁部が外反して開く，いわゆる「山陰系」の土器である。25は口縁部～胴部中央付近の破片である。26は口縁部～頸部，27・28は口縁部～胴部上半の破片である。25の口縁部外面に凹凸があるが，凹線とは認定しがたい。口縁端部は丸くおさめる。外面の調整は，口縁部から頸部が横ナデ，胴部が縦位のハケ目である。内面の調整は，口縁部から頸部が横ナデ，胴部がヘラケズリである。25は復元口径14.8cm，復元頸部径11.5cm，復元胴部最大径20.1cmである。26の口縁部は外面に凹凸は見られず，端部は尖り気味におさめる。調整は25と同じと考えられる。27の頸部は緩やかに「く」の字状に屈曲し，口縁部は外反する。口縁端部は外傾した面をもち，中央に沈線上の窪みがめぐる。28の頸部は「く」の字状に強く屈曲し，口縁部は外上方に直線的にのびる。口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。27・28の調整は，口縁部の内外面が横ナデ，内面の胴部上半は横位のヘラケズリ，外面の胴部上半は不明である。なお，27の口縁部外面には煤が付着する。

鉢（29） 口縁部～体部上半の破片である。体部にアクセントをつけて外反する単純口縁の鉢もしくは高杯の杯部と推定される。外面の体部と口縁部の境はやや突出する。調整は口縁部外面が横ナデ，その他は不明である。

ＳＢ20（第34図，図版23）

弥生時代後期中葉（Ｖ－２）から後期後葉（Ｖ－３）にかけての壺・鉢・脚部が出土した。

壺（30） 口縁部が屈曲する複合口縁の壺の破片（口縁部～頸部）で，屈曲した口縁は内傾する。口縁部外面に凹凸はあるが凹線にはならない。また，口縁部と頸部の境は突出する。調整は内外面ともに口縁部から頸部は横ナデである。

鉢（31） 完形の小型の鉢で，口縁部と体部の境が不明瞭な椀形態である。小さな底部をもち，大きく外上方へ内湾気味に開く。口縁端部付近でさらに内湾させ，端部はやや尖り気味におさめる。外面はヘラケズリであるが，口縁端部付近は雑なナデをおこなう。内面の調整は板状工具によるナデで，底部付近には指頭圧痕が残る。

脚部（32） 脚部に複数段にわたって円孔を穿ち，脚端部を拡張する。外面の調整は脚部が縦位のヘラミガキ，脚端部付近は横ナデ，内面の調整は不明である。

ＳＢ21（第34図，図版24）

弥生時代中期後葉（Ⅳ－１）の甕が出土した。

甕（33） 口縁部～胴部上半の破片である。肩の張らない胴部から頸部に至り，頸部はくの字状に強く屈曲させる。口縁端部を上下に拡張し，その拡張した部分に３条の凹線をめぐらせる。調整は，口縁部～頸部の内外面が横ナデ，内面胴部上側が斜位のハケ目，内面胴部中央付近は斜位も

しくは横位のヘラミガキが施される。なお，胴部外面の調整は不明である。

ＳＢ23（第34・35図，図版24）

弥生時代後期後葉（Ｖ－３）から後期末葉（庄内式併行期）の壺・甕・鉢・脚部が出土した。

壺（34～36） 口縁部が屈曲する複合口縁の壺（**34・35**）と，単純口縁の壺（**36**）がある。なお，**35・36**は破片のため全容は不明で，甕の可能性もある。**34**は口縁部が外反して開く，いわゆる山陰系の土器の破片（口縁部～底部）である。口縁部には櫛歯状工具による波状文，胴部肩部付近に平行文と波状文がめぐる。底部は平底である。外面の調整は，口縁部が横ナデ，頸部が雑なナデ，胴部上位１／３が縦位のハケ目後施文，胴部中央付近が横位のハケ目，胴部下位１／３は不明である。内面の調整は摩滅が著しく不明である。復元口径22cm，復元器高44.3cm，復元頸部径14.2cm，復元胴部最大径33.7cm，底部径7.7cmである。**35**は口縁部～頸部の破片である。屈曲した口縁部は内傾し，口縁端部付近の内面がやや肥厚する。さらにその肥厚した部分に凹線状の窪みがめぐる。器面の摩滅が著しいために調整は不明である。**36**は単純口縁の短頸壺の破片（口縁部～頸部）である。口縁部は頸部から外上方にやや外反し，端部を若干上下に拡張する。拡張した端部は面をもち，その面はやや窪む。**35・36**の調整は内外面とも横ナデである。

甕（37～42） 口縁部が屈曲する複合口縁の甕（**37～39**）と，単純口縁の甕（**40～42**）がある。**37**は口縁部～胴部上半の破片である。屈曲した口縁部はわずかに内傾し，端部は尖り気味に丸くおさめる。口縁部外面にやや凹凸はあるが，凹線ではない。内外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ，胴部上半は摩滅が著しく不明である。なお，頸部上半に煤が付着している。口径13.7cm，頸部径11.7cmである。**38・39**はいわゆる「山陰系」土器の口縁部～頸部の破片であるが，いずれも口縁部はやや直立気味である。**38**の口縁部は外反気味にのび，口縁端部付近でさらに強く外反させ，端部を尖り気味におさめる。外面はやや凹凸があるが，凹線はめぐらない。口縁部から頸部の調整は内外面ともに横ナデ，内面胴部上側はヘラケズリである。**39**は大型甕の破片である。口縁部はまっすぐ端部に向かってのびる。端部は平坦な面をもち，わずかに外側へ拡張する。調整は外面が横ナデ，内面は摩滅が著しく不明である。**40～42**は単純口縁の甕である。**40**はほぼ完形，**41・42**は口縁部～胴部上半の破片である。**40**は小さな底部に，倒卵形の胴部，くの字に開く頸部をもつ。口縁部は外上方にのび，口縁端部は面をもち，その面は外傾する。なお，胴部最大径付近に煤がわずかに付着する。調整は，口縁部から頸部が内外面ともに横ナデ，内面胴部上半が板状工具による横位のナデ，内面胴部下半が調整不明で指頭圧痕がみられる。外面胴部は板状工具による縦位のナデである。口径12.4cm，器高17.3cm，頸部径10.4cm，胴部最大径13.9cmである。**41**は，くの字状にゆるやかに屈曲する頸部からやや直立気味に外上方に口縁部がのび，口縁端部は丸くおさめる。外面に煤が付着する。調整は内外面ともに不明である。**42**の口縁部は，くの字状に強く屈曲する頸部から外上方にのびる。口縁部は中間付近で最も器壁が厚くなり，端部をやや尖り気味に丸くおさめる。調整は，口縁部から頸部が内外面ともに横ナデ，内面胴部がヘラケズリ，外面は不明である。

鉢（43・46）43は口縁部～体部上半の破片で，鉢または高杯の杯部と推定される。口縁部が屈曲して立ち上がり，端部を水平方向に拡張する。拡張した口縁端面はやや窪み，わずかに内傾する。全体に摩滅が著しく，調整は不明である。**46**はややロの開いたコップ状を呈する小型の鉢で，ほぼ完形の手づくね土器である。内外面ともに指頭圧痕を残す。口径2.3cm，高さ2.5cm，底径1.8cmである。

脚部（44・45）44・45は端部を拡張した脚の破片である。**44**は円孔のある大型の脚部である。端部は上下に大きく拡張し，端面の外先端は突出する。なお，端面に凹線がめぐらない。外面の調整は摩滅が著しく不明である。内面の調整は横位のヘラケズリである。**45**は拡張した脚端部に２条の凹線を施す。外面の調整は横ナデ，内面の調整は不明である。

ＳＫ136（第35図，図版24）

弥生時代後期中葉（Ｖ－２）頃の壺・鉢が出土した。

壺（47・48）47は口縁部が屈曲する複合口縁の壺の破片（口縁部～頸部），**48**は単純口縁の壺の破片（口縁部～胴部上半）である。**47**の屈曲した口縁部は内傾し，口縁部外面に３条の不明瞭な凹線をめぐらせる。全体に摩滅が著しく，調整は不明である。**48**は短頸壺で，頸部がくの字に屈曲し，口縁部は外上方に短くのびる。口縁端部は上端が欠損する。残存する口縁端部に凹線が１条確認できることから，口縁端部に２～３条の凹線が巡っていたと想定される。調整は口縁部から頸部が内外面ともに横ナデ，内面胴部がヘラケズリである。外面胴部は摩滅が著しく調整不明である。

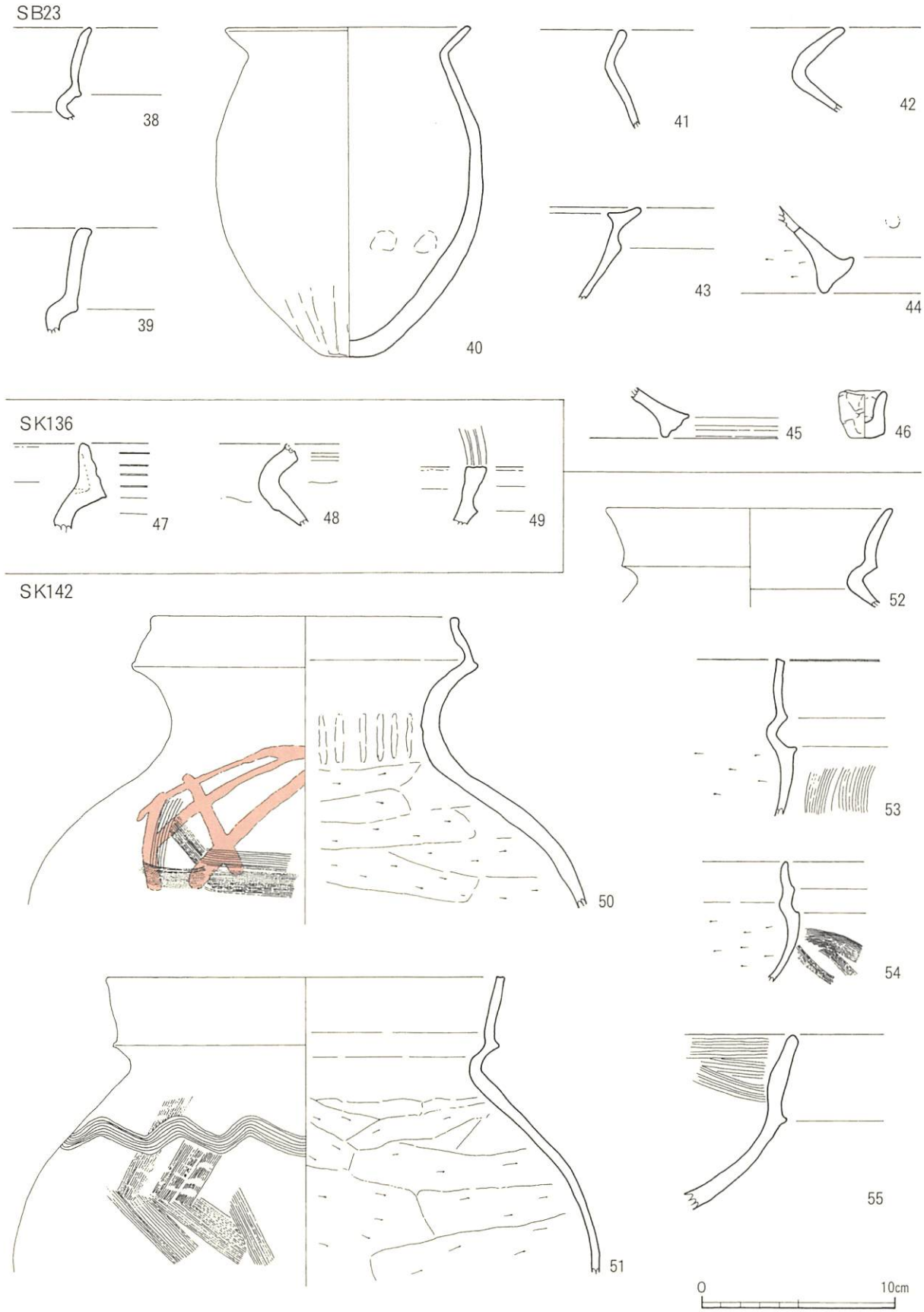
鉢（49）口縁部の破片で，鉢もしくは高杯の杯部と推定される。口縁部が屈曲して立ち上がり，端部を水平方向にわずかに拡張する。拡張した口縁端部に１～２条の凹線をめぐらせる。全体に摩滅が著しく，調整は不明である。

ＳＫ142（第35・36図，図版24・25）

弥生時代後期末葉（庄内式併行期）の壺・甕・鉢が出土した。

壺（50）口縁部～胴部最大径付近の破片で，口縁部が屈曲する複合口縁の壺である。屈曲した口縁部は内傾し，端部付近でわずかに外反させ，端部は丸くおさめる。口縁部と頸部の境は横方向へ突出する。頸部上側に煤が付着する。調整は，口縁部が内外面ともに横ナデ，頸部が内外面ともに横位のナデ，外面胴部上半がハケ目，内面胴部上半が横位のヘラケズリである。口径15.8cm，頸部径14.0cmである。

甕（51・52）51・52は屈曲した口縁部が外上方へのびる，いわゆる「山陰系」の甕である。**51**は大型甕の破片（口縁部～胴部最大径付近）である。屈曲した口縁部は直立気味にまっすぐのびる。口縁端部は面をもち，端面はやや中央を窪ませる。口縁部と頸部の境は明瞭で，横方向に突出する。肩部付近には櫛歯状工具による波状文が施される。調整は，口縁部～頸部が内外面ともに横ナデ，外面胴部上半は縦位のハケ目後に肩部付近を横ナデし，その後波状文を施す。胴部最大径



第35図　ＳＢ23，ＳＫ136・142出土土器実測図（１：３）

付近の斜位や横位のハケ目は肩部付近の縦位のハケ目後におこなうが，波状文との新旧関係は不明である。焼成はきわめて良好で赤褐色を呈する。口径20.5cm，頸部径18.2cm，胴部最大径30.5cmである。**52**は口縁部～頸部の破片で，屈曲した口縁部が外上方に向かって外反する。端部は丸くおさめ，口縁部と頸部の境は尖り気味に横方向に突出する。口径14.6cm，頸部径11.8cmである。

鉢（53～61） 口縁部が屈曲して立ち上がり，体部もくの字状に屈曲するいわゆる「神谷川式」の鉢（**53・54**）と，体部にアクセントをつけて外反する単純口縁の鉢（**55**），内湾する単純口縁の鉢（**56～61**）の３種類の鉢がある。「神谷川式」の**53・54**は口縁部～胴部上半の破片で，屈曲した口縁部がほぼ直立する。体部の屈曲は口縁径よりもわずかに外方に出る。**53**の口縁端部はわずかに外傾する面をもつ。外面の調整は，口縁部から体部屈曲部付近まで横ナデ，体部屈曲部付近より下位は縦位のハケ目である。体部屈曲部は周囲を横ナデすることにより，屈曲部が強調され横方向へ突出する。内面の調整は，口縁部から体部屈曲部まで横ナデ，体部屈曲部より下位は横位のヘラケズリである。**54**は小型の鉢である。口縁部の屈曲部から体部の屈曲部に至るくの字状の屈曲（頸部の屈曲）がなだらかである。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。外面の調整は口縁部から体部屈曲部付近までが横ナデ，それより下位は斜位のハケ目である。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ，頸部より下位が横位のヘラケズリである。**55**は口縁部～体部の破片で，体部にアクセントをつけて外反する。口縁端部は丸くおさめる。アクセント部は外方にやや突出する。調整は，外面の摩滅が著しく不明瞭であるが横ナデであろう。内面は体部上半が横位のハケ目，下半は不明瞭であるがナデと思われる。なお，**55**は高杯の杯部の可能性もある。内湾する単純口縁の鉢には丸底のもの（**56・57**）と平底のもの（**59～61**）がある。**58・59**を除き，ほぼ完形である。**56**は口縁が大きく開き，底部はやや尖り気味の丸底になる。外面の調整はナデ，内面の調整は斜位のハケ目であるが，内面底部には指頭圧痕が残る。口径11.8cm，器高6.5cmである。**57**は口縁が大きく開き，底部は緩やかな丸底になる。椀形よりもむしろ皿形に近い。調整は内外面ともにヘラケズリ後ナデと推定されるが，内面のナデは外面に比べ丁寧で，ヘラケズリの痕跡はわからない。口径10.6cm，器高4.0cmである。**58**は椀形を呈する。外面には型押しした際の亀裂が残る。内面は指押さえ後にハケ目調整をおこなう。復元口径7.5cm，復元器高4.2cmである。**59**は椀形の鉢で，口縁部を３分の１ほど欠く。指押さえで成形するが，その後のナデにより指頭圧痕は不明瞭である。復元口径7.0cm，器高3.6cm，底径2.4cmである。**60・61**は口縁部が直立気味となる砲弾形の鉢である。**60**は小さい底部が高台状にやや突出する。復元口径7.3cm，器高6.6cm，底径1.8cmである。**61**は口縁端部を外反させ，端部はやや尖り気味におさめる。**61**は口径6.8cm，器高7.0cm，復元底径2.0cmである。**60・61**は，いずれも口縁部は指押さえで，体部は指押さえとヘラケズリで成形する。**60・61**ともに内面は未調整であるが，**60**の外面は雑なナデ，**61**の外面は丁寧なナデを施す。**56～58**は内面を丁寧に調整するのに対して，**60・61**は内面より外面を調整する。

ＳＫ213（第36図，図版25）

弥生時代後期末葉（庄内式併行期）の壺・甕・鉢が出土した。

壺（62） 口縁部が屈曲する複合口縁の壺の破片（口縁部～頸部）である。屈曲した口縁部はほぼ直立し，口縁端部付近を外反させる。口縁端部は平坦な面をもつ。調整は内外面ともに横ナデである。口径20.2cm，頸部径14.8cmである。

甕（63） 単純口縁の甕の破片（口縁部～胴部上半）の破片である。頸部をくの字状に屈曲させ，口縁部は外上方にのび，端部は平坦な面をもつ。調整は，口縁部～頸部が内外面ともに横ナデ，内面胴部は横位のヘラケズリである。外面胴部の調整はハケ目と思われるが，摩滅が著しく不明である。

鉢（64） 底部の欠けた破片で，椀形の鉢と推定される。体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり，口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。調整は，内面が丁寧なナデ，外面は口縁部～体部上半が未調整もしくは簡単なナデ，体部下半が横位のヘラケズリである。

ＳＫ219（第36・37図，図版25～27）

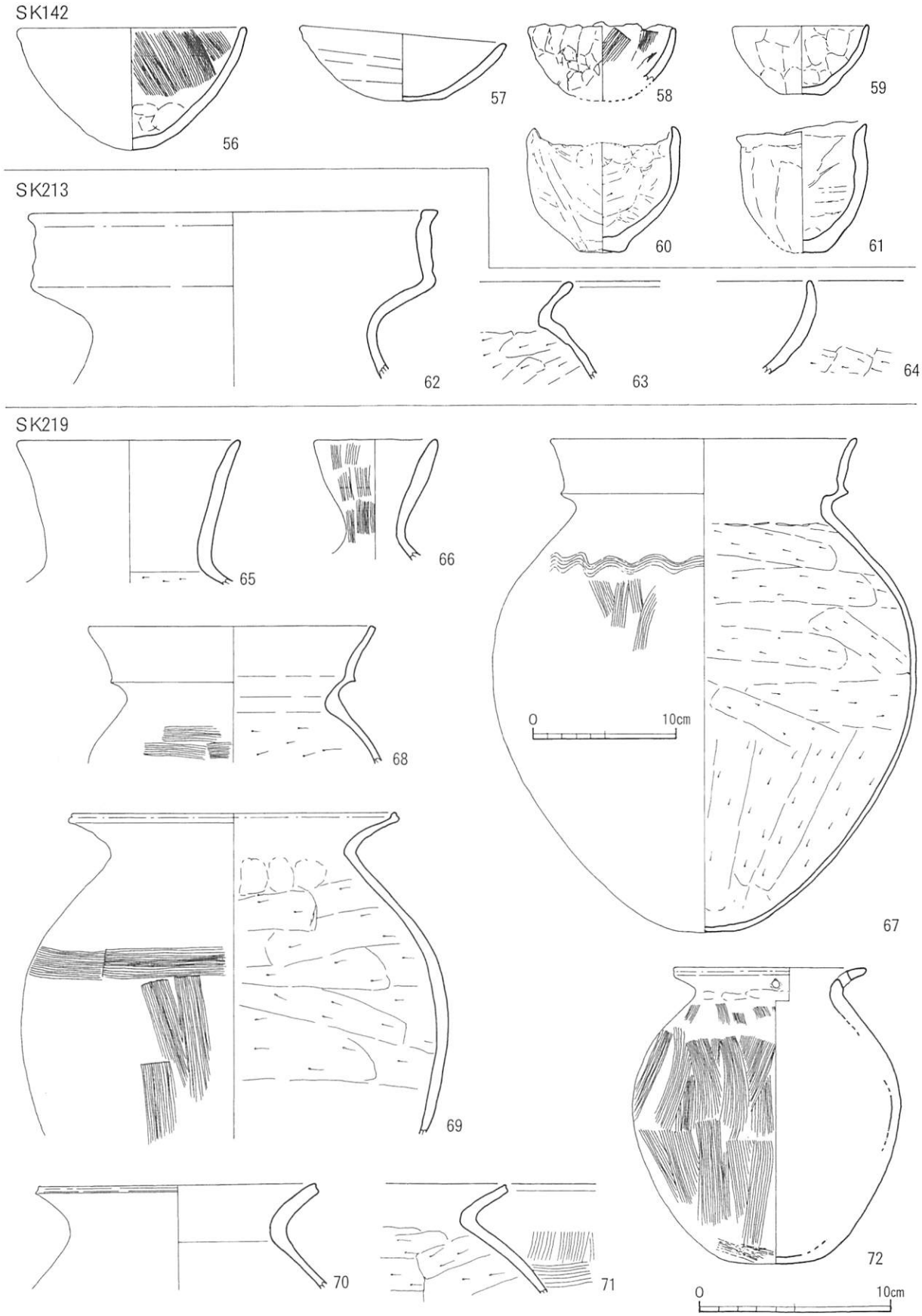
弥生時代後期末葉（庄内式併行期）から古墳時代初頭の壺・甕・鉢・高杯・鼓形器台・脚部・底部が出土した。

壺（65・66） **65・66**は口縁部～頸部の破片で，単純口縁の直口壺と推定される。**65**の口縁部は外傾気味に立ち上がり，口縁端部は外上方へ尖り気味に丸くおさめる。調整は，内面が雑な横ナデで，外面が丁寧な横ナデである。また内面口縁部下半には指頭圧痕がわずかに残る。復元口径11.4cm，復元頸部径8.7cmである。**66**の口縁部は外傾して立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。胴部は肩が張らないようである。調整は外面がハケ目，内面は雑な横位のナデである。なお，口縁部に成形時の指頭圧痕が認められる。全体的に雑なつくりである。口径6.3cm，頸部径3.2cmである。

甕（67～73） 屈曲した口縁部が外上方へのびるいわゆる「山陰系」の甕（**67・68**）と，単純口縁の甕（**69～73**）がある。**67**はほぼ完形の大型甕である。口縁部はわずかに外反気味にのびる。端部は矩形気味に丸くおさめ，面をもつまでには至っていない。口縁部と頸部の境は横方向へ突出する。胴部は倒卵形を呈し，肩部には波状文をめぐらせる。底部はわずかに認められる。調整は，口縁部から頸部が内外面ともに横ナデとし，胴部外面はハケ目を施す。内面は頸部付近までヘラケズリである。全体に赤色を呈する。口径21.3cm，器高34.5cm，頸部径18.0cm，胴部最大径29.8cm，底径4.0cmである。**68**は口縁部～胴部上半の破片である。口縁端部は外傾する面をもち，わずかに内側に肥厚させる。調整は**67**と同じであるが，胴部上半のハケ目が横位となる。復元口径14.7cm，復元頸部径11.1cmである。単純口縁の甕（**69～73**）は，口縁を直線的にのばし，端部に面をもつもの（**69～71**），口縁を外反気味にのばし，端部を丸くおさめるもの（**72**），口縁が短く，端部を丸くおさめるもの（**73**）がある。なお，**72・73**は壺の可能性がある。**69～71**は口縁端部に面をもち，いずれもその面に凹線状の窪みがめぐる。**69**は口縁部～胴部下半の破片である。口縁端部は内側にわずかに肥厚し，端面に凹線状の窪みがめぐる。胴部中央付近に煤が付着する。外面の調整は，口縁部から頸部が横ナデ，胴部は縦方向のハケ目で，その後に胴部の上位１／３付

近に横方向のハケ目を施す。なお，横方向のハケ目は上位に行くほど不明瞭になる。内面は，胴部上端付近が指押さえ，それより下位がヘラケズリにより成形し，口縁部から胴部上端付近まで横ナデ調整を施す。口径16.6cm，頸部径12.8cm，胴部最大径22.4cmである。**70**は口縁部～胴部上半の破片である。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外上方へ外反気味にのびる。口縁端部は面をもち，凹線状の窪みがめぐる。調整は，口縁部から頸部が内外面ともに横ナデ，胴部外面が横ナデである。胴部内面はヘラケズリであるが，頸部にまでは達していない。橙白色を呈し，復元口径14.4cm，復元頸部径11.4cmである。**71**は口縁部～胴部上半の破片である。調整は，口縁部から頸部が内外面ともに横ナデ，胴部外面はハケ目である。ハケ目調整を全体的に縦方向でおこない，その後胴部中央付近を横方向に施す。胴部内面はヘラケズリをおこなう。焼成はきわめて良好で，明橙色を呈する。**72**は完形の甕で，口縁に１対（２か所）の穿孔が認められる。外反する口縁部の端部には凹凸があり，中央に段差ができる。この段差は，凹線状や沈線状になりながら口縁端部をめぐる。底部は平底で自立することができる。なお口縁部の孔は焼成前に穿孔している。調整は，口縁部から頸部が横ナデ，胴部外面が縦位のハケ目である。胴部内面はヘラケズリであるが，撫でつけるように削っており痕跡は不明瞭である。口径9.3cm，器高15.6cm，頸部径7.7cm，胴部最大径14.0cm，底径4.7cmである。**73**は完形の甕である。口縁部は短く，端部は丸くおさめる。胴部は卵形よりもむしろ球形に近い。底部は平底で自立することができる。調整および成形は**74**とほぼ同様であるが，口縁部に指頭圧痕が認められ，胴部内面のヘラケズリが**72**よりもやや明瞭である。口径8.7cm，器高11.7cm，頸部径8.3cm，胴部最大径12.3cm，底径3.2cmである。

鉢（74～82・89～92） 口縁部が外反して開く単純口縁の鉢（**74**），体部にアクセントをつけて外反する単純口縁の鉢（**75・78・79**），体部をくの字状に屈曲するいわゆる「神谷川式」の鉢（**76・77**），内湾する単純口縁の鉢（**80～82・89～92**）の大きく４種類の鉢がある。**74**は口縁部の大半を欠くが残りの部分はほぼ完形である。**74**の体部は，丸みをもった底部（平底）から緩やかに内湾して立ち上がり，わずかに屈曲して直立する。直立した体部から口縁部が外反して開く。口縁端部は面をもち，部分的に凹線状の窪みが見られる。調整は，口縁部が内外面ともに横ナデ，体部屈曲部より上位が横ナデ，屈曲部より下位が縦位もしくは斜位のハケ目である。体部内面はヘラケズリを施す。復元口径15.4cm，器高9.2cm，底径3.6cmである。**75・78・79**は体部にアクセントをつける鉢である。**75**は口縁を中心に３分の１程度を欠く破片である。口縁部は直立し，外反する。口縁端部は丸くおさめ，底部は丸底である。口縁部内外面は横ナデ調整で，体部はヘラケズリである。復元口径15.5cm，器高6.5cmである。**78・79**は口縁部～体部上半の破片で，口縁部は外上方へ開く。**78**の口縁部は外反して大きく外上方へひらき，口縁端部は丸くおさめる。口縁部内外面が横ナデ調整，体部外面が縦位のハケ目調整を施し，体部内面は横位のヘラケズリである。**79**は内外面に朱塗りした土器である。口縁部は外上方に向かってまっすぐのび，端部は丸くおさめる。調整は内外面ともにヘラミガキである。なお，**78・79**は高杯の可能性がある。**76・77**はいわゆる神谷川式の鉢である。屈曲した口縁は内傾し，体部の屈曲は口縁径よりも外方に出る。体部の屈曲は鋭く，屈曲部上位に不明瞭な凹線状の窪みがめぐる。**77**の口縁には不明瞭な凹線が３



第36図　ＳＫ142・213・219出土土器実測図（１：3，67は１：４）

条めぐる。なお76の外面には煤が付着する。外面の調整は，口縁部から体部屈曲部が横ナデ，屈曲部より下位は不明である。内面は，口縁部から体部屈曲部付近が横ナデ調整で，それより下位はヘラケズリである。80・81は口縁部～体部の破片で，椀形を呈する鉢である。80の調整は，口縁部付近は内外面とも横ナデ，体部内面はヘラミガキを施す。なお体部外面はヘラケズリである。81は摩滅が著しく調整が不明である。82・89・90の器形は，丸底から大きく外方へ開き，端部は丸くおさめる。82は口縁部～底部の破片で，底部は尖り気味になる。主に指押さえで成形するが，内面は底部を中心にヘラケズリをおこなう。復元口径10.7cm，器高4.1cmである。89～92はミニチュア土器である。89は手づくね土器で，口縁部が３分の１欠けた破片である。口縁部付近を中心に指頭圧痕が残る。復元口径3.5cm，器高2.2cmである。90は口縁部～底部の破片で，内外面ともにナデ調整を施す。特に内面は丁寧にナデ調整をおこなう。復元口径5.9cm，器高3.3cmである。91・92は平底を有し，口縁は大きく開かない。91は完形で，安定した底部から直立気味にわずかに内湾して立ち上がり，端部は丸くおさめる。調整は内外面ともにナデで，特に内面は丁寧に施す。なお内面は板状の工具でナデ調整をおこなった後，さらにその工具痕をナデ消したようである。口径5.6cm，器高3.5cm，底径3.2cmである。92は底部の破片で，平底の底部から直立気味に立ち上がる。調整は内外面ともにナデである。なお内面にはわずかに指頭圧痕が残る。底径2.4cmである。

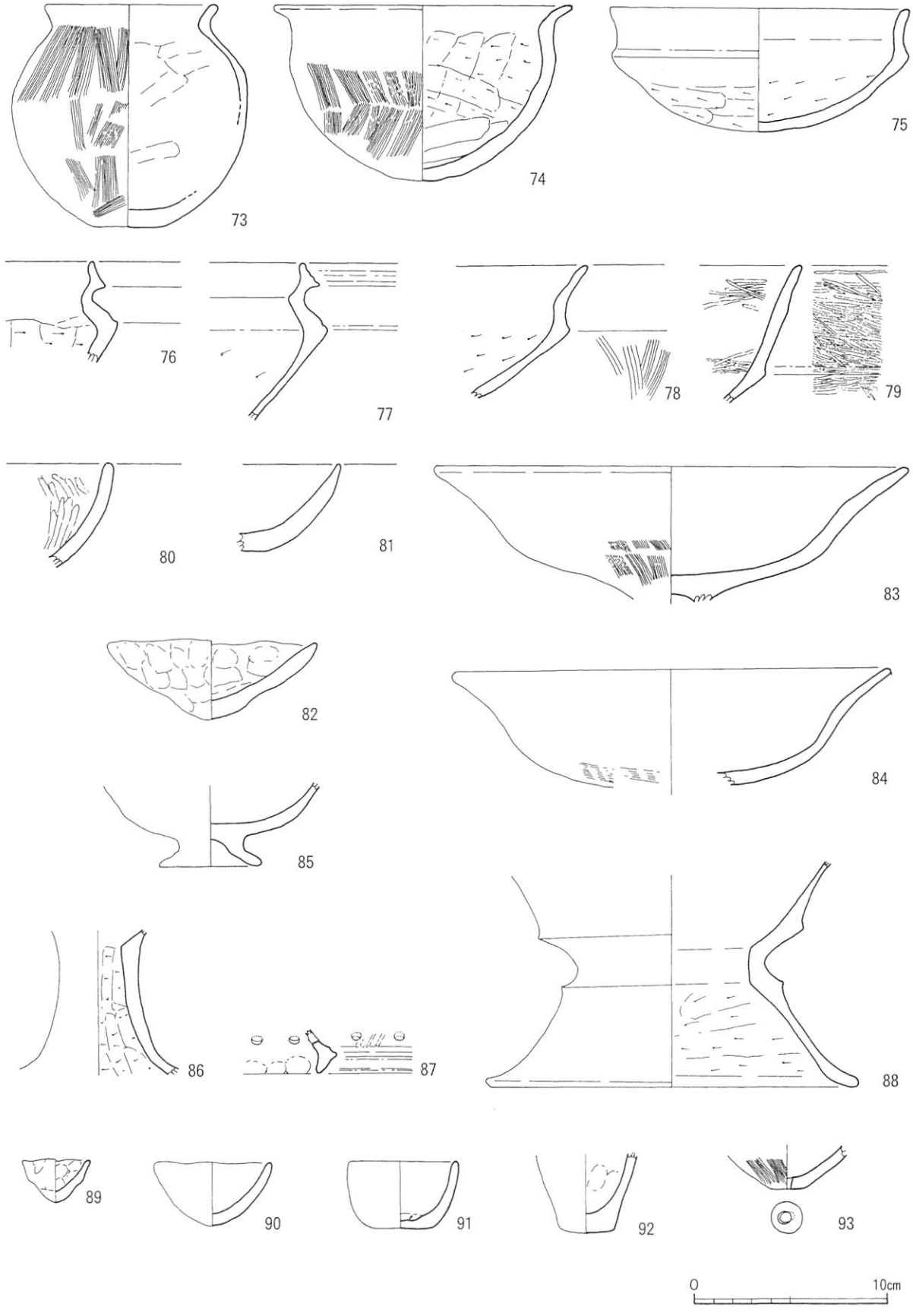
高杯（83・84・86） 83・84はいわゆる「山陰系」の大型の杯部で，83はほぼ完形，84は３分の１程度の破片である。器形は，浅い体部から口縁部が外反し大きく外方に開く。口縁端部は丸くおさめ，体部と口縁部の境は不明瞭である。また84の体部は内湾気味に立ち上がる。83の外面の調整は，口縁部が横ナデ，杯部は縦位もしくは斜位のハケ目である。内面の調整は摩滅が著しく不明である。84の外面の調整はハケ目後横ナデ，内面の調整はナデである。特に内面の調整は丁寧である。83の口径は24.3cm，84の復元口径は22.5cmである。86は朱塗りの脚注部の破片である。摩滅により外面の調整は不明で，内面は横位のヘラケズリである。内面の一部にも朱が付着する。

低脚杯（85） 85は低脚杯の破片（体部～脚部）である。体部は内湾しながら緩やかに立ち上がる。短い脚部が外反気味に外下方に大きく開く。調整は，体部外面が縦位のハケ目後横ナデ，脚部は内外面ともに横ナデである。体部内面は横ナデであるが，見込み部分は未調整である。底部端部径は5.1cmである。

脚部（87） 脚端部付近に複数の円孔が穿たれる。脚端部は下方に拡張し，端面に凹線状の窪みがめぐる。また脚端部付近に凹線が１条めぐる。外面の調整は縦位もしくは斜位のヘラミガキである。内面はヘラケズリで端部付近には指頭圧痕が残る。

鼓形器台（88） 口縁部を欠くが，ほぼ完形である。受け部と裾部がともに大きく開く形態で，脚部は直線的に外下方へのび，端部付近で外反し，端部は丸くおさめる。器面の摩滅が著しく調整は不明であるが，裾部内面はヘラケズリである。裾端部径19.0cmである。

底部（93） 径約６㎜の円孔が穿たれた底部片である。円孔の断面観察では，焼成前に穿たれたと考えられる。円孔の周囲が擦れて平坦になっているが，本来は丸みがあったと推定される。外面



第37図　ＳＫ219出土土器実測図（１：３）

の調整はハケ目，内面はヘラケズリである。底径は1.7cmである。

ＳＫ229（第38図，図版27）

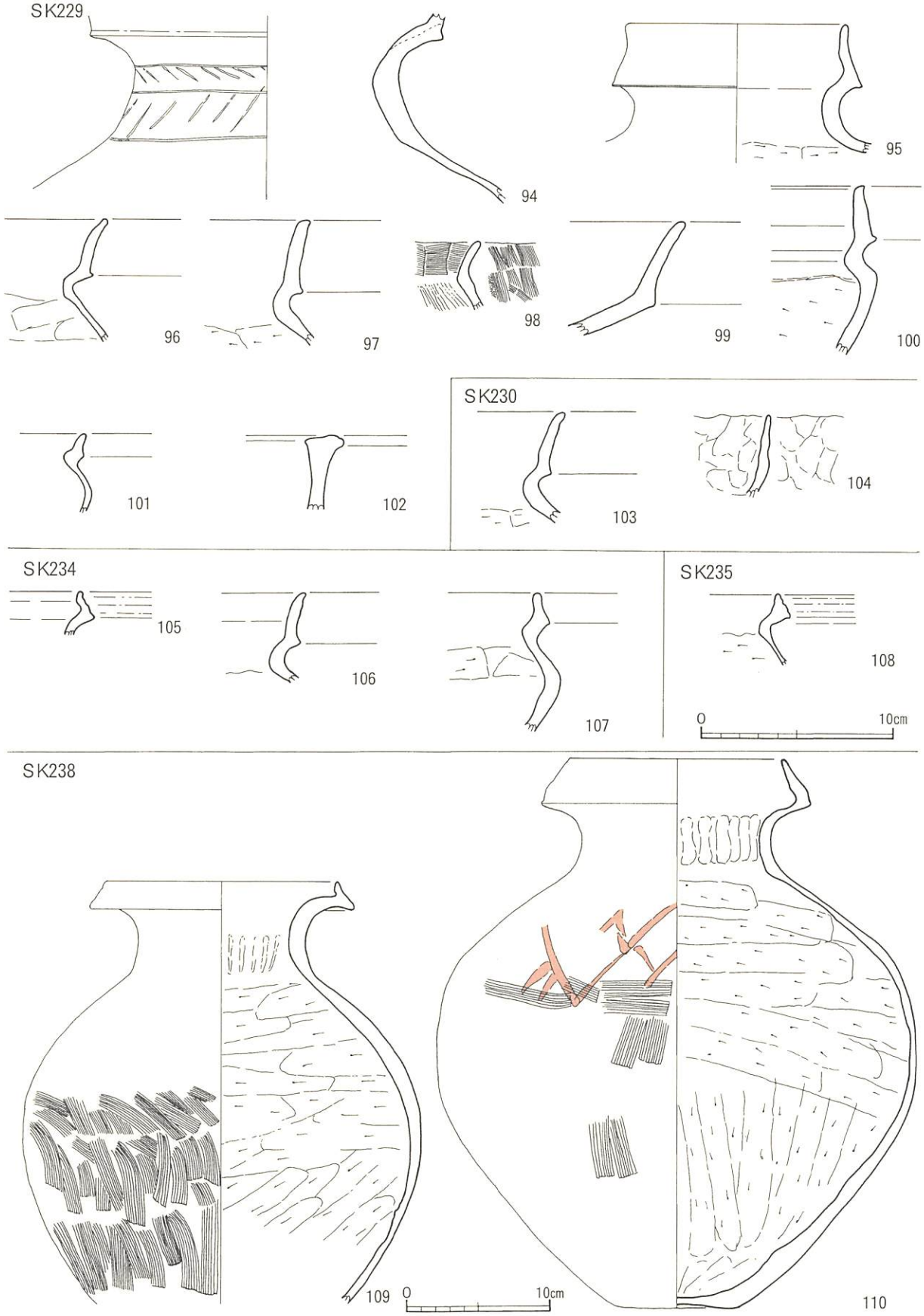
弥生時代後期末葉（庄内式併行期）の壺・甕・鉢などが出土した。

壺（94・95） いずれも口縁部が屈曲する複合口縁の壺である。**94**は頸部～胴部上側の破片で，口縁部を欠く。頸部に３条の沈線をめぐらせ，それらの間に板状工具の小口の押圧による綾杉文を施す。摩滅が著しく調整は不明である。頸部径13.8cmである。**95**は口縁部～頸部の破片で，屈曲した口縁がわずかに内傾する。また，口縁は外反し，端部を丸くおさめる。口縁部と頸部の境はやや下方に突出する。外面の調整は横ナデ，内面の調整は口縁から頸部が横ナデである。内面の頸部以下は横位のヘラケズリを施す。復元口径11.4cm，復元頸部径9.9cmである。

甕（96～98・101） 口縁部が屈曲する複合口縁の甕（**96・97・101**）と，単純口縁の甕（**98**）がある。また複合口縁の甕は，口縁部が外上方へ長くのびるいわゆる「山陰系」の甕（**96・97**）と，口縁部が短く外方への開きが小さい甕（**101**）がある。**96・97**は口縁部～胴部上半の破片である。**96**の口縁部は外反し大きく外上方へ開く。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。口縁部と頸部の境は横方向に鋭く突出する。**97**の口縁部はほぼ直線的にのび，端部に面をもつ。外方への開きは小さく，直立気味である。**96・97**の調整は，外面が横ナデ，内面は口縁部～頸部が横ナデである。内面の頸部以下はヘラケズリが施される。**101**は口縁部～胴部の破片で，小型の甕もしくは壺である。口縁部は外反し，端部は尖る。摩滅が著しく調整は不明であるが，胴部内面はヘラケズリである。全体に丁寧なつくりである。**98**は単純口縁の小型甕の破片（口縁部～体部上半）である。肩の張らない胴部からくの字状に口縁部が外上方にのびる。口縁端部は面をもつ部分もあるが，明確ではない。調整は内外面ともにハケ目であるが，口縁部内面が横位で，その他は斜位あるいは縦位である。

鉢（99・100） 体部にアクセントをつけて外反する単純口縁の鉢（**99**），体部をくの字状に屈曲するいわゆる「神谷川式」の鉢（**100**）がある。**99**は口縁部～体部の破片である。口縁部は外反気味にのび，端部は丸くおさめる。口縁部外面には凹凸があり，凹線状の窪み数条がめぐる。口縁部の調整は内外面ともに横ナデ，体部内面の調整はナデである。体部外面はヘラケズリを施す。**100**は口縁部～体部の破片である。屈曲した口縁はわずかに内傾し，体部の屈曲は口縁径よりもわずかに外方に出る。口縁部と頸部との境は横方向に突出し，口縁端部は外方へわずかに肥厚し内傾する面をもつ。外面の調整は口縁部から体部屈曲部までが横ナデ，それ以下は摩滅が著しく不明瞭であるがハケ目と思われる。内面の調整は口縁部から体部屈曲部付近までが横ナデである。それ以下はヘラケズリを施す。

器種不明の土器（102） 直立する口縁部の破片である。口縁端部は外方へ肥厚し水平の面をもつ。外面の調整は横ナデ，内面の調整はヘラミガキ状の強いナデである。色調は黒褐色を呈する。



第38図　ＳＫ229・230・234・235・238出土土器実測図（１：3，109・110は１：４）

ＳＫ230（第38図，図版27）

弥生時代後期末葉（庄内式併行期）の甕・鉢（手づくね土器）などが出土した。

甕（103） 口縁部～胴部上半の破片で，口縁部が外方へ大きく屈曲するいわゆる「山陰系」の甕である。口縁部は外反気味にのび，端部は尖り気味に丸くおさめる。口縁部から頸部上半にかけて煤が付着する。調整は，外面が横ナデ，内面は口縁部から頸部が横ナデである。内面体部はヘラケズリを施す。

鉢（104） 口縁部～体部の破片で，内湾する単純口縁の手づくね土器である。内外面に指頭圧痕が明瞭に残る。また内面の下方には板状工具による強いナデの痕跡がわずかに認められる。色調は黒褐色を呈する。

ＳＫ234（第38図，図版28）

弥生時代後期中葉（Ｖ－２）や後期末葉（庄内式併行期）の甕・鉢が出土した。

壺（105～106） いずれも口縁部を屈曲して立ち上がる複合口縁の甕であるが，口縁部が短く内傾するもの（105），口縁部が外反して開くいわゆる「山陰系」のもの（106）がある。105は口縁部～頸部の破片で，内傾する口縁部外面に不明瞭な凹線が２～３条めぐる。なお口縁部と頸部の境付近に煤が付着する。調整は内外面ともに横ナデである。焼成はきわめて良好で，明橙色を呈する。106は壺あるいは甕の破片（口縁部～胴部上半）である。口縁部は外反気味にのび，口縁端部付近で外方へわずかに屈曲させ，端部を尖り気味に丸くおさめる。摩滅が著しく，外面の調整は不明である。口縁部から頸部の内面は横ナデ調整で，胴部上半はヘラケズリを施す。

鉢（107） 口縁部～体部の破片で，体部をくの字状に屈曲させ，口縁部も屈曲させて内傾気味に直立させる。口縁部は短く，端部は丸くおさめる。なお体部の屈曲はやや鈍い。口縁部から頸部は内外面ともに横ナデである。体部外面の調整は摩滅が著しく不明である。体部内面はヘラケズリであるが，屈曲部付近はナデ調整を施す。

ＳＫ235（第38図，図版28）

弥生時代後期前葉（Ｖ－１）の甕が出土した。

甕（108） 口縁部～胴部上半の破片である。口縁端部を拡張し，内傾した端面に３条の凹線をめぐらせる。なお口縁部には煤が付着する。外面の調整は横ナデ，内面の調整は口縁部から頸部までが横ナデである。また胴部上半はヘラケズリを施す。

ＳＫ238（第38～43図，図版28～33）

弥生時代後期末葉（庄内式併行期）の壺・甕・鉢・蓋・底部が大量に出土した。

壺（109～113） いずれも口縁部が屈曲する複合口縁の壺である。屈曲した口縁部を内傾させる「備後系」のもの（109・110）と，外傾させ大きく開くいわゆる「山陰系」のもの（111～113）がある。109は口縁部～体部下半の破片で，110はほぼ完形である。109の口縁部は短く鋭く内側

に屈曲し，端部は丸くおさめる。口縁部を除く外面と，内面の頸部上半に煤が付着する。外面の調整は口縁から胴部上半にかけて横ナデ，胴部下半はハケ目で，上位ほど横位に近くなる。内面は口縁から頸部中央にかけて横ナデ，頸部には絞りの痕跡が見られ，胴部はヘラケズリである。109は復元口径16.1cm，復元頸部径11.7cm，復元胴部最大径27.9cmである。110の内傾した口縁部はほぼ直線的で，端部に近くなるほど器壁は薄くなり，端部は丸くおさめる。胴部はタマネギ形を呈し，安定した平底を有する。胴部上半には籠の痕跡が確認できる。タガの幅は最大５㎜である。外面は，口縁部～胴部上半まで横ナデ，胴部中央付近は横位もしくは斜位のハケ目，胴部下半は縦位のハケ目である。内面は，口縁部～頸部上半が横ナデ，頸部中央には絞りの痕跡があり，胴部上半が横位のヘラケズリ，胴部中央付近が斜位のヘラケズリ，胴部下半が縦位のヘラケズリである。110は口径14.9cm，器高38.4cm，頸部径13.3cm，胴部最大径33.6cm，底径8.7cmである。111～113は「山陰系」の壺で，111は口縁部～胴部上半の破片，112・113はほぼ完形である。111～113の口縁は直線的に外上方にのび，端部を外反気味に外方へ突出させ丸くおさめる。口縁部外面に強いナデによる凹線状の窪みがある。113の口縁部はわずかに外反気味で，器壁がやや薄い。111は胴部上半に籠の痕跡が認められる。籠の痕跡は赤橙色を呈し，幅は最大６ ㎜である。また，籠の痕跡を消すように幅７～10㎜の条痕がある。すべて斜位でほぼ同一方向である。砂粒の動いた痕跡などは認められない。長期間なんらかの物体が器面に密着し，淡黄褐色に変色したものと思われる。111の胴部の肩は張り，112の胴部は球形に近い倒卵形で，底部は不安定な小さな平底である。113の胴部は球形に近いタマネギ形で，底部は不安定でやや丸みのある小さな平底である。111～113の内面は，口縁部から頸部上半が横ナデ，頸部下半は不明で，胴部上半が横位のヘラケズリ，胴部下半が縦位のヘラケズリである。111の外面は，口縁部から頸部にかけて横ナデ，胴部は縦位もしくは斜位のハケ目を施す。内面口縁部や外面口縁部・胴部に一部煤が付着する。111は復元口径18.6cmである。112の外面は，口縁部から頸部が横ナデ，胴部はナデである。胴部下半で縦位のナデが確認できるが，胴部上半のナデ方向は不明である。112は口径14.6cm，器高31.4cm，頸部径10.0cm，胴部最大径23.9cm，底径3.9cmである。113の外面は，口縁部から頸部にかけて横ナデ，胴部は縦位のハケ目である。113は口径18.3cm，器高39.5cm，頸部径12.9cm，胴部最大径31.4cm，底径4.0cmである。

甕（114～133） 口縁が屈曲し外傾する複合口縁の甕（114～132）と外上方へ開く単純口縁の甕（133）がある。さらに複合口縁の甕は，口縁部が直立気味にのびるもの（114）もしくは大きく外方へ開かないもの（115～117），口縁部が内湾気味にのびるもの（118），口縁部が外上方に直線的にのびるもの（119～121・132），口縁部が外反し端部を尖り気味にするもの（122～131）に分かれる。これらの甕の外面は，口縁部～頸部が横ナデ，胴部がハケ目である。内面は，口縁部～頸部が横ナデ，胴部上半が横位のヘラケズリ，胴部下半が縦位のヘラケズリである。また胴部上半のヘラケズリは頸部（中央）まで達していない。

114は口縁部がほぼ直立する甕もしくは壺で，口縁部～底部の破片である。口縁端部付近を外反させ，端部は丸くおさめる。頸部の屈曲は緩やかで，胴部は球形を呈する。底部は丸みのある

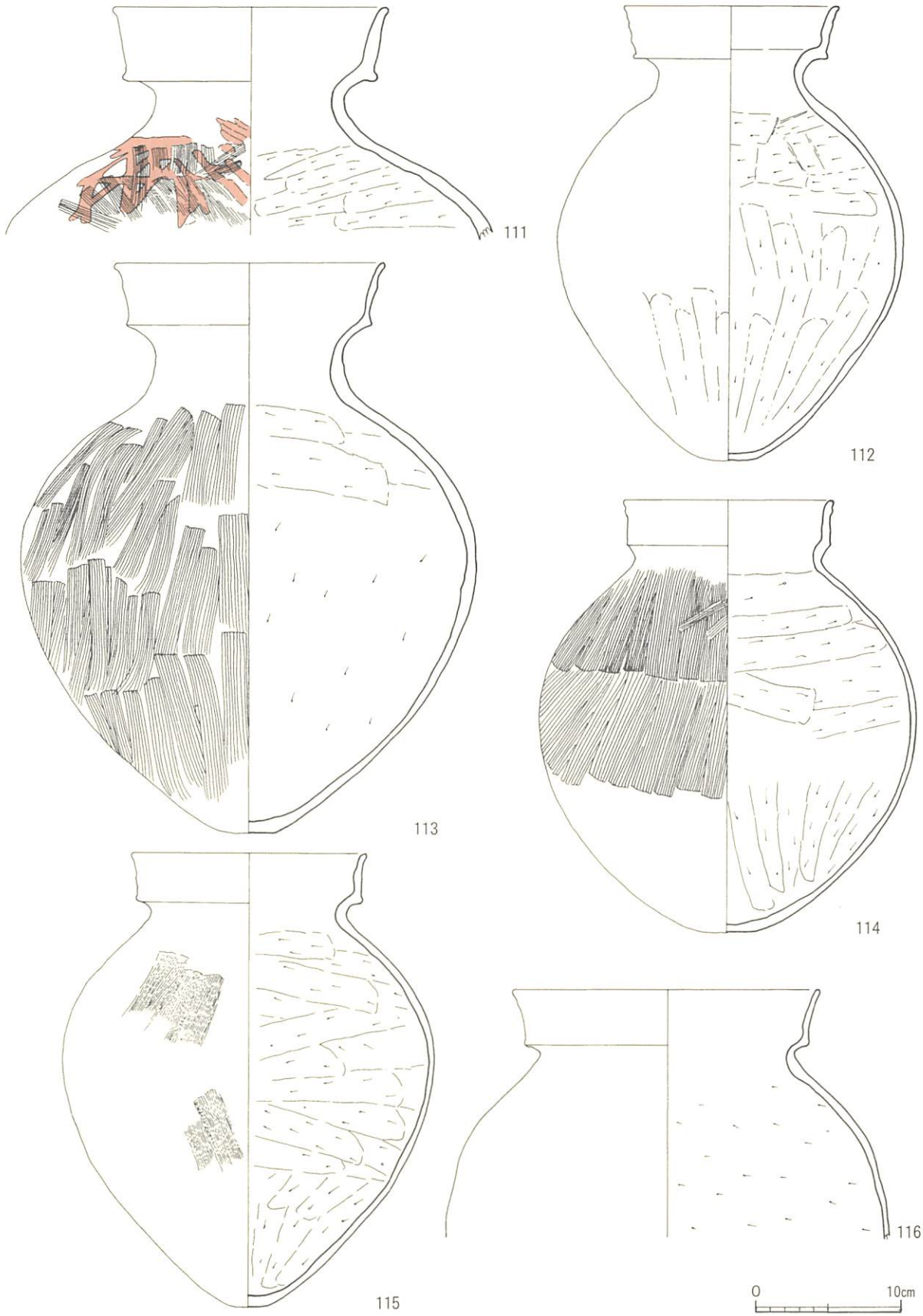
小さな平底である。胴部下半に煤が付着する。復元口径14.2cm，器高29.9cm，復元頸部径12.9cm，復元胴部最大径25.8cm，復元底径4.0cmである。

115～117は口縁がわずかに外傾する甕である。**115**はほぼ完形で，口縁端部付近で外反させ，端部は丸くおさめる。口縁外面に凹凸があり，凹線状の窪みがめぐる。胴部は倒卵形を呈し，底部は小さな平底である。外面は縦位のハケ目後ナデが施され，胴部内面の横位のヘラケズリは胴部２／３まで達している。口径16.0cm，器高31.2cm，頸部径13.6cm，胴部最大径25.8cm，底径3.2cmである。**116**は大型の甕で，口縁部～胴部上半の破片である。口縁端部はわずかに外方へ突出させ，端部は丸くおさめる。全体に摩滅が著しく調整は不明である。復元口径20.8cm，復元頸部径17.4cm，復元胴部最大径30.6cmである。**117**はほぼ完形の甕である。口縁端部付近を外反させ，端部は丸くおさめる。口縁外面はやや凹凸があり，凹線状の窪みがめぐる。胴部は倒卵形であるが，最大径は中央に下がる。底部は丸みを帯びた小さな平底である。なお胴部下半に煤が付着する。外面は板状工具のナデで，胴部内面の横位のヘラケズリは胴部の２／３に達する。口径14.4cm，器高24.1cm，頸部径11.6cm，胴部最大径19.4cm，底径3.9cmである。

118は口縁が内湾気味にのびる完形の甕である。口縁部の器壁はやや厚く，端部は丸くおさめる。頸部は鋭く屈曲し，口縁部と頸部の境は横方向に突出する。胴部最大径は中央にあり，断面楕円形を呈する。底部は丸みのある小さな平底である。胴部下半に煤が付着する。胴部外面はナデで，胴部内面はヘラケズリで頸部付近が横位，それより下位は縦位である。口径12.8cm，器高21.4cm，頸部径10.3cm，胴部最大径16.7cm，底径3.2cmである。

119～121・132は口縁部が直線的に外上方にのびる甕である。**119**は胴部を１／２ほど欠く。口縁端部を外側にわずかに肥厚させ，端部は丸くおさめる。頸部は鋭く屈曲する。外面の口縁部と頸部の境は横方向に突出するが，内面の口縁部と頸部の境は不明瞭である。胴部は球形に近い倒卵形で，丸みのある小さな平底をわずかに確認できる。胴部下半に煤が付着する。外面は縦位のハケ目もしくは板ナデを施すが，不明瞭である。口径16.9cm，器高26.6cm，頸部径13.6cm，復元胴部最大径22.4cm，底径2.6cmである。**120**は口縁部～胴部上半の破片である。口縁端部付近をわずかに外反させ，端部は丸くおさめる。全体に摩滅が著しく調整は不明である。復元口径15.6cm，復元頸部径12.7cm，復元胴部最大径19.7cmである。**121**は口縁部～胴部上半の破片で，口縁端部を外側にわずかに肥厚させ，端部は丸くおさめる。外面頸部から胴部上半にかけて櫛描きによる直線文と波状文がめぐる。胴部中央付近は横位のハケ目が施される。口径15.7cm，頸部径12.0cm，胴部最大径20.5cmである。**132**は口縁部～底部の破片で，胴部はタマネギ形を呈する。**132**の口縁部は直線的に外上方にのび，端部は丸くおさめる。口縁部と頸部の境は鋭く横方向に突出する。底部は小さく丸みの強い不明瞭な平底である。外面は板状工具によるナデ，内面は胴部下半から底部に指頭圧痕が認められる。器壁が薄く，調整は丁寧である。復元口径12.9cm，器高17.0cm，復元頸部径10.2cm，胴部最大径16.3cm，底径2.5cmである。

122～131は口縁部を外反させ端部を尖り気味にする甕である。このうち**122～124**は口縁部が短く，**125～127**は口縁部が長く器壁がやや厚い，**128～131**は口縁部が長く器壁が薄い。**122**は口縁部



第39図　ＳＫ238出土土器実測図１（１：４）

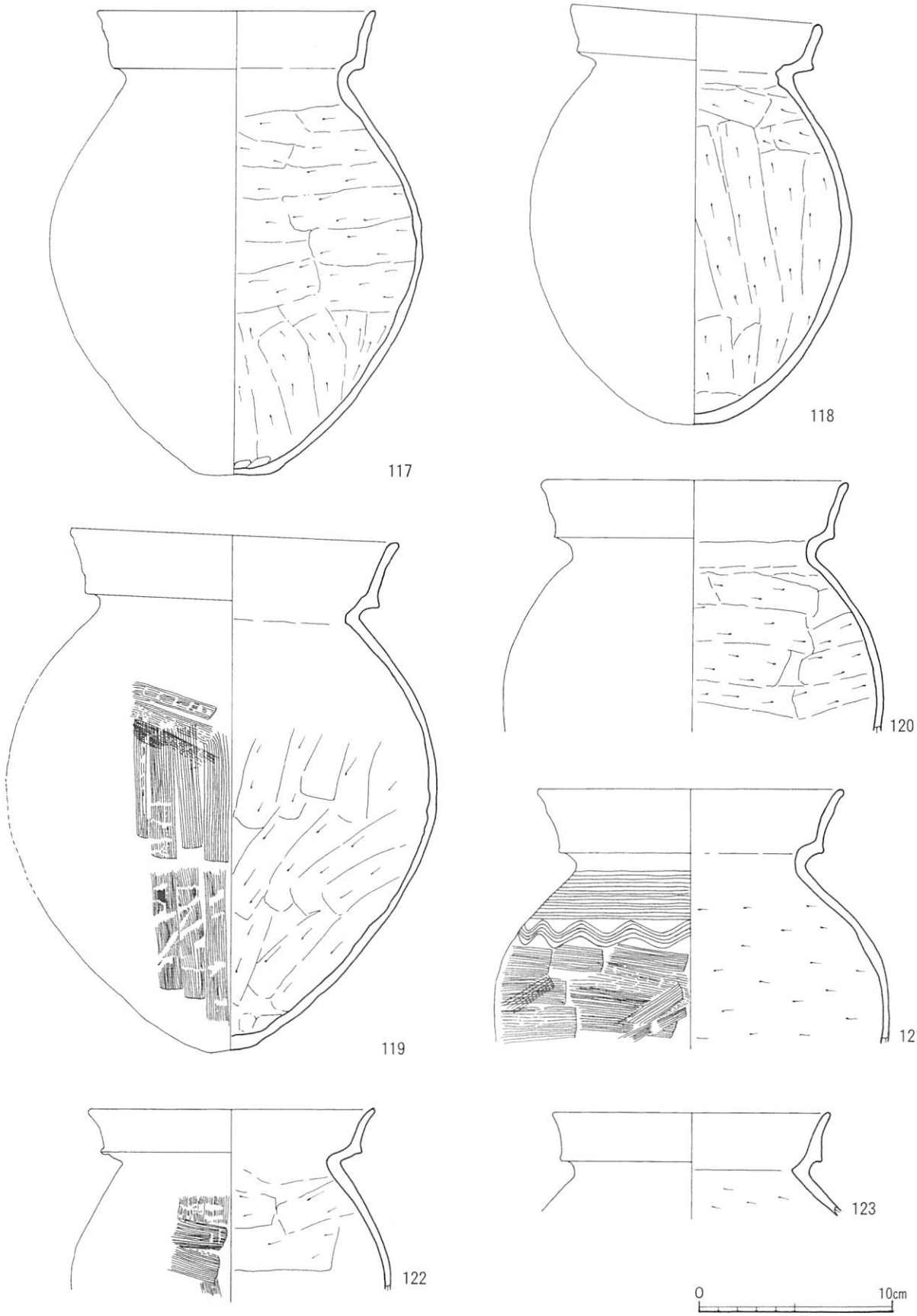
～胴部上半の破片である。頸部でくの字に屈曲し外反気味にのびて口縁部に至る。また口縁部と頸部の境は横方向に突出しする。口縁部や胴部に煤の付着が認められる。外面の胴部上端付近のハケ目は横ナデによって消される。口径14.7cm，頸部径11.4cm，胴部最大径16.7cmである。**123・124**は口縁部～胴部上半の破片で，口縁部の開きが弱い。外面の口縁部と頸部の境は横方向やや下側に突出し明瞭であるが，内面の口縁部と頸部の境は不明瞭である。胴部内面のヘラケズリが頸部中央から施される。**123**の口縁部は外反するが，**124**の口縁部はほぼ直線的にのびる。**123**は口径14.2cm，頸部径12.2cm，**124**は口径12.6cm，頸部径10.5cmである。**125～127**はほぼ完形で，口縁部が長く器壁がやや厚い。胴部にはハケ目もしくは板状工具によるナデが施される。**125**の口縁部は開きがやや弱く，口縁部中央やや下側で外反しそれからは直線的にのびる。**126・127**の口縁部は外反して大きく開く。外面の口縁部と頸部の境は，**125**は明瞭に屈曲し，**126・127**は横方向に突出する。内面の口縁部と頸部の境は，**125・126**が不明瞭であるが，**127**は明瞭である。底部は，**125**が小さな丸みのある平底，**126・127**はわずかに平底の痕跡を残す。**126・127**の外面胴部下半に煤が付着する。**125**は口径12.6cm，器高21.2cm，頸部径9.9cm，胴部最大径17.9cm，底部径3.2cm，126は口径15.8cm，器高26.1cm，頸部径12.6cm，胴部最大径21.4cm，底部径2.0cm，**127**は口径13.9cm，器高23.0cm，頸部径10.3cm，胴部最大径18.7cm，底部径2.8cmである。

128～131は長くて器壁の薄い口縁部をもつ。**128・130**はほぼ完形，**129**は口縁部～胴部上半の破片，**131**は口縁部～胴部下半の破片である。**128・129**の口縁部は，外面に凹凸があり，凹線状の窪みがめぐる。**129**は口縁部の開きがやや小さく，外反の程度は弱い。**131**は口縁端部に外傾する面をもつ。頸部と口縁部の境（外面）は，**128**が下側に，**129・131**が横方向に，**130**がやや上側に突出する。**128・130**の底部はわずかに平底の痕跡を残す。調整は，**128**の胴部外面がヘラナデ，**129・130**は摩滅が著しく不明，**131**の胴部外面が縦位のハケ目後横位のハケ目である。**130**の胴部下半には煤が付着する。**128**が口径13.4cm，器高24.4cm，頸部径10.2cm，胴部最大径18.5cm，底径1.9cm，**129**が復元口径14.0cm，復元頸部径11.5cm，復元胴部最大径21.7cm，**130**が口径15.2cm，器高24.0cm，頸部径12.1cm，胴部最大径19.2cm，底径1.7cm，131が復元口径17.9cm，復元頸部径14.3cm，復元胴部最大径22.5cmである。

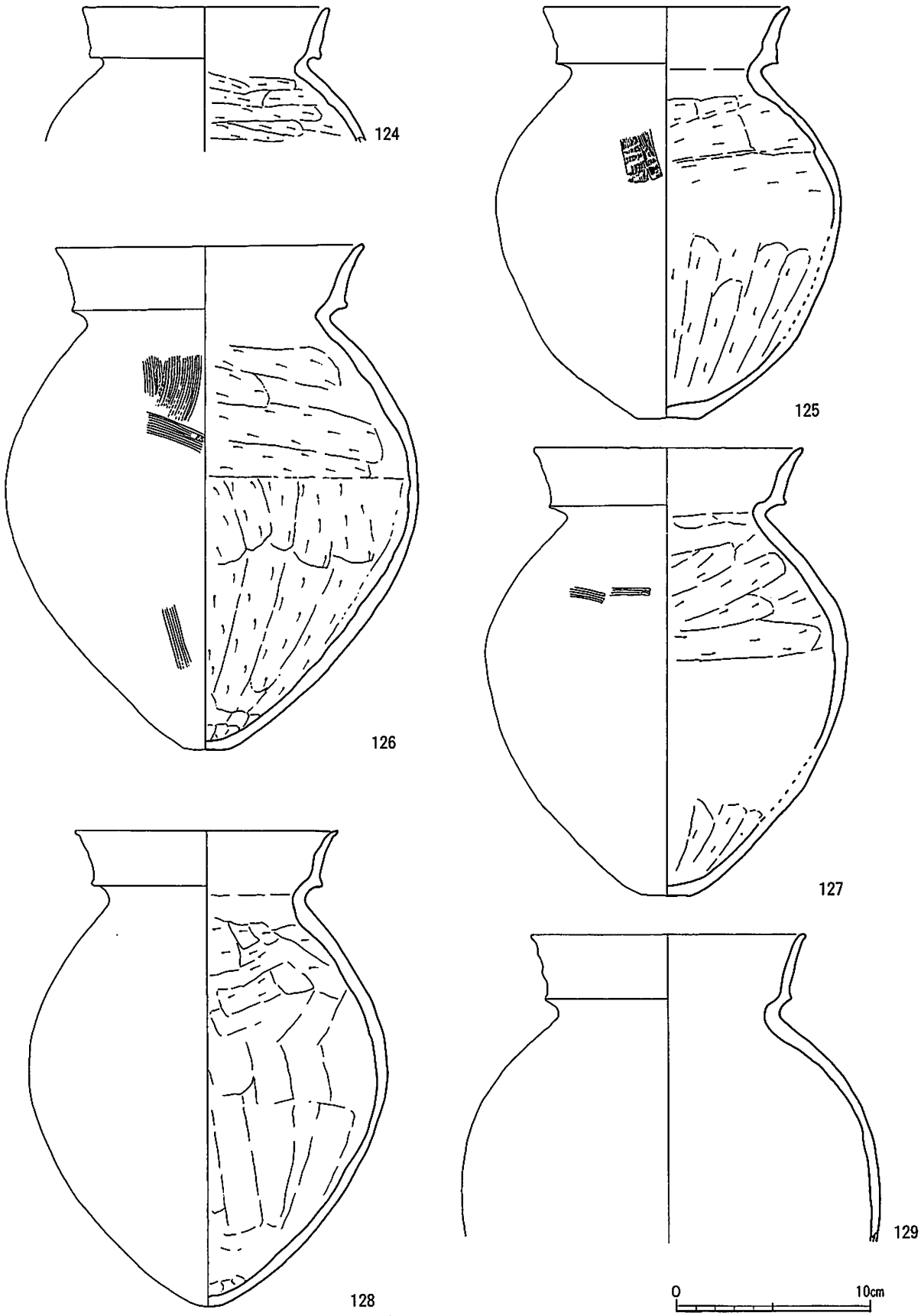
133は外上方へ開く単純口縁の甕の破片（口縁部～胴部上半）である。口縁部は短く，肩部は張るようである。端部は面をもつ部分もあるが，丸くおさめる部分もあり一定していない。外面は摩滅が著しく調整不明である。内面は口縁部から頸部が板状工具による横ナデ，胴部は横位のヘラケズリである。口縁端部付近の内外面に煤が付着する。復元口径14.8cm，復元頸部径13.2cmである。

鉢（134～145） 体部をくの字状に屈曲させるいわゆる「神谷川式」の鉢（**134～137**），体部にアクセントをつけて外反する単純口縁の鉢（**138**），口縁部が外上方に屈曲して開く単純口縁の鉢（**139・140**），内湾する単純口縁の鉢（**141～145**）の大きく４種類の鉢がある。

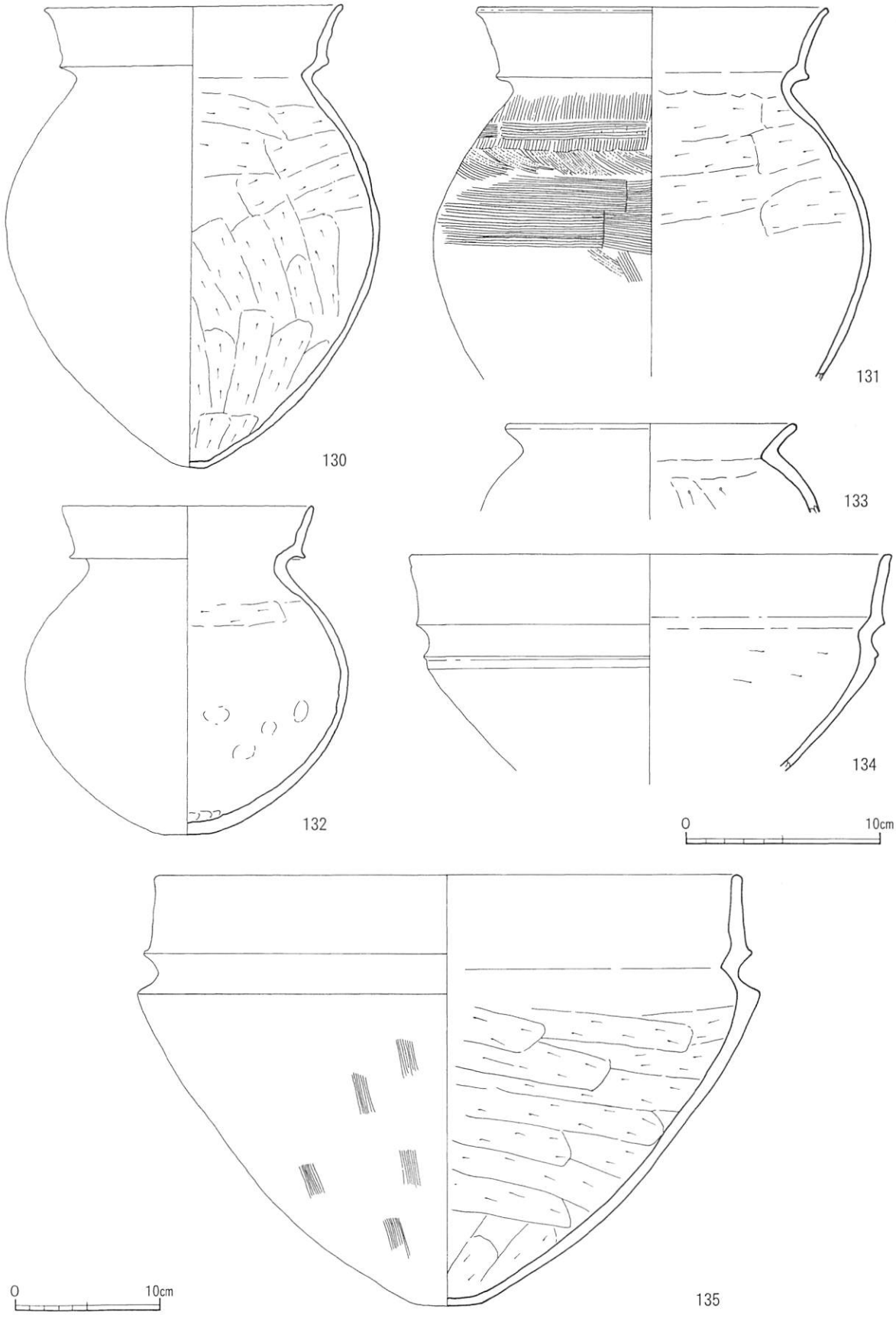
134～137はいわゆる「神谷川式」の鉢で，**134**は口縁部～体部の破片，**135**は口縁部～底部の破片，**136・137**はほぼ完形である。なお**135**は大型の鉢である。**134・136・137**は，屈曲した口縁が



第40図　ＳＫ238出土土器実測図２（１：３）



第41図　ＳＫ238出土土器実測図３（１：３）



第42図　ＳＫ238出土土器実測図４（１：3，135は１：４）

外傾する。135は，屈曲した口縁がわずかに内傾し，体部の屈曲は口縁径よりも外方に出る。口縁端部は丸くおさめ，口縁部と頸部の境は横方向（134～136）もしくはやや下方向（137）に突出する。また134・137は頸部の横ナデにより屈曲部分下側が突出する。135～137の底部はやや丸みのある平底で，136・137は体部に煤が付着する。外面は，口縁部から体部屈曲部まで横ナデ，体部屈曲部より下位が縦位のハケ目である。内面は口縁部から頸部まで横ナデ，頸部から下位がヘラケズリ後雑なナデを施す。なお136は頸部付近に指頭圧痕が残る。134は復元口径24.8cm，135は復元口径40.0cm，器高29.8cm，復元底径4.9cm，136は口径21.5cm，器高12.2cm，底径4.8cm，137は口径21.7cm，器高11.8cm，底径6.5cmである。

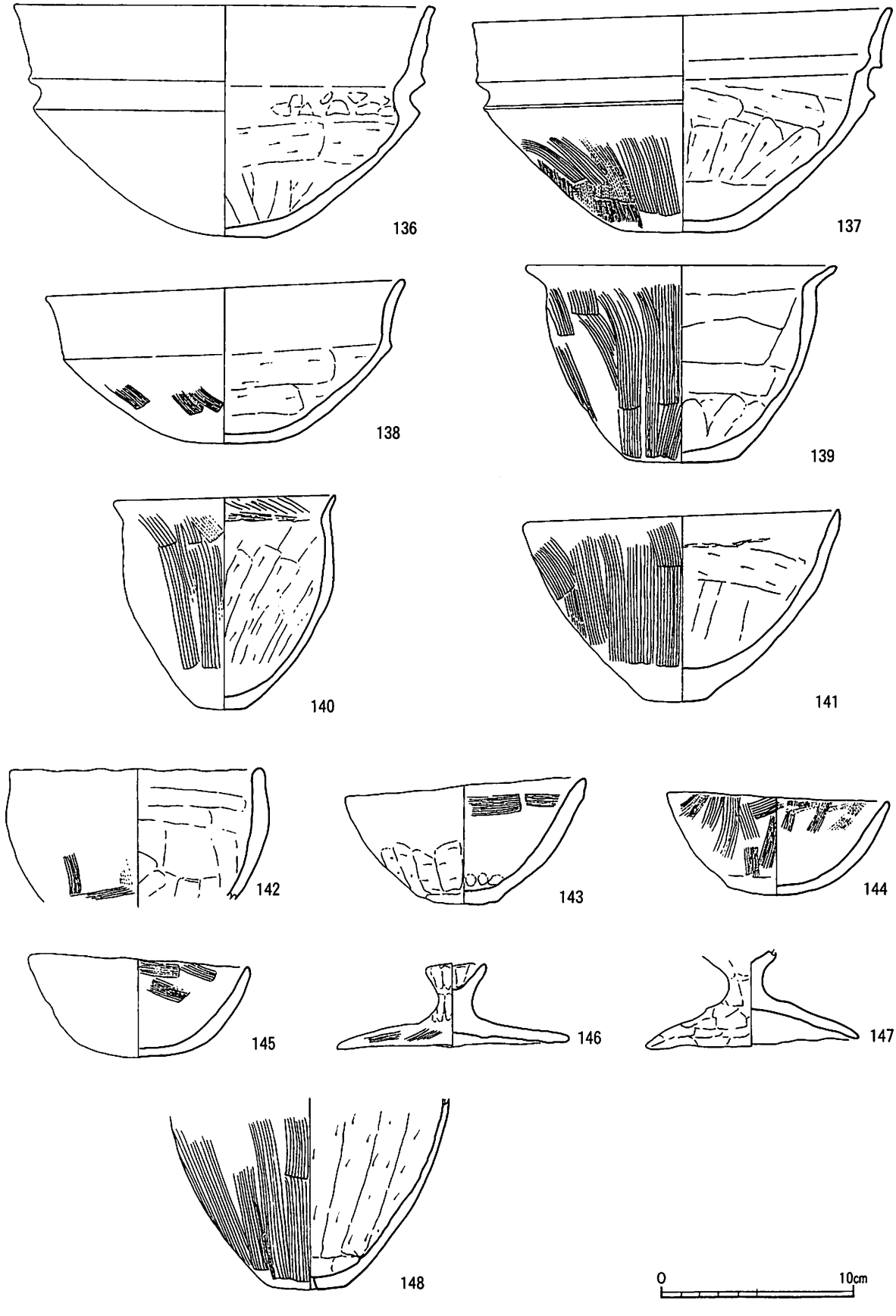
138は完形で，体部にアクセントをつけて外反する単純口縁の鉢である。口縁端部は丸くおさめ，口縁部と体部の境（外面）はやや突出する。底部は平底であるが，丸みを帯び不明瞭である。外面は，口縁部が横ナデ，体部が縦位のハケ目もしくは板状工具によるナデである。内面は，口縁部が横ナデ，体部がヘラケズリである。口径18.6cm，器高8.5cm，底径5.0cmである。

139・140はいずれも完形で，口縁部が外上方に屈曲して開く単純口縁の鉢である。ほぼ直立した体部から口縁は外上方に短くのび，端部を丸くおさめる。底部は平底である。外面は，口縁部～頸部が横ナデ，体部が縦位のハケ目である。内面は，口縁部が横ナデ，体部がヘラケズリである。140は口径と底部が小さく，砲弾形を呈する。また140の外面は煤が付着する。140の口縁部の調整は，外面が不明で，内面がハケ目である。139は口径16.0cm，器高10.3cm，底径5.9cm，140は口径11.3cm，器高11.1cm，底径2.4cmである。

141～145は内湾する単純口縁の鉢である。141・143～145の口縁部は大きく外上方に開き，142の口縁部はほぼ直立し外上方に開かない。いずれも口縁端部は丸くおさめる。また142・143・145の口縁端部の位置は一定でなく，上下に波うつ。141はほぼ完形である。外面はハケ目，内面はヘラケズリで口縁部付近は雑な横ナデを施す。小さな平底の底部をもち，外面に煤が付着する。口径16.2cm，器高10.0cm，底径3.3cmである。142は口縁部～体部の破片である。外面は縦位のハケ目もしくは板状工具によるナデ，内面はヘラケズリで口縁部付近は雑な板状工具による横ナデが施される。口径13.0cm。143～145は椀形を呈する完形の鉢である。144・145の底部は丸みのある平底で，特に144は不明瞭である。145は丸底である。143の外面は，口縁部から体部上半が調整不明，体部下半が横位のヘラケズリである。内面は，口縁部から体部上半が横位のハケ目もしくは板ナデが施され，体部下半は指頭圧痕がみられる。144の外面は縦位もしくは斜位のハケ目，内面は横位のハケ目後縦位のハケ目を施す。145の外面には型押しした際の亀裂がわずかに残る。内面は指頭圧後ハケ目もしくは板状工具によるナデをおこなう。143は口径12.4cm，器高6.5cm，底径3.3cm，144は口径11.4cm，器高5.3cm，底径5.0cm，145は口径11.3cm，器高5.4cmである。

蓋（146・147） 147のつまみ先端部を欠損するが，146・147はほぼ完形の蓋である。いずれも指頭圧により成形するため，器形にゆがみがある。146は内外面に簡単な（雑な）ハケ目を施すが，147は未調整である。146は口径11.5cm，器高4.4cm，147は口径10.7cmである。

底部（148） 148は胴部下半～底部の破片である。倒卵形の胴部に丸みのある小さな平底の底部が



第43図　ＳＫ238出土土器実測図５（１：３）

つく。外面はハケ目，内面は縦位のヘラケズリである。底径3.7cmの底部に孔が外（径８㎜）から内（径３㎜）に向かって穿たれる。

ＳＤ44（第44図，図版33・34）

弥生時代後期中葉（Ｖ－２）頃の鉢・高杯が出土した。

鉢（150） 150は体部にアクセントをつけて直立する単純口縁の鉢もしくは高杯の杯部で，口縁部～体部の破片である。口縁端部を横方向に拡張する。拡張した端部には不明瞭な凹線が３条めぐる。外面は摩滅が著しく調整不明，内面は横ナデである。

高杯（149） 149は口縁部の大半を欠く高杯である。杯部は椀形を呈し，脚柱部は太い。脚部は短く内湾し，丸底の皿を伏せた形を呈する。外面は，口縁部付近が横ナデ，杯部～脚柱部が板状工具による縦位のナデ，脚部は未調整である。内面はヘラケズリであるが，口縁部付近は横ナデを施す。また脚部内面はヘラケズリで，中央に径1.3cmの貫通しない孔が穿たれる。復元口径14.0cm，器高11.0cm，底部径7.0cmである。

ＳＤ45（第44図，図版34）

弥生時代後期前葉（Ｖ－１）もしくは後期中葉（Ｖ－２）の壺・甕が出土した。

壺（151・152） 151・152は口縁部～頸部の破片である。いずれも口縁端部を大きく拡張し，外傾した端面に不明瞭な複数の凹線をめぐらせる。151は３条の凹線をめぐらせ，その上に円形浮文を施す。152は４条の凹線をめぐらせる。外面は横ナデ，内面は口縁部～頸部が横ナデ，頸部より下位は絞りの痕跡が見られる。

甕（153） 153は口縁部が屈曲して短く立ち上がる複合口縁の甕で，口縁部～胴部上半の破片である。屈曲した口縁は内傾し，端部は丸くおさめる。胴部外面に煤が付着する。外面は，口縁部～胴部上側が横ナデ，それより下位は縦位のハケ目である。内面は，口縁部～頸部が横ナデ，それより下位は摩滅が著しく不明瞭であるがヘラケズリであろう。

ＳＸ23（第44図，図版34）

弥生時代後期末葉（庄内式併行期）の高杯が出土した。

高杯（154） 154は高杯の杯部の破片で，体部から緩やかに外反する口縁部をもつ。口縁は大きく開き，体部と口縁部の境は不明瞭である。口縁部は内外面ともに横ナデ，体部外面は横位のナデ，体部内面は放射状のナデを施す。復元口径18.6cmである。

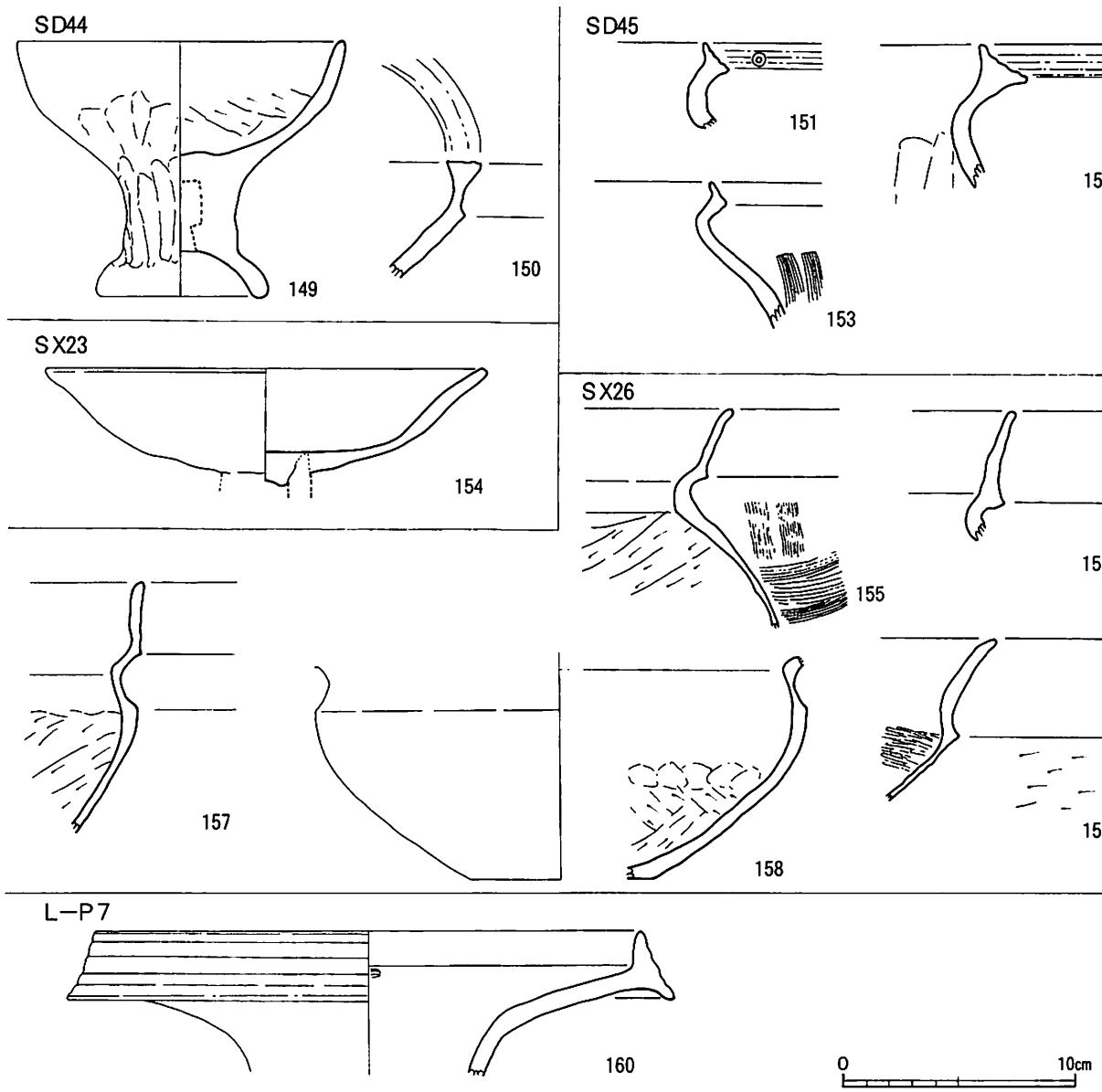
ＳＸ26（第44図，図版34）

弥生時代後期末葉（庄内式併行期）の甕・鉢が出土した。

甕（155・156） 155・156はいずれも口縁部が屈曲して立ち上がる複合口縁の甕で，屈曲した口縁部は直線的に長くのび，外上方に開く。外面は，口縁部から頸部が横ナデ，胴部が縦位のハケ目

後横位のハケ目である。内面は，口縁部から頸部が横ナデ，胴部は斜位のヘラケズリである。**155**は口縁部～胴部上半の破片で，口縁端部付近で外反させ，端部は丸くおさめる。**156**は口縁部～頸部の破片で，口縁部外面に凹凸があり，凹線状の窪みがめぐる。口縁端部は丸くおさめる。

鉢（157～159） 体部をくの字状に屈曲させるいわゆる「神谷川式」の鉢（**157・158**）と，体部にアクセントをつけて外反する単純口縁の鉢（**159**）がある。**157**は口縁部～体部の破片で，口縁は直立し，端部は丸くおさめる。口縁部と頸部の境は横方向に突出する。体部は丸みをもち，ほぼ直立したところで屈曲する。**158**は体部～底部の破片である。やや丸みのある平底の底部から内湾して立ち上がり，屈曲部分ではほぼ直立する。復元底径は8.0cmである。色調や形態などから**157**と**158**は同一個体の可能性が高い。外面は，口縁部から体部屈曲部分が横ナデ，調整不明である。内面は，口縁部から頸部までが横ナデ，頸部から体部屈曲部分までがヘラケズリ後ナデ，体



第44図　ＳＤ44・45，ＳＸ23・26，Ｌ－Ｐ７出土土器実測図（１：３）

部屈曲部分より下位はヘラケズリである。**158**ではヘラケズリによりほとんど消されるが，わずかに指頭圧痕が確認できる。**159**は口縁部～体部の破片である。口縁部は外反し，口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。口縁部と体部の境は明瞭である。外面は，口縁部が横ナデ，体部が横位のヘラケズリである。内面は，口縁部が横ナデ，体部が横位のヘラミガキである。色調は橙褐色を呈し，焼成は良好である。

Ｌ－Ｐ７（第44図，図版34）

弥生時代後期の器台が出土した。

器台（160） 器台もしくは壺の破片（口縁部～頸部）と推定される。口縁端部を上下に大きく拡張し，その端面を内傾させる。さらに口縁端面に不明瞭な凹線を３～４条めぐらせる。摩滅が著しく調整は不明であるが，頸部上端にヘラミガキ状の調整がわずかに確認できる。復元口径23.6cmである。

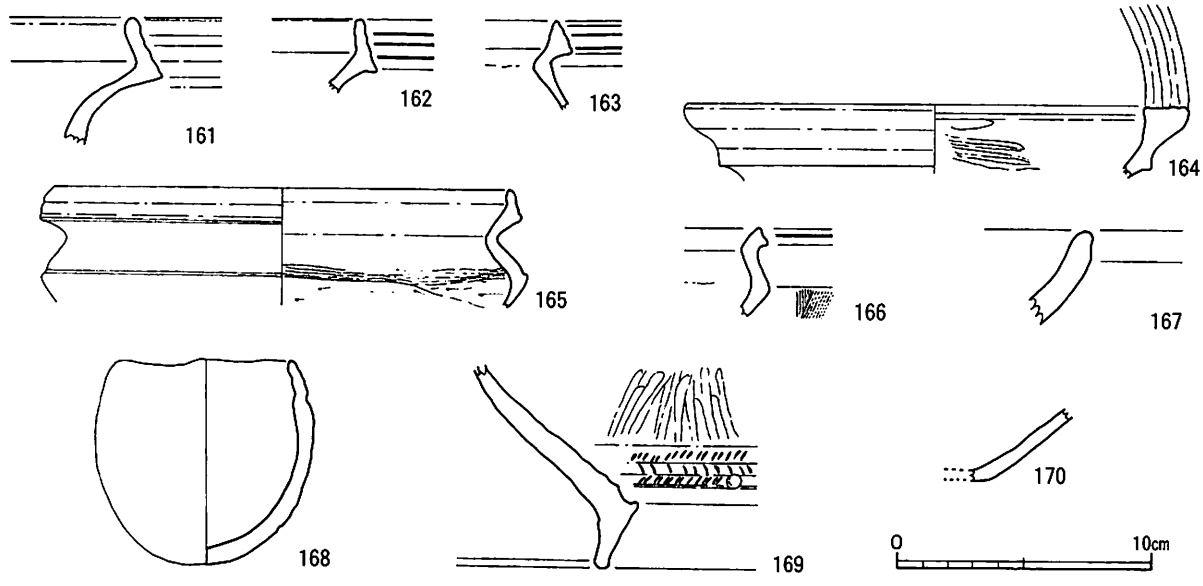
調査区（第45図，図版34）

各遺構には混入した遺物が含まれている。ここでは遺構に伴っていない可能性が高い遺物を報告する。弥生時代後期の壺・甕・鉢・脚部・底部である。

壺（161） 複合口縁の壺の破片（口縁部～頸部）で，摩滅が著しく調整は不明である。ＳＢ18出土である。

甕（162・163） **162**は複合口縁の甕で，口縁部～頸部の破片である。屈曲した口縁部は内傾し，下方へわずかに突出する。口縁部外面に不明瞭な凹線が３条めぐる。内外面は横ナデを施す。**163**は口縁部端部を拡張する甕で，口縁部～胴部の破片である。内傾する口縁部の端面から頸部までが短い。口縁端面に凹線が３条めぐる。内外面の調整は横ナデで，内面頸部屈曲部より下位は横位のヘラケズリである。**162・163**はいずれもＳＢ18出土である。

鉢（164～168） 口縁部が屈曲して立ち上がり，端部を水平方向に拡張する鉢もしくは高杯の杯部（**164**），複合口縁で体部をくの字状に屈曲させるいわゆる「神谷川式」の鉢（**165**），単純口縁で体部をくの字状に屈曲させる鉢（**166**），内湾する単純口縁の鉢（**167・168**）の４種類の鉢がある。**164**は口縁部～体部の破片（復元口径19.7cm）で，水平に拡張した口縁部端面に３～５条の不明瞭な凹線をめぐらせる。外面は横ナデ，内面は横位のヘラミガキである。**165**は口縁部～体部下半の破片（復元口径18.0cm）で，口縁部の立ち上がりは短く，内傾する。口縁部外面には凹線が２条めぐり，体部屈曲部の上側には凹線状の窪みがめぐる。外面は横ナデ，内面は，口縁部～頸部が横ナデ，頸部屈曲部付近に横位のハケ目，それより下位は横位のヘラケズリである。また頸部屈曲部付近には指頭圧痕が残る。**166**は口縁部～体部下半の破片で，体部をくの字状に屈曲させるが，口縁部は上方に屈曲しない。頸部から口縁端部までが短く，口縁端部は中央が凹線状に窪む。外面は，口縁部から体部屈曲部まで横ナデ，屈曲部より下位が縦位のハケ目である。内面は摩滅が著しく不明である。**167・168**は体部と口縁部に境がなく，内湾して立ち上がる単純口縁の



第45図　調査区内出土土器実測図（1：3）

鉢である。**167**は朱塗りの鉢で，口縁部の破片である。口縁はやや開き，外面の端部付近を強くナデ，窪ませる。**168**は完形である。卵形を呈し，口縁部はやや内傾する。底部は丸底である。内外面ともに摩滅が著しく調整不明である。口径6.8cm，器高8.6cmである。**164・165**はＳＸ21出土，**166**はＳＢ18出土，**167**はＳＫ226出土，**168**は調査区内出土である。

脚部（169） 大型の脚部の破片である。脚端部を内下方に大きく拡張する。脚部と端面との境は脚部の強い横ナデにより横方向にやや突出する。この強い横ナデよりも上位にほぼ等間隔に不明瞭な凹線を４条めぐらせ，各凹線の間に爪形文をめぐらせる。また最下位の爪形文を壊し，径８㎜の円孔が穿たれる。外面はヘラミガキ，内面はヘラケズリで，内面端部付近は横ナデが施される。焼成は良好で，色調は淡灰褐色を呈する。ＳＸ33から出土した。

底部（170） 平底の底部の破片である。内外面ともに摩滅が著しく調整不明，ＳＢ18の出土である。

２　石・石器

ＳＢ２（第46図，図版34）

石（171） 厚さ1.0cmの板状の石製品である。平面形は，5.5cm×5.5cmの不整方形状である。加工痕および明瞭な使用痕跡は認められない。付近に同様な石が見られないことから人為的に持ち込まれた可能性がある。重量は68.7ｇ，石材は流紋岩である。

ＳＢ11（第46図）

台石（172） 平面形が方形の台石である。使用面と想定できる表面は滑らかであるが，明確な使用痕は認められない。長さ37cm，最大幅25cm，最大厚さ10cm，重量18.14kgで，石材は変成岩である。

ＳＢ20（第46図，図版34）

有孔砥石（173） 横断面が長方形の棒状の有孔砥石である。孔側の小口はU字状に丸くし，反対側の小口は欠損する。表面・裏面・左側面・右側面の４つの面を使用するが，実際によく使用されているのは，表面・裏面の２面である。孔は両面穿孔で，紐ずれの痕跡は確認できない。残存長5.8cm，最大幅1.5cm，最大厚さ1.0cm，重量16.2ｇで，石材は頁岩である。

ＳＢ21（第46図，図版34）

磨石（174・175） **174**は横断面が隅丸三角形の磨石である。使用痕は上下両端面と，側面の三角形の角のひとつにある。長さ7.7cm，幅4.1cm，厚さ4.7cm，重量242ｇ，石材は流紋岩である。**175**は横断面が楕円形の磨石である。両小口は丸みがある。使用痕は下面と側面の一部に見られる。また下面の縁辺に剥離痕がみられる。長さ11.5cm，最大幅5.8cm，最大厚さ4.9cm，重量610ｇで，石材は流紋岩である。

ＳＢ23（第46図，図版34）

凹石（176） 横断面が楕円形の短い棒状を呈した凹石である。表面・裏面・左側面・右側面の計４面に上下２個ずつの敲打痕をもつ。上下ほぼ同じ位置に敲打痕が見られ，各敲打痕の大きさは径２～３cm大で，深さは２～３㎜である。敲打痕は基本的に中央が窪むクレーター状を呈する。上下両端面は中央を除いてザラつき，敲打痕の可能性がある。また上下両端面の縁辺に剥離痕が見られる。これら敲打痕あるいは敲打痕の可能性がある箇所，剥離痕を除くと，器面は滑らかである。長さ11.1cm，最大幅6.1cm，最大厚さ4.4cm，重量525ｇで，石材は流紋岩である。

ＳＸ32（第47図，図版35）

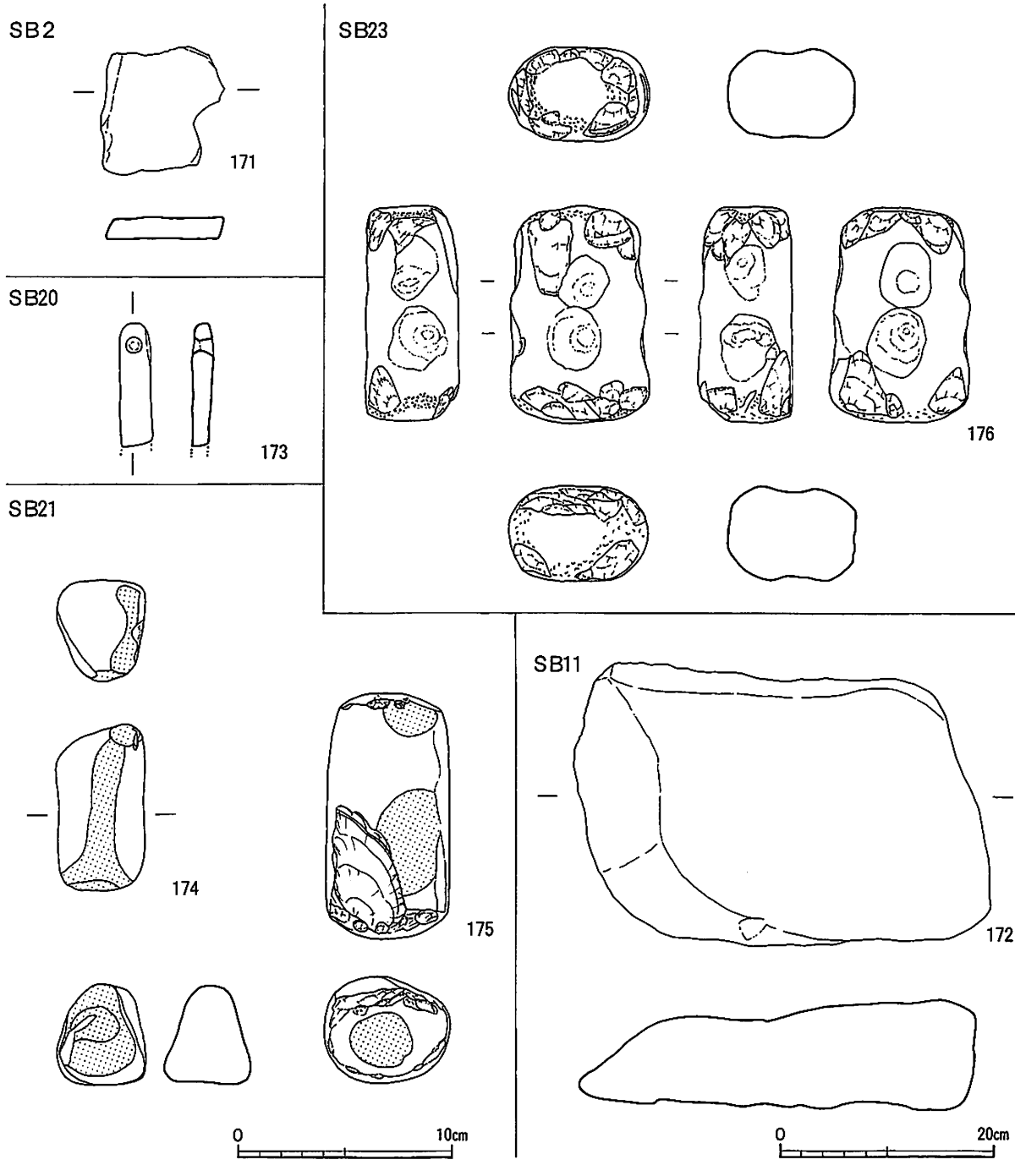
石鏃（177） 基部の抉りが浅い石鏃である。表裏に大きく素材面を残す。内湾する刃部をもち，先端は不明瞭である。長さ2.2cm，最大幅2.1cm，重量1.72ｇ，石材は安山岩である。

調査区（第47図，図版35）

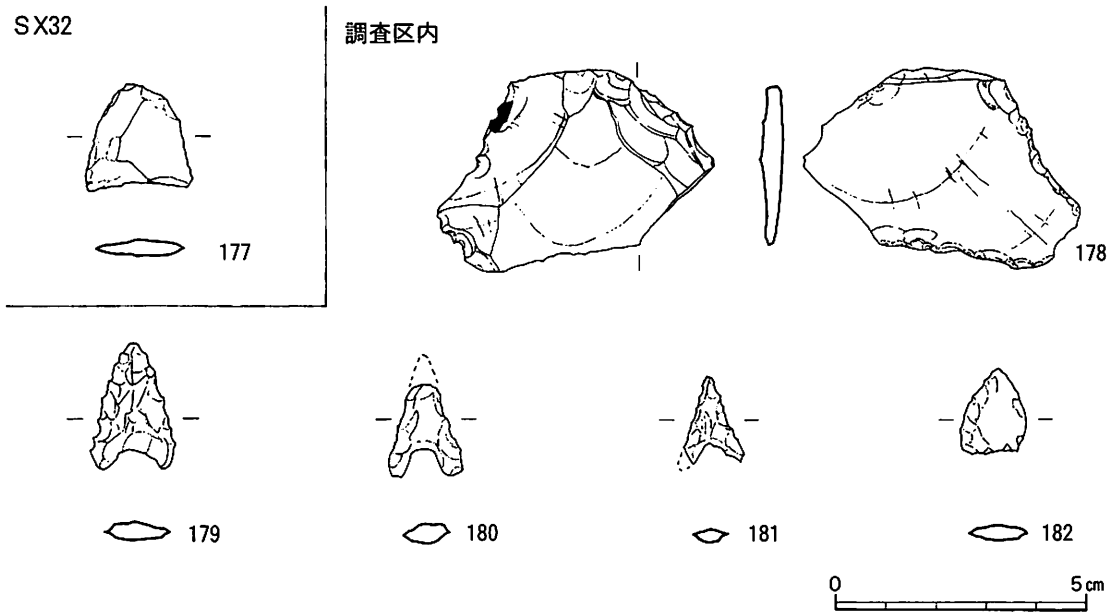
調査区内からスクレイパー１点（**178**），石鏃４点（**179～182**）が出土した。

スクレイパー（178） 石材は安山岩である。素材は石理に沿って剥離した板状剥片で，この素材剥片の腹面から連続的な剥離をおこなって，刃部を形成している。長さ5.6cm，最大幅4.6cm，最大厚0.5cm，重量15.0ｇで，石材は安山岩である。

石鏃（179～182） **179～181**は基部に抉りのある石鏃で，**182**は抉りのない石鏃である。石材はいずれも安山岩である。**179**の抉りは浅く，**180・181**の抉りは深い。**180**は先端を，**181**は基部の一端を欠く。**182**は刃部が内湾し，形は左右非対称である。**179**は長さ2.5cm，最大幅1.7cm，重量1.30ｇ，**180**は残存長1.9cm，最大幅1.5cm，重量0.62ｇ，**181**は残存長1.7cm，残存幅1.2cm，重量0.32ｇ，**182**は長さ1.7cm，最大幅1.3cm，重量0.70ｇである。



第46図　ＳＢ２・11・20・21・23出土石器（石）実測図（１：3，172は1：６）

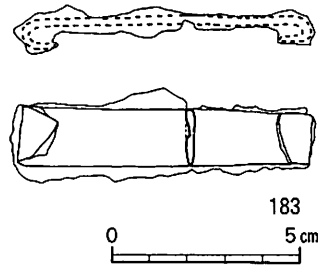


第47図　ＳＸ32，調査区内出土石器実測図（２：３）

３　鉄器

ＳＢ23（第48図，図版35）

摘鎌（183） 横長長方形で，両端を折り返す。基部とともに刃部も直線的である。縦幅は両端で0.5cm程度差があり，刃部は斜めになる。刃幅8.0cm，縦幅1.5～2.0cm，厚さ0.2cmである。



第48図　ＳＢ23出土鉄器実測図（１：２）

註

（１）弥生土器の時期比定は弥生時代後期後半においては①の文献を，それ以外の時期については②の文献を参考にした。

①伊藤　実「備後南部の弥生後期土器における曽川１号遺跡ＳＫ１出土土器の位置」『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財報告（２）　曽川１号遺跡（Ａ～Ｄ地区）』財団法人広島県教育事業団　2006年

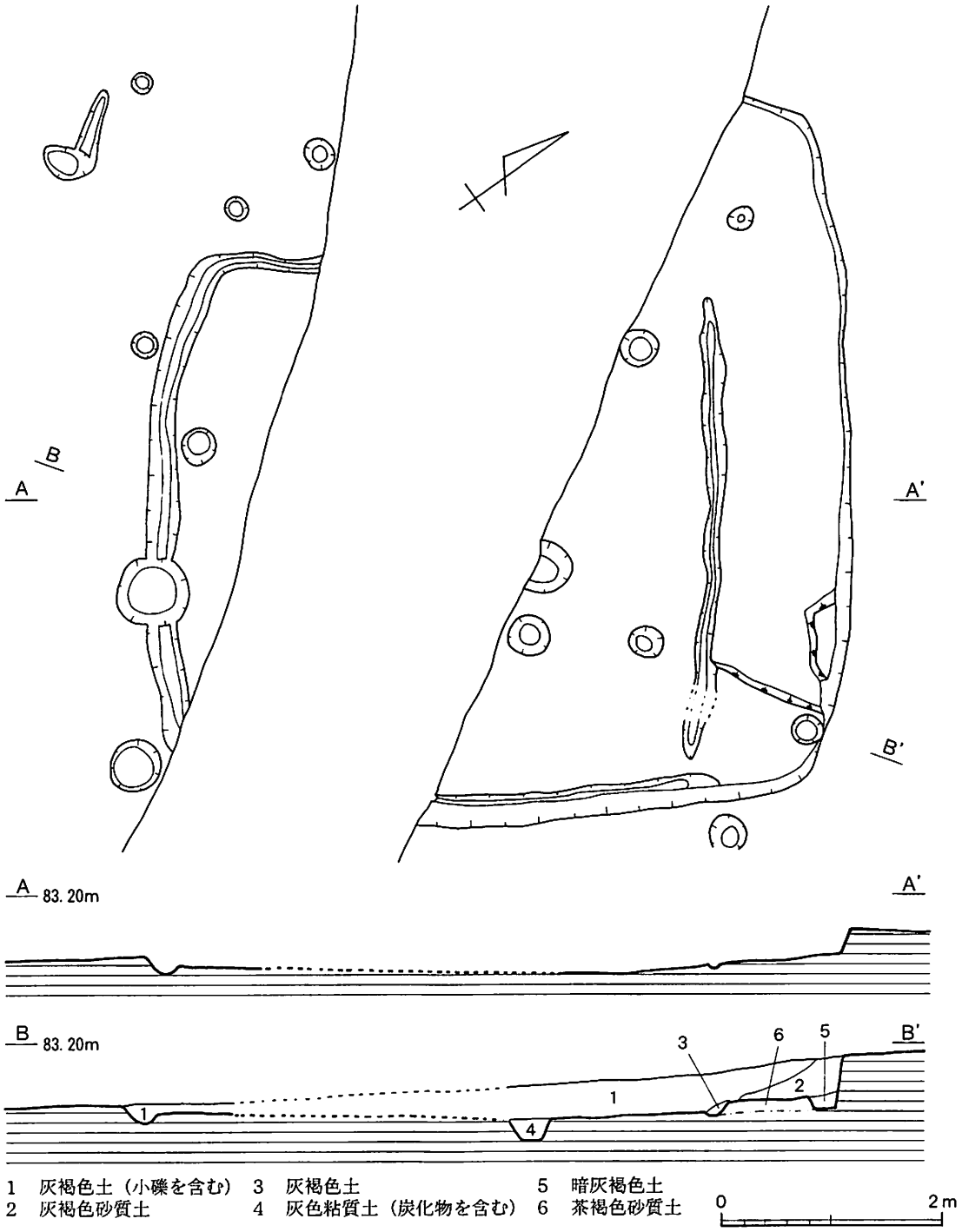
②伊藤　実「備後地域」『弥生土器の様式と編年―山陽・山陰編―』正岡睦夫・松本岩雄編　木耳社　1992年

3　古墳時代から古代の遺構と遺物

1　竪穴住居跡

ＳＢ６（第49図，図版18ａ）

Ｒ４・５区，Ｓ４・５区に位置する平面形が方形の竪穴住居跡である。２つの調査区に分かれており，北東側はＢ調査区，南西側はＭ調査区である。なおＢ調査区とＭ調査区の間（幅2.2～3.2ｍ）は調査がおこなわれていない。下側斜面にあたる南西側の上端は流失しており，遺構の全容は不明確であるが，規模は約6.5ｍ（北西－南東）×6.4ｍ以上（北東－南西）で，北東－南西方



第49図　ＳＢ６実測図（１：60）

向が長くなる可能性が高い。主軸方向はN55°W（N35°E）である。壁高は最も残存状況の良い東角付近で54cmである。壁溝は南東辺で検出した。規模は幅25～30cm，深さ13cmで，底面はほぼ水平である。床面には溝が5.2m×5.2mの方形に途切れながら廻り，南東側は壁溝と重複する。溝の規模は幅10～30cm，深さ10cmで，底面は凹凸がある（高低差14cm）。床面東側ではこの溝と壁との間（幅1.2m）が床面中央部より10cm程度高く，ベッド状遺構の可能性がある。いくつかのピットは検出したが，主柱穴は不明である。

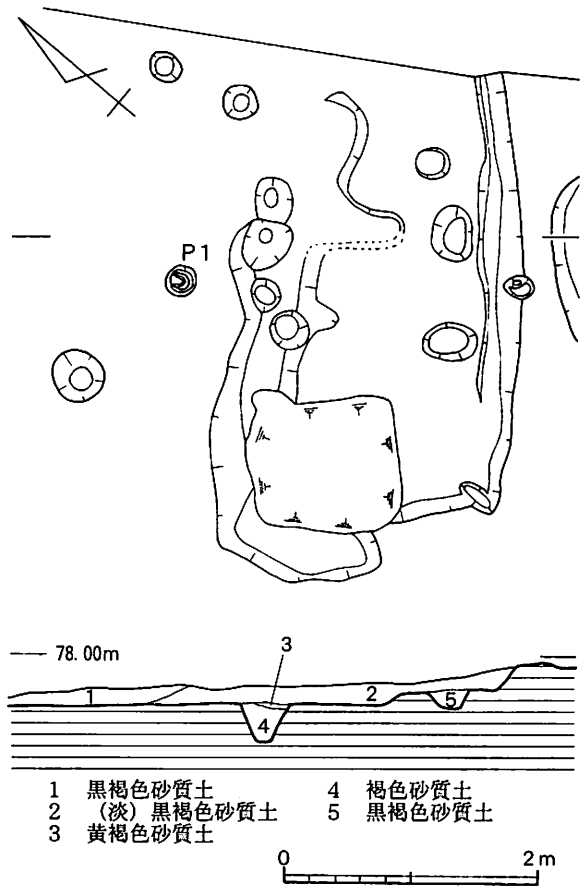
出土遺物は弥生土器や土師器があるが，小片のため図示できない。この住居の時期は平面形態などから6世紀頃と思われる。

ＳＢ18（第51図，図版18ｂ）

Ｏ（－２）区に位置し，土坑状の落ち込みＳＸ21の底部で確認した竪穴住居跡である。おそらく複数の竪穴住居跡が重複していると考えられるが，残りが悪く，ＳＢ18しか認定できなかった。ＳＸ21のなかでは，ＳＢ18が最も新しい時期と考えられる。

平面形態は東西4.8m，南北4.5mの不整方形（床面積21m²）であるが，北東部はいびつな形になっている。壁溝は上端幅30cm，深さ5cmである。主柱穴は4個で，柱間距離はＰ１－Ｐ２が1.65m，Ｐ２－Ｐ３が2.15m，Ｐ３－Ｐ４が1.85m，Ｐ４－Ｐ１が2.4mである。柱穴の規模は，Ｐ１は一辺50cmの方形で，深さ20cm，Ｐ２は長径35cm×短径33cm，深さ49cm，Ｐ３は長径45cm×短径40cm，深さ60cm，Ｐ４は長径42cm×短径38cm，深さ13cmである。住居跡中央で長径65cm×短径55cm，厚さ1cmの焼土面を確認したが，炭化物は認められなかった。また，南部でも85～100cmの範囲で焼土を検出した。性格は不明である。そのほか，北東部で長さ30cm，幅20cm，厚さ10cmの板石や径30cmの範囲で焼土面を検出した。これらは，別の竪穴住居跡の柱穴の根石や焼土である可能性が大きい。またＰ２の下層に土坑ＳＫ158がある。

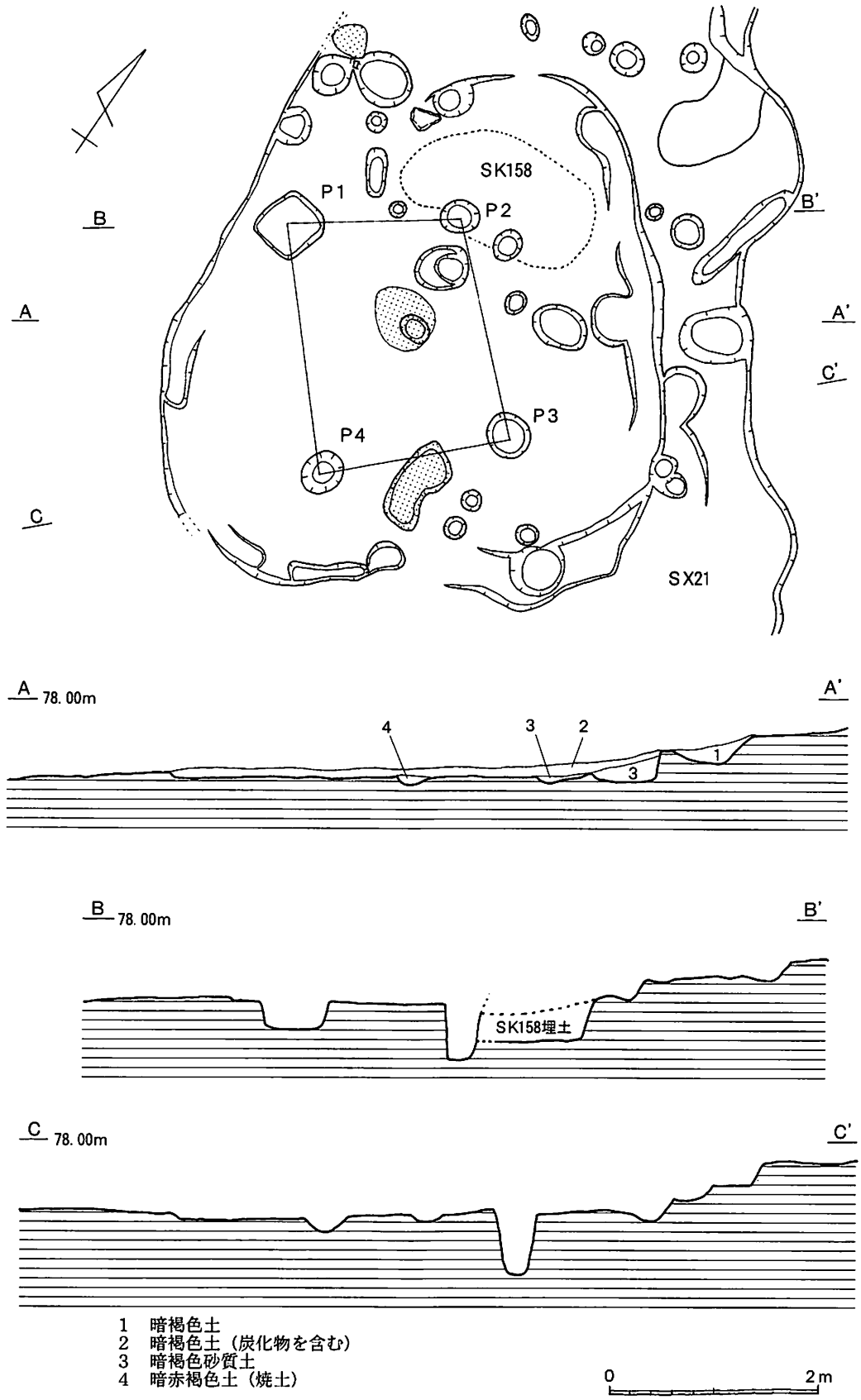
出土遺物としては弥生時代後期の土器が多いが，土師器・甕や須恵器・杯身（**184・185**）などがある。この住居跡の時期は，平面形態が方形であり，土師器・須恵器の年代から6世紀末から7世紀前半頃と思われる。



第50図 ＳＢ22実測図（1：60）

ＳＢ22（第50図，図版18ｃ）

Ｍ０区に位置する平面形が方形の竪穴住居跡で



第51図　ＳＢ18実測図（１：60）アミ目は焼土

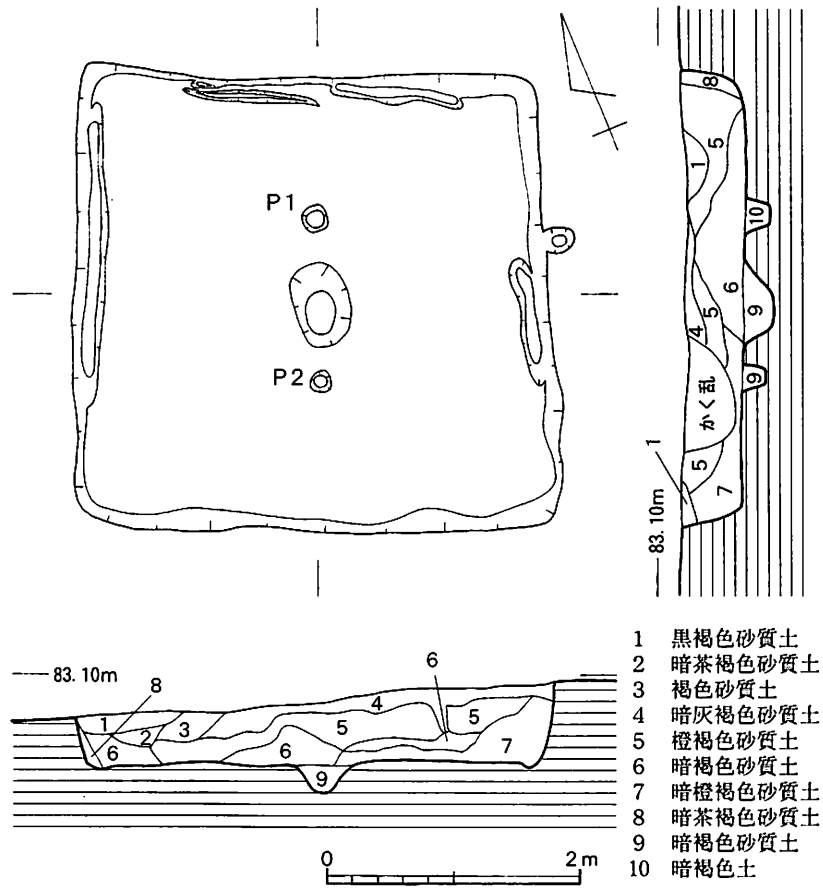
ある。下側斜面にあたる北西側を流失し，北東側は調査区外にある。さらに南西辺北端はかく乱により壊される。現状では3.4m以上（北東－南西）×0.7m以上（北西－南東）で，壁高は南東側で20cmである。主軸方向はN50°E（N40°W）である。壁溝は南東辺で検出した。長さ2.6m以上，幅20～35cm，深さ5cmで，底面はほぼ水平である。南東辺と並行する溝状の遺構が重複するが，新旧関係は不明である。規模は長さ3.8m，幅約0.7m，深さ14cmである。ピットはいくつか検出したが，主柱穴は不明である。

Ｐ１では土師器・小型甕（186）がほぼ完形の状態で出土した。Ｐ１の規模は径24cm，深さ48cmである。その他には土師器や須恵器の破片が少量出土した。この住居跡の時期は，平面形態や出土遺物から６世紀後半頃の住居と考えられる。

ＳＢ24（第52図，図版19ａ）

Ｓ４・５区，Ｔ４・５区に位置する平面形が方形の竪穴住居跡（床面積11.3㎡）である。規模は3.6～3.8m（東西）×3.5m（南北）で，南辺が北辺よりも長い。主軸方向はN22°Eである。壁高は残存状況の良い東辺で63cmである。壁溝は南辺を除く各辺で検出したが，途切れている。西辺の壁溝は長さ2.42m，幅21～25cm，深さ7cmで，底面は北から南に7cm下傾する。北辺の壁溝は長さ1.06m，幅16～23cm，深さ5cmで，底面はほぼ水平である。東辺の壁溝は長さ1.02m，幅21～23cm，深さ4cmで，底面はほぼ水平である。２本柱構造で，Ｐ１は径20cm，深さ22cm，Ｐ２は径15cm，深さ28cmである。柱間距離は1.3mである。床面中央でＰ１・２に挟まれる位置に土坑がある。長径63cm×短径44cmの楕円形で，深さは22cmである。埋土に炭化物は含まれておらず，また熱を受けた痕跡は確認できなかった。床面は西から東へ約5cm下傾する。

出土遺物は土師器の小片がわずかに出土した。同様の形態の住居跡がＤ地区で確認（ＳＢ４）されており，須恵器を伴っていないこと



第52図　ＳＢ24実測図（１：60）

から古墳時代前期頃に比定している。この住居跡の時期は古墳時代前期頃の可能性が考えられる。

2　掘立柱建物跡

ＳＢ25（第53図）

Ｏ（－１）区に位置する南北約7.2m×東西約3.6mの掘立柱建物跡である。建物の主軸はＮ６°Ｗで，ほぼ北－南方向を指し，等高線に対して斜行する。北東角の柱穴はかく乱により壊される。建物の規模は桁行４間（東辺Ｏ－Ｐ３－Ｐ４－Ｐ５－Ｐ６，西辺Ｐ８－Ｐ９－Ｐ10－Ｐ11－Ｐ１）×梁行２間（北辺Ｐ１－Ｐ２－Ｏ，南辺Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８）である。柱間距離は桁行方向がＰ３－Ｐ４で0.7m，Ｐ４－Ｐ５で1.4m，Ｐ５－Ｐ６で2.3m，Ｐ８－Ｐ９で2.5m，Ｐ９－Ｐ10で1.4m，Ｐ10－Ｐ11で1.0m，Ｐ11－Ｐ１で2.3mである。梁行方向はＰ１－Ｐ２で1.8m，Ｐ６－Ｐ７で2.0m，Ｐ７－Ｐ８で1.6mである。Ｐ３－Ｐ４およびＰ10－Ｐ11の柱間距離が短いことから，柱を立て替えた可能性がある。

柱穴の規模はＰ１が長径47cm×短径43cm，深さ57cm，Ｐ２が長径68cm×短径50cm，深さ47cm，Ｐ３が長径推定（40）cm，深さ49cm，Ｐ４が長径57cm×短径50cm，深さ26cm，Ｐ５が長径56cm×短径52cm，深さ24cm，Ｐ６が長径94cm×短径72cm，深さ17cm，Ｐ７が長径62cm×短径52cm，深さ24cm，Ｐ８が長径41cm×短径30cm，深さ33cm，Ｐ９が径58cm，深さ42cm，Ｐ10が長径55cm×短径51cm，深さ35cm，Ｐ11が長径56cm×短径50cm，深さ52cmである。Ｐ３は平面形が不整楕円形の土坑と重複する。規模は長径91cm×短径57cmで，深さは29cmで，底面は北から南に７cm下傾する。新旧関係は不明で，柱の抜き取り痕跡の可能性もある。Ｐ５・９は底面に小ピットがある。Ｐ５内の小ピットは長径16cm×短径14cm，深さ３cmで，Ｐ９内の小ピットは径15cm，深さ６cmである。

出土遺物はＰ９から須恵器・杯蓋（**187**）・杯身（**188**），鉄斧（**238**），Ｐ10から須恵器・底部（**189**）が出土した。出土遺物から古代（８世紀代）と考えられる。

3　土坑

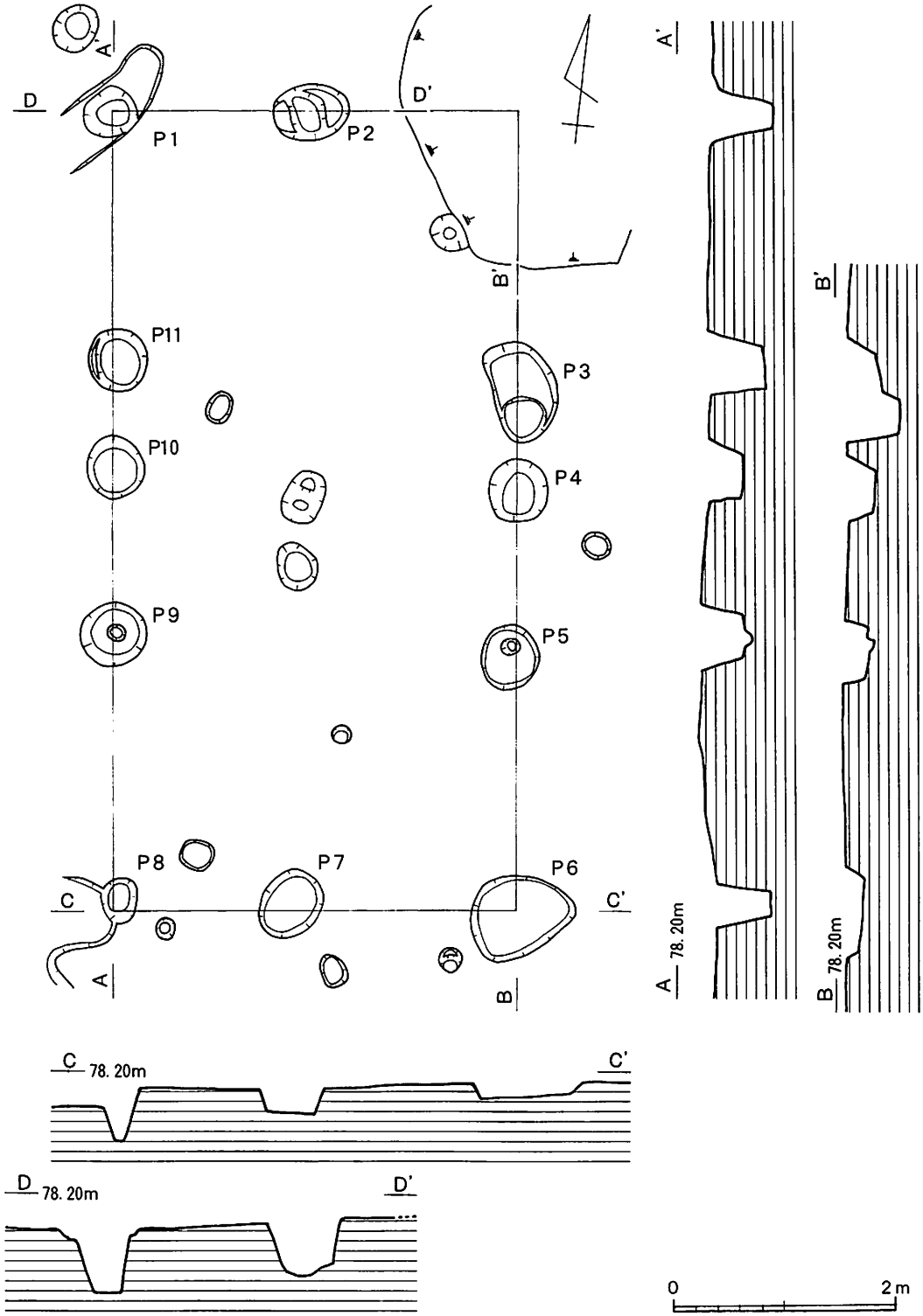
ＳＫ141（第54図）

Ｑ（－１）区に位置する土坑で，等高線に直交する。平面形態は不整形で，上面で南北1.6m，東西3.4m，底面では南北0.9m，東西2.05m，深さは25～50cmで，北東部は２段になって落ち込む。底面は平坦である。埋土は２層で，ともに砂を含んだ暗黒褐色土で，土器が少量出土した。

出土遺物としては，弥生土器，須恵器，土師器などがあり，いずれも小片である。須恵器は古墳時代後期のものであることから，遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。

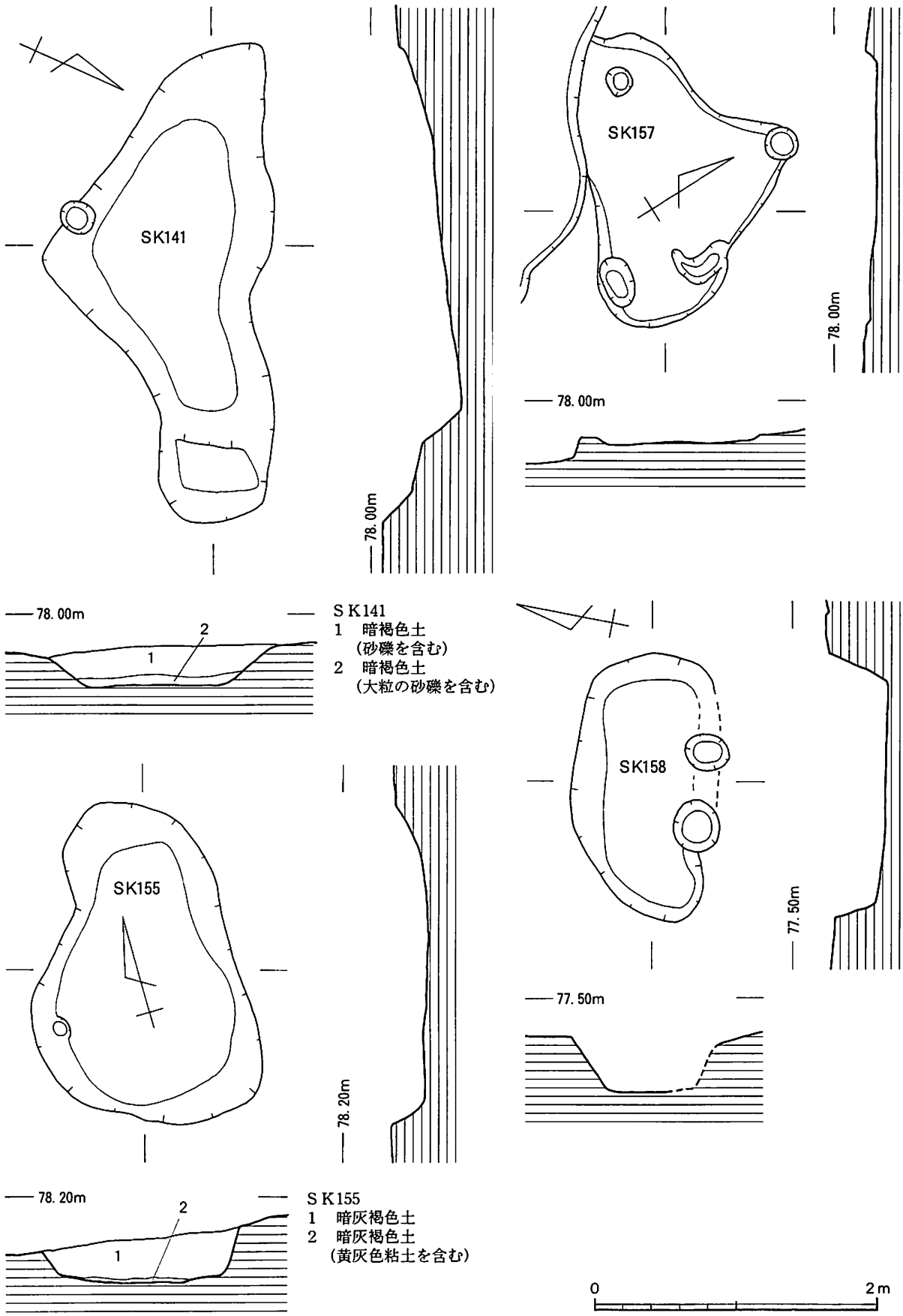
ＳＫ155（第54図）

Ｏ（－１）区に位置する土坑である。平面形態は不整形で，上面で東西1.0～1.7m，南北約2.32m。底面では東西0.55～1.25m，南北1.75m。深さは25～30cmで，坑底面は平坦である。埋土は２層で上層は暗灰褐色土，下層は黄灰色粘土が混じった暗灰褐色土。土器などが少量出土した。



第53図　ＳＢ25実測図（１：60）

出土遺物としては，弥生土器，土師器・把手（191），須恵器・壺（192）・杯身（193），鉄滓などがある。遺構の時期は遺物の特徴から古墳時代後期後半（６世紀末から７世紀前半）と考えられる。



第54図　SK141・155・157・158実測図（1：40）

ＳＫ157（第54図）

Ｏ（－１）区に位置する土坑で，ＳＫ156のすぐ西にある。平面形態は不整形で，上面で東西2.0m，南北1.5m。底面では東西1.9m，南北1.4m。深さは８cmで，底面は平坦である。埋土は暗褐色土で，土器などが少量出土した。

出土遺物としては，須恵器・蓋（**196**）などがある。遺構の時期は遺物の特徴から古墳時代後期と考えられる。

ＳＫ158（第54図）

Ｏ（－２）区に位置する土坑で，ＳＢ18の下層にある。平面形態は長方形で，上面で東西1.9m，南北1.0m。底面では東西1.6m，南北0.6m。深さは30cmで，底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色土である。時期は埋土などの状況から，古墳時代後期と思われる。

ＳＫ145（第55図）

Ｐ・Ｑ（－１）区に位置する土坑である。平面形態は不整形で，上面で東西1.15m，南北1.32m，深さは７～15cmで，底面は平坦である。埋土は暗褐色土で，土器が少量出土した。

出土遺物としては，土師器，須恵器・瓶の底部（**190**）などがある。遺構の時期は古代（８世紀）と考えられる。

ＳＫ156（第55図）

Ｏ(－１)区に位置する土坑で，ＳＫ155のすぐ北にある。平面形態は楕円形で，上面で東西0.75m，南北約1.05m。底面では東西0.4m，南北0.7m。深さは30cmで，擂鉢状に落ち込む。埋土はやや赤みのある暗褐色土で，土器などが少量出土した。

出土遺物としては，土師器・甕（**194**），須恵器・杯蓋（**195**）などがある。遺構の時期は遺物の特徴から古代（８世紀代）と考えられる。

ＳＫ224（第55図，図版19ｂ）

Ｊ（－２）区に位置する土坑である。北側がＳＢ20と重複し，これを壊す。またＳＫ225・226に南西半を壊される。新旧関係はＳＢ20→ＳＫ224→ＳＫ226→ＳＫ225である。平面形は楕円形で，主軸方向はN41°Ｗである。規模は長径0.74m×短径0.43m，深さ20cmである。底面の規模は長径0.52m×短径0.33mで，東から西に向かって６cm下傾する。

遺物は出土していない。弥生時代後期後葉のＳＢ20を壊し，古墳時代後期のＳＫ226に壊されることから，遺構の時期は古墳時代におさまると思われる。

ＳＫ225（第55図，図版19ｂ）

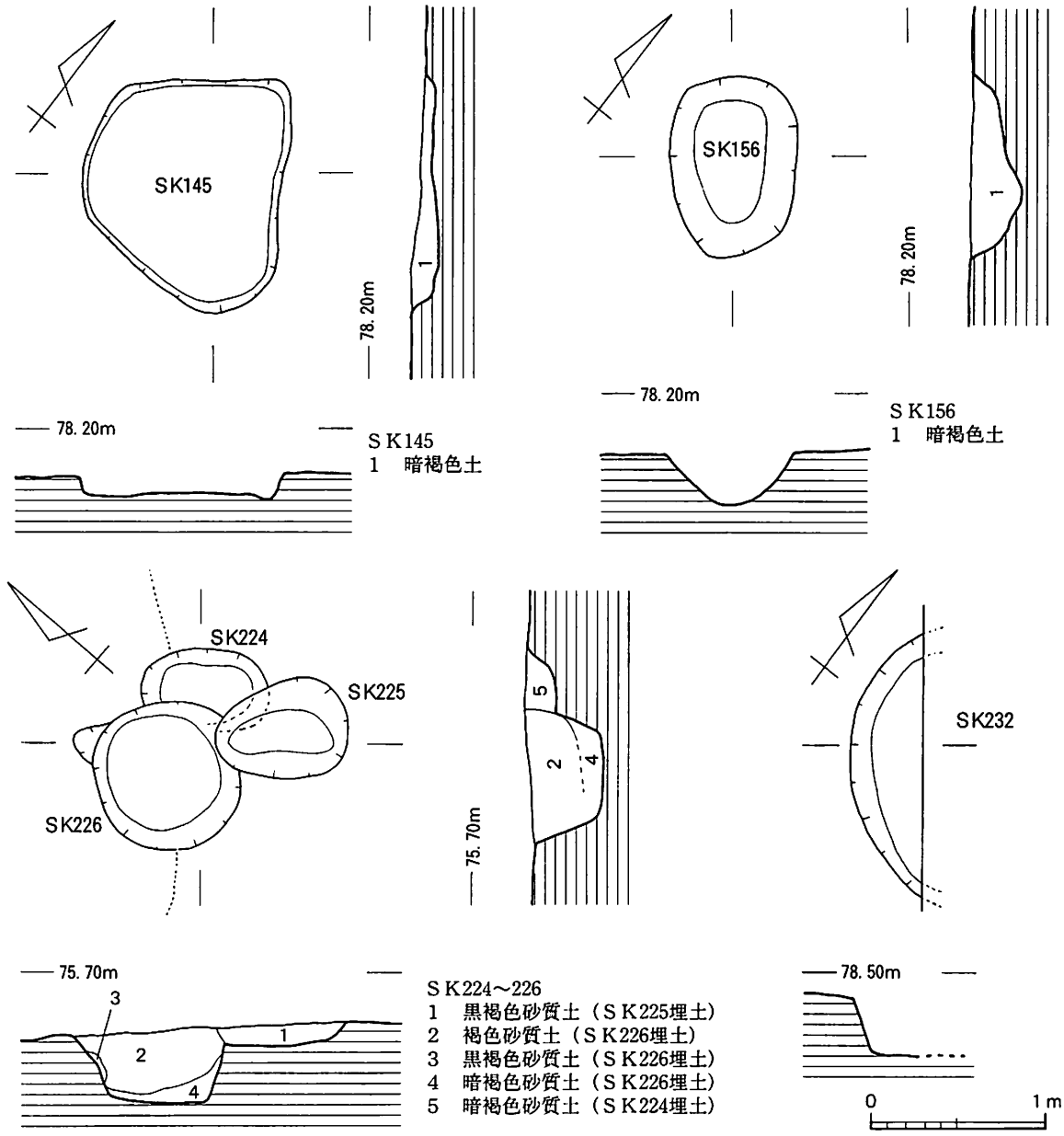
Ｊ（－２）区に位置する平面形が不整楕円形の土坑である。北側でＳＫ224・226と重複し，こ

れらを壊す。主軸方向は不明確であるが，N50°W程度で，規模は長径0.75m×短径0.56m，深さ13cmである。底面の規模は長径0.59m×短径0.25mで，南から北に向かって3cm下傾する。

土師器の破片が少量出土した。遺構の時期は不明である。弥生時代後期後葉のＳＢ20を壊し，古墳時代後期のＳＫ226を壊していることから，遺構の時期はＳＫ224と同様に古墳時代におさまると思われる。

ＳＫ226（第55図，図版19ｂ）

Ｊ（－２）区に位置する平面形が円形の土坑である。北側でＳＢ20を，東側でＳＫ224を壊す。また南東側はＳＫ225により壊される。新旧関係はＳＢ20→ＳＫ224→ＳＫ226→ＳＫ225である。



第55図　ＳＫ145・156・224～226・232実測図（１：40）

規模は長径0.85m×短径0.83m，深さ41cmである。底面の規模は長径0.66m×短径0.63mで，ほぼ水平である。

土師器，須恵器の破片が出土した。古墳時代後期の遺構と思われる。

ＳＫ232（第55図，図版19ｃ）

Ｎ０区に位置する土坑である。平面形は円形あるいは楕円形と考えられるが，遺構の大半が調査区外にあり，不明確である。遺構の南西側を調査した。現状で長さ1.45m以上，幅0.4m以上，深さ37cmである。埋土は上～中層が黒褐色砂質土で遺物や炭化物を含み，下層は暗褐色砂質土で遺物や炭化物を含まない。底面は南から北へ10cm下傾する。

出土遺物は土師器の破片や須恵器・杯身（197）・体部片がある。この遺構の時期は出土遺物の特徴から古墳時代後期後半（６世紀末から７世紀前半）と考えられる。

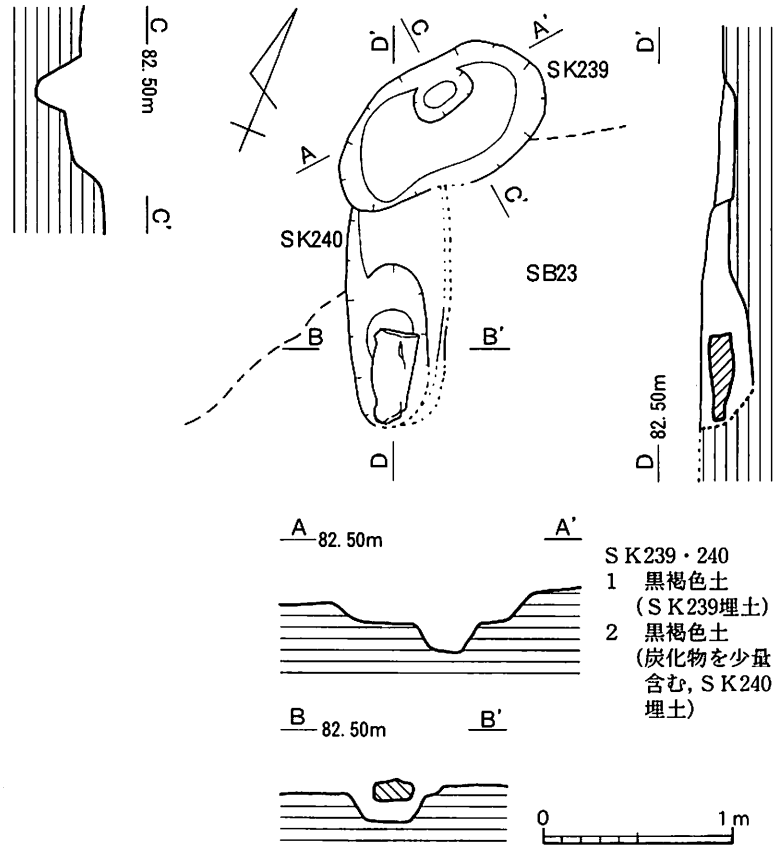
ＳＫ239（第56図）

Ｓ４区に位置する平面形が不整楕円形の土坑である。遺構の南東側でＳＢ23，ＳＫ240と重複し，これらを壊す。新旧関係はＳＢ23→ＳＫ240→ＳＫ239である。規模は長径1.2m×短径0.68m，深さ18cmで，主軸方向はN38°Ｅである。底面の規模は長径1.93m×短径0.9mで，南東から北西に向かって７cm下傾する。底面北側に長径0.34m×短径推定（0.18）m，深さ16cmの落ち込みがある。埋土は黒褐色砂質土である。

出土遺物は土師器，須恵器の破片が少量出土した。古墳時代後期頃の遺構と考えられる。

ＳＫ240（第56図）

Ｓ４区に位置する土坑である。土坑の北側をＳＫ239により壊される。また南東側はＳＢ23と重複し，これを壊す。新旧関係はＳＢ23→ＳＫ240→ＳＫ239である。平面形は楕円形と考えられ，規模は現状で長径1.2m以上×短径0.5m以上，深さ８cmで，主軸方向はN20°Ｗである。底面はほぼ平坦である。底面北端に長径推定(0.85)m×短径推定（0.4）m，深さ10cm



第56図　ＳＫ239・240実測図（１：40）

の落ち込みがあり，上層で長さ48cm，幅23cm，厚さ11cmの自然石を検出した。埋土は黒褐色砂質土で，炭化物と焼土を含む。

土師器の破片や須恵器・杯（**198**），鉄刀子（**239**）などが出土した。遺構の時期は古墳時代後期と思われる。

4　溝状遺構

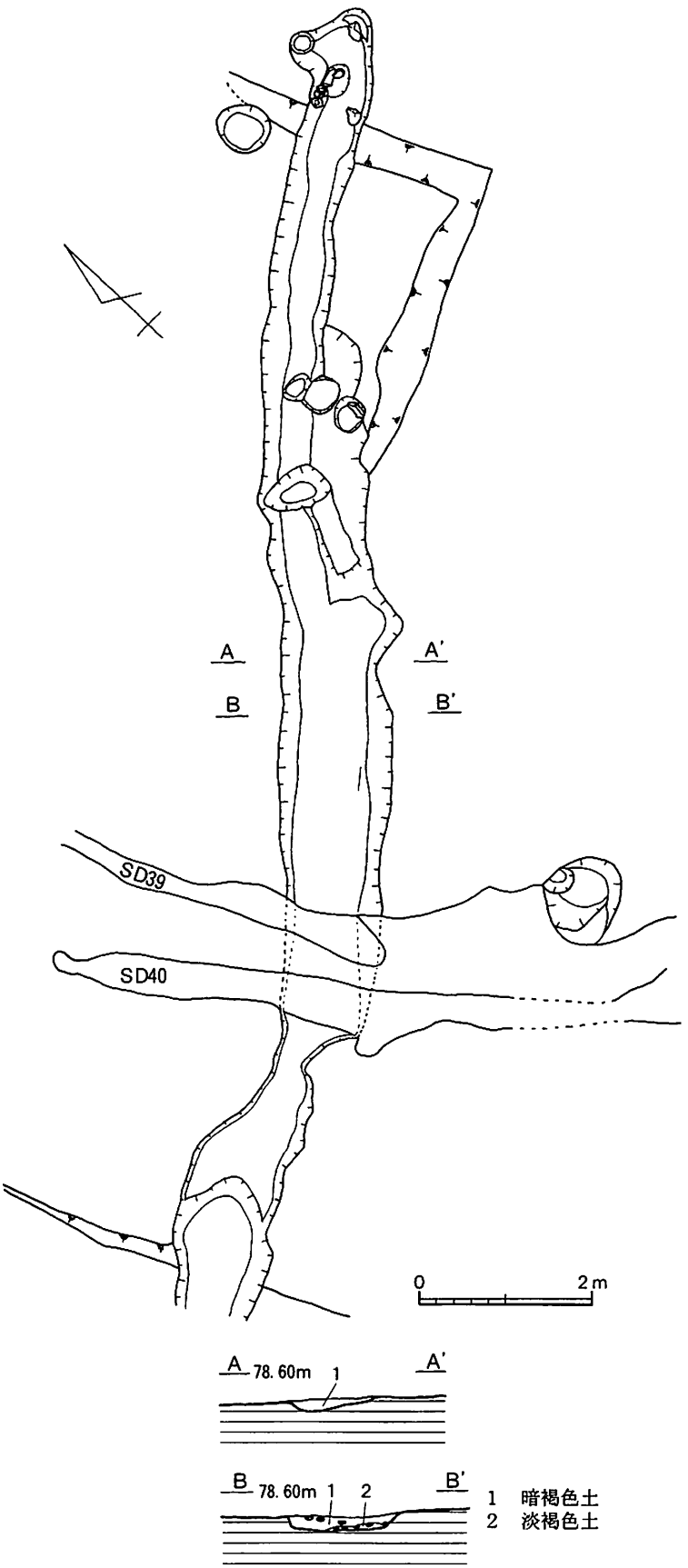
ＳＤ19（第57図，図版20ａ）

ＵＯ・１区に位置している。上端幅0.35～0.55m，下端幅0.2～0.4m，深さ10～20cmの溝で，今回のＬ地区では長さ6.9m分を検出した。北東から南西方向に等高線とほぼ直角に直線的に走る。溝埋土は暗褐色土で，基盤層が黄色粘土層・灰色礫層であるため，礫が多量に混じっている。土器が少量出土した。なお，周辺の発掘調査の成果によれば，東西方向に約33m分確認することができる。

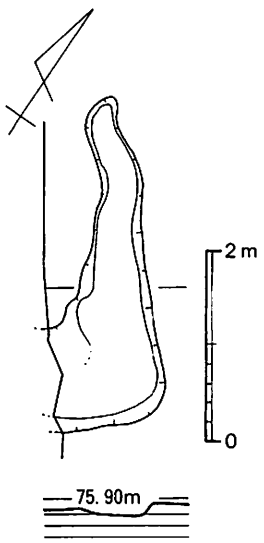
出土遺物としては，土師器の破片，須恵器・杯（**199～204**）・甕（**205**），鉄滓などがある。遺構の時期は出土遺物から８世紀頃と考えられる。

ＳＤ42（第58図）

Ｌ（－３）区に位置する溝状遺構である。Ｌ・Ｍ地区との間に段差のつくところがあり，そこにＳＤ42は位置している。遺構検出面がＭ地区に比べ，Ｌ地区が低くなるため，Ｌ地区部分にあたる遺構西側が失われる。南西方向から北東方向に延び，ほぼ直角に屈曲して北西方向に伸びる。現状では南西



第57図　ＳＤ19実測図（１：80）



第58図　ＳＤ42実測図（１：80）

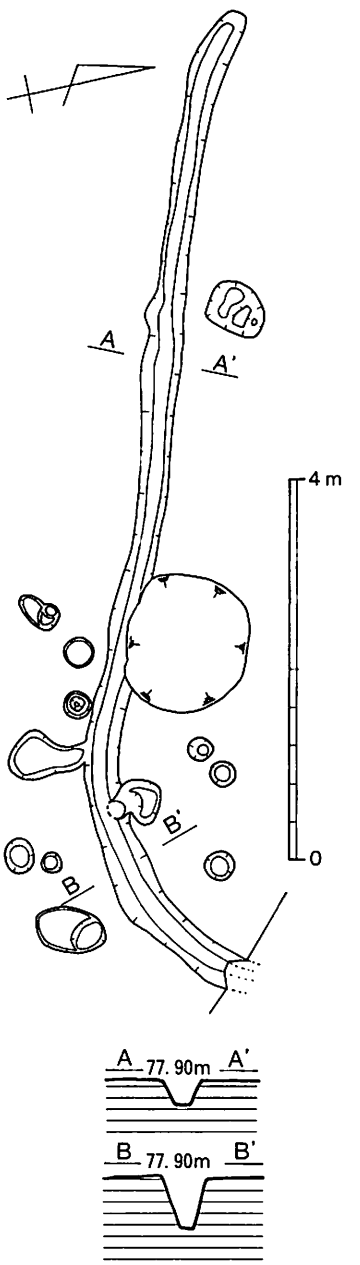
ー北東部分の長さが短いため数値で示すことはできない。南東ー北西部分は長さ3.4mで，軸方向はN35°Wである。幅は一定せず最大で1.1m，深さ23cmである。底面は南東から北西に10cm下傾する。埋土は暗灰色砂質土である。

出土遺物は土師器の破片や須恵器・杯（206）などがある。遺構の時期は出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

ＳＤ43（第59図，図版20ｂ）

Ｍ（－１）・０区，Ｎ０区に位置する溝状遺構である。遺構の東端は調査区外にあり，遺構の全容は不明である。北東から南西に向かって延びるが，すぐに北西へ湾曲し，そのまま直線的に北西へ延びる。現状での規模は長さ5.14m，幅0.25～0.47m，深さ54cmである。底面は東から西へ43cm下傾する。埋土は黒褐色砂質土である。

出土遺物には土師器・甕（207），須恵器・杯（208～210）などがある。このうち土師器・甕（207）は中層から，須恵器・杯（209）は上層からの出土である。遺構の時期は，出土遺物の特徴から古墳時代後期後半（６世紀末から７世紀前半）と考えられる。



第59図　ＳＤ43実測図（１：80）

5　その他

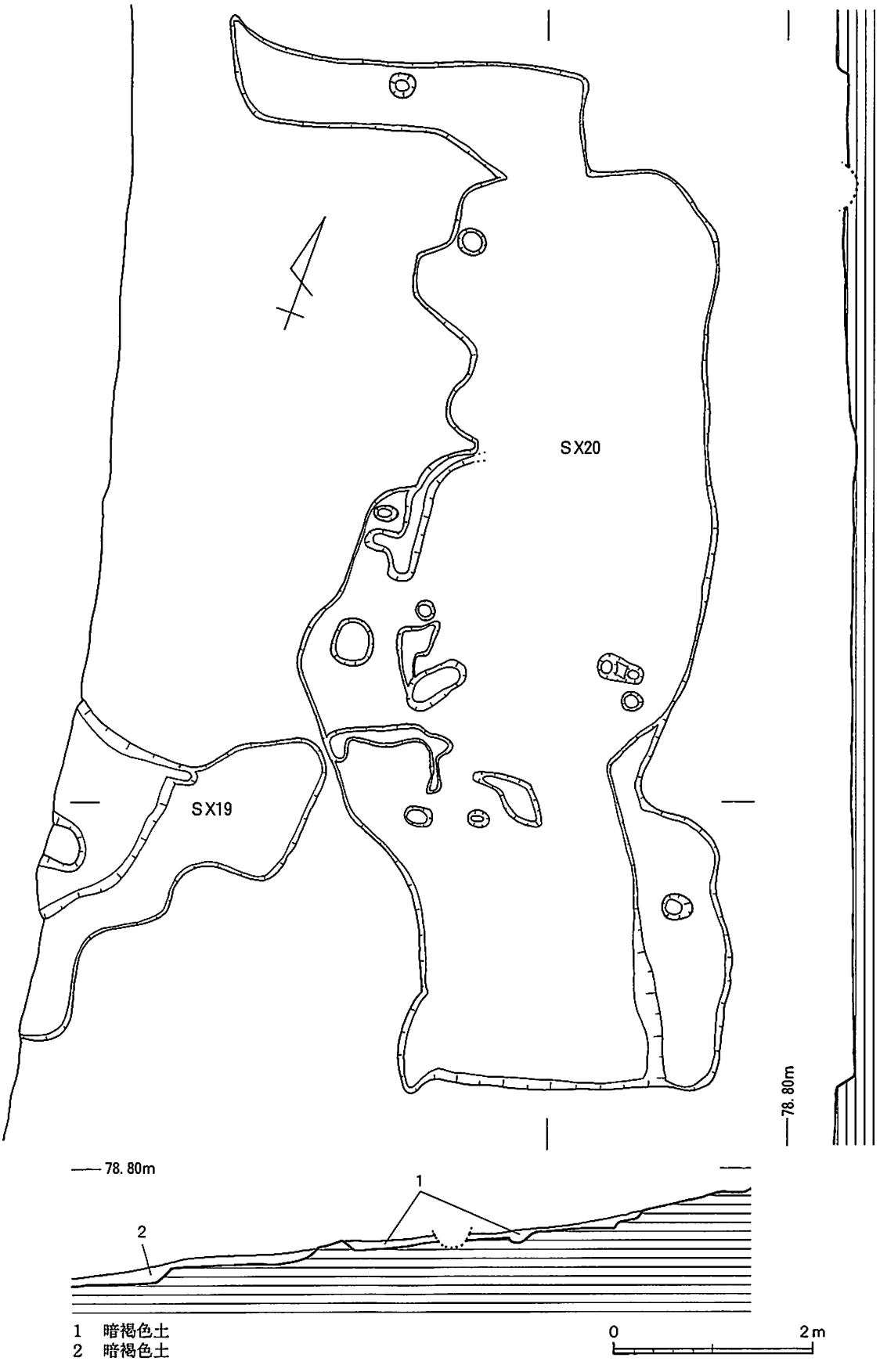
ＳＸ19（第60図）

Ｔ・Ｕ０区に位置する落ち込みで，東側にはＳＸ20が隣接する。平面形態は不整形で，東西2.7m，南北3.5m，深さ10～15cmである。遺構はさらに西方向に広がることが予想されたが，西に隣接するＫ地区において確認できなかった。埋土は砂礫混じりの暗褐色土で，土器が少量出土した。

出土遺物としては，弥生土器，須恵器・杯（211），土師質土器などがある。遺構の時期は，埋土が暗褐色土であり，須恵器の年代である平安時代後半（10世紀）と思われる。

ＳＸ20（第60図）

Ｔ０・１区に位置する落ち込みで，西側にはＳＸ19が隣接す



第60図　ＳＸ19・20実測図（１：60）

る。平面形態は不整形で，西側は斜面で流出している。現状は，東西３～４ｍ，南北12m，深さ10cmである。坑底面は平坦で，斜面に平行な南北方向は同じ高さが続く。ピットなどは存在するが，建物に復原できる柱穴はない。埋土は砂礫混じりの暗褐色土で，土器が少量出土した。

出土遺物としては，弥生土器，須恵器，土師質土器などがあり，いずれも小片である。遺構の時期は，埋土が暗褐色土であり，堆積状況から古墳時代後期と考えられる。

ＳＸ21（第62図）

Ｏ（－２）区に位置する落ち込みで，ＳＢ18を含む。平面形態は不整形で，西側は斜面で流出している。現状の規模は，東西12.6m，南北2.4～4.8m，深さ５～15cmである。底面は平坦で，斜面方向である北西側が低くなる。底面には柱穴，ピットなどが存在する。埋土は砂礫混じりの暗褐色土で，土器が少量出土した。ＳＢ18と同様な竪穴住居跡が重複している可能性が高いが，削平が著しく，認定できなかった。

出土遺物としては，弥生土器，土師器・甕（**212**）・把手（**213**），須恵器・杯（**214～218**），鉄鏃（**240**），鉄滓などがある。遺構の時期は古墳時代後期後半（６世紀末～７世紀前半）と考えられる。

ＳＸ30（第61図）

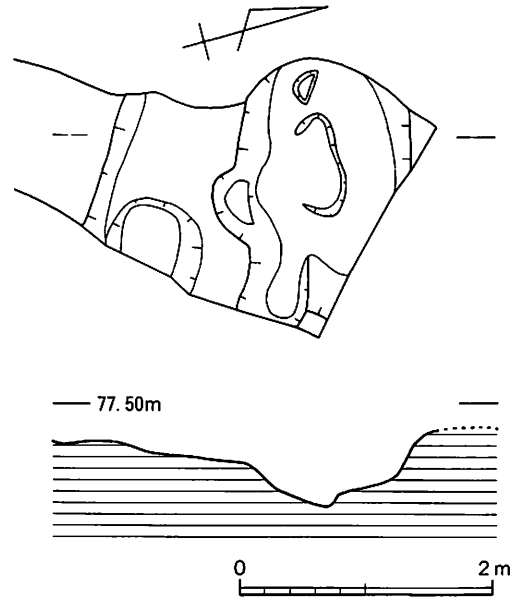
Ｋ・Ｌ０区に位置する性格不明の遺構である。遺構の大半は調査区外にあり，遺構の全容は不明である。わずかに遺構の西側一部を確認した。現状での規模は長さ2.1m以上，幅2.4m以上，深さ51cmである。底面の凹凸が著しく，自然流路の可能性がある。

出土遺物は土師器・甕（**219**），須恵器・杯（**220**）などがある。出土遺物の特徴から遺構の時期は古墳時代後期後半（６世紀末から７世紀前半）と考えられる。

ＳＸ34（第63図，図版20ｃ）

Ｔ４区に位置する性格不明の遺構である。平面形は不整形で，規模は東西5.4m×南北4.7m，深さ77cmである。底面の凹凸は著しく，土層観察からも複数の落ち込みが重複している可能性がある。またこれらの落ち込みも不整形であったと思われる。

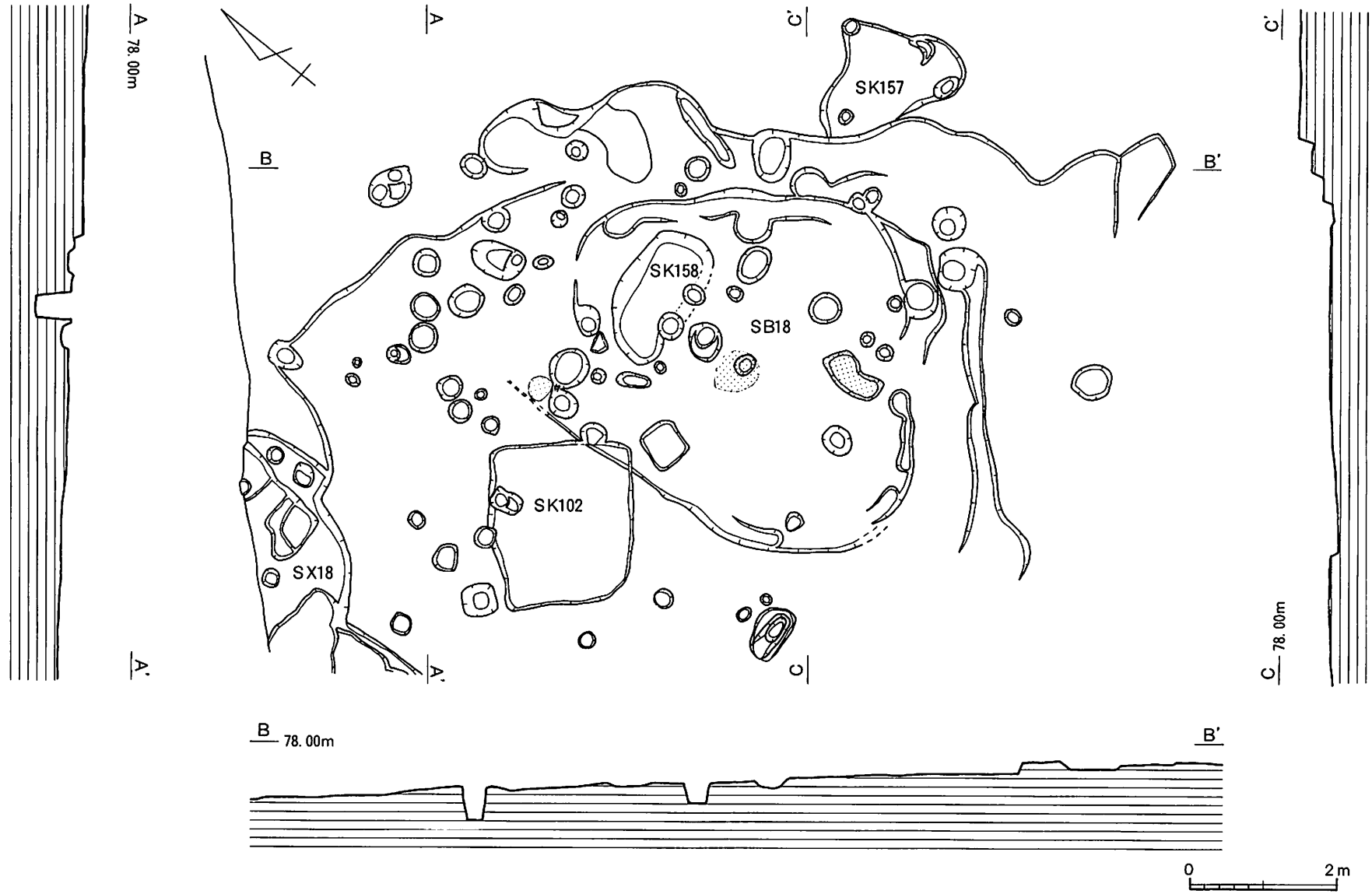
出土遺物は土師器・甕（**221**），須恵器・杯（**222**）などがある。遺物の特徴から遺構の時期は古墳時代後期後半（６世紀末から７世紀前半）と考えられる。



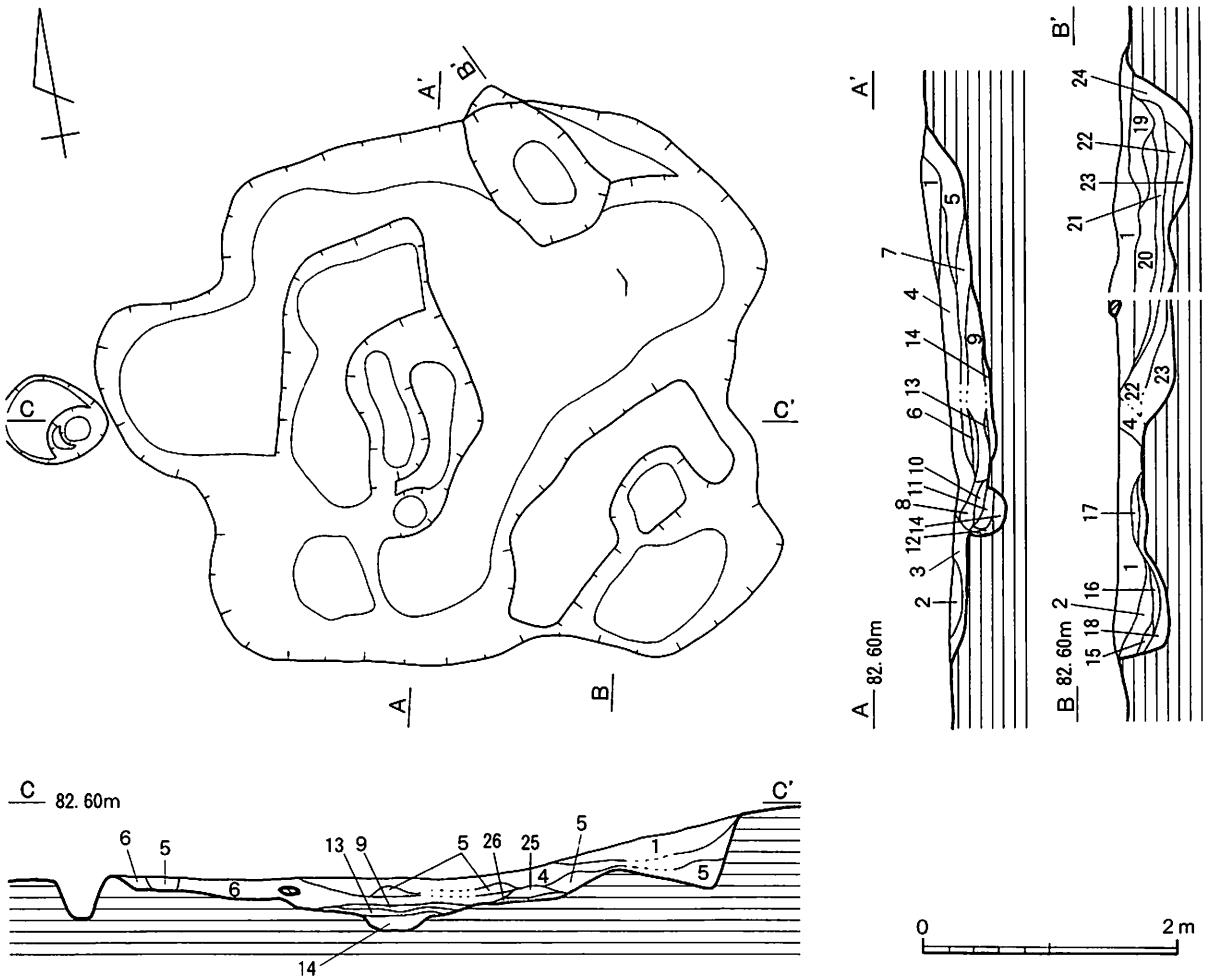
第61図　ＳＸ30実測図（１：60）

Ｌ－Ｐ１（第64図）

Ｉ（－６）区に位置するピットである。Ｌ－Ｐ１



第62図　ＳＸ21実測図（１：80）アミ目は焼土



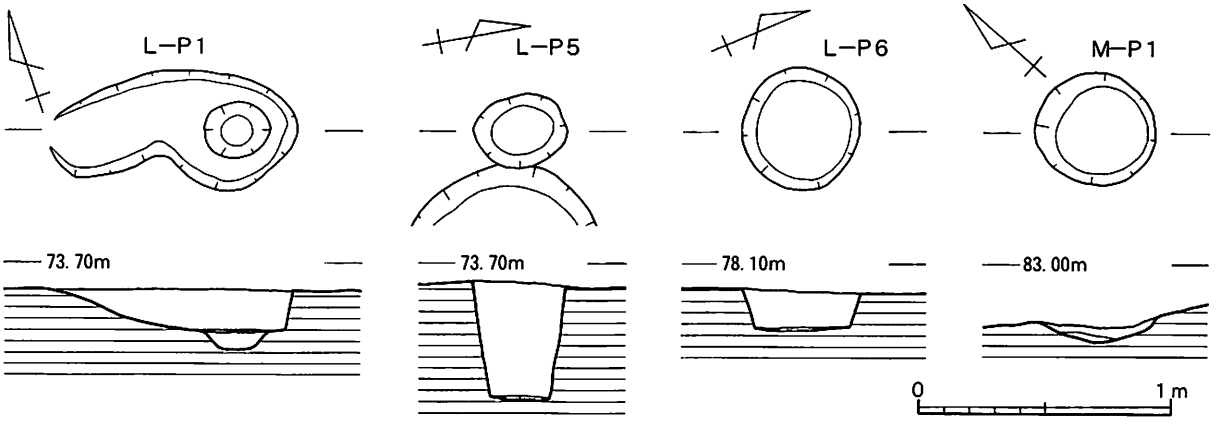
1	暗褐色砂質土	8	灰褐色砂質土	15	灰褐色砂質土	22	暗灰褐色砂質土
2	暗灰褐色砂質土	9	暗褐色砂質土	16	褐色砂質土	23	明黄褐色砂質土
3	黄褐色砂質土	10	明橙褐色砂質土	17	褐色砂質土	24	暗茶褐色砂質土
4	暗黄褐色砂質土	11	暗灰褐色砂質土	18	暗灰褐色砂質土	25	黄褐色粘質土
5	暗褐色砂質土	12	黒褐色粘質土	19	暗褐色砂質土	26	暗黄褐色砂質土
6	黒褐色砂質土	13	橙褐色砂質土	20	暗黄褐色砂質土		
7	明黄褐色砂質土	14	暗灰褐色砂質土	21	灰褐色砂質土		

第63図　ＳＸ34実測図（１：60）

は東西に長い不整形の落ち込みと重複する。落ち込みの規模は長軸0.98m，短軸0.46mである。ピットの位置する東側が深く，西側は上端と同じ高さになる。深さは最大で16cmである。ピットは落ち込みの底面東側に位置する。ピットの平面形は楕円形で，規模は26cm×22cm，深さは落ち込み底面から８ cmである。落ち込みとの新旧関係は不明である。８世紀前半頃の須恵器・胴部（**223**）・杯蓋（**224**）が出土したが，落ち込みに伴う可能性もある。

Ｌ－Ｐ５（第64図）

Ｏ（－２）区に位置するピットである。ＳＸ21と接するが，新旧関係は不明である。平面形は楕円形で，規模は長径38cm，短径29cmである。また，底面は長径26cm，短径19cmの楕円形で，深



第64図　L－P１・５・6，M－P１実測図（１：30）

さは47cmである。10世紀前半頃の須恵器・杯（**225**）の底部が出土した。

L－P６（第64図）

P（－１）区に位置するピットである。平面形は径47cmの円形で，深さは17cmである。底面は径38cmの円形である。６世紀後半～７世紀初頭頃の土師器・甕（**226**）が出土した。

M－P１（第64図）

S５区に位置するピットである。平面形は円形に近い楕円形で長径48cm，短径44cmである。深さは10cmで，底面の規模は長径36cm，短径34cmである。底面はやや凹凸があり，高低差は６cmである。６世紀後半～７世紀初頭頃の須恵器・杯身（**227**）が出土した。

（２）遺物

１　土器類（土師器・須恵器）

SB18（第65図，図版35）

６世紀末から７世紀前半頃の須恵器・杯身が出土した。

須恵器（184・185）

杯身（184・185）184・185は立ち上がり部が短い杯身の破片（口縁部～体部）である。調整は回転ナデである。**184**の立ち上がり部は外湾気味に立ち上がり，受け部は短く横やや上方にのびる。**185**の立ち上がり部は直線的に立ち上がり，受け部は内湾気味に短く外上方にのびる。

SB22（第65図，図版35）

６世紀後半～７世紀初頭の土師器・甕が出土した。

土師器（186）

甕（186）ほぼ完形の小型の甕で，最大径が胴部中位より下方にある下膨れ気味の胴部をもち，底部は丸底である。直立する短い口縁がつくが，口縁部と胴部の境は不明瞭である。外面は縦位の

ハケ目，内面はヘラケズリ後ナデである。口縁部の内外面は横ナデと推定される。口径10.3cm，器高12.6cm，頸部径10.4cm，胴部最大径12.8cmである。

ＳＢ25（第65図，図版35）

８世紀後半～９世紀前半頃の須恵器・杯蓋・杯身が出土した。

須恵器（187～189）

杯蓋（187） 杯蓋の扁平なつまみ部である。

杯身（188・189） **188・189**は底部の破片で，低く小さな高台を貼り付ける。**188**はヘラ切り後に高台を雑に貼り付ける。外面は，体部が回転ナデ，底部が未調整である。内面は，底部周縁が回転ナデ，中央が一定方向のナデである。**189**の高台端面は強い横ナデにより中央が窪み，わずかに内傾する。内外面ともに回転ナデである。

ＳＫ145（第65図，図版35）

古墳時代後期以降の須恵器・底部が出土した。

須恵器（190）

底部（190） 高台のつく底部の破片である。高台は外下方にのび，端部は丸みのある外傾する面をもつ。調整は回転ナデである。

ＳＫ155（第65図，図版35）

６世紀後半から７世紀初頭頃の土師器・把手，須恵器・壺・杯身の破片が出土した。

土師器（191）

把手（191） 甑あるいは把手付甕の把手と考えられる。横断面が不整楕円形で牛角状を呈する。

須恵器（192・193）

壺（192） 壺の胴部上半の破片と推定される。凹線文を３条以上めぐらせ，凹線文の間に刺突による斜格子文を２条施す。刺突は板状工具の小口を利用する。色調は，外面は暗灰色で，内面は淡褐色を呈する。

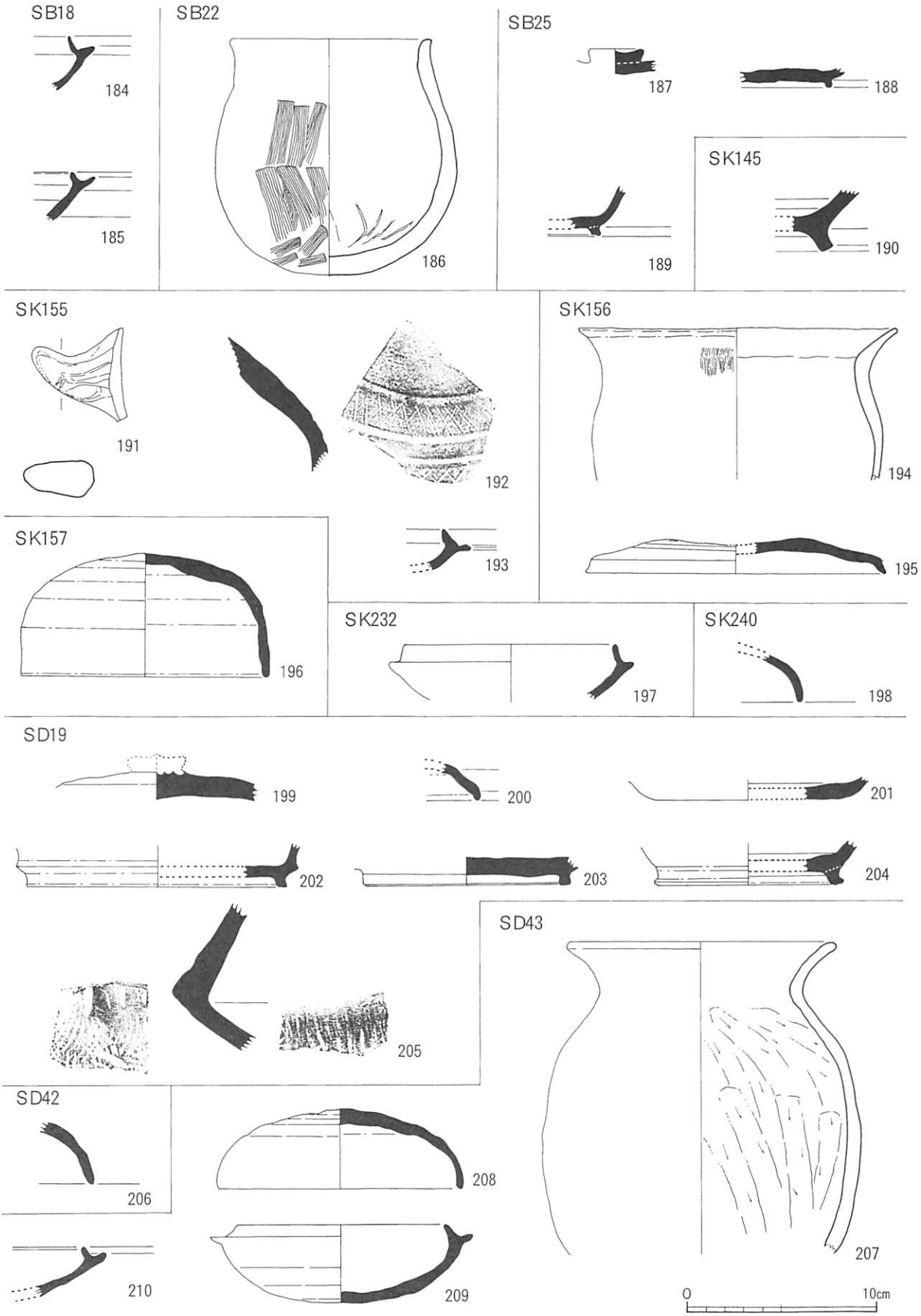
杯身（193） 杯身の口縁部の破片である。受け部は横方向にのび，立ち上がり部は内上方に外反気味に短くのびる。立ち上がり部と受け部の境に小さな凹線状の窪みがめぐる。

ＳＫ156（第65図，図版35）

８世紀前半頃の土師器・甕と須恵器・杯蓋が出土した。

土師器（194）

甕（194） 口縁部～胴部上半の甕の破片である。最大径は胴部上半にあるが，頸部径との差は小さく寸胴を呈すると考えられる。口縁部は外反気味に外上方へのび，端部を尖り気味に丸くおさめる。全体に摩滅が著しく調整不明であるが，外面胴部上端にハケ目が認められる。また内面胴部



第65図　ＳＢ18・22・25，ＳＫ145・155～157・232・240，ＳＤ19・42・43出土土器実測図（１：３）

はヘラケズリである。復元口径16.8cm，復元頸部径14.2cm，復元胴部最大径15.5cmである。

須恵器（195）

杯蓋（195） 器高が低く，扁平な杯蓋の破片である。蓋の中央を失っており，蓋の有無は不明である。口縁部の内側のかえりはなく，端部を外下方に折り曲げ，強い回転ナデを施す。端部はやや尖り気味に丸くおさめる。天井部のヘラケズリが，口縁部にも一部かかっており，天井部と口縁部の境が不明瞭である。外面口縁部および内面は回転ナデを施す。口径15.9cmである。

ＳＫ157（第65図，図版35）

６世紀後半から７世紀前半頃と思われる須恵器・蓋が出土した。

須恵器（196）

蓋（196） 口縁部の大半を欠く蓋である。丸みのある天井部と，直立する口縁部をもつ。天井部はヘラケズリ後未調整であるが，口縁部の回転ナデは天井部の周縁にまで達しており，口縁部と天井部の境を不明瞭なものしている。口縁部内面は回転ナデ，天井部内面は不定方向のナデである。口縁端部は丸くおさめる。復元口径13.0cm，器高6.5cmである。

ＳＫ232（第65図，図版35）

６世紀末から７世紀初頭頃の須恵器・杯身が出土した。

須恵器（197）

杯身（197） 立ち上がり部～体部の破片である。立ち上がり部が内上方に向かって外反気味に立ち上がり，受け部が横方向に短くのびる。立ち上がり部と受け部の境に小さな凹線状の窪みがめぐる。焼成はやや不良で，白色を呈する。内外面とも回転ナデである。復元口径は11.2cmである。

ＳＫ240（第65図）

６世紀後半から７世紀前半頃の須恵器・杯蓋が出土した。

須恵器（198）

杯蓋（198） 杯蓋の口縁部の破片である。口縁部は内湾し，端部を丸くおさめる。調整は内外面とも回転ナデである。

ＳＤ19（第65図，図版35）

８世紀後半頃の須恵器・杯蓋・杯身・甕が出土した。

須恵器（199～205）

杯蓋（199・200） 199はつまみを欠損した天井部の破片，200は口縁部の破片である。199の外面はヘラケズリ，内面の調整は不明である。200は端部を下方に短く折り曲げる。内外面とも横ナデを施す。

杯身（201～204） いずれも底部の破片である。201は高台がつかず，202～204は高台がつく。201

は底部から緩やかに立ち上がる。小片であるため調整は不明確であるが，体部外面は回転ナデ，底部外面は不明，底部内面は周縁が横ナデ，中央付近は不整方向のナデと考えられる。復元底径10.0cm。202～204は高台が低く小さい。202・203の高台は断面がほぼ方形で，端面は横ナデにより中央が窪む。202の端面はわずかに内傾する。202の底部と体部外面の境は明瞭で横方向に突出し，体部は直立気味に外上方にのびる。内外面ともに回転ナデであるが，底部外面の高台より内側は不明確である。203は体部を失っており，底部と体部との境は不明である。底部外面は周縁がヘラケズリで，中央は未調整である。内面は回転ナデを施す。204の高台は外下方にのび，端部は外方にわずかに突出する。底部と体部との境は不明瞭である。内外面とも回転ナデである。202～204の復元底径は，順に13.8cm，10.8cm，9.2cmである。なお，底部しか残存していないため，他器種が含まれている可能性がある。

甕（205） くの字状に屈曲する頸部の破片である。胴部外面に平行タタキ目文，胴部内面に同心円タタキ目文が施される。口縁部から頸部は内外面とも横ナデである。

ＳＤ42（第65図，図版35）

６世紀後半から７世紀前半頃の須恵器・杯蓋が出土した。

須恵器（206）

杯蓋（206） 杯蓋の口縁部の破片である。口縁部は内湾し，端部を丸くおさめる。調整は内外面とも回転ナデである。

ＳＤ43（第65図，図版35・36）

６世紀後半から７世紀初頭頃の土師器・甕，須恵器・杯蓋が出土した。

土師器（207）

甕（207） 口縁部～胴部下半の破片である。最大径はほぼ胴部中央に位置する。頸部はやや強くすぼまり，口縁部は外反気味に外上方にのび，端部は丸くおさめる。口縁部から頸部は内外面とも横ナデ，内面の頸部～胴部はヘラケズリである。なお外面の胴部は摩滅が著しく調整不明である。復元口径13.9cm，復元頸部径10.8cmである。

須恵器（208～210）

杯蓋（208） ほぼ完形の杯蓋である。天井部は丸みがあり，体部との境はやや不明瞭である。体部は内湾気味に外下方にのび，垂下した口縁端部は丸くおさめる。天井部外面はヘラケズリ後未調整，その他は回転ナデである。なお天井部内面中央には一定方向の仕上げナデが施される。復元口径12.8cm，器高4.2cmである。

杯身（209・210） 209はほぼ完形の杯身で，底部から外上方に内湾気味に立ち上がり，底部と体部の境が不明瞭である。外横方に屈曲した受け部は端部を丸くおさめ，立ち上がり部は内傾して短くのび，端部はやや尖り気味に丸くおさめる。調整は，外面底部はヘラケズリ後未調整，その他は回転ナデである。ヘラケズリの一部は受け部近くまで見られる。なお内面中央には一定方向の

仕上げナデが施される。口径11.1cmである。210は杯身の上半の破片である。体部は直線的に外上方に向かってのび，受け部となる。受け部端部は丸くおさめる。立ち上がり部は内上方に短くのび，端部は面をもつ。調整は回転ナデである。

ＳＸ19（第66図，図版36）

10世紀前半頃の須恵器・杯が出土した。

須恵器（211）

杯（211） 口縁部を失った杯の破片と考えられる。底部は安定した平底で，体部は外上方に向かってのびる。内外面とも強い横ナデにより体部に凹凸がめぐる。外面底部はナデを施す。焼成がやや不良で，色調は白色である。復元底径7.0cm。

ＳＸ21（第66図，図版36）

６世紀後半から７世紀初頭頃の土師器・甕・把手，須恵器・杯蓋・杯身・小型皿が出土した。

土師器（212・213）

甕（212） 口縁部～頸部の破片である。頸部からくの字状に外上方に直線的にのび，口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。頸部はすぼまらない。内面は横位のハケ目，外面は摩滅が著しく調整不明である。復元口径21.8cm，復元頸部径18.0cmである。

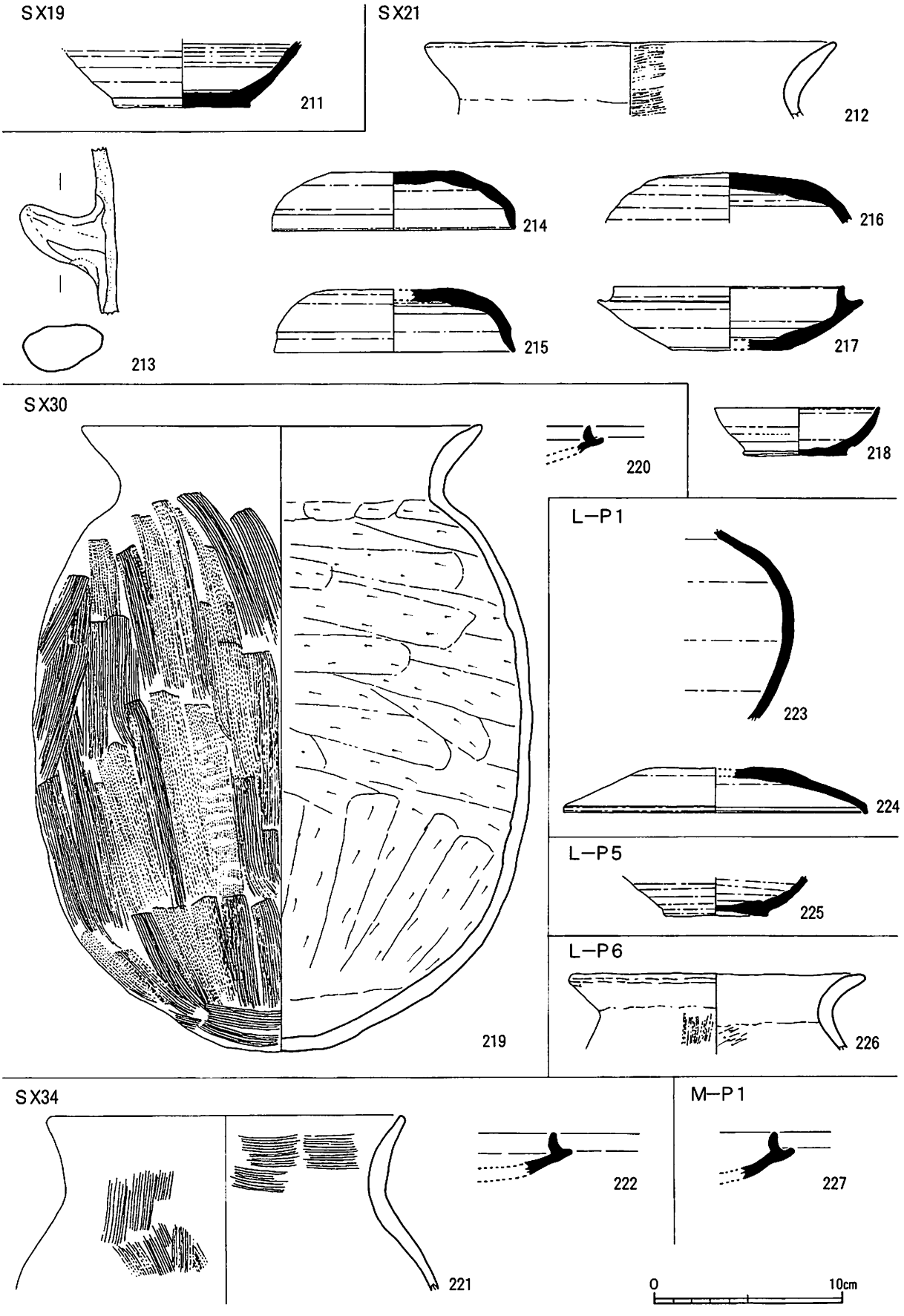
把手（213） 甑あるいは把手付甕の把手と考えられる。横断面は不整楕円形を呈する牛角状の把手である。

須恵器（214～218）

杯蓋（214～216） 214・215は天井部から口縁部までの破片，216は口縁部を欠く破片である。いずれも器高は低く，天井部はほぼ平坦である。214～216は天井部と体部の境はやや不明瞭である。体部は外下方に向かって内湾気味にのびる。214・215は口縁端部付近で内側に屈曲させ外面を強く横ナデする。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。215の口縁部はやや開き気味になる。214の天井部外面はヘラケズリ後ナデ，その他は回転ナデである。なお214の天井部内面は不定方向のナデを施す。216の天井部はヘラケズリ後未調整である。214は復元口径12.9cm，器高3.1cm，215は復元口径12.7cm，器高3.4cmである。

杯身（217） 安定した平底から直線的に外上方にのび，受け部となる。立ち上がり部は短く，内上方に向かって外反気味にのび，ほぼ直立する。受け部，立ち上がり部ともに端部は尖り気味に丸くおさめる。底部はナデ，その他は回転ナデである。復元口径12.3cm，器高3.4cm，復元底径7.3cmである。

小型皿（218） 小型の皿あるいは杯である。丸みのある不安定な底部から外上方に向かって内湾し，端部を尖り気味におさめる。調整は，底部外面がナデ，その他は回転ナデである。なお体部外面は回転ナデによる凹凸が著しい。また口縁端部周縁の色調が黒くなっており，重ね焼きをしたと考えられる。復元口径8.7cm，器高2.5cm，復元底径5.4cmである。



第66図　ＳＸ19・21・30・34，Ｌ－Ｐ１・５・６，Ｍ－Ｐ１出土土器実測図（１：３）

ＳＸ30（第66図，図版36）

６世紀末から７世紀初頭頃の土師器・甕，須恵器・杯身が出土した。

土師器（219）

甕（219） 丸底のほぼ完形の甕である。楕円形のやや長い胴部に，くの字状に屈曲する頸部をもつ。口縁部は外上方に向かって外反気味にのび，端部は尖り気味に丸くおさめる。口縁部から頸部は内外面とも横ナデ，頸部から胴部の上位２／３が横位のヘラケズリ，それより下位は縦位のヘラケズリである。底部は指頭圧痕とおもわれる凹凸がわずかに見られる。口径21.0cm，器高33.0cm，頸部径17.3cm，胴部最大径26.6cmである。

須恵器（220）

杯身（220） 杯身の体部上端の破片である。受け部はわずかに外側へ屈曲し，端部を丸くおさめる。短い立ち上がり部はやや外反気味に内上方にのび，端部は尖り気味に丸くおさめる。受け部と立ち上がり部の境には凹線状の窪みがめぐる。

ＳＸ34（第66図，図版36）

６世紀末から７世紀初頭頃の土師器・甕，須恵器・杯身が出土した。

土師器（221）

甕（221） 口縁部～胴部上半の破片である。頸部はあまりすぼまらず，口縁部は直立気味に外上方にのび，端部は丸くおさめる。外面の調整は，頸部から胴部上半が縦位のハケ目である。外面の口縁部から頸部は不明瞭であるが，縦位のハケ目後ナデと思われる。内面の調整は，口縁部から頸部が横位のハケ目，胴部上半がヘラケズリである。復元口径18.7cm，復元頸部径17.1cmである。

須恵器（222）

杯身（222） 杯身の体部上端の破片である。体部は外上方に直線的にのび，受け部になる。端部はやや尖る。立ち上がり部は外反気味に内上方へのび，直立する。端部は丸みのある小さな面をもつ。受け部と立ち上がり部の境に凹線状の窪みがめぐる。

Ｌ－Ｐ１（第66図，図版36）

８世紀前半頃の須恵器・胴部・杯蓋が出土した。

須恵器（223・224）

胴部（223） 胴部と考えられる破片である。自然釉が胴部下半までかかるが，上半は自然釉が剥がれる。調整は，内外面とも回転ナデである。

杯蓋（224） 器高が低く，扁平な杯蓋の破片である。蓋の中央を失っており，蓋の有無は不明である。口縁部の内側のかえりはなく，端部を下方に折り曲げ，強い回転ナデを施す。端部はやや尖り気味に丸くおさめる。天井部はほぼ平坦である。外面天井部はヘラケズリ，外面口縁部および内面は回転ナデ，内面中央付近は一定方向のナデを施す。復元口径は16.2cmである。

Ｌ－Ｐ５（第66図，図版36）

10世紀前半頃の須恵器・杯が出土した。

須恵器（225）

杯（225）口縁部を失った杯の破片と考えられる。安定した平底は中央がやや窪む。体部は内湾しながら外上方に向かってのびる。体部は内外面とも強い回転ナデにより凹凸がある。調整は内外面ともに回転ナデであるが，外面底部はヘラ切り後雑なナデである。復元底径は5.3cmである。

Ｌ－Ｐ６（第66図，図版36）

６世紀後半～７世紀初頭頃の土師器・甕が出土した。

土師器（226）

甕（226）頸部があまりすぼまらない甕である。口縁部は外上方に向かって外反気味にのびる。口縁は大きく開き，端部は丸くおさめる。口縁部から頸部は内外面とも横ナデ，外面胴部上半は縦位のハケ目，内面胴部上半はヘラケズリである。復元口径15.4cm，復元頸部径12.4cmである。

Ｍ－Ｐ１（第66図，図版36）

６世紀後半～７世紀初頭頃の須恵器・杯身が出土した。

須恵器（227）

杯身（227）杯身の体部上端の破片である。体部は外上方に直線的にのびる。受け部はわずかに外側へ屈曲し，端部を丸くおさめる。立ち上がり部はやや外反気味に内上方にのび，端部は丸くおさめる。受け部と立ち上がり部の境には凹線状の窪みがめぐる。

調査区（第67図，図版37）

時期の異なる遺構に混入した土器類および表土または検出面で出土した土器類を報告する。

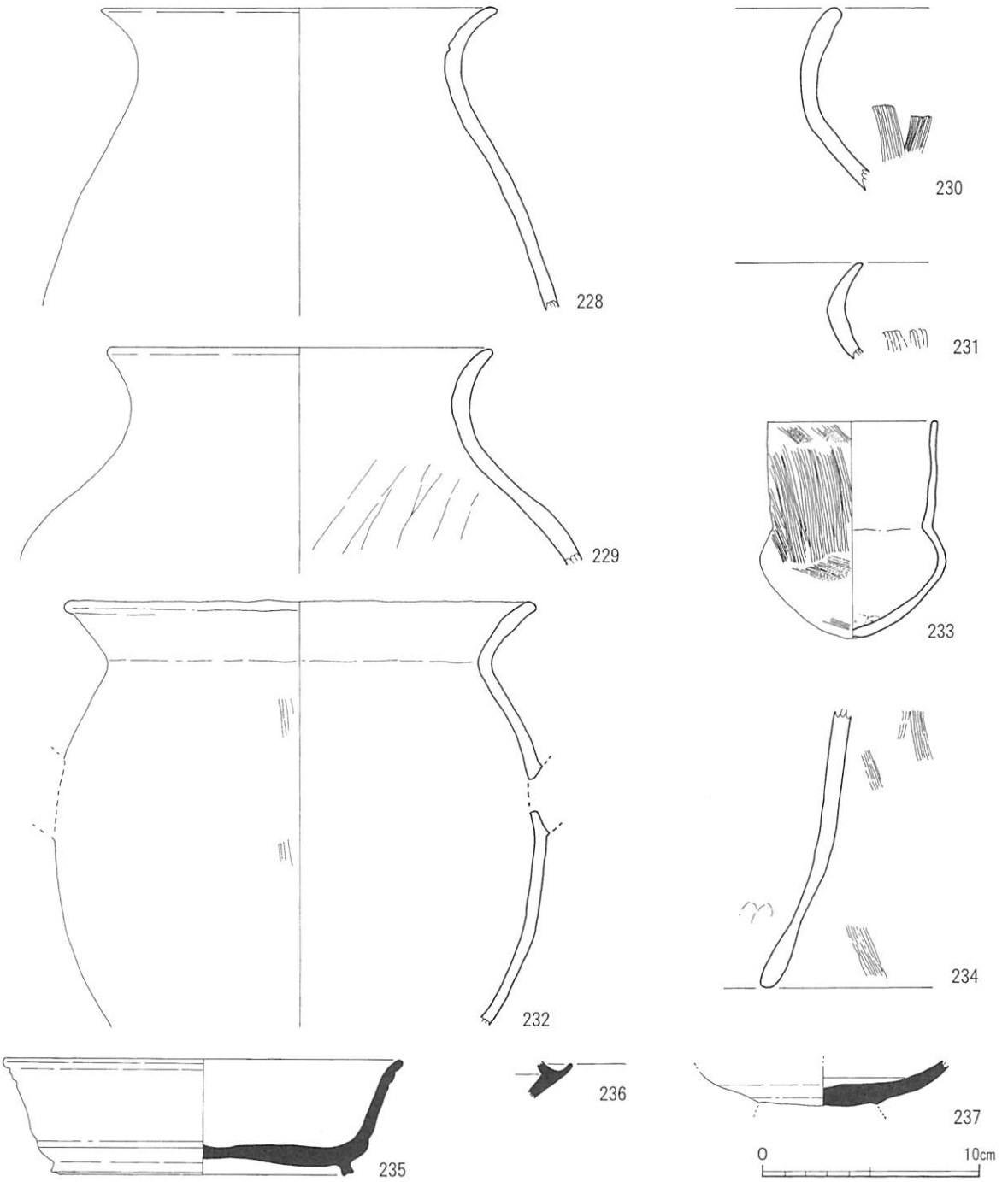
土師器（228～234）

甕（228～231）228～231はいずれも口縁部～胴部上半の破片である。頸部で緩やかに湾曲し，外反気味に外上方へのび，端部は丸くおさめる。摩滅が著しいため調整が不明瞭であるが，口縁部～頸部の内外面が横ナデで，胴部内面はヘラケズリである。また**230・231**の胴部外面には縦位のハケ目が認められる。**228**は最大径が下半にあり，下膨れの長胴をもつ。**229・230**は頸部がすぼまり，肩の張る胴部をもつ。**231**は小型の甕で，口縁が短く端部は尖り気味におさめる。**228**はＳＢ18に混入する。ＳＢ18はＳＸ21と重複することから**228**はＳＸ21の遺物である可能性が高い。**229・230**はＭ地区の表土から出土し，**231**はＳＢ23に混入する。**228**は口径17.9cm，復元頸部径15.0cm，**229**は復元口径17.5cm，復元頸部径15.7cmである。

把手付甕（232）口縁部～胴部下半の破片で，把手は失う。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外上方にわずかに外反気味にのび，端部は丸くおさめる。最大径は胴部上半にある。最大径付近に差し込み式の把手を付加する。摩滅が著しく調整は不明瞭であるが，胴部外面に縦位のハケ目が

認められる。復元口径21.3cm，復元頸部径17.7cmで，ＳＫ136に混入する。

直口壺（233） 器壁が薄く，丁寧なつくりの小型の直口壺である。算盤球形の胴部に直立する口縁部ももつ。頸部はすぼまらない。また口縁部は長く，器高の半分に達する。底部は尖り気味の丸底で，中央に径４㎜の窪みがある。外面の調整は，口縁部から胴部最大径まで縦位のハケ目，胴部下半は斜位や横位のハケ目である。内面はナデで，底部付近には指頭圧痕が残る。復元口径7.8cm，器高10.0cm，復元頸部径7.3cm，胴部最大径8.6cmである。



第67図　調査区内出土土器実測図（１：３）

甑（234） 底部の破片である。底部から内湾気味に外上方に立ち上がる。底部の端部は丸くおさめる。調整は，外面がハケ目，内面は底部付近が指頭圧後ナデである。

須恵器（235～237）

杯身（235・236） 235は高台のつく杯身の破片である。高台は断面がほぼ方形で，端面は横ナデにより中央がくぼむ。高台は外下方に向かってのび，端面は外傾する。底部と体部との境は明瞭である。体部は外上方に直線的にのび，端部付近で外反し端部を丸くおさめる。調整は内外面ともに回転ナデであるが，底部外面はヘラケズリである。復元口径8.3cm，器高5.3cm，復元底径13.0cmである。236は杯身の体部上端の破片である。体部は外上方に直線的にのび，受け部になる。立ち上がり部は内上方へのびるが，端部を欠損する。受け部と立ち上がり部の境に凹線状の窪みがめぐる。調整は，内外面とも横ナデである。ＳＫ147に混入する。

高杯（237） 高杯の杯部の破片である。ほぼ平坦な底部から体部は内湾気味に立ち上がる。底部と体部の境は不明瞭である。杯部と脚部は接着する。底部外面中央に同心円状の条痕が認められる。轆轤から底部を切り離した際の痕跡と考えられる。調整は，外面がヘラケズリ，内面が横ナデである。なお底部内面中央に一定方向のナデが施される。ＳＫ136に混入する。

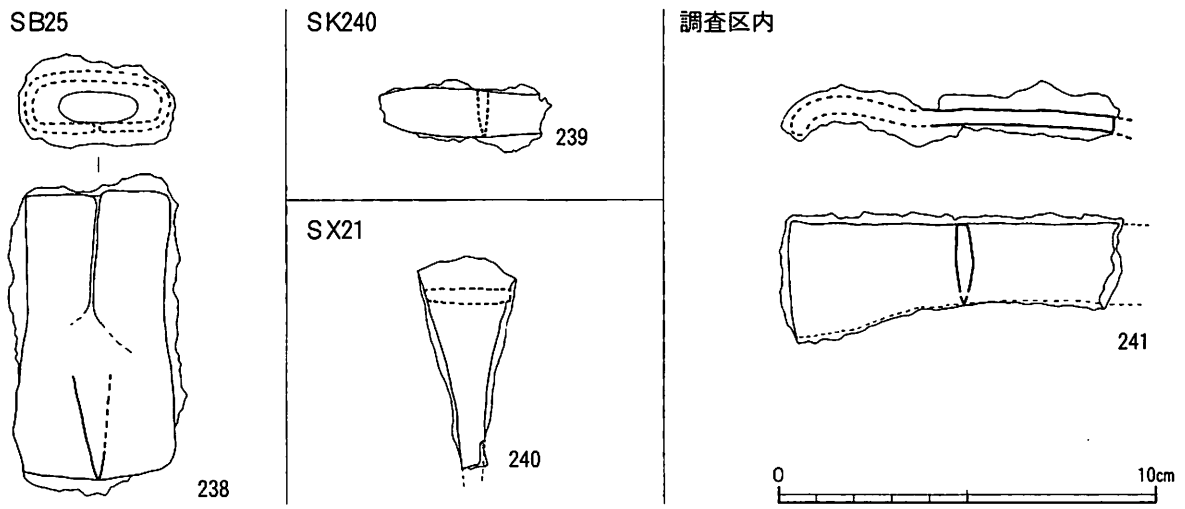
2　鉄器

ＳＢ25（第68図，図版37）

鉄斧（238） 基部が袋状のソケットになる袋状鉄斧である。長さ7.6cm，刃部幅4.3cm，基部幅3.8cmで，基部幅より刃部幅が大きく，中央部でわずかにくびれる。基部を薄く叩きのばして折り返しており，基部の断面形は楕円形で深さ1.1cmである。刃部の最大厚さは1.0cm，基部の厚さは0.25cmである。

ＳＫ240（第68図，図版37）

鉄刀子（239） 残存長4.6cmの刃部の破片で，幅1.3cm，厚さ0.3cmである。



第68図　ＳＢ25，ＳＫ240，ＳＸ21，調査区内出土鉄器実測図（１：２）

ＳＸ21（第68図，図版37）

鉄鏃（240） 方頭鏃と推定される。銹化が進んでおり不明瞭であるが，刃部はあまり欠損していないようである。刃部先端はわずかに弧を描く。残存長5.7cm，刃部最大幅は2.6cm，最大厚さは0.4cmである。茎部の断面は長方形あるいは楕円形を呈する。

調査区（第68図，図版37）

鉄鎌（241） 直刃鎌で，基部を折り曲げて木柄に装着するようになっている。先端部を欠損しており長さは不明である。残存長8.7cm，基部幅3.1cm，刃部幅2.0cm，厚さ0.4cmである。基部の折り返しは不明瞭であるが，基部全体にわたって鈍角に折り返す。

作業風景

4　中世の遺構と遺物

（1）遺構

ＳＢ17及びＳＫ103・104についてはＫ地区の報告書で詳述しているので，ここでは省略する。

1　土坑

ＳＫ134（第69図）

Ｖ１区に位置する土坑である。平面形態はほぼ円形で，径1.1m，底面では径0.8m，深さは35cmで，擂鉢状の底になる。埋土土層は大きく２層に分かれ，遺物は上層と下層で出土したが，特に上層から出土した。下層は砂を多く含んでいた。

出土遺物としては，土師質土器・皿（**242～247**）・鍋（**248**），瓦質土器・擂鉢（**249**）・鍋（**250**）・釜（**251**），陶器，焼土などがある。**248・251**は13・14世紀の可能性があるが，他の遺物の特徴から遺構の時期は中世（14世紀後半～15世紀前半）と考えられる。

ＳＫ139（第69図）

Ｑ（－１）区に位置する土坑で，等高線に斜交する。平面形態は長方形で，上面で東西1.5m，南北0.75m。２段に落ち込み，底部が西部で径0.4mの円形になる。深さは30～37cmで，東側は浅くなっている。埋土は暗灰色土で，土器が少量出土した。

出土遺物としては，土師質土器・皿（**252・253**），白磁・皿もしくは碗（**254**）がある。遺構の時期は中世（15世紀後半～16世紀代）と考えられる。

ＳＫ161（第69図）

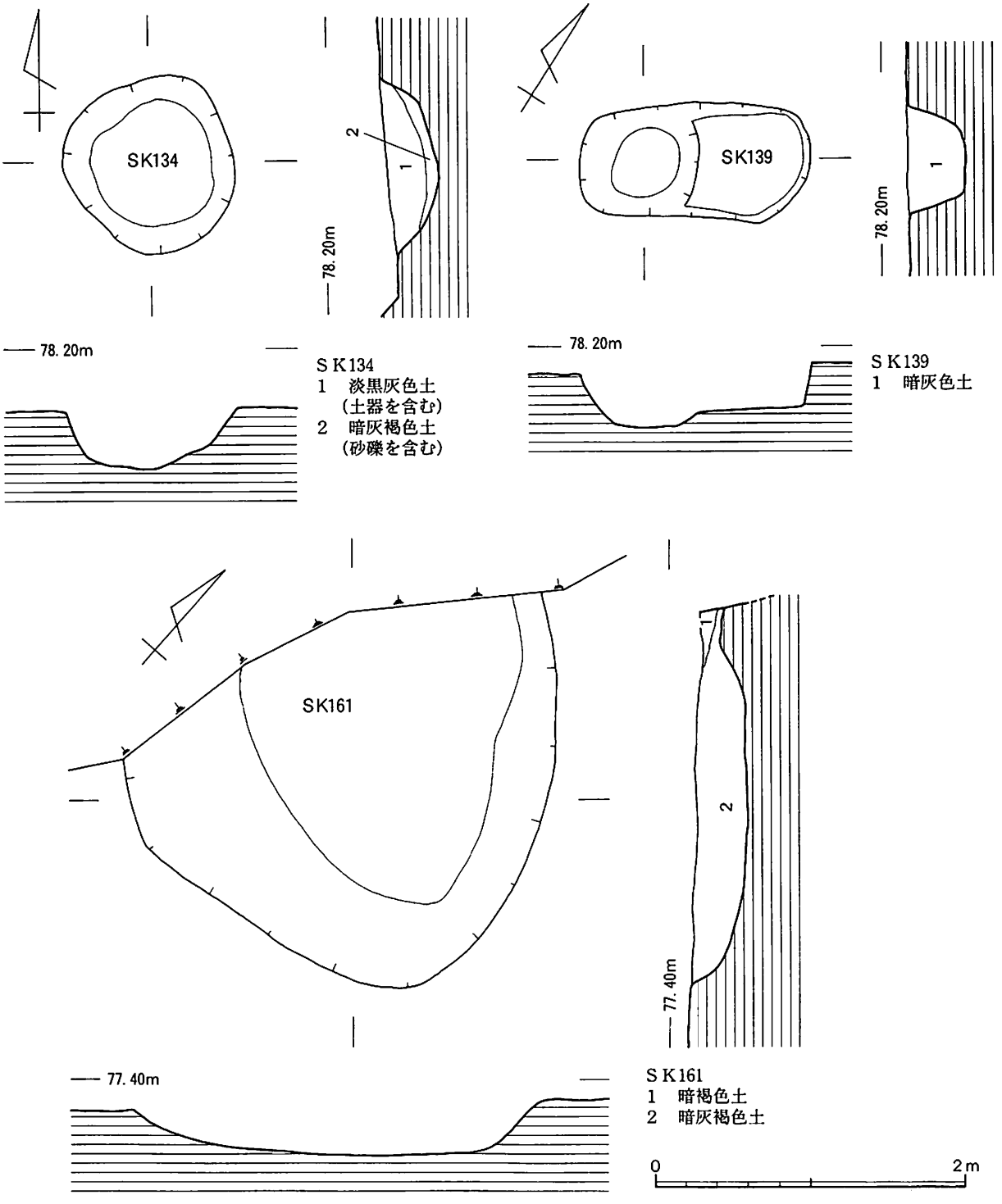
Ｎ（－２）区に位置する土坑で，等高線に斜交する。平面形態は楕円形で，北部が大きく削平されている。現存規模は上面で東西2.4m以上，南北2.9m。底面では東西1.9m以上，南北1.85m。深さは30～33cmで，坑底面はほぼ平坦である。埋土は２層で，残存していた下層の暗灰褐色土から遺物が少量出土した。

出土遺物としては，土師質土器・皿（**269～272**），亀山系甕，古銭などがある。遺構の時期は中世（15～16世紀）と考えられる。

ＳＫ144・147（第70図）

Ｐ（－１）区に位置する土坑で，等高線に斜交する。２つの土坑が重なっており，ＳＫ144は北側をＳＫ147に壊される。ＳＫ144の平面形態は楕円形で，現存規模は上面で東西0.76m，南北0.8mである。底面では東西0.5m，南北0.7m。深さは12cmで，坑底面は平坦である。ＳＫ147の平面形態は不整形で，北側は削平される。また，北西側はＳＫ146と重複するが，ＳＫ146との新旧関係は不明である。現存規模は上面で東西1.0m，南北1.4m。深さは18cmで，坑底面は平坦である。ＳＫ144の埋土は暗褐色土，ＳＫ147の埋土は暗灰色土で，ＳＫ147からは土器が少量出土した。

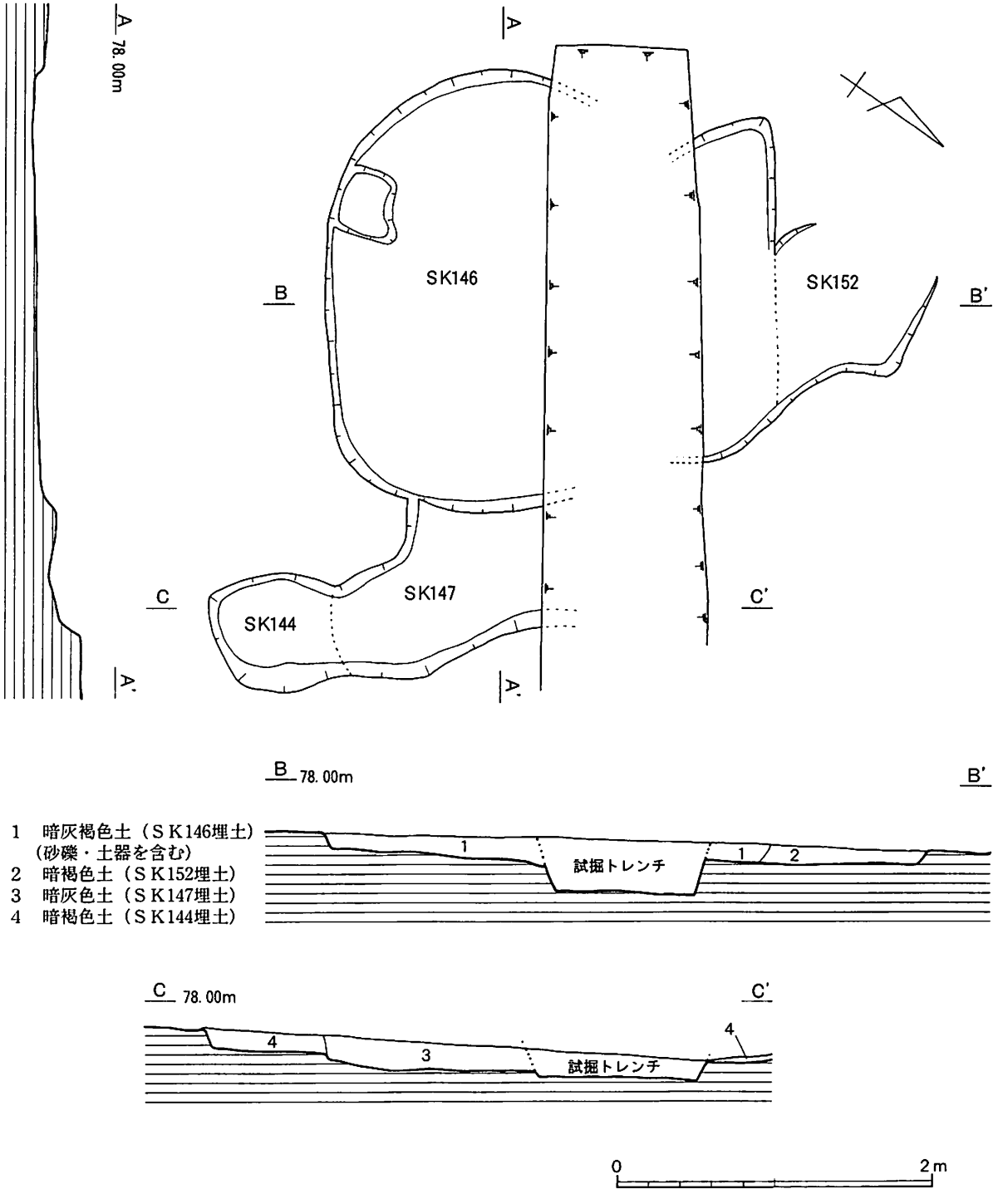
ＳＫ147の出土遺物としては，土師質土器・皿（259・260），瓦器・椀（261），焼土，鉄滓などがある。ＳＫ147の時期は中世（15～16世紀）と考えられる。なお，ＳＫ144は遺物が出土しておらず，時期不明である。



第69図　ＳＫ134・139・161実測図（１：40）

ＳＫ146・152（第70図）

Ｐ（－２・－１）区に位置する土坑で，等高線に斜交する。２つの土坑が重なっており，ＳＫ146はＳＫ152を壊す。ＳＫ146の平面形態は長方形で，上面で東西2.8m，南北2.85m。底面では東西2.6m，南北2.7m。深さは10cmで，坑底面は平坦である。遺構の東側でＳＫ147と重複するが，



第70図　ＳＫ144・146・147・152実測図（１：40）

新旧関係は不明である。ＳＫ152の平面形態は不整形で，北西部は削平される。また，南東側はＳＫ146に壊される。現存規模は上面で東西約1.2m，南北約1.05m。深さは10cmで，坑底面は平坦である。ＳＫ146の埋土は暗灰褐色土，ＳＫ152の埋土は暗褐色土で，両者から土器が少量出土した。

出土遺物としては，ＳＫ146から土師質土器・皿（**255・256**），瓦質土器・擂鉢（**257・258**）などが，ＳＫ152から土師質土器・皿（**268**）などがある。ＳＫ146・152の時期は中世（15～16世紀）と考えられる。

ＳＫ148（第71図）

Ｐ（－１）区に位置する土坑である。平面形態はほぼ楕円形で，南部が削平されている。現存規模は上面で東西0.72m，南北約0.8m。底面で東西0.36m，南北0.35m。深さは30cmで，擂鉢状の底になる。埋土は炭を含んだ暗褐色土で，土器が少量出土した。

出土遺物としては，土師質土器や瓦器の小片，青磁碗（**262**）などがある。遺構の時期は中世（15～16世紀）と考えられる。

ＳＫ149（第71図）

Ｐ（－１）区に位置する土坑で，ＳＫ148のすぐ東にある。平面形態は円形で，上面で径0.85m，底面では径0.35m，深さは30cm，擂鉢状の底になる。埋土は炭を含んだ暗褐色土で，土器などが少量出土した。

出土遺物としては，土師質土器の小片などがある。遺構の時期は中世（15～16世紀）であろう。

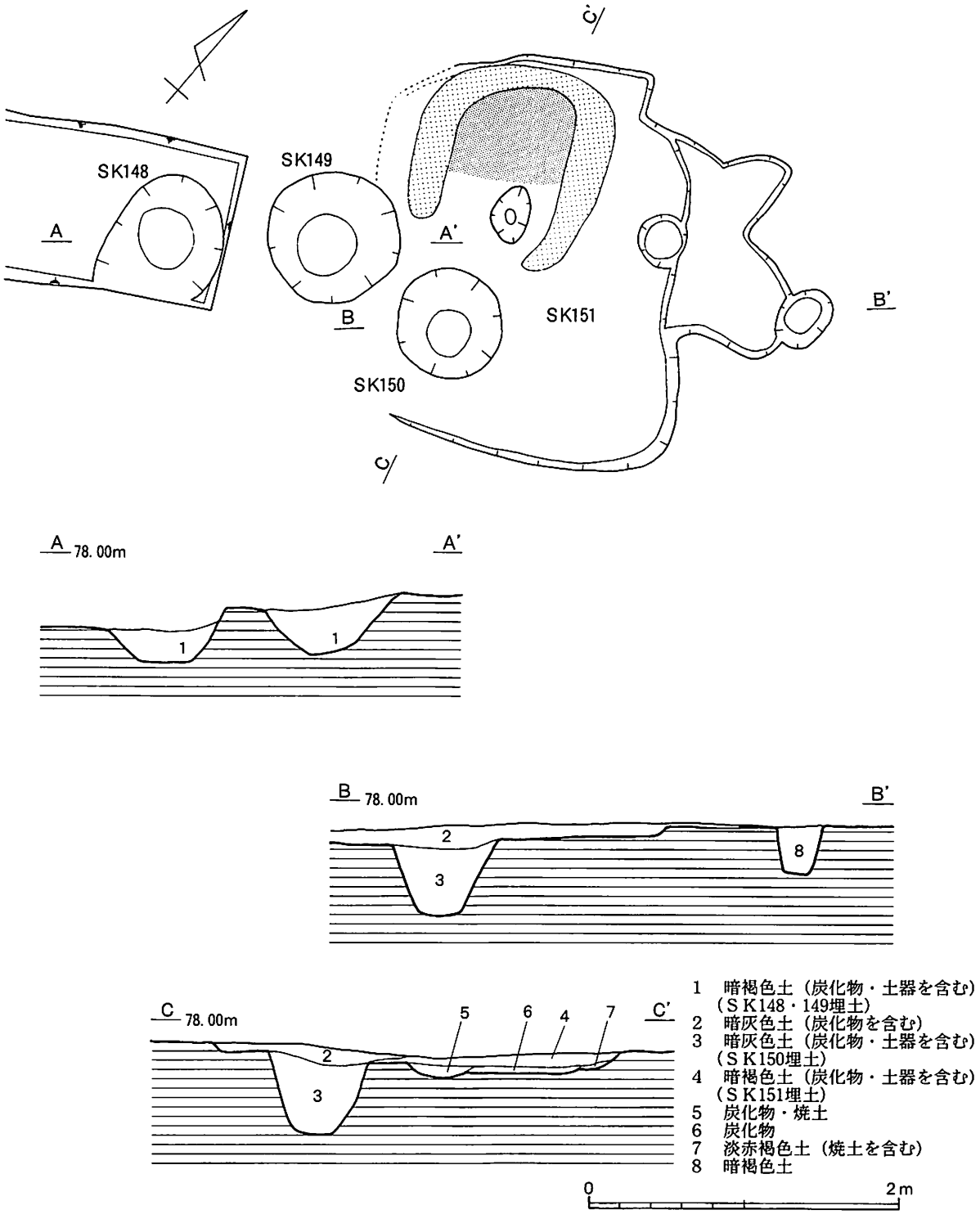
ＳＫ150（第71図）

Ｐ（－１）区に位置する土坑で，ＳＫ149のすぐ東にあり，並ぶ。平面形態は円形で，上面で径0.7m，底面では径0.25m，深さは45cm，擂鉢状の底になる。埋土は炭を含んだ暗灰色土で，土器が少量出土した。

出土遺物としては，瓦器・椀（**263**），白磁（**264**），土錘（**265**）などがある。遺構の時期は中世（15～16世紀）であろう。

ＳＫ151（第71図）

Ｏ・Ｐ（－１）区に位置する土坑で，等高線に斜交する。平面形態は長方形で，西側部分が削平を受ける。上面で東西約2.0m，南北2.62m。深さは10～15cmで，浅くなる。坑底面は平坦である。北部やや西よりに，東西1.25m，南北約1.25mの馬蹄形の土手状の高まりがあり，その内部には炭・灰が多量に堆積していた。この高まりは焼けており，全体としては炉跡であろう。土坑の埋土は炭・灰を含む暗褐色土で，土器が出土した。ＳＫ151は小規模な竪穴状遺構で，炉跡とその作業場と推定できる。



第71図　ＳＫ148～151実測図（１：40）アミ目は焼土，濃いアミ目は炭化物

出土遺物としては，土師質土器・皿（**266・267**），焼土などがある。遺構の時期は中世（15世紀後半～16世紀）と考えられる。

ＳＫ236（第72図，図版21ａ）

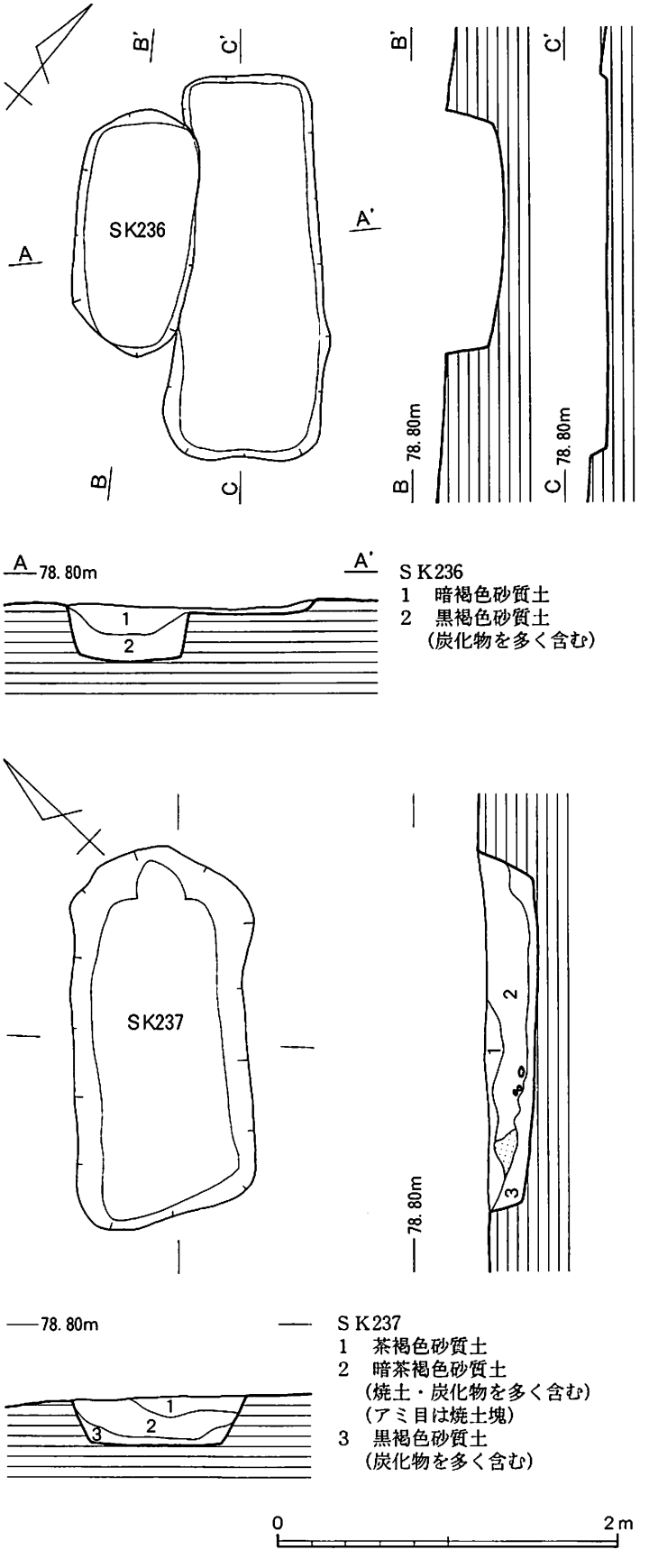
Ｎ０区に位置する土坑である。主軸はN33°Ｗで，平面形は北西－南東が長い不整隅丸方形である。なお南西側の丸みが強い。規模は1.47m（北西－南東）×0.7m（北東－南西）で，深さは土坑中央で36cmである。底面の規模は1.32m×0.63mで，床面中央が周囲よりも10cm程度低い。埋土下層は遺物や炭化物を含む。

ＳＫ236の北東側に土坑があり，ＳＫ236の上端を一部壊す。ＳＫ236より新しい時期の土坑である。主軸方向はN38°Ｗで，北西－南東が長い方形である。規模は2.25m（北西－南東）×0.74～0.93（北東－南西）で，北西辺は南東辺よりも19cm程度短い。深さは11cmとかなり浅い。底面の規模は2.15m×0.64～0.73mで，北から南へ5cm下傾する。

出土遺物は土師質土器・皿（**273**），青磁椀（**274**）などがある。遺構の時期は中世（15～16世紀）と考えられる。

ＳＫ237（第72図，図版21ｂ）

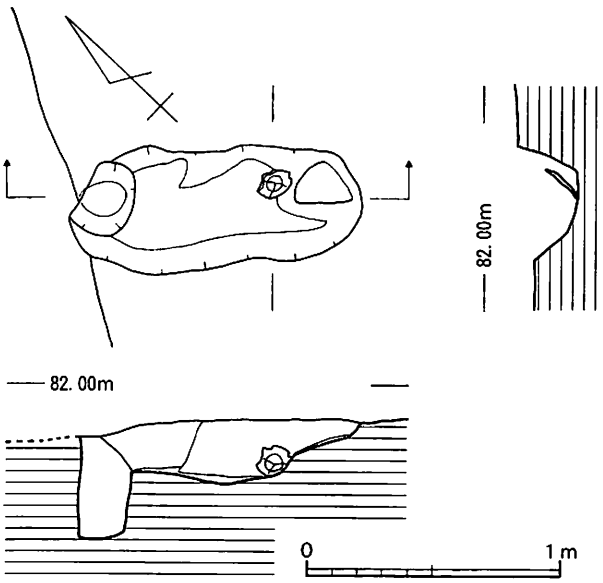
Ｏ０区に位置する土坑である。主軸はN46°Ｅで，平面形は北東－南西が長い不整隅丸方形である。北東辺にあたる部分の丸みが強い。規模



第72図　ＳＫ236・237実測図（１：40）

は北西辺2.05m，南東辺1.8m，北東辺1.05m，南西辺1.1mである。深さは30cmで，底面やや凹凸がある（高低差7cm）。底面は北西辺1.8m，南東辺1.55m，北東辺0.58m，南西辺0.8mである。底面の北東側が一部半円状に広がっている。埋土中層は焼土塊と炭化物を含み，埋土下層は炭化物を多く含む。

出土遺物は土師質土器・皿（275）・鍋（276），瓦質土器・擂鉢の小片や焼けた壁土などが出土した。遺構の時期は中世（15～16世紀）と考えられる。



第73図　ＳＫ241実測図（１：30）

ＳＫ241（第73図，図版21ｃ）

Ｓ３区に位置する土坑で，平面形は不整楕円形である。遺構の北西端でピットと重複するが，新旧関係は不明である。主軸方向はN46°Wで，規模は長径推定(1.2)m×短径0.5mである。深さは25cmで，底面は凹凸が著しい（高低差7cm）。また底面の南東隅が一段高くなっており，底面からの高さは８～14cmである。埋土は褐色砂質土である。

底面に接するようにして土師質土器・皿（277）が出土した。遺構の時期は中世（13～14世紀）と考えられる。

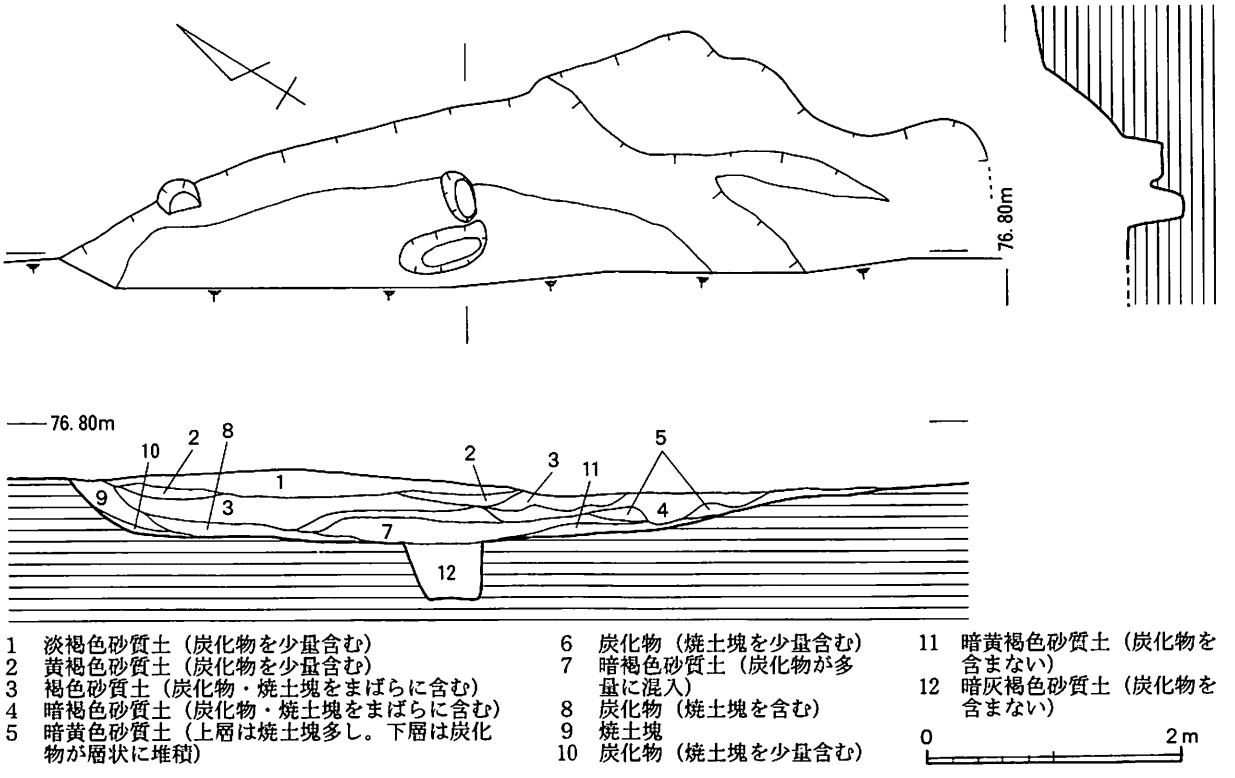
その他の遺構

ＳＸ27（第74図，図版22ａ・ｂ）

Ｌ・Ｍ（－２）区に位置する性格不明の遺構である。Ｌ・Ｍ調査区の境に位置しているが，Ｌ調査区側が後世の削平を受けているため，Ｍ調査区側しか残存していなかった。遺構の一部しか残っていないため，平面形態など全容は不明である。現状の規模は7.4m（北西－南東）×1.6m（北東－南西），深さ66cmである。底面の規模は4.7m（北西－南東）×0.85m（北東－南西）で，底面は平坦であるが，東側に位置する土坑付近が低い（高低差14cm）。底面には平面形が楕円形の土坑２基があり，底面東端に位置する土坑１は一部壁を掘り込む。規模は長径43cm×短径23cmで，深さは32cmである。土坑２は土坑１の南西端と接するように位置し，土坑１・２はＬ字状の配置をとる。土坑２の規模は長径71cm×短径33cmで，深さ45cmである。

底面直上には炭化物が層状に堆積していた。また北壁に接して焼けた壁土を含む焼土塊を検出した。焼失建物に伴う落ち込みと考えられる。土坑１・２は埋土に炭化物がほとんど含まれていないことから焼失前の遺構であろう。

土坑２の底面近くから土師質土器・皿（278）と土製品・取瓶（280）がいずれも完形で出土した。完形品の埋納は何らかの祭祀的な行為と考えられる。その他に埋土から土師質土器・皿



第74図　ＳＸ27実測図（１：60）

(279)，瓦質土器・擂鉢や染付の小片などが出土した。遺構の時期は中世（15～16世紀）である。

ＳＸ31（第75図，図版22ｃ）

Ｒ２区に位置する性格不明の遺構である。Ｍ・Ｊ調査区の境にあるが，Ｊ調査区では確認できなかった。遺構の一部であるため，全容は不明である。平面形は不整形で，現状の規模は7.2m（北西－南東）×2.8m（北西－南東），深さ17cmである。底面は南東から北西に向かって30cm程度下傾する。また底面東側が一段高くなっており（底面より10～30cm），この段も東から西に10cm下傾する。

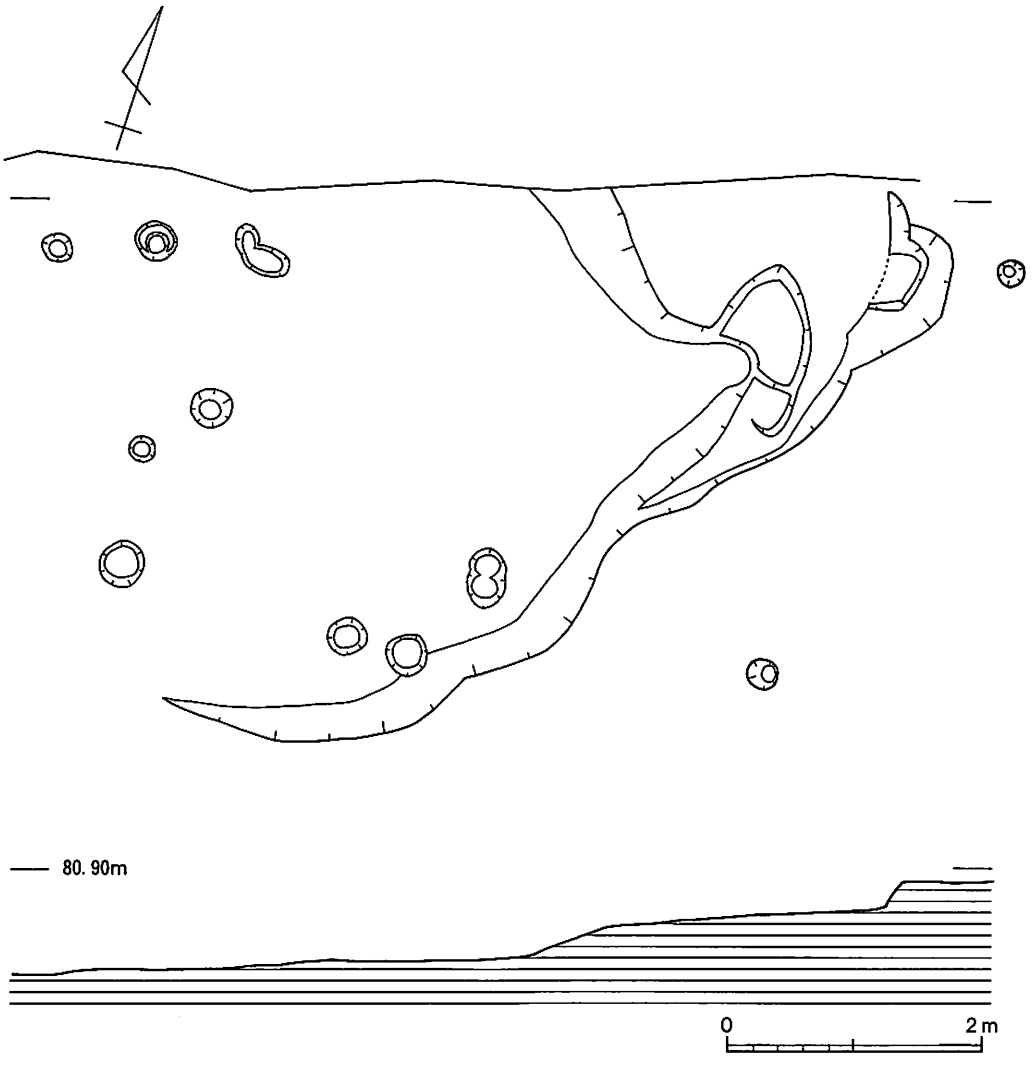
出土遺物は土師質土器・皿（281），瓦質土器・擂鉢（282・283），染付碗（284）などがある。遺構の時期は中世（16世紀後半）と考えられる。

Ｌ－Ｐ２（第76図）

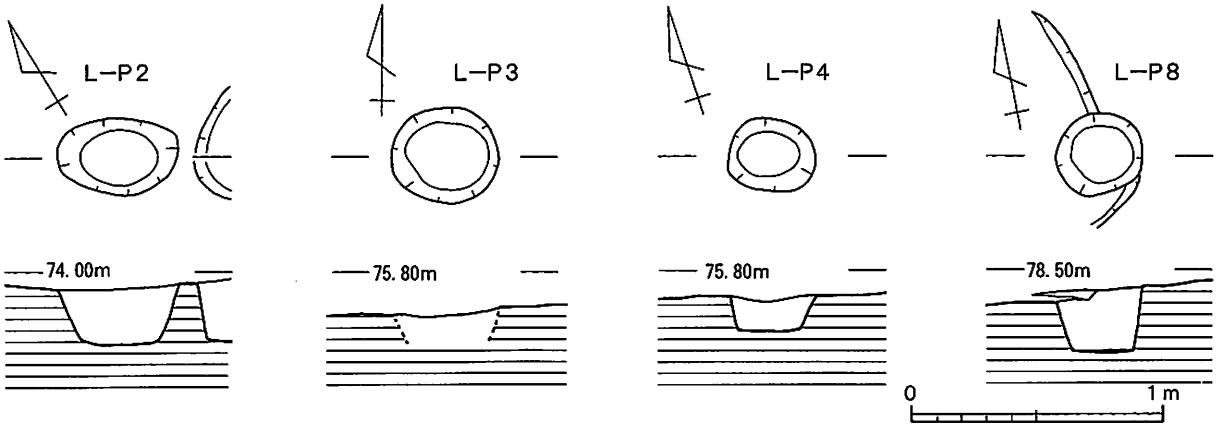
Ｉ（－５）区に位置するピットである。平面形は楕円形で，規模は長径48cm，短径31cmである。底面の規模は長径31cm×短径21cmで，深さは24cmである。中世の青白磁・合子の蓋（285）が出土した。

Ｌ－Ｐ３（第76図）

Ｍ（－３）区に位置するピットである。南東方向へ３ｍの位置にＬ－Ｐ４がある。平面形は楕



第75図　ＳＸ31実測図（１：60）



第76図　Ｌ－Ｐ２～４・８実測図（１：30）

円形で，規模は長径43cm×短径37cmである。底面の規模は長径33cm，短径26cmで，深さは不明である。埋土から古銭・大観通宝（294）が出土した。

Ｌ－Ｐ４（第76図）

Ｍ（－３）区に位置するピットである。北西方向へ３ｍの位置にＬ－Ｐ３がある。平面形は楕円形で，長径34cm×短径28cmの規模である。底面の規模は長径24cm×短径17cmで，深さは14cmである。埋土から古銭・太平通宝（295）が出土した。

Ｌ－Ｐ８（第76図）

Ｖ１区に位置するピットである。平面形はやや不整の円形で，規模は長径34cm×短径32cmである。底面の規模は長径24cm×短径22cmである。深さは26cmである。瓦質土器・鍋（286）が出土した。

（２）遺物

１　土器類（土師器質土器，瓦質土器，瓦器，磁器），土製品類

ＳＫ134（第77図，図版37・38）

14世紀後半～15世紀前半頃の土師質土器・皿・鍋，瓦質土器鉢・鍋・釜が出土した。

土師質土器（242～248）

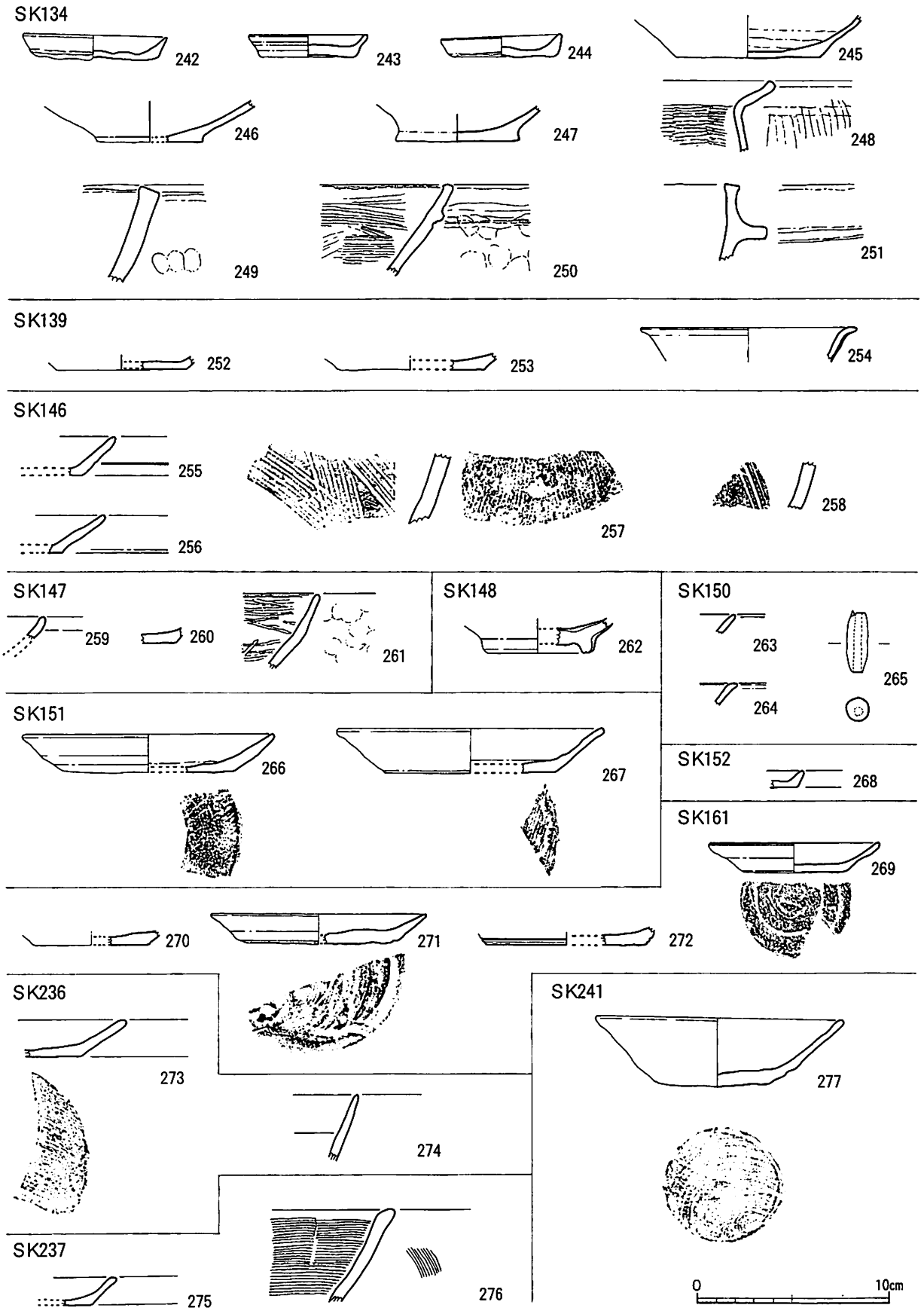
皿（242～247） 242～247はいずれも摩滅が著しいため調整不明の平底の皿である。242～244は器高が低い扁平な小型の皿で，体部は直立気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味である。242・243は口縁部の大半を失い，244はほぼ完形である。242は復元口径7.4cm，器高1.3cm，底径6.7cm，243は復元口径6.1cm，器高1.2cm，底径4.4cm，244は口径6.2cm，器高1.2cm，底径5.0cmである。245～247は口縁部を欠く皿あるいは杯の破片（体部～底部）である。体部は外上方にのび，大きく開く。底部の器壁は周縁が厚く，中央が薄い。246・247は顕著で，底部が高台状になる。なお245の内面はわずかに稜が認められる。245の復元底径7.5cm，246の復元底径5.6cm，247の底径6.6cmである。

鍋（248） 口縁部～体部上半の破片である。頸部でくの字状に屈曲し，外上方へ直線的にのび，口縁端部は面をもつ。調整は，口縁部が内外面とも回転ナデ，体部外面が縦位のハケ目，体部内面が横位のハケ目である。外面には煤が付着する。

瓦質土器（249～251）

擂鉢（249） 擂り目は見られないが，擂鉢あるいは鍋の破片（口縁部～体部上半）と考えられる。体部は外上方に直線的にのび，端部は面をもつ。端面の横ナデによりわずかに端部の内外が肥厚する。摩滅が著しく調整は不明瞭である。体部外面に指頭圧痕が認められる。

鍋（250） 口縁部付近に突帯を巡らす鍋で，口縁部～体部上半の破片である。体部は外上方に直線的にのび，口縁端部に達する。口縁端部は丸みのある面をもち，内側にわずかに肥厚する。外面



第77図　ＳＫ134・139・146・147・150～152・161・236・237・241出土土器及び土製品実測図（１：３）

は指押さえで成形した後に突帯を貼り付ける。内面はハケ目である。

釜（251） 口縁部付近に鍔を巡らす釜で，口縁部～体部上半の破片である。ほぼ直立する体部に横方向へ突出する鍔を付加する。鍔の端部はやや丸みのある面をもつ。口縁端部は面をもち，端面の横ナデにより端面が窪むとともに外側へ若干肥厚する。調整は内外面とも回転ナデである。

ＳＫ139（第77図，図版38）

中世（15世紀後半～16世紀代）の土師質土器・皿，白磁皿が出土した。

土師質土器（252・253）

皿（252・253） 皿の底部の破片である。平底で，252は復元底径6.7cm，253は復元底径7.7cmである。小片のため，底部外面の調整は不明である。その他は回転ナデを施す。

磁器（254）

白磁皿（254） 口縁端部付近で外横方向に屈曲するいわゆる端反りの皿である。小片のため不明確であるが，復元口径は11.0cmである。

ＳＫ146（第77図，図版38）

中世の土師質土器・皿，瓦質土器・擂鉢が出土した。

土師質土器（255・256）

皿（255・256） 255・256は口縁部～底部の破片で，平底の底部から外上方に直線的にのびる。255の口縁端部は尖り気味に，256の口縁端部は丸くおさめる。なお，255の外面には工具痕の痕跡が沈線状にめぐる。また，内面に煤が付着することから灯明皿と考えられる。調整は内外面とも回転ナデ，底部の調整は不明である。

瓦質土器（257・258）

擂鉢（257・258） 257・258は擂鉢の体部の破片である。257は土師質土器に近い焼成で，外面に煤が付着する。調整は，外面が縦位のハケ目，内面が横位のハケ目後擂り目を施す。擂り目の単位は２cm幅に５条の条痕である（条痕の間隔は５mm）。258の調整は，外面は不明，内面はナデ後擂り目を施す。擂り目の単位は不明であるが，条痕の間隔は３～４mmである。

ＳＫ147（第77図，図版38）

中世の土師質土器・皿，瓦器・椀，焼土，鉄滓などが出土した。

土師質土器（259・260）

皿（259・260） 259は口縁部，260は底部の破片である。いずれも小片のため全容は不明である。259は内湾する口縁部で，端部は丸くおさめる。調整は内外面ともに回転ナデである。260は平底の底部で，底部外面はヘラ切りの痕跡が認められる。内面は回転ナデを施す。

瓦器（261）

椀（261） 和泉型の椀で，口縁部～体部上半の破片である。内湾気味に外上方にのび，口縁端部は

丸くおさめる。外面は，口縁部が回転ナデ，体部が未調整で指頭圧痕が残る。内面は，回転ナデ後ヘラミガキを施す。ヘラミガキの幅は２㎜程度で，横位が中心である。

ＳＫ148（第77図，図版38）

中世の青磁碗などが出土した。

磁器（262）

青磁碗（262） 底部の破片である。高台畳み付け部は丸みももち，中央に沈線状の条痕がめぐる。高台を含め全面に施釉されるが，外面底部の高台より中央は釉が薄い。釉の色調は透明度のある青みを帯びた明緑色である。

ＳＫ150（第77図，図版38）

中世の瓦器・椀，白磁皿，土錘などが出土した。

瓦器（263）

椀（263） 椀と考えられる口縁部の破片である。小片のため全容は不明である。和泉型か？

磁器（264）

白磁皿（264） 皿と考えられる口縁部の破片である。口縁端部に水平な面をもち，外横方向にわずかに肥厚する。内外面に貫入が見られ，胎土の色調は褐色を帯びた白色である。

土製品（265）

土錘（265） 小型で細身の管状土錘で，片側の端部を失う。現存寸法は長さ3.2cm，径1.1cmで，径0.4cmの孔が穿たれる。色調は淡橙色である。

ＳＫ151（第77図，図版38）

中世の土師質土器・皿などが出土した。

土師質土器（266・267）

皿（266・267） **266・267**は口縁部～底部の破片である。平底の底部から外上方にのび，端部は丸くおさめる。破片のため不明瞭であるが，底部はヘラ切りで，その後に板目痕跡がつく。そのほかは内外面ともに回転ナデである。**266**の体部は内湾気味に立ち上がり，**267**の体部は口縁端部付近でわずかに外反する。**266**は復元口径13.1cm，器高2.0cm，復元底径9.0cm，**267**は復元口径13.9cm，器高1.3cm，復元底径9.0cmである。

ＳＫ152（第77図，図版38）

中世の土師質土器・皿などが出土した。

土師質土器（268）

皿（268） 小型の皿の破片である。直立気味に外上方へ立ち上がり，端部は尖り気味に丸くおさめる。小片であるため調整は不明瞭であるが，底部外面はヘラ切り，その他は内外面ともに回転ナ

デと考えられる。

ＳＫ161（第77図，図版38）

中世の土師質土器・皿などが出土した。

土師質土器（269～272）

皿（269～272） 269・271は口縁部～底部の破片，270・272は底部の破片である。平底の底部から外上方に立ち上がる皿で，底部がヘラ切り（271を除く），その他は回転ナデを施す。269の体部はやや内湾気味に立ち上がり，端部は丸くおさめる。271の体部は直線的に立ち上がり，端部は尖る。271の底部は糸切りであるが，回転か静止かは破片であるため不明である。また，器形のゆがみがやや大きく，色調は橙色を呈する。272は底部付近に工具痕と考えられる条痕がめぐる。269は復元口径8.8cm，器高1.6cm，復元底径5.5cm，271は復元口径11.3cm，器高1.6cm，復元底径8.4cmである。

ＳＫ236（第77図，図版38）

中世の土師質土器・皿，青磁碗などが出土した。

土師質土器（273）

皿（273） 口縁部～底部の破片である。平底の底部から外上方へ直線的に立ち上がり，端部は丸くおさめる。底部は板目状の痕跡が明瞭に残る。273に見られる板目状の痕跡は幅が狭く凹凸が顕著である。内外面ともに回転ナデであるが，内面はその後にナデが施される。

磁器（274）

青磁碗（274） 口縁部～体部の破片である。体部は直立気味に外上方に立ち上がり，端部は尖り気味に丸くおさめる。内面に沈線状の条痕が１条めぐる。釉は薄く，全体に施される。外面に気泡による小穴があばた状に見られる。色調はくすんだ薄緑色である。

ＳＫ237（第77図，図版38）

中世の土師質土器・皿・鍋などが出土した。

土師質土器（275・276）

皿（275） 口縁部～底部の破片である。平底の底部から外上方に立ち上がり，端部は丸くおさめる。小片のため不明瞭であるが，底部はヘラ切り後にハケ目状の痕跡がつく。

鍋（276） 口縁部～体部の破片である。体部は外上方に立ち上がり，口縁部端部付近でやや外反し，端部は丸くおさめる。外面の口縁部端部付近（外反部分）に横ナデが施される。それより下位は縦位のハケ目が施されるが，器面に凹凸がある。内面は，口縁端部付近が横ナデ，それより下位は横位のハケ目が丁寧に施される。内面に煤が付着する。

ＳＫ241（第77図，図版38）

中世の土師質土器・皿が出土した。

土師質土器（277）

皿（277）器高のやや高い皿で，ほぼ完形である。底部は不安定な平底で，ほぼ直線的に外上方に立ち上がり，端部は丸くおさめる。底部は回転糸切りで，色調は白褐色を呈する。焼成が不十分で，調整が不明である。口径12.8cm，器高3.7cm，底径5.9cmである。

ＳＸ27（第78図，図版38）

中世の土師質土器・皿，土製品・取瓶が出土した。

土師質土器（278～280）

皿（278・279）278・279は口縁が大きく開く平底の皿で，**278**はほぼ完形，**279**は口縁部～底部の破片である。**278**の体部は内湾気味に外上方に立ち上がり，端部は丸くおさめる。底面はヘラ切り後，筵状の痕跡がつく。口縁部から体部の調整は内外面ともに回転ナデである。底部内面は摩滅が著しく調整不明である。体部内面に煤が付着しており，灯明皿と考えられる。器壁はやや厚く，色調は灰褐色を呈する。口径10.6cm，器高1.9cm，底径7.8cmである。**279**の体部は直線的に外上方へのび，口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切り後，ハケ目状の痕跡がつく。口縁部から体部は内外面とも回転ナデ，底部内面はナデが施される。

土製品（280）

取瓶（280）完形品で，口径3.6cm，器高1.9cmの小型の鉢形を呈する。底部は尖底で，体部はわずかに内湾して外上方にのびる。口縁端部は丸みをもった面をもつ。内外面とも調整の痕跡は認められない。口縁端部付近に光沢のある箇所があり，その付近の体部内面は赤色を帯びる。また内面の口縁端面付近では帯状に黒く変色した部分が認められる。

ＳＸ31（第78図，図版38）

中世の土師質土器・皿，瓦質土器・擂鉢，磁器・染付碗などが出土した。

土師質土器（281）

皿（281）口縁部の大半を欠く皿である。安定したやや丸みのある平底で，体部は直線的に外上方へのび，口縁端部は丸くおさめる。底部は静止糸切りである。口縁部から体部は内外面とも回転ナデで，内面底部はナデである。復元口径12.5cm，器高2.5cm，底径7.0cmである。

瓦質土器（282・283）

擂鉢（282・283）282・283はいずれも口縁部～体部上半の破片である。体部は外上方に立ち上がり，口縁端部は外傾する面をもつ。**282**は須恵質に近い焼成の擂鉢である。内面はハケ目調整後に擂目を施す。擂目の単位は条痕４本以上で，条痕の間隔は４～５㎜である。口縁端面にハケ目を施すが，内面調整の際の粘土が口縁端面にかかり，ハケ目の一部を覆う。外面は未調整である。**283**は土師質に近い焼成の擂鉢である。口縁端面はわずかに下側へ肥厚する。内面は回転ナデ調

整後に擂目を施す。擂目の単位は条痕３本以上で，条痕の間隔は４㎜程度である。口縁端面および外面は未調整である。

磁器（284）

染付碗（284） 底径4.7cmの底部の破片である。高台は断面三角形で，施釉は高台外面までおこなわれる。高台内面および底部中央付近に一部釉がかかる。見込み中央に文字，周縁に２条の輪線を配するが，中央の文字は判読できない。外面では，高台脇に１条，高台基部に１条の輪線を配する。透明釉は白濁しており，呉須は暗藍色を呈する。胎土は黄色味をおびる。璋州窯系の染付碗と考えられる。

Ｌ－Ｐ２（第78図，図版39）

中世の青白磁・合子の蓋が出土した。

磁器（285）

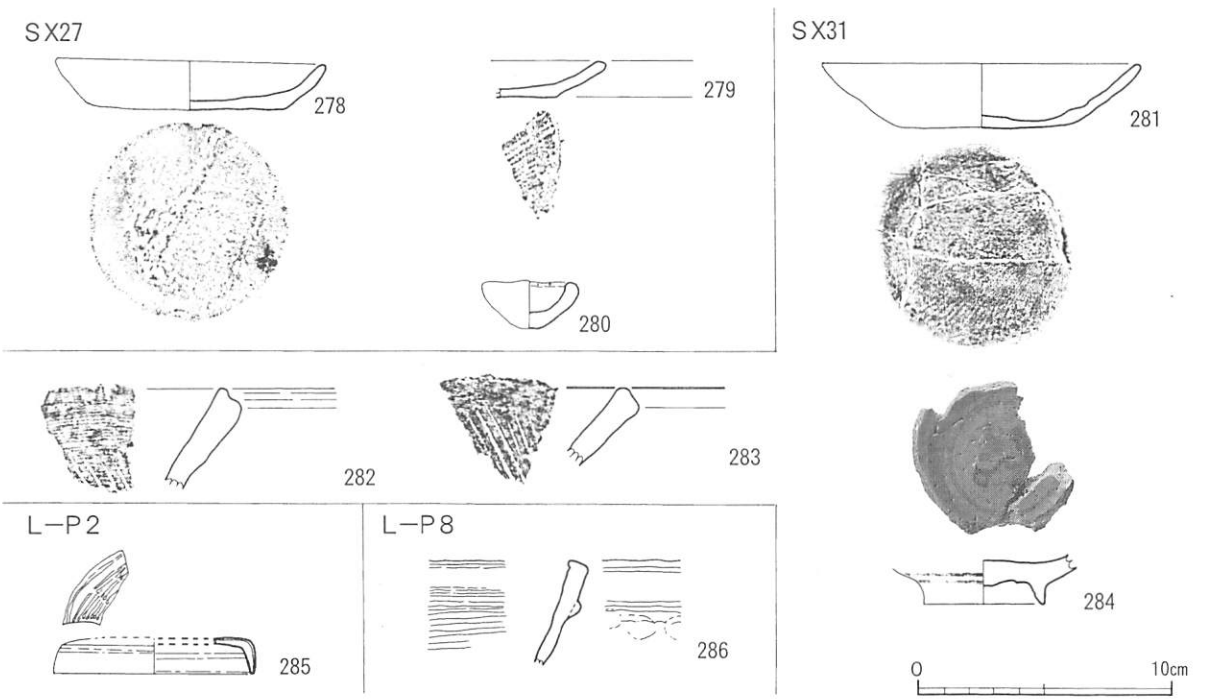
青白磁合子（285） 合子の蓋の破片で，復元口径7.8cmである。やや丸みのある平坦な天井部から内湾気味にほぼ垂直に垂下し，口縁端部は丸くおさめる。（天井部の文様）全面に施釉後，体部外面の下から１／３は釉ハギを施し，内面では体部から天井部の一部まで釉ハギをおこなう。

Ｌ－Ｐ８（第78図，図版39）

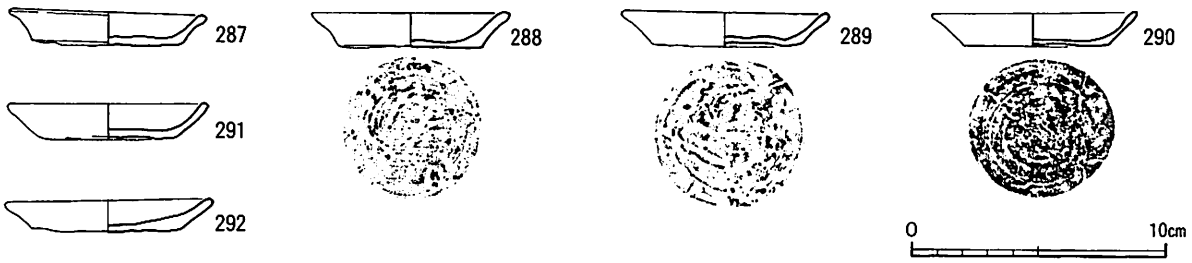
中世の瓦質土器・鍋が出土した。

瓦質土器（286）

鍋（286） 口縁部付近に突帯を巡らす鍋で，口縁部～体部上半の破片である。体部は外上方に直線



第78図　ＳＸ27・31，Ｌ－Ｐ２・８出土土器及び土製品実測図（１：３）



第79図　調査区内出土土器実測図（１：３）

的にのび，口縁端部付近でやや器壁が厚くなり，口縁端部に達する。口縁端部は面をもち，横ナデを施す。端面の横ナデに伴い，内側へわずかに肥厚する。外面口縁端部付近は横ナデが施される。それより下位は，指頭圧痕が認められ，その上に断面三角形の突帯が貼り付けられる。内面は横位のハケ目である。なお，外面に煤が付着する。

調査区（第79図，図版39）

弥生時代の遺構であるＳＢ11から中世の土師質土器・皿がまとまって出土した。

土師質土器（287～292）

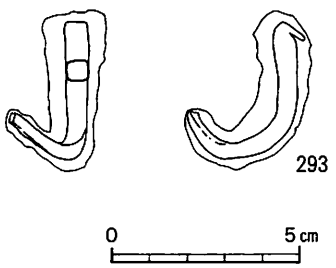
皿（287～292） いずれもほぼ完形の小型の皿である。口径7.5～7.9cm，器高1.3～1.5cm，底径5.4～6.1cmである。平底の底部から外上方に向かって立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。口縁部から体部の調整は内外面ともに回転ナデ，底部内面の調整は雑なナデである。**287・288**の体部は外反気味に立ち上がり，その他は直線的に立ち上がる。底部はいずれもヘラ切りである。**287**～289・292はヘラ切り後にハケ目状の痕跡がつく。なお，**287**は見込みに古銭の痕跡が残る。

2　鉄製品類

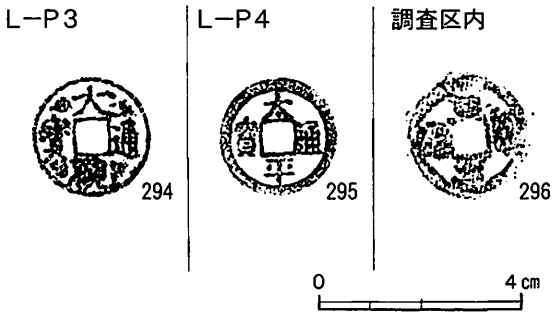
ＳＫ236（第80図，図版39）

中世の鉄釘が１点出土した。

鉄釘（293） 全面を錆に厚く覆われた鉄釘である。Ｕ字状に曲がり，さらに釘先端と釘頭が前後にねじれる。断面は方形で，復元した全長は約6.3cmである。



第80図　ＳＫ236出土鉄製品実測図（１：２）



第81図　Ｌ－Ｐ３・4，調査区内出土古銭拓影（２：３）

3　古銭

Ｌ－Ｐ３（第81図，図版39）

古銭（294） 大観通宝である。初鋳は1107年で，銭径2.4cmである。

Ｌ－Ｐ４（第81図，図版39）

古銭（295） 太平通宝である。初鋳は976年で，銭径2.4cmである。

調査区内（第81図，図版39）

弥生時代の遺構であるＳＢ11から古銭が１点出土した。

古銭（296） 銹化が著しく銭種不明である。銭径は2.45cmである。

作業風景

第３表　縄文土器一覧表

遺物番号	出土地区	出土遺構	器種・部位	調　　整	備　考
1	L（－3）	SK229	－　・口縁部	外面：RL　内面：ナデ	口縁端部に縄文
2	L（－2）	かく乱	深鉢？・口縁部	外面：RL，ナデ　内面：沈線，ナデ	口縁端部に縄文
3	M調査区北側	—	深鉢？・体部	外面：磨消縄文，LR＋沈線　内面：ナデ	
4	J（－3）	SK222	深鉢？・体部	外面：磨消縄文，LR＋沈線　内面：ナデ	
5	J（－3）	SK222	深鉢？・体部	外面：磨消縄文，LR＋沈線　内面：ナデ	
6	M調査区北側	—	深鉢？・体部	外面：磨消縄文，RL＋沈線　内面：ナデ	
7	I（－5）	ピット	－　・体部	外面：LR？　内面：ナデ	
8	I（－5）	ピット	－　・体部	外面：LR？　内面：ナデ	
9	J（－2）	SK227	深鉢？・体部	外面：沈線　内面：ナデ	
10	N0	SD45	深鉢？・口縁部	外面：RL？沈線　内面：ナデ	
11	J（－5）	SK191	深鉢？・口縁部	外面：沈線　内面：ナデ	
12	J（－3・2）	SB20	深鉢？・口縁部	外面：沈線　内面：ナデ	
13	L（－3）	SK229	－　・口縁部	外面：沈線　内面：ナデ	刺突文
14	L（－2）	かく乱	－　・口縁部	外面：沈線　内面：ナデ	
15	M調査区北側	—	－　・体部	外面：沈線　内面：ナデ	
16	J（－4）	SK219	－　・体部	外面：沈線　内面：ナデ	
17	J（－5）	SK187	－　・体部	外面：条文痕　内面：？	
18	J（－5）	SK183	－　・体部	外面：条文痕　内面：ナデ	

第４表　出土土器計測表１（弥生時代～古墳時代初頭）

遺物番号	遺構番号	土器種類	器　種	寸法（cm，カッコ内の数値は推定値）					備　考
				口径	頸部径	最大径	器高	底径	
19	SB2	弥生土器	壺	－	－	－	－	－	
20	SB2	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	
21	SB2	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	山陰系
22	SB2	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	備後系（神谷川式）
23	SB2	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
24	SB2	弥生土器	壺	－	－	－	－	－	混入
25	SB11	弥生土器	甕	(14.8)	(11.5)	(20.1)	－	－	山陰系
26	SB11	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	山陰系
27	SB11	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	
28	SB11	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	
29	SB11	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
30	SB20	弥生土器	壺	－	－	－	－	－	
31	SB20	弥生土器	鉢	10.7	－	－	5.5	－	
32	SB20	弥生土器	脚部	－	－	－	－	－	
33	SB21	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	
34	SB23	弥生土器	壺	(22.0)	(14.2)	(33.7)	(44.3)	7.7	山陰系
35	SB23	弥生土器	壺	－	－	－	－	－	
36	SB23	弥生土器	壺	－	－	－	－	－	
37	SB23	弥生土器	甕	13.7	11.7	－	－	－	
38	SB23	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	山陰系
39	SB23	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	山陰系
40	SB23	弥生土器	甕	12.4	10.4	13.9	17.3	－	
41	SB23	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	
42	SB23	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	
43	SB23	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
44	SB23	弥生土器	脚部	－	－	－	－	－	
45	SB23	弥生土器	脚部	－	－	－	－	－	
46	SB23	弥生土器	手づくね土器	2.3	－	－	2.5	1.8	

第５表　出土土器計測表２（弥生時代～古墳時代初頭）

遺物番号	遺構番号	土器種類	器　種	寸法（cm，カッコ内の数値は推定値）					備　考
				口径	頸部径	最大径	器高	底径	
47	ＳＫ136	弥生土器	壺	－	－	－	－	－	
48	ＳＫ136	弥生土器	壺	－	－	－	－	－	
49	ＳＫ136	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
50	ＳＫ142	弥生土器	壺	15.8	14.0	－	－	－	籠の痕跡あり
51	ＳＫ142	弥生土器	甕	20.5	18.2	30.5	－	－	山陰系
52	ＳＫ142	弥生土器	甕	14.6	11.8	－	－	－	山陰系
53	ＳＫ142	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	備後系（神谷川式）
54	ＳＫ142	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
55	ＳＫ142	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
56	ＳＫ142	弥生土器	鉢	11.8	－	－	6.5	－	
57	ＳＫ142	弥生土器	鉢	10.6	－	－	4.0	－	
58	ＳＫ142	弥生土器	鉢	(7.5)	－	－	(4.2)	－	
59	ＳＫ142	弥生土器	鉢	(7.0)	－	－	3.6	2.4	
60	ＳＫ142	弥生土器	鉢	(7.3)	－	－	6.6	1.8	
61	ＳＫ142	弥生土器	鉢	6.8	－	－	7.0	(2.0)	
62	ＳＫ213	弥生土器	壺	20.2	14.8	－	－	－	
63	ＳＫ213	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	
64	ＳＫ213	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
65	ＳＫ219	弥生土器	壺	(11.4)	(8.7)	－	－	－	
66	ＳＫ219	弥生土器	壺	6.3	3.2	－	－	－	
67	ＳＫ219	弥生土器	甕	21.3	18.0	29.8	34.5	4.0	山陰系
68	ＳＫ219	弥生土器	甕	(14.7)	(11.1)	－	－	－	山陰系
69	ＳＫ219	土師器	甕	16.6	12.8	22.4	－	－	畿内系
70	ＳＫ219	土師器？	甕	(14.4)	(11.4)	－	－	－	畿内系
71	ＳＫ219	土師器？	甕	－	－	－	－	－	畿内系
72	ＳＫ219	弥生土器	甕	9.3	7.7	14.0	15.6	4.7	
73	ＳＫ219	弥生土器	甕	8.7	8.3	12.3	11.7	3.2	
74	ＳＫ219	弥生土器	鉢	(15.4)	－	13.8	9.2	3.6	
75	ＳＫ219	弥生土器	鉢	(15.5)	－	－	6.5	－	備後系
76	ＳＫ219	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	備後系（神谷川式）
77	ＳＫ219	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	備後系（神谷川式）
78	ＳＫ219	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
79	ＳＫ219	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
80	ＳＫ219	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
81	ＳＫ219	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
82	ＳＫ219	弥生土器	鉢	(10.7)	－	－	4.1	－	
83	ＳＫ219	弥生土器	高杯	24.3	－	－	－	－	山陰系
84	ＳＫ219	弥生土器	高杯	(22.5)	－	－	－	－	山陰系
85	ＳＫ219	弥生土器	脚部	－	－	－	－	5.1	
86	ＳＫ219	弥生土器	脚柱部	－	－	－	－	－	
87	ＳＫ219	弥生土器	脚部	－	－	－	－	－	
88	ＳＫ219	弥生土器	鼓形器台	－	－	－	－	19.0	
89	ＳＫ219	弥生土器	鉢	(3.5)	－	－	2.2	－	手づくね
90	ＳＫ219	弥生土器	鉢	(5.9)	－	－	3.3	－	
91	ＳＫ219	弥生土器	鉢	5.6	－	－	3.5	3.2	
92	ＳＫ219	弥生土器	鉢	－	－	－	－	2.4	
93	ＳＫ219	弥生土器	底部	－	－	－	－	1.7	
94	ＳＫ229	弥生土器	壺	－	13.8	－	－	－	
95	ＳＫ229	弥生土器	壺	(11.4)	(9.9)	－	－	－	
96	ＳＫ229	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	山陰系
97	ＳＫ229	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	山陰系
98	ＳＫ229	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	
99	ＳＫ229	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
100	ＳＫ229	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	備後系（神谷川式）
101	ＳＫ229	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	
102	ＳＫ229	弥生土器	器種不明	－	－	－	－	－	
103	ＳＫ230	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	山陰系
104	ＳＫ230	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
105	ＳＫ234	弥生土器	壺	－	－	－	－	－	
106	ＳＫ234	弥生土器	壺	－	－	－	－	－	山陰系
107	ＳＫ234	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
108	ＳＫ235	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	

第６表　出土土器計測表３（弥生時代～古墳時代初頭）

遺物番号	遺構番号	土器種類	器　種	寸法（cm，カッコ内の数値は推定値）					備　考
				口径	頸部径	最大径	器高	底径	
109	ＳＫ238	弥生土器	壺	(16.1)	(11.7)	(27.9)	－	－	備後系
110	ＳＫ238	弥生土器	壺	14.9	13.3	33.6	38.4	8.7	籠の痕跡あり 備後系
111	ＳＫ238	弥生土器	壺	(18.6)	(13.0)	－	－	－	籠の痕跡あり 山陰系
112	ＳＫ238	弥生土器	壺	14.6	10.0	23.9	31.4	3.9	山陰系
113	ＳＫ238	弥生土器	壺	18.3	12.9	31.4	39.5	4.0	山陰系
114	ＳＫ238	弥生土器	甕	(14.2)	(12.9)	(25.8)	29.9	(4.0)	山陰系？
115	ＳＫ238	弥生土器	甕	16.0	13.6	25.8	31.2	3.2	山陰系
116	ＳＫ238	弥生土器	甕	(20.8)	(17.4)	(30.6)	－	－	山陰系
117	ＳＫ238	弥生土器	甕	14.4	11.6	19.4	24.1	3.9	山陰系
118	ＳＫ238	弥生土器	甕	12.8	10.3	16.7	21.4	3.2	
119	ＳＫ238	弥生土器	甕	16.9	13.6	(22.4)	26.6	2.6	山陰系
120	ＳＫ238	弥生土器	甕	(15.6)	(12.7)	(19.7)	－	－	山陰系
121	ＳＫ238	弥生土器	甕	15.7	12.0	20.5	－	－	山陰系
122	ＳＫ238	弥生土器	甕	14.7	11.4	16.7	－	－	山陰系
123	ＳＫ238	弥生土器	甕	14.2	12.2	－	－	－	山陰系
124	ＳＫ238	弥生土器	甕	12.6	10.5	－	－	－	山陰系
125	ＳＫ238	弥生土器	甕	12.6	9.9	17.9	21.2	3.2	山陰系
126	ＳＫ238	弥生土器	甕	15.8	12.6	21.4	26.1	2.0	山陰系
127	ＳＫ238	弥生土器	甕	13.9	10.3	18.7	23.0	2.8	山陰系
128	ＳＫ238	弥生土器	甕	13.4	10.2	18.5	24.4	1.9	山陰系
129	ＳＫ238	弥生土器	甕	(14.0)	(11.5)	(21.7)	－	－	山陰系
130	ＳＫ238	弥生土器	甕	15.2	12.1	19.2	24.0	1.7	山陰系
131	ＳＫ238	弥生土器	甕	(17.9)	(14.3)	(22.5)	－	－	山陰系
132	ＳＫ238	弥生土器	甕	(12.9)	(10.2)	16.3	17.0	2.5	山陰系
133	ＳＫ238	弥生土器	甕	(14.8)	(13.2)	－	－	－	
134	ＳＫ238	弥生土器	鉢	(24.8)	(23.0)	(23.6)	－	－	備後系（神谷川式）
135	ＳＫ238	弥生土器	鉢	(40.0)	(40.4)	(43.2)	29.8	(4.9)	備後系（神谷川式）
136	ＳＫ238	弥生土器	鉢	21.5	19.3	20.2	12.2	4.8	備後系（神谷川式）
137	ＳＫ238	弥生土器	鉢	21.7	19.8	20.4	11.8	6.5	備後系（神谷川式）
138	ＳＫ238	弥生土器	鉢	18.6	－	－	8.5	5.0	備後系
139	ＳＫ238	弥生土器	鉢	16.0	14.0	－	10.3	5.9	
140	ＳＫ238	弥生土器	鉢	11.3	10.8	－	11.1	2.4	
141	ＳＫ238	弥生土器	鉢	16.2	－	－	10.0	3.3	
142	ＳＫ238	弥生土器	鉢	13.0	－	13.7	－	－	
143	ＳＫ238	弥生土器	鉢	12.4	－	－	6.5	3.3	
144	ＳＫ238	弥生土器	鉢	11.4	－	－	5.3	5.0	
145	ＳＫ238	弥生土器	鉢	11.3	－	－	5.4	－	
146	ＳＫ238	弥生土器	蓋	11.5	－	－	4.4	－	
147	ＳＫ238	弥生土器	蓋	10.7	－	－	－	－	
148	ＳＫ238	弥生土器	底部	－	－	－	－	3.7	穿孔あり
149	ＳＤ44	弥生土器	高杯	(14.0)	－	－	11.0	7.0	
150	ＳＤ44	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
151	ＳＤ45	弥生土器	壺	－	－	－	－	－	
152	ＳＤ45	弥生土器	壺	－	－	－	－	－	
153	ＳＤ45	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	
154	ＳＸ23	弥生土器	高杯	(18.6)	－	－	－	－	
155	ＳＸ26	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	山陰系
156	ＳＸ26	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	山陰系
157	ＳＸ26	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	備後系（神谷川式）
158	ＳＸ26	弥生土器	鉢	－	(20.2)	(21.3)	－	(8.0)	備後系（神谷川式）
159	ＳＸ26	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
160	調査区（Ｌ－Ｐ７）	弥生土器	器台	(23.6)	－	－	－	－	
161	調査区（ＳＢ18）	弥生土器	壺	－	－	－	－	－	
162	調査区（ＳＢ18）	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	
163	調査区（ＳＢ18）	弥生土器	甕	－	－	－	－	－	
164	調査区（ＳＸ21）	弥生土器	鉢	(19.7)	－	－	－	－	
165	調査区（ＳＸ21）	弥生土器	鉢	(18.0)	(17.1)	(19.3)	－	－	
166	調査区（ＳＢ18）	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	
167	調査区（ＳＫ226）	弥生土器	鉢	－	－	－	－	－	朱塗り
168	調査区（Ｍ地区）	弥生土器	鉢	6.8	－	－	8.6	－	
169	調査区（ＳＸ33）	弥生土器	脚部	－	－	－	－	－	
170	調査区（ＳＢ18）	弥生土器	底部	－	－	－	－	－	

第7表　出土土器計測表（古墳時代～古代）

遺物番号	遺構番号	土器種類	器　種	寸法（cm，カッコ内の数値は推定値）					備　考
				口径	頸部径	最大径	器高	底径	
184	ＳＢ18	須恵器	杯身						
185	ＳＢ18	須恵器	杯身						
186	ＳＢ22	土師器	甕	10.3	10.4	12.8	12.6	－	
187	ＳＢ25	須恵器	杯蓋						
188	ＳＢ25	須恵器	杯身						
189	ＳＢ25	須恵器	杯身						
190	ＳＫ145	須恵器	底部						
191	ＳＫ155	土師器	把手						
192	ＳＫ155	須恵器	壺						
193	ＳＫ155	須恵器	杯身						
194	ＳＫ156	土師器	甕	(16.8)	(14.2)	(15.5)			
195	ＳＫ156	須恵器	杯蓋	(15.9)			1.9		
196	ＳＫ157	須恵器	杯蓋	(13.0)			6.5		
197	ＳＫ232	須恵器	杯身	(11.2)					
198	ＳＫ240	須恵器	杯蓋						
199	ＳＤ19	須恵器	杯蓋						
200	ＳＤ19	須恵器	杯蓋						
201	ＳＤ19	須恵器	杯身					(10.0)	
202	ＳＤ19	須恵器	杯身					(13.8)	
203	ＳＤ19	須恵器	杯身					(10.8)	
204	ＳＤ19	須恵器	杯					(9.2)	
205	ＳＤ19	須恵器	甕						
206	ＳＤ42	須恵器	杯蓋						
207	ＳＤ43	土師器	甕	(13.9)	(10.8)	(16.9)			
208	ＳＤ43	須恵器	杯蓋	(12.8)			4.2		
209	ＳＤ43	須恵器	杯身	11.1			4.1		
210	ＳＤ43	須恵器	杯身						
211	ＳＸ19	須恵器	杯					(7.0)	
212	ＳＸ21	土師器	甕	(21.8)	(18.0)				
213	ＳＸ21	土師器	把手						
214	ＳＸ21	須恵器	杯蓋	(12.9)			3.1		
215	ＳＸ21	須恵器	杯蓋	(12.7)			3.4		
216	ＳＸ21	須恵器	杯蓋						
217	ＳＸ21	須恵器	杯身	(12.3)			3.4	(7.3)	
218	ＳＸ21	須恵器	小型皿	(8.7)			2.5	(5.4)	
219	ＳＸ30	土師器	甕	21.0	17.3	26.6	33.0		
220	ＳＸ30	須恵器	杯身						
221	ＳＸ34	土師器	甕	(18.7)	(17.1)				
222	ＳＸ34	須恵器	杯身						
223	Ｌ－Ｐ１	須恵器	胴部						
224	Ｌ－Ｐ１	須恵器	杯蓋	(16.2)					
225	Ｌ－Ｐ５	須恵器	杯身					(5.3)	
226	Ｌ－Ｐ６	土師器	甕	(15.4)	(12.4)				
227	Ｍ－Ｐ１	須恵器	杯身						
228	調査区（ＳＢ18）	土師器	甕	17.9	(15.0)				ＳＸ21出土？
229	調査区（Ｍ地区）	土師器	甕	(17.5)	(15.7)				
230	調査区（Ｍ地区）	土師器	甕						
231	調査区（ＳＢ23）	土師器	甕						
232	調査区（ＳＫ136）	土師器	把手付甕	(21.3)	(17.7)	(22.7)			
233	調査区（Ｍ地区）	土師器	直口壺	(7.8)	(7.3)	(8.6)	10.0		
234	調査区（Ｍ地区）	土師器	甑						
235	調査区（Ｍ地区）	須恵器	杯身	(8.3)			5.3	(13.0)	
236	調査区（ＳＫ147）	須恵器	杯身						
237	調査区（ＳＫ136）	須恵器	高杯						

第８表　出土土器計測表（中世）

遺物番号	遺構番号	土器種類	器　種	寸法（cm，カッコ内の数値は推定値）					備　考
				口径	頸部径	最大径	器高	底径	
242	ＳＫ134	土師質土器	皿	(7.4)			1.3	6.7	ヘラ切り？
243	ＳＫ134	土師質土器	皿	(6.1)			1.2	4.4	
244	ＳＫ134	土師質土器	皿	6.2			1.2	5.0	ヘラ切り？
245	ＳＫ134	土師質土器	皿					(7.5)	ヘラ切り？
246	ＳＫ134	土師質土器	皿					(5.6)	
247	ＳＫ134	土師質土器	皿					6.6	ヘラ切り
248	ＳＫ134	土師質土器	鍋						
249	ＳＫ134	瓦質土器	擂鉢						
250	ＳＫ134	瓦質土器	鍋						
251	ＳＫ134	瓦質土器	釜						
252	ＳＫ139	土師質土器	皿					(6.7)	
253	ＳＫ139	土師質土器	皿					(7.7)	
254	ＳＫ139	白磁	皿	(11.0)					
255	ＳＫ146	土師質土器	皿				2.0		灯明皿
256	ＳＫ146	土師質土器	皿				1.9		
257	ＳＫ146	瓦質土器	擂鉢						
258	ＳＫ146	瓦質土器	擂鉢						
259	ＳＫ147	土師質土器	皿						
260	ＳＫ147	土師質土器	皿						
261	ＳＫ147	瓦器	椀						和泉型
262	ＳＫ148	青磁	碗					(5.2)	
263	ＳＫ150	瓦器	椀						和泉型？
264	ＳＫ150	白磁	皿						
266	ＳＫ151	土師質土器	皿	(13.1)			2.0	(9.0)	ヘラ切り
267	ＳＫ151	土師質土器	皿	(13.9)			1.3	(9.0)	ヘラ切り
268	ＳＫ152	土師質土器	皿				0.9		ヘラ切り
269	ＳＫ161	土師質土器	皿	(8.8)			1.6	(5.5)	ヘラ切り
270	ＳＫ161	土師質土器	皿					(6.1)	ヘラ切り
271	ＳＫ161	土師質土器	皿	(11.3)			1.6	(8.4)	糸切り
272	ＳＫ161	土師質土器	皿					(8.6)	ヘラ切り
273	ＳＫ236	土師質土器	皿				1.9		
274	ＳＫ236	青磁	碗						
275	ＳＫ237	土師質土器	皿				1.5		ヘラ切り
276	ＳＫ237	土師質土器	鍋						
277	ＳＫ241	土師質土器	皿	12.8			3.7	5.9	糸切り
278	ＳＸ27	土師質土器	皿	10.6			1.9	7.8	
279	ＳＸ27	土師質土器	皿				1.4		ヘラ切り
281	ＳＸ31	土師質土器	皿	(12.5)			2.5	7.0	糸切り
282	ＳＸ31	瓦質土器	擂鉢						
283	ＳＸ31	瓦質土器	擂鉢						
284	ＳＸ31	磁器(染付)	碗					4.7	瑋州窯系
285	Ｌ－Ｐ２	青白磁	合子蓋	(7.8)			(1.5)		
286	Ｌ－Ｐ８	瓦質土器	鍋						
287	調査区（ＳＢ11）	土師質土器	皿	7.5			1.5	6.1	ヘラ切り
288	調査区（ＳＢ11）	土師質土器	皿	7.6			1.3	5.7	ヘラ切り
289	調査区（ＳＢ11）	土師質土器	皿	7.9			1.4	5.9	ヘラ切り
290	調査区（ＳＢ11）	土師質土器	皿	7.9			1.3	5.7	ヘラ切り
291	調査区（ＳＢ11）	土師質土器	皿	7.7			1.4	5.4	ヘラ切り
292	調査区（ＳＢ11）	土師質土器	皿	7.9			1.4	5.9	ヘラ切り

V まとめ

曽川１号遺跡は御調川の南側にあり，牛の皮城跡が存在する丘陵の北側裾部に立地する集落遺跡である。今回調査をおこなったのは，このうちのＬ・Ｍ地区である。

調査の結果，縄文時代から中世の竪穴住居跡22軒（拡張・縮小を含む），掘立柱建物跡２棟，土坑41基，溝７条，性格不明の遺構10基などを検出した。ここでは，縄文時代の遺構と遺物，弥生時代から古墳時代初頭の竪穴住居跡，ＳＫ219・238出土土器，中世の遺物について述べ，まとめとする。また，曽川１号遺跡における集落の変遷について概観する。

１　縄文時代の遺構と遺物について

縄文時代の遺構としては，Ｍ調査区南側のＳＫ222がある。平面形は南北にやや長い不整形で，規模は1.32m×1.23m，深さは32cmである。底面中央には自然石が底面に密着して出土し，覆土から縄文時代後期初頭（中津式[1]）の縄文土器片が出土した。県内で検出した縄文時代のほぼ同規模の遺構としては，早期中葉の山中池南第６地点５号土坑ＳＫ05[2]（楕円形，長径1.7m×短径1.4m，深さ85cm）や西ガガラ遺跡第１地点18号土坑ＳＫ18[3]（楕円形，長径1.87m×短径1.39m，深さ53cm），中期後半の行年遺跡ＳＫ17[4]（円形，径約1.6m，深さ28cm），後期後半の帝釈名越岩陰遺跡№６竪穴[5]（円形？，長径1.15m×短径0.8m，深さ60cm）などがある。西ガガラ遺跡第１地点18号土坑ＳＫ18は遺構の性格について触れていないが，その他の遺構は性格を貯蔵穴と想定している。本遺跡検出のＳＫ222も貯蔵穴の可能性が考えられよう。なお，遺構として確認されていないが，縄文土器は調査区の各所で出土している。

ＳＫ222から出土した縄文土器を除き，新しい時期の遺構に混入したものである。文様を手がかりとして縄文土器の時期について検討する。なお，出土遺物はいずれも小片のため，器形はほとんどが不明である。有文土器は，縄文を有するものと有さないものがある。縄文を有するものは**１～８**で，中津式あるいは福田ＫⅡ式に属するものと考えられる。**３～５**は同一個体と考えられる。太い沈線で囲まれた内側に縄文を施した磨消縄文で，中津式に属する。また，Ｊ字文を施す６は中津式であるが，沈線が細く縄文が小さいことから新段階に分類できよう。**１**は，口縁端部をやや拡張し，文様帯としており，福田ＫⅡ式である。同様に縄文を有しない**９・12**も口縁部を文様帯とする事から福田ＫⅡ式と考えられる。また，**10・11**は口縁部の外側を厚くし文様帯としていることから，縁帯文土器[6]と考えられる。特に**11**は縁帯文土器の特徴である同心円文が施される。**13・14**は口縁部を内側に屈曲させ文様帯とすること，**15・16**は縄文を有さず，沈線が直線的であることから，福田ＫⅡ式あるいは縁帯文土器であろう。

以上のことから，今回出土した縄文土器の時期は概ね後期初頭～中頃と考えられる。これは曽川１遺跡Ｅ地区[7]の調査において出土した縄文土器と同時期であり，当該時期の集落が本遺跡を含めた周辺にあったことを追認するものである。

2　弥生時代～古墳時代初頭の竪穴住居跡について

弥生時代～古代の竪穴住居跡を22軒検出した。このうち最も多いのは，弥生時代～古墳時代初頭の竪穴住居跡である。この時期の竪穴住居跡について検討する。

当該期の竪穴住居跡は，拡張および縮小を含め18軒を確認した。内訳は，平面形が円形のものは９軒（ＳＢ２－ａ・ｂ・ｃ・ｅ，ＳＢ16，ＳＢ19，ＳＢ20－ａ・ｂ・ｃ），平面形が楕円形のものは７軒（ＳＢ11－ａ・ｂ・ｃ，ＳＢ23－ａ・ｂ・ｃ・ｄ），平面形が隅丸方形のものは２軒（ＳＢ２－ｄ，ＳＢ21）である。円形の規模は径4.3～8.6m，楕円形の規模は推定（6.4）ｍ×推定（6.0）ｍ～9.7m×9.0mである。隅丸方形の規模は残存状況が悪く，不明である。拡張もしくは縮小しているものは，円形９軒中７軒，楕円形７軒中７軒，隅丸方形２軒中１軒である。円形あるいは楕円形の住居跡は，同一場所で拡張もしくは縮小を繰り返す傾向があり，そのために規模の差が大きくなっている。隅丸方形は２軒しかないためその傾向はつかみにくい。

次に時期別に平面形を検討する。出土遺物から竪穴住居跡は３つの時期に分けられる。①弥生時代中期中葉もしくは後葉，②弥生時代後期後葉，③弥生時代後期末葉である。平面形との対応関係は以下のとおりである。なお，拡張もしくは縮小している住居跡は時期幅があると推定できるが，古い時期が不明なため最も新しい時期にあてている。

①弥生時代中期中葉もしくは後葉・・・隅丸方形（ＳＢ21）

②弥生時代後期後葉・・・・・・・・・円形（ＳＢ16，ＳＢ19，ＳＢ20－ａ～ｃ），楕円形（ＳＢ23－ｂ～ｄ）

③弥生時代後期末葉・・・・・・・・・円形（ＳＢ２－ａ～ｃ・ｅ），楕円形（ＳＢ11－ａ～ｃ，ＳＢ23－ａ）隅丸方形（ＳＢ２－ｄ）

弥生時代中期の平面形は隅丸方形である。弥生時代後期の平面形の主体は円形あるいは楕円形であるが，隅丸方形も認められる。他の地区の確認された弥生時代の竪穴住居跡は以下のとおりである。時期と竪穴住居跡の平面形との関係はＬ・Ｍ地区とほぼ同様の傾向が窺われる。

Ａ～Ｄ地区では，

弥生時代後期中葉	円形（ＳＢ１）
弥生時代後期末葉	円形（ＳＢ２－ａ～ｄ），隅丸方形（ＳＢ３）

Ｇ～Ｊ地区では

弥生時代後期後葉	隅丸方形（ＳＢ12）

Ｋ地区では

弥生時代後期後葉	円形（ＳＢ16）
弥生時代後期後葉	円形（ＳＢ15－新・旧）

3　ＳＫ219・238出土遺物について

貯蔵穴のＳＫ219・238は庄内併行期[8]～古墳時代初頭の良好な出土資料である。これらについて検討する。

ＳＫ219の遺物は大きく三箇所から出土した。上層（２層），中層（４層），底面である。上層のものは小片が多く，中層から出土したものは完形に近いものが多い。底面から出土したものは少なく，完形に近い甕が１点である。出土状況から時期差が想定され，その時期差は出土遺物の特徴から弥生時代後期末葉（庄内併行期）～古墳時代初頭におさまるもの考えられる。甕は単純口縁の甕（72・73），山陰系のもの（67・68），畿内系のもの（69～71）がある。中層から出土した畿内系甕（69）は①胴部外面の調整が縦位のハケ目後肩部に横位のハケ目を施していること，②胴部内面がヘラケズリであること，から布留式甕である。さらに，①口縁部がわずかに外反する。②口縁端部は外傾する面をもち，端面中央が窪むとともに内面がわずかに肥厚する。などの特徴から布留０式期[9]の甕と判断できる。また，底面から出土した山陰系甕（67）は草田６期（庄内併行期[10]）の特徴をもつ。中層から出土した単純口縁の甕（72・73）の底部は平底で，山陰系甕（67）の底部は小さな平底である。畿内系甕は底部を欠損し，底部の状況は不明である。鉢では74と，備後系と考えられる75があり，いずれも底部は丸底である。備後系鉢（75）は中層からの出土で，同じく中層から出土した単純口縁の甕（72・73）は平底を有していた。器形により丸底化の進度の相違がみてとれる。山陰系器台は筒部が短くなり，痕跡化する傾向があるが，中層出土の山陰系器台（88）は明瞭に筒部を残すことから草田６期（庄内併行期）に比定できよう。高杯（83・84）・低脚杯（85）は山陰系である。

ＳＫ238出土遺物は弥生時代後期末葉（庄内併行期）の一括資料である。ＳＫ238は本遺跡で最も多く遺物が出土した土坑である。器種，数量ともに多い。壺は備後系（109・110）と山陰系（111～113）がある。甕は備後北部の影響を感じさせる118や，単純口縁の133があるが，主体は山陰系の甕である。鉢では備後系のもの（134～138）が多く，山陰系は認められない。甕では山陰の影響が強く，鉢では山陰の影響が弱いことがわかる。

ＳＫ238は庄内併行期の古段階，ＳＫ219は庄内併行期の新段階～古墳時代初頭にあたると考えられる。庄内併行期～古墳時代初頭においては備後系，山陰系，畿内系の土器が認められ，他地域の影響を大きく受けていたことが窺える。

なお，ＳＫ142出土の壺（50）とＳＫ238出土の壺（110・111）の胴部上半に籠目痕跡が確認できた。籠目痕跡について，県内の例としては，神辺御領遺跡Ｅ地点ＳＤ09出土の壺[11]や，発掘調査によるものではないが上下町矢野無念寺地区出土の壺が報告されている[12]。特に後者は，「斜めの二方向に交差する二種の経に対し，一方向の緯が組み合わさった三方編を連続して編んだ，一般的に籠目編と呼ばれる技法」であることが観察されている。本遺跡出土のものは斜めの二方向に交差する二種の経はいずれも確認できる。また不明瞭であるが111では緯にあたる横方向の籠目痕跡が頸部付近と胴部上側の２箇所で認められる。横方向の籠目痕跡は50では頸部付近において確認でき，110では確認できない。籠の構造上，頸部付近では横方向の緊縛が想定されるので，

110はこの部分の籠目が残存していなかったと思われる。胴部において横方向の籠目痕跡が確認できないことが，編み方の相違を表しているのか，また単に痕跡が残らなかっただけなのかは，今後の類例の増加を待って判断したい。

4　中世の遺物について

中世の遺物としては，土師質土器・皿が多数出土している。底部の切り離し技法は主にヘラ切りで，糸切りはわずかである。備後地域においてヘラ切りは湾岸部に多く，糸切りは山間部に多いこと[13]から，沿岸部の影響を強く受けていることが看取される。

出土した皿の口径は推定（6.1）cm～13.9cmで，草戸千軒町遺跡の分類[14]による皿ＡⅠ（口径６cm～10cm）と皿ＡⅡ（口径10cm～14cm）にあたる。草戸千軒町遺跡では口縁と器高の比率により時期をある程度特定することが可能である。皿ＡⅡの場合，口縁と器高の比率が19～21の場合Ⅳ期前半（15世紀後半），15～18の場合Ⅳ期後半（15世紀末から16世紀初頭）とされる。なお，皿ＡⅠは皿ＡⅡと同様に小型化，扁平化の傾向があるが，皿ＡⅠの形態変化が顕著ではないことから，皿ＡⅡに相当するものを検討していく。本遺跡出土の皿ＡⅡは**266**，**267**，**271**，**277**，**278**，**281**で，それぞれの比率は，順に15.3，16.5，14.2，28.9，17.9，20.0である。草戸千軒町遺跡の成果を援用すると，比率からⅣ期後半が大半で，Ⅳ期前半に相当するのは**281**だけである。

その他の土師質土器では鍋（**248**・**276**）があり，草戸千軒町遺跡の分類では土師質土器鍋Ｂにあたる。**248**は草戸Ⅱ期最新段階（14世紀中頃），**276**は草戸Ⅳ期前半（15世紀後半）のものに類似する。瓦質土器では擂鉢（**249**・**257**・**258**・**282**・**283**），鍋（**250**・**286**），釜（**251**）がある。擂鉢は末近城跡出土の瓦質土器・擂鉢と類似しており，報告書[15]では15世紀末～16世紀初頭を前後する時期に比定している。鍋の**250**・**286**は草戸Ⅱ期（14世紀前半）以降に出現する瓦質土器鍋Ｆに類似する。瓦器では椀（**261**・**263**）があり，**261**は和泉型で尾上編年[16]のⅢ－２期（13世紀中葉）に相当する。

輸入陶磁器では白磁・皿の**254**，青磁・碗の**262**・**274**，染付・碗の**284**，青白磁・合子蓋の**285**がある。**254**は森田編年[17]の端反りの皿Ｅ－２に相当し，15世紀後半から16世紀代に多く出土する。青磁（**262**・**274**）は破片であるため，年代等は明らかにできない。染付・碗（**284**）は璋州窯系磁器で，16世紀後半以降と考えられる。

以上のことを参考に年代比定をすると，中世の遺構は16世紀代が主体と考えられる。また，これらの遺構には13世紀に遡る遺物（瓦器・椀）が含まれることから，本遺跡は13世紀から活動を開始し，牛の皮城跡の存続期間（16世紀前半から16世紀末）である16世紀代に集落としての盛期があったと考えられる。ほぼ同じ場所を利用したため，16世紀代の遺構がそれ以前の遺構を壊したようである。

5　集落の変遷

（1）はじめに

L・M地区における集落の変遷を概観するが，既往の調査区（A～K地区）の発掘成果も加味して記述する。縄文時代以来，現在まで集落が営まれた地点でもある。そのため，遺構については重複したり，後世に削平されたりして残りが悪く，資料的制約がある。

曽川１号遺跡は，御調川沿いに広がる河谷平野を望み，支谷の出口に位置する丘陵末端の扇状地（水田面からの比高４～14m）に立地する。緩斜面地で，北面しているが前面にさえぎるものがなく，日当たりもよい。洪水等から安全な場所にある。

（2）縄文時代（第82図）

丘陵斜面が急に落ち込む場所から，縄文時代後期前半・中頃の土器・石器がまとまって出土した。また，縄文時代後期・晩期の土器片が，斜面全域に展開する弥生時代以後の遺構から，断片的に出土している。縄文時代の遺構は北部地区に小規模な土坑ＳＫ222があり，それ以外は確認していないが，縄文土器等の出土状況からみれば，丘陵斜面下部で小規模な集落が営まれた可能性が大きい。この時期は，福山湾沿岸部の洗谷貝塚や松永湾沿岸部の大田貝塚に代表されるように，芦田川流域を中心とした備後南部地域で遺跡数が大きく増加した時期である。

（3）弥生時代中期（第83図）

弥生土器が断片的に少量出土し，中部地区で隅丸方形の竪穴住居跡ＳＢ21を検出している。

（4）弥生時代後期前葉（第83図）

竪穴住居跡は確認していないが，斜面が急に落ち込む場所から，土器がまとまって出土しており，近接地に住居跡が存在していたと考えられる。

（5）弥生時代後期中葉（第83図）

南部地区に円形の竪穴住居跡ＳＢ１，土坑ＳＫ２・136がある。中部地区に溝ＳＤ18・44・45がある。この溝は居住地を区画する溝かあるいは道路の側溝かとも考えられる。

（6）弥生後期後葉（第84図）

曽川１号遺跡では，この時期と次の時期の２時期が，集落の盛期と言える。竪穴住居跡の平面形はほとんどが円形で，分布状況から見ると，北部と南部の２地区にまとまっている。その間は建物のない空間地で，広場・道あるいは畑などになっていたと思われる。北部地区では，大型住居，中型住居，小型住居がセットになり，貯蔵穴や土坑などが存在した。大型竪穴住居跡ＳＢ15を中心に，中型竪穴住居跡ＳＢ16・19・20，小型竪穴住居跡ＳＢ12を配置している。大型竪穴住居跡は，建物の建替をたびたび行っており，同一場所で長期間住居を構えている。竪穴住居跡は西日本の他の遺跡での状況から，規模によって大・中・小と３分類できる。大型竪穴住居跡は径約８ｍ以上，中型が径５～８ｍ，小型が径５ｍ以下の規模が目安である。大型竪穴住居跡は，大家族が日常生活を行った場所とも考えられるが，集団指導者の居住場所，集会所，共同作業場，これらの複合したものと，諸説がある。

竪穴住居跡のなかに，隅丸方形をした２本柱の小型竪穴住居跡ＳＢ12があり，すぐ北に掘立柱

建物跡ＳＢ13が１棟建っていた。この小型竪穴住居跡からは鉄鏃と石鏃が同時に見つかっている。石鏃の住居跡出土例は，ほとんどが後期前半・中頃までで，後期後半の例は少ない[18]。鉄鏃の住居跡出土例は，後期は多数あり[19]，これまでの研究成果[20]によると，岡山県は有茎式，広島県は無茎式が多い傾向にあると言われている。曽川１号遺跡出土鉄鏃は無茎式である。この小型竪穴住居跡は，２本柱の間に炉跡があり，何か作業（たとえば，道具作り，鍛冶など）を行った作業小屋と思われる。

集落は溝で区画される例が多いが，大きな溝は見つかっていない。また，掘立柱建物群が集中する地区のある遺跡例（たとえば，福山市御領遺跡）もあるが，曽川１号遺跡ではそうした地区は見つかっていない。さらに，発掘区内では墓は見つかっておらず，発掘区とは別の場所にあると思われる。すぐ北側の御調川をはさんだ対岸の丘陵部には貝ヶ原遺跡があり，特殊器台を供えた墳丘墓と考えられている[21]。曽川１号遺跡の属するグループのリーダーの墓の可能性がある。

（７）弥生時代後期末葉（庄内式併行期）・古墳時代初頭（第85図）

後期後葉の時期と同じように，竪穴住居跡の分布状況は，南部・北部の２地区に分かれ，集落の構造は，前時期を受け継いでいる。南部地区では大型と中型竪穴住居跡の規模が建替によって変化するが，大型竪穴住居跡ＳＢ２・23，中型竪穴住居跡ＳＢ２・23，小型竪穴住居跡ＳＢ３，貯蔵穴，土坑が存在する。前時期と同様，大型・中型竪穴住居跡は平面形が円形であるが，小型竪穴住居跡は隅丸方形である。大型竪穴住居跡は，同じ場所で何度か建替を行っている。大型竪穴住居跡が建替を繰り返すのは，近くでは，世羅町近森遺跡[22]（円形竪穴住居跡，径８～10m）でも発見されており，三次市・庄原市でも例があり，この時期の集落では，一般的様相である。小型竪穴住居跡は隅丸方形の２本柱の住居で，柱と柱の間に炉跡があり，土製の紡錘車が出土している。おそらく，作業場であったと思われる。なお，掘立柱建物跡については不明である。

この時期になると土器のなかに，山陰系土器（壺・甕・鼓型器台など）が多数含まれるようになる。このような傾向は，曽川１号遺跡より北側の庄原市・三次市などを中心とする広島県東北部地域の遺跡で多数の例がある。

（８）古墳時代前半（第86図）

南部地区に方形・隅丸方形の竪穴住居跡や土坑がある。隅丸方形の竪穴住居跡ＳＢ７（推定一辺約６ｍ），方形の竪穴住居跡ＳＢ４（一辺約5.7m），方形の竪穴住居跡ＳＢ24（一辺約3.8m）がある。ＳＢ４･24は2本柱の構造で，柱の間に炉状の遺構があり，ＳＢ７のような日常生活の居住場所ではなく，何らかの工房・作業場であろう。竪穴住居跡に機能の違いがあったと考えられる。

（９）古墳時代後半（第87図）

南部と中部地区に遺構がまとまっている。南部地区では，方形・隅丸方形の竪穴住居跡，土坑などが，中部地区では，方形・隅丸方形の竪穴住居跡，土坑，溝などがある。

南部地区のＳＢ５は方形の竪穴住居跡で，４本柱の構造である。カマドの施設はない。ＳＢ６も同様な竪穴住居跡であろう。古墳時代後半の竪穴住居跡としては，最も普遍的な構造である。

竪穴住居跡のまわりに，廃棄土坑などがある。中部地区でもほぼ同様な在り方で，ＳＢ18は方形の竪穴住居跡で４本柱構造であり，何回かの建替を行っている。ＳＢ22もＳＢ18と同じような竪穴住居跡であろう。住居跡の周囲に溝を巡らしている。

この時期では，方形小型の２本柱構造で柱の間に炉がある形態の竪穴住居跡は確認していない。前時期のように竪穴住居跡の規模や構造に，機能の差が反映している状況から，変化した可能性がある。なお，曽川１号遺跡の竪穴住居跡ではカマドは確認していない。

（10）古代（第88図）

古代の遺構は，南部，中部の２地区に分かれている。古代の遺構は時期的には８～９世紀の遺構が多い。

南部地区に，丘陵斜面を横切る東西溝ＳＤ19がある。東西溝の南に，土坑ＳＫ６がある。この土坑近辺に古代の土器が出土する柱穴があり，付近に掘立柱建物が存在した可能性が高い。東西溝は，道路側溝であった可能性もある。古代の山陽道は御調川沿いを通っていたことは確実であり，もし仮にこの東西溝が道路側溝であったとすれば，古代山陽道との関係が問題になるが，様相は断片的であり，詳細は不明である。

中部地区には，掘立柱建物ＳＢ25や建物に近接して土坑等がある。ＳＢ25の柱穴の一つから須恵器・鉄斧が出土した。建物建設に際して，これらの遺物を柱穴に埋納し，祭祀を行っている。

また，集落縁辺部，丘陵斜面が急に落ち込む場所に縄文土器・弥生土器がまとまって堆積していたが，その上部から古代の須恵器，平瓦が少量出土している。

（11）中世（第89図）

16世紀頃の遺構は，南部，中部の２地区に分かれている。

南部地区は掘立柱建物ＳＢ８・９・10，土坑などがあり，日常生活場所であろう。土坑ＳＫ８には容器が埋められていたような痕跡があった。居住地は東西の２箇所に分かれている。いずれも，建物の周囲に細い溝がある。溝は，標高の高い側にもあるので，区画することのほか排水溝としても機能していたと考えられる。

中部地区では，作業小屋やそれと関連する施設を確認した。掘立柱建物ＳＢ17がある。作業が何であるかは不明であるが，建物内中央に土坑ＳＫ104があり，そこには焼けた壁土・石，炭・灰が多量に堆積していた。火を使用する施設の下部施設と思われる。また，建物外に近接して，土坑ＳＫ103があり，液体を溜める施設と考えられる。さらに，ＳＢ17の北東に土坑ＳＸ27がある。壁土や炭化物が堆積し，取瓶（とりべ）が出土している。金属加工の作業場が近くに存在したと思われる。ＳＢ17の南には，大型のカマド状施設ＳＫ151があり，近接して，複数の土坑ＳＫ146～150などが点在した。日常生活場所ではなく，何らかの作業場に関係するものであったと考えられる。

なお，16世紀には，すぐ南側丘陵上で，牛の皮城跡が機能している。

（12）集落の特徴

曽川１号遺跡は，弥生時代では，地域における拠点集落ではなく，一般的な通例の集落であっ

たと思わる。同じ芦田川流域であれば，福山市神辺町の大宮・御領遺跡のように，竪穴住居跡や掘立柱建物が群として存在し，環濠などの大規模な溝で囲われた集落とは様相が異なる。集落は大型竪穴住居跡と中・小型竪穴住居跡，少数の掘立柱建物跡，貯蔵穴，土坑などからなっている。弥生時代は大型・中型竪穴住居跡は平面形が円形であるが，小型竪穴住居跡は平面形が隅丸方形である。大型竪穴住居跡は何回かの建替が行われていることも特徴である。それが，古墳時代になると平面形は隅丸方形・方形に統一されていく。さらに，２本柱構造の隅丸方形・方形小型竪穴住居跡（工房・作業場など日常生活場所ではないと推定）が，弥生時代中期から古墳時代前期まで存続することも特徴である。

集落の基盤が何であったかの究明は今後の課題である。周囲の低地での稲作は可能であったが，その他の生産活動については不明である。いずれにしても，風水害にも対応でき，また交通の便にも恵まれている位置にある。このような条件から，縄文時代から現代まで連続して集落が営まれる場所であったと考えられる。

註

（１）縄文土器の型式や時期については次の文献による。
大川清・鈴木公雄・工楽善通編『日本土器事典』雄山閣出版株式会社　1996年

（２）藤野次史・槙林啓介「山中池南遺跡第６地点」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』広島大学埋蔵文化財調査室　2005年

（３）藤野次史・中村真里「西ガガラ遺跡第１地点」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室　2004年

（４）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『行年遺跡発掘調査報告書』1985年

（５）川越哲志「帝釈名越岩陰遺跡の発掘調査」『帝釈峡遺跡群』1976年

（６）縁帯文土器について，ここでは，福田ＫⅡ式の後の津雲Ａ式・彦崎ＫⅠ式以降の土器をいう。
泉拓良・玉田芳英「文様系統論－縁帯文土器－」『季刊考古学』第17号　雄山閣出版株式会社　1986年

（７）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（４）城根遺跡　曽川１号遺跡（Ｅ地区）　牛の皮城跡（第４次）』 2008年

（８）本遺跡出土の土器のうち，弥生時代後期後半から後期末葉については次の報告書の編年による。
財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）曽川１号遺跡（Ａ～Ｄ地区）』 2006年

（９）奈良県立橿原考古学研究所『矢部遺跡－国道24号線橿原バイパス建設に伴う遺跡調査報告（Ⅱ）－』1986年

(10) 島根県鹿島町教育委員会『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』 1992年

(11) 広島県教育委員会『神辺御領遺跡－国鉄井原線建設に係る発掘調査報告－』1981年

(12) 妹尾周三「編籠痕のついた土器」『みよし風土記の丘　№12』みよし風土記の丘友の会　1983年

(13) 鈴木康之「瀬戸内の中世土器－吉備地域の土師質土器を中心に－」『考古学から見た地域文化－瀬戸内の歴史復元－』渓水社　1999年

(14) 草戸千軒町遺跡の土器類の分類及び時期については次の文献による。
鈴木康之「土師質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』Ⅴ　広島県教育委員会　1996年

(15) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『末近城跡』 2002年

(16) 尾上　実「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念　古文化論叢』古代を考える会（編集）藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会（発行）　1983年

(17) 森田　勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究　№２』日本貿易陶磁研究会　1982年

(18) 広島県内での石鏃の竪穴住居跡出土例は，ほとんどが後期でも前半・中頃までで，後期後半の例は未確認の状況である。たとえば，東広島市寺家城遺跡，竪穴住居跡，後期前半・中頃　石鏃１点（財団法人広島県

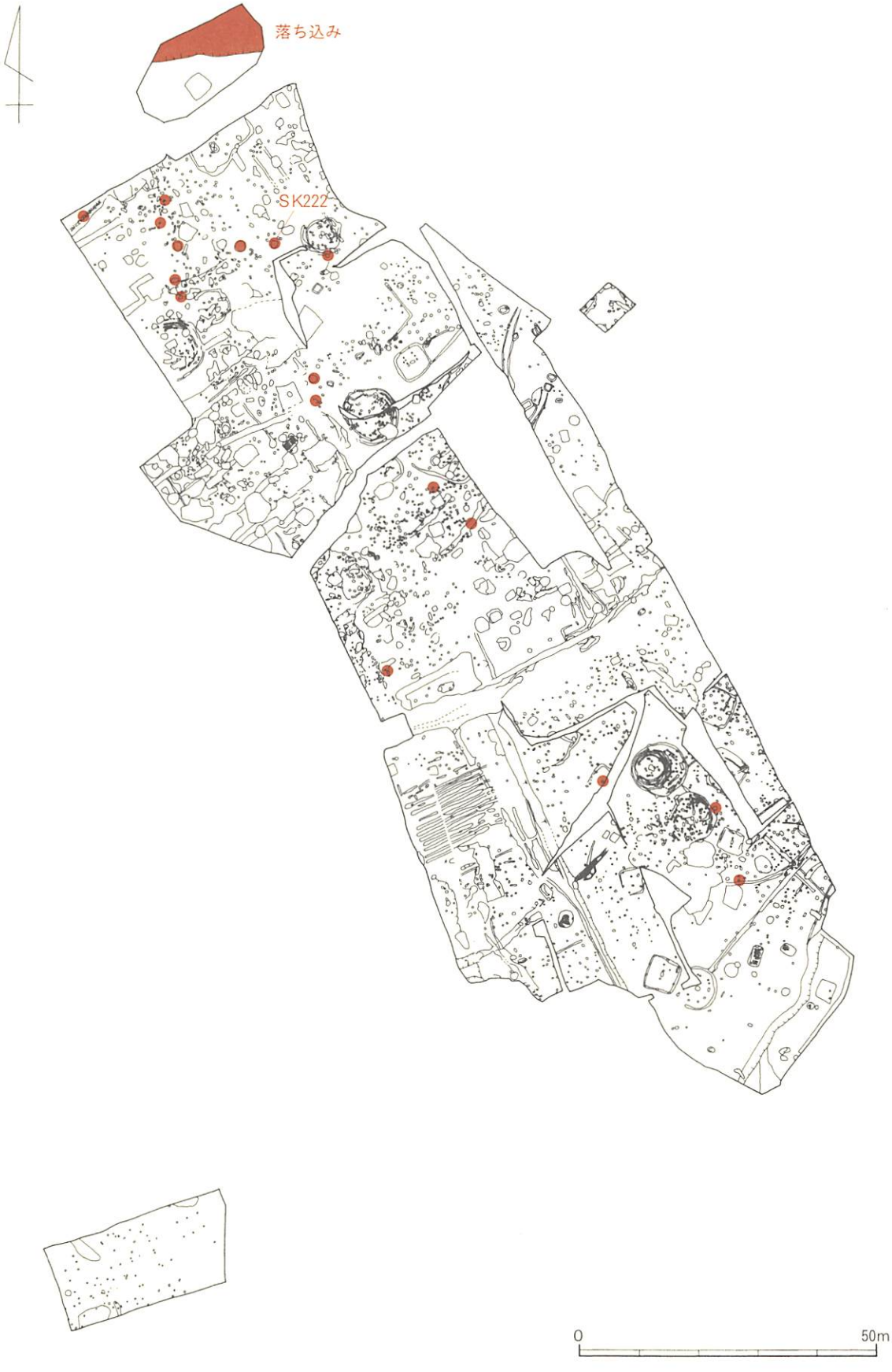
埋蔵文化財調査センター『寺家城遺跡・近信遺跡』 1993年)，東広島市胡麻５号遺跡，第２調査区ＳＢ２竪穴住居跡，後期前半・中頃，石鏃１点（財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『東広島市ニュータウン遺跡群』Ⅰ 1990年)，東広島市米山遺跡，ＳＢ１竪穴住居跡，後期前半・中頃，石鏃１点（財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅴ) 1990年）などの出土例があるが，後期後半の例ではない。

(19) 広島県内で鉄鏃の住居跡出土例は，後期には多数ある。たとえば，福山市沢田遺跡 ＳＢ２竪穴住居跡 後期 鉄鏃１点（財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅶ) 1991年)，福山市石鎚権現遺跡Ｃ地点 ＳＢ23竪穴住居跡 後期 鉄鏃１点（広島県立埋蔵文化財センター『石鎚権現遺跡群発掘調査報告 Ｃ地点』 1985年）などの例がある。

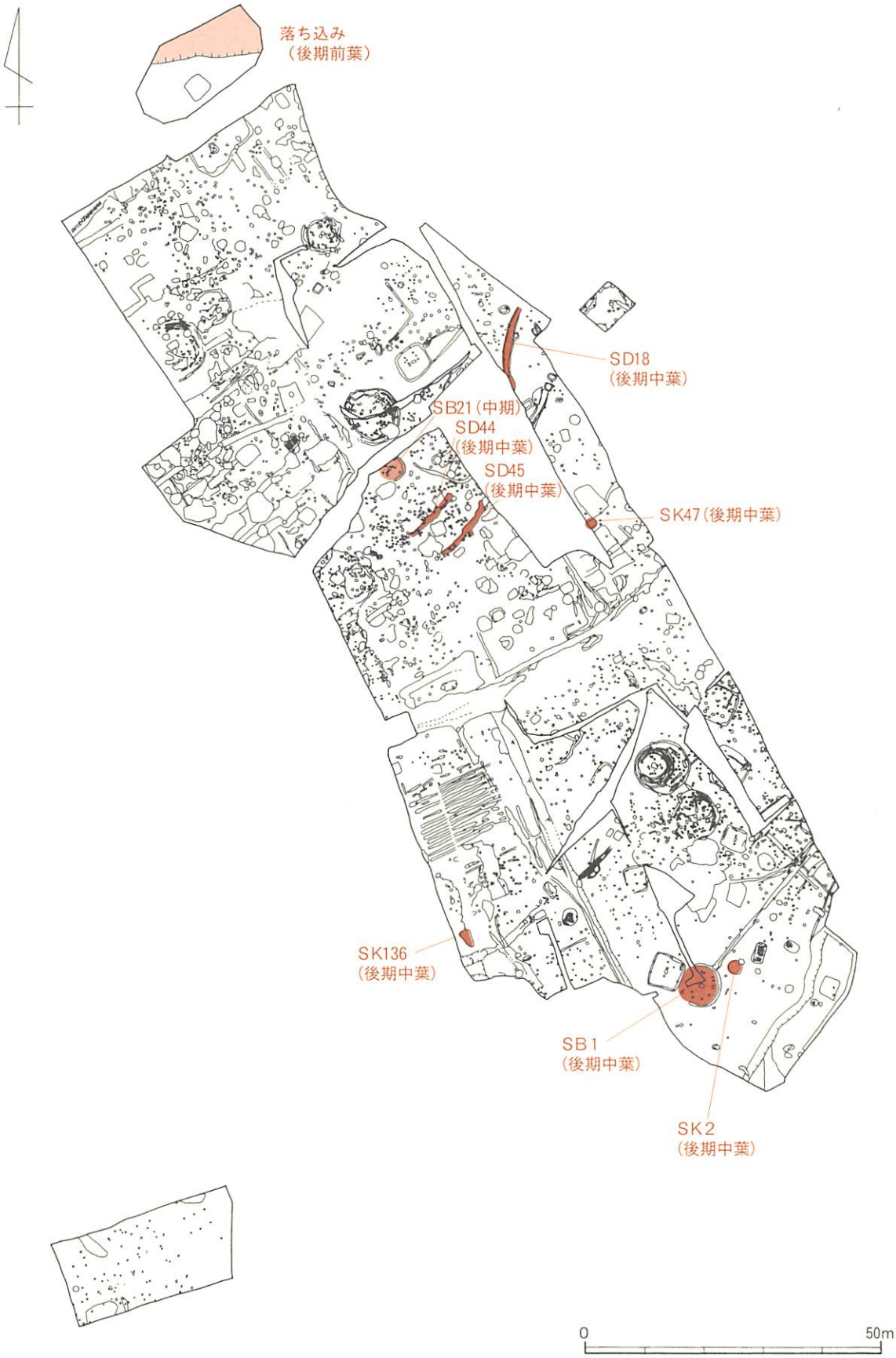
(20) 野島永「弥生時代鉄器の地域性」『考古論集 潮見浩先生退官記念論文集』 潮見浩先生退官記念事業会 1993年

(21) 潮見浩「貝ヶ原遺跡出土の特殊器台形土器」『広島県文化財調査報告』第17集 広島県教育委員会 1991年

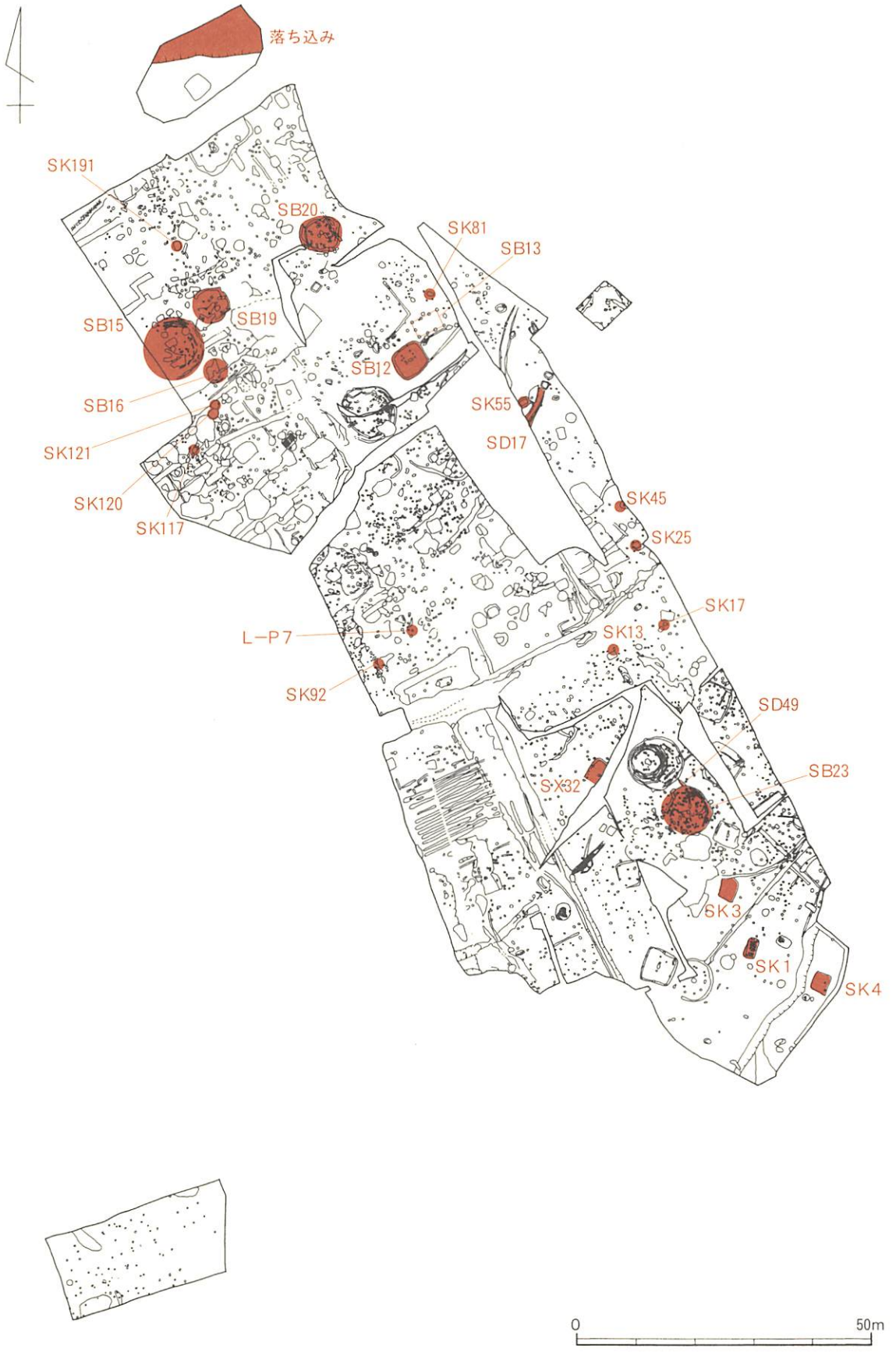
(22) 財団法人広島県教育事業団『近森遺跡』 2008年



第82図　曽川１号遺跡　縄文時代　遺物出土地点配置図（１：1,000）赤色は縄文土器出土地点

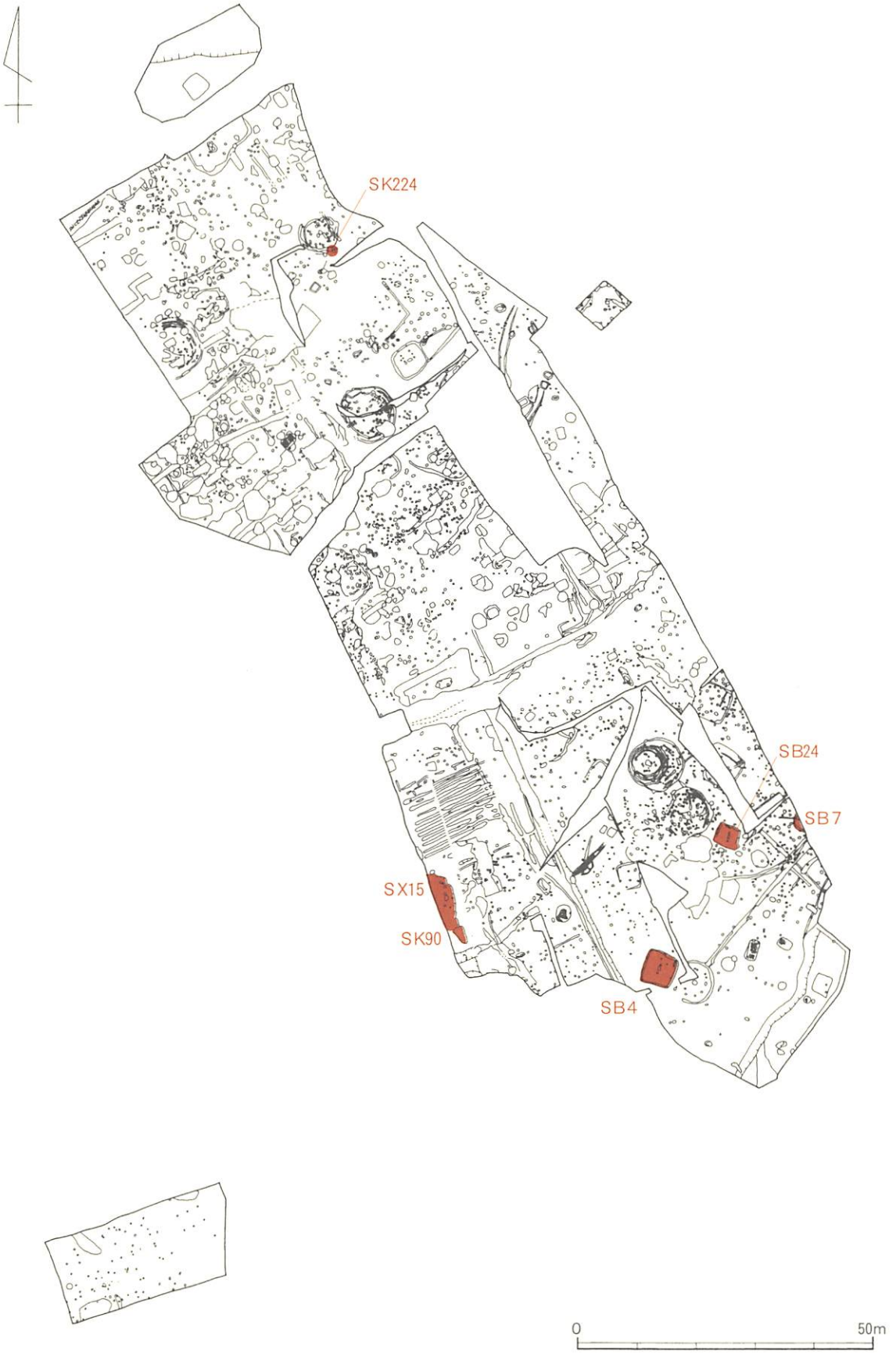


第83図　曽川１号遺跡　弥生時代中期，後期前葉，後期中葉　遺構配置図（１：1,000）赤色は当該期の遺構



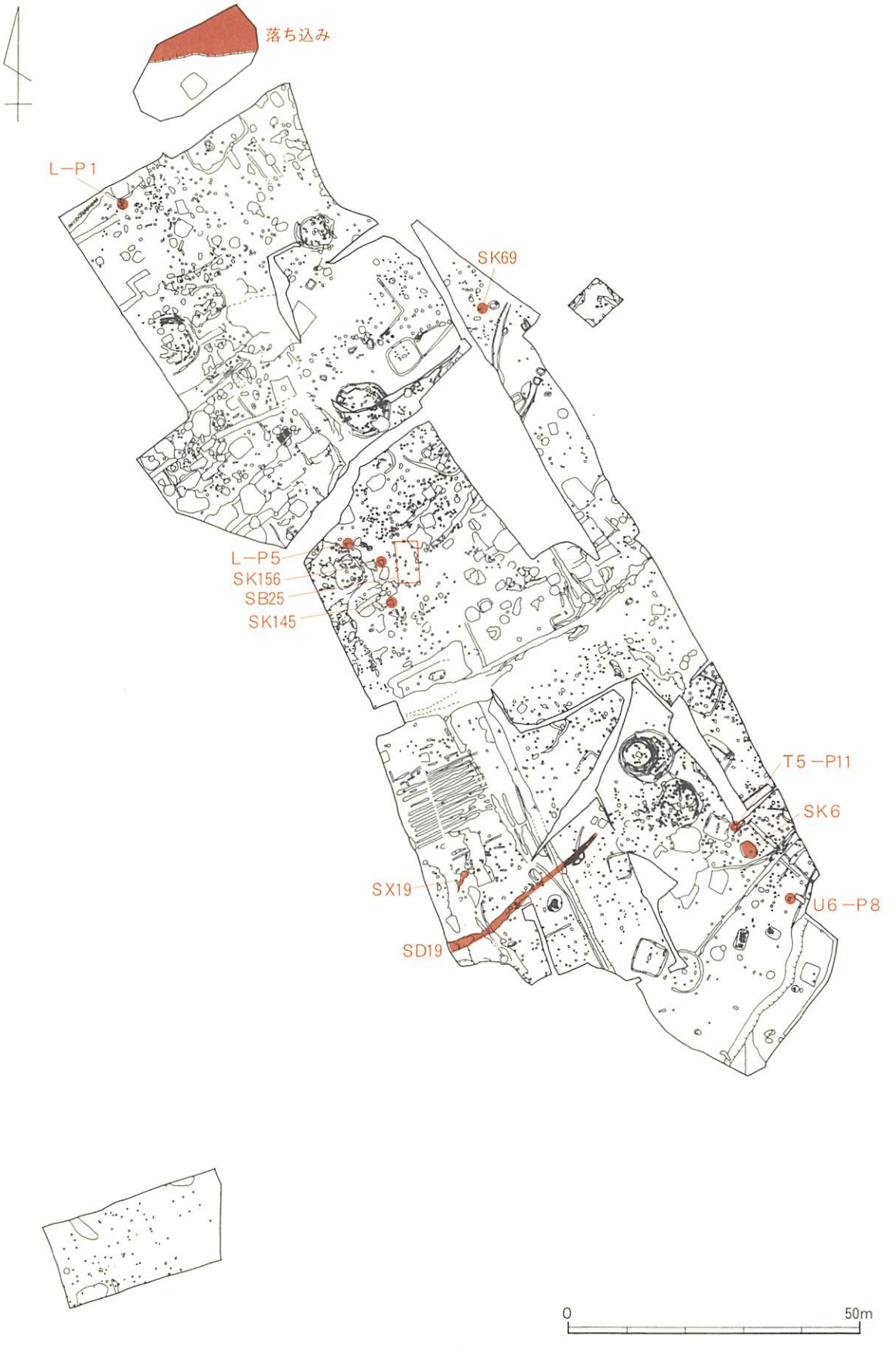
第84図　曽川１号遺跡　弥生時代後期後葉　遺構配置図（１：1,000）赤色は当該期の遺構

第85図　曽川１号遺跡　弥生時代後期末葉・古墳時代初頭　遺構配置図（１：1,000）赤色は当該期の遺構

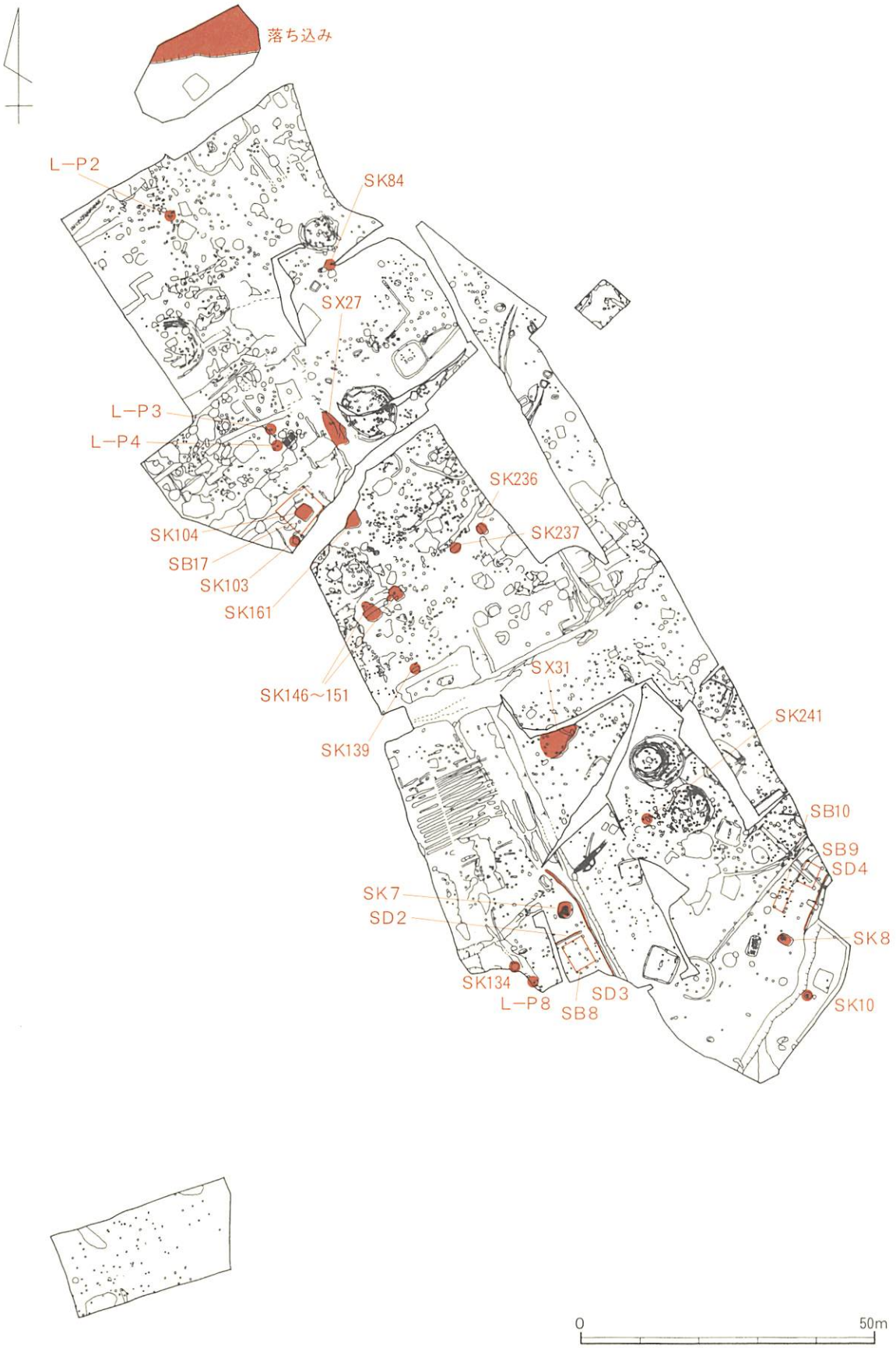


第86図　曽川１号遺跡　古墳時代前半　遺構配置図（１：1,000）赤色は当該期の遺構

第87図　曽川１号遺跡　古墳時代後半　遺構配置図（１：1,000）赤色は当該期の遺構



第88図　曽川１号遺跡　古代　遺構配置図（１：1,000）赤色は当該期の遺構



第89図　曽川１号遺跡　中世　遺構配置図（１：1,000）赤色は当該期の遺構

a　遺跡遠景（空中写真，北から）

b　遺跡遠景（空中写真，西から）

図版２

a　Ｌ地区遺構全景
（空中写真，
北西から）

b　Ｌ地区北部遺構（北から）

図版３

a　Ｉ（－５・－６）区
周辺遺構完掘状況
（南東から）

b　Ｋ・Ｌ（－３），Ｌ
（－４）区周辺遺構
完掘状況（南西から）

c　Ｍ・Ｌ（－３）区
周辺遺構完掘状況
（北西から）

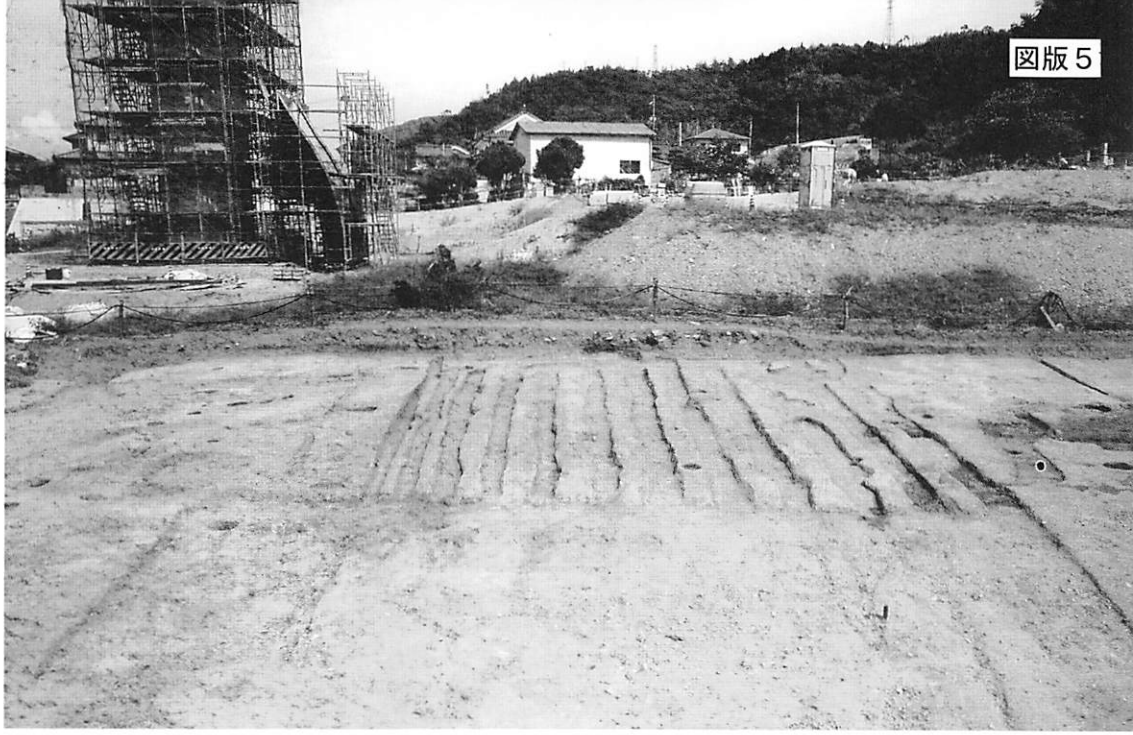
図版４

a　O・P（－2），O・P・Q（－1），Q0区周辺遺構完掘状況（南から）

b　N・O（－2），O（－1）区周辺遺構完掘状況（南西から）

c　P（－2），P・Q（－1），Q0区周辺遺構完掘状況（南西から）

図版５



a　Ｒ・Ｓ０区周辺遺構
完掘状況（南西から）

b　Ｔ・Ｕ０，Ｔ・Ｕ１区
周辺遺構完掘状況
（北西から）

c　Ｕ・Ｖ０区周辺遺構
完掘状況（西から）

図版６

a　M地区北西部遺構
完掘状況（北から）

b　M地区中央付近遺構
完掘状況（西から）

c　K・L０区周辺遺構
完掘状況（南西から）

a　M地区南東部遺構
完掘状況（北西から）

b　R・S１，R・S２，
R３区周辺遺構完掘
状況（西から）

c　S・T３，R・S・
T４，S・T５区
周辺遺構完掘状況
（北西から）

図版８

a　ＳＫ222完掘状況
（北から）

b　ＳＢ２完掘状況
（北西から）

c　ＳＢ２完掘状況
（南西から）

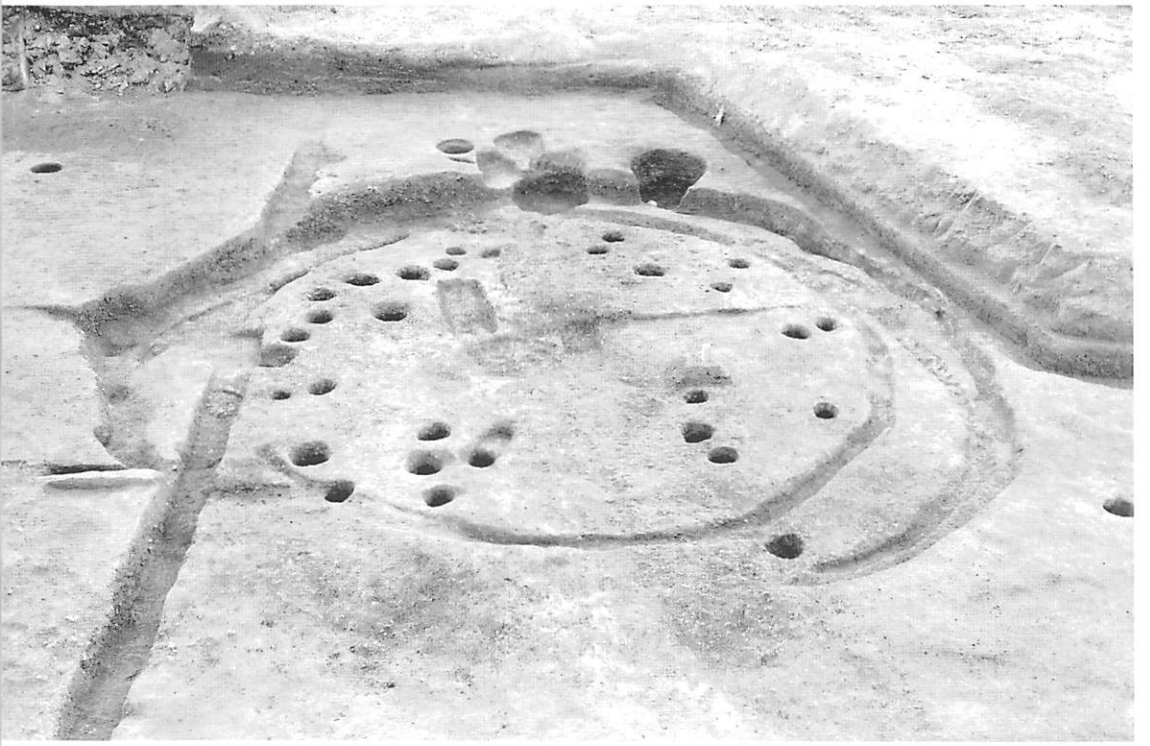
a　ＳＢ11完掘状況
（北西から）

b　ＳＢ16完掘状況
（南西から）

c　ＳＢ19完掘状況
（南から）

図版10

a　ＳＢ20炭化物出土
状況（北西から）



b　ＳＢ20完掘状況
（北西から）

c　ＳＢ20有孔砥石
出土状況（北西から）

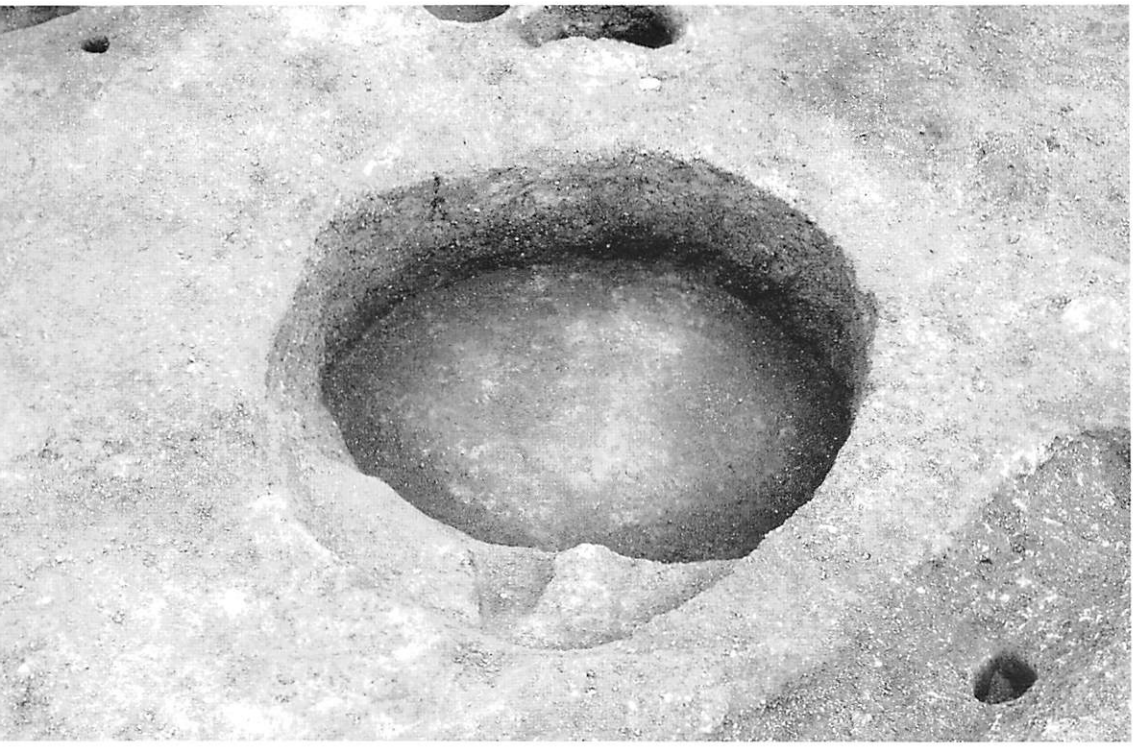
a　ＳＢ21完掘状況
（南西から）

b　ＳＢ23完掘状況
（北から）

c　ＳＢ23完掘状況
（南西から）

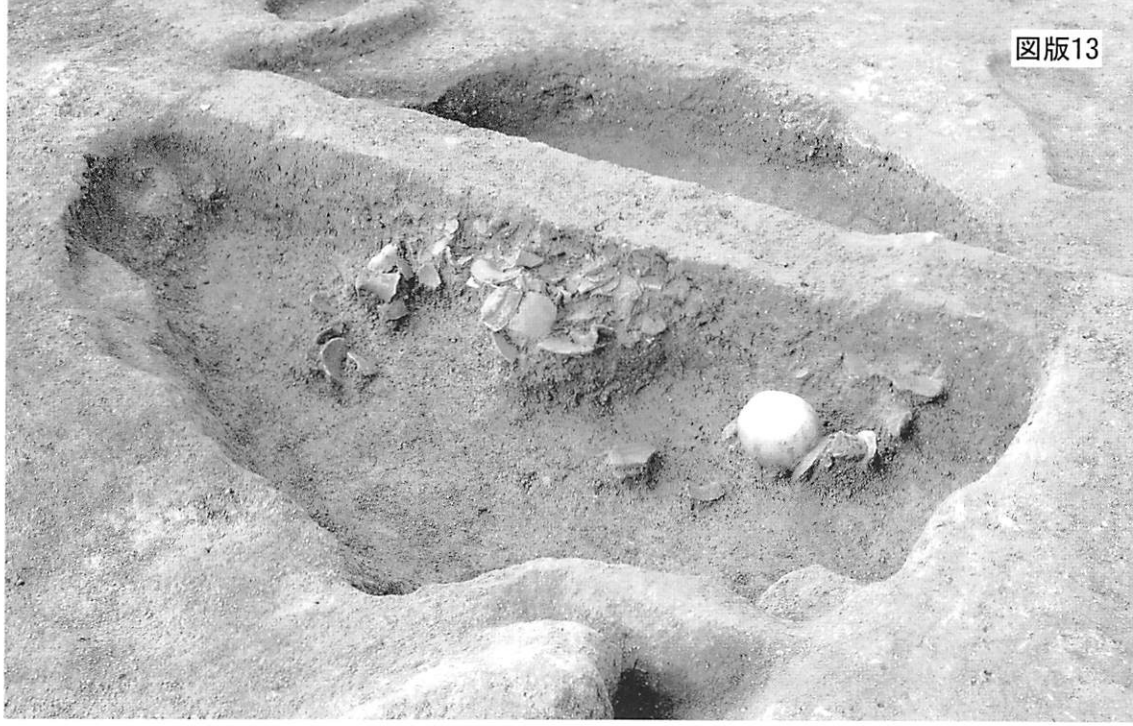
図版12

a　ＳＫ142遺物出土状況
（東から）



b　ＳＫ191完掘状況
（南東から）

c　ＳＫ213遺物出土状況
（東から）

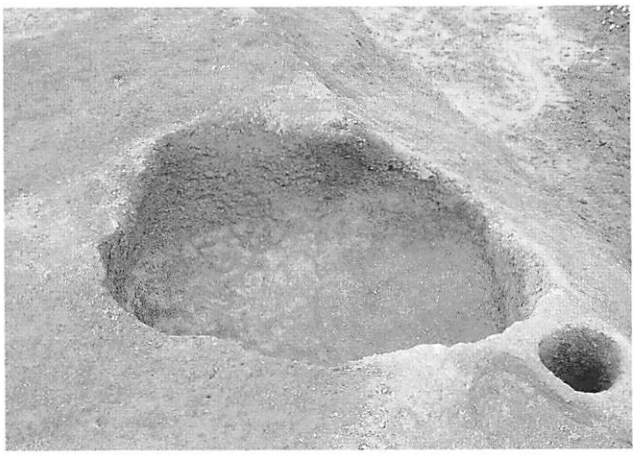


a　ＳＫ219遺物出土
状況・上～中層
（北東から）

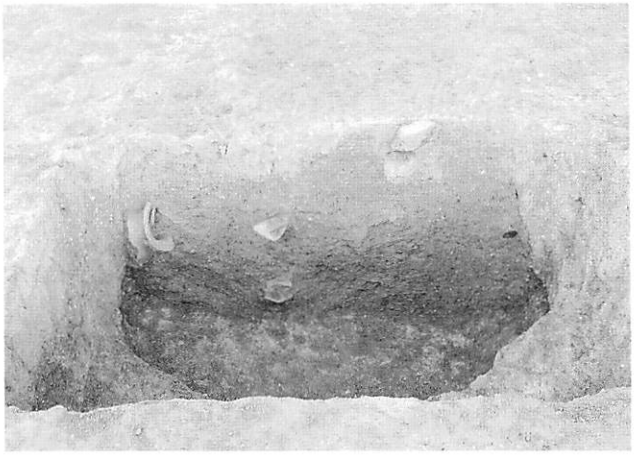
b　ＳＫ219遺物出土
状況・中層（北から）

c　ＳＫ219完掘状況
（北東から）

a　ＳＫ227石検出状況（南西から）



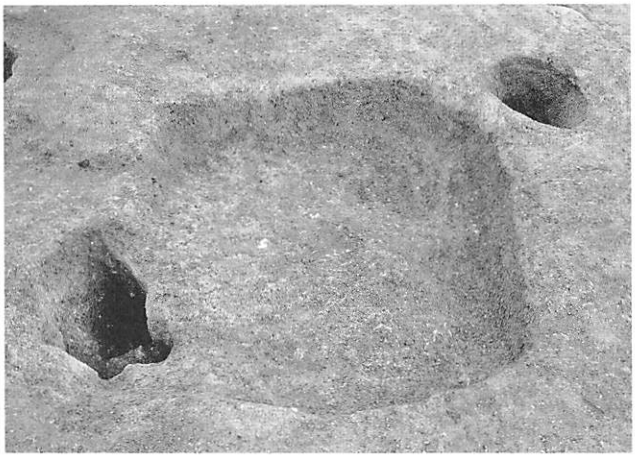
b　ＳＫ230完掘状況（東から）



c　ＳＫ229土層断面（南東から）

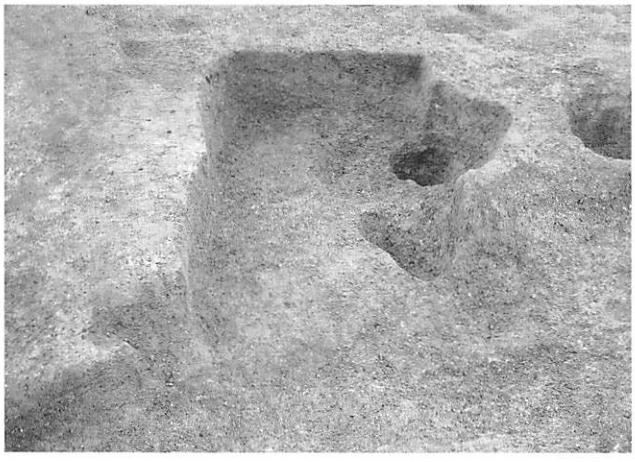
d　ＳＫ229完掘状況（南東から）

e　ＳＫ231完掘状況（北西から）



f　ＳＫ233完掘状況（北西から）

g　ＳＫ234遺物出土状況（北から）



h　ＳＫ235完掘状況（北西から）

a　ＳＫ238遺物出土状況（西から）

b　ＳＫ238完掘状況（北西から）

a　ＳＤ44・45完掘状況（南西から）

b　ＳＸ23完掘状況（北東から）

a　ＳＸ26遺物出土状況
（北東から）

b　ＳＸ32完掘状況
（北西から）

c　ＳＸ33完掘状況
（南西から）

図版18

a　ＳＢ６完掘状況
（西から）

b　ＳＢ18完掘状況
（東から）

c　ＳＢ22完掘状況
（南西から）

a　ＳＢ24完掘状況
（西から）

b　ＳＫ224～227完掘状況
（北西から）

c　ＳＫ232完掘状況
（南西から）

図版20

a　ＳＤ19完掘状況
（北東から）

b　ＳＤ43完掘状況
（南西から）

c　ＳＸ34完掘状況
（西から）

a　ＳＫ236完掘状況
（北東から）

b　ＳＫ237完掘状況
（北西から）

c　ＳＫ241完掘状況
（南西から）

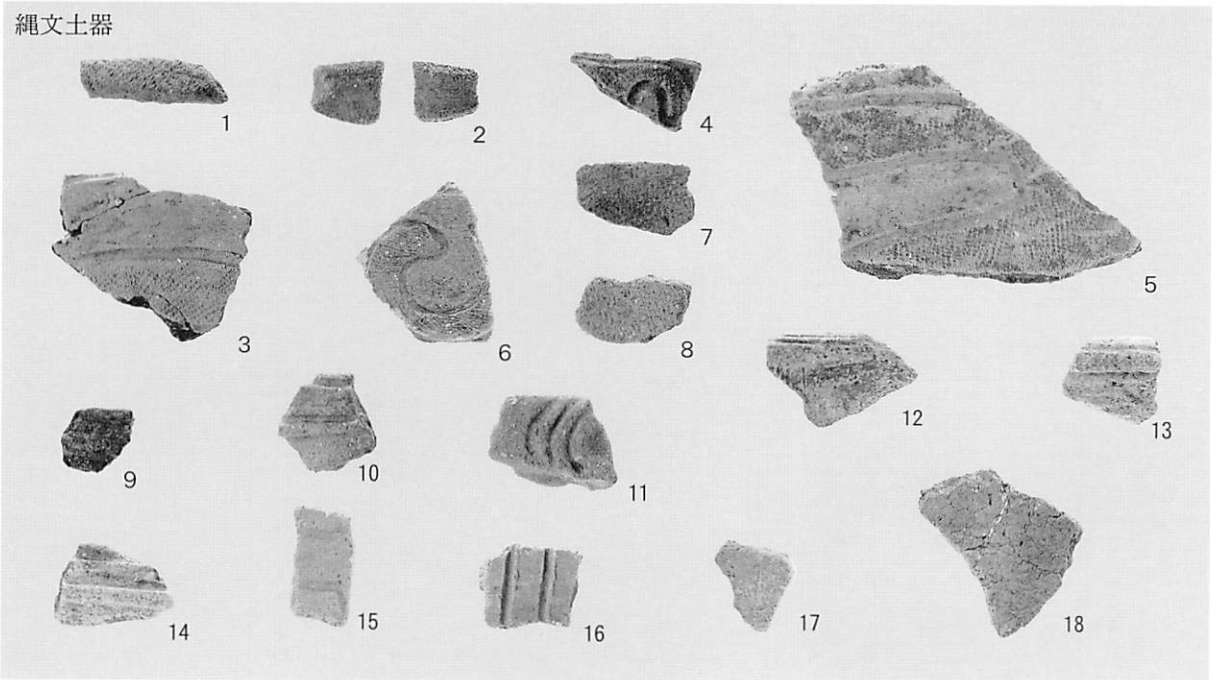
図版22

a　ＳＸ27完掘状況
（北西から）

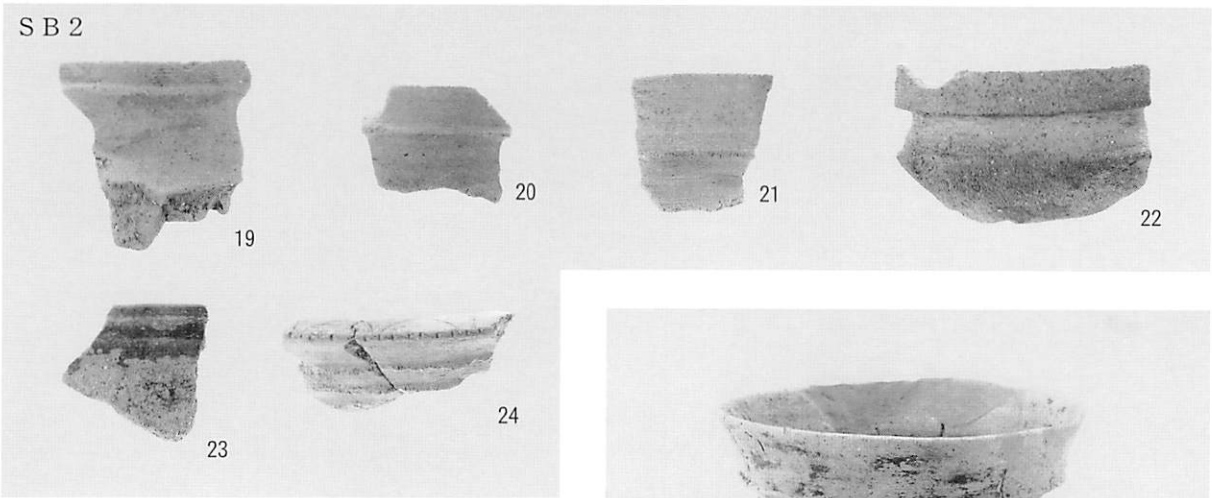
b　ＳＸ27土坑１・２完掘
状況（北西から）

c　ＳＸ31完掘状況
（南西から）

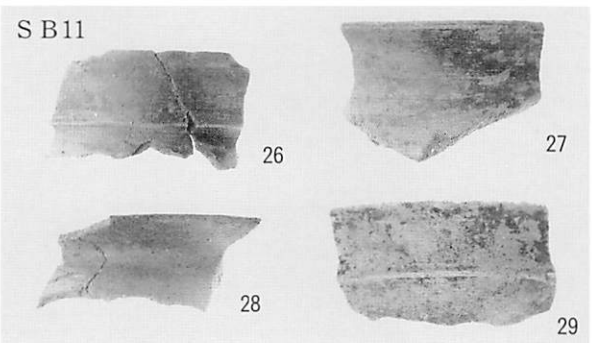
縄文土器



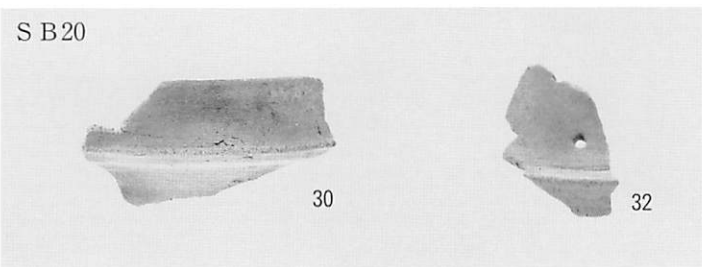
ＳＢ２

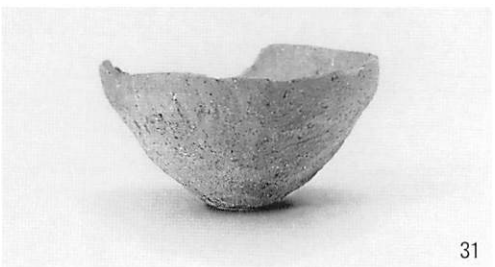


ＳＢ11

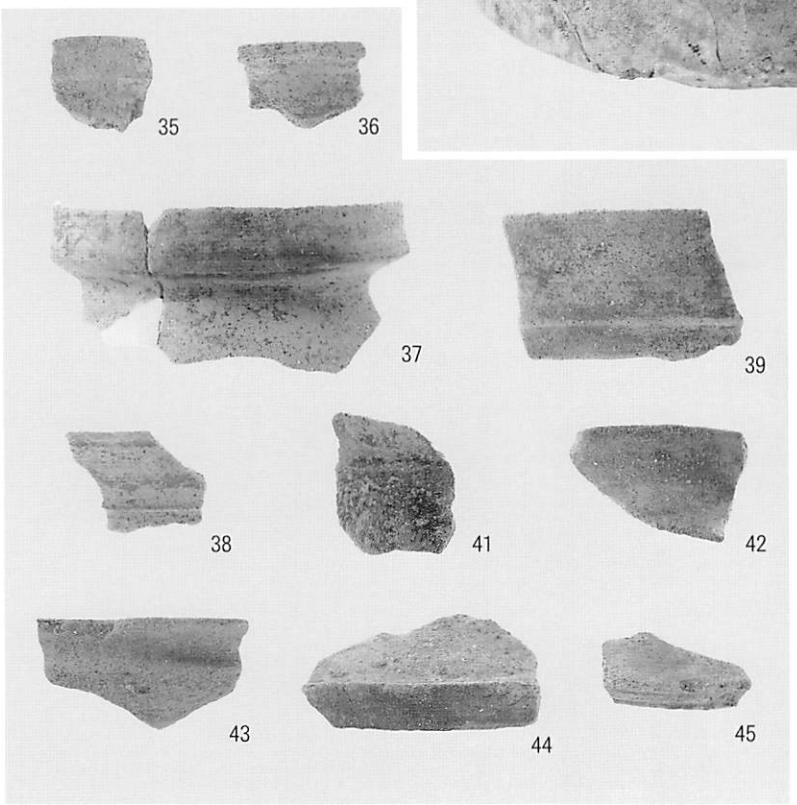


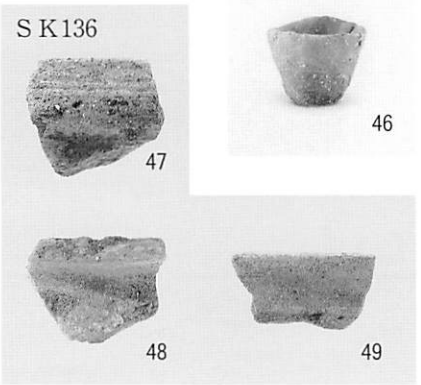
ＳＢ20



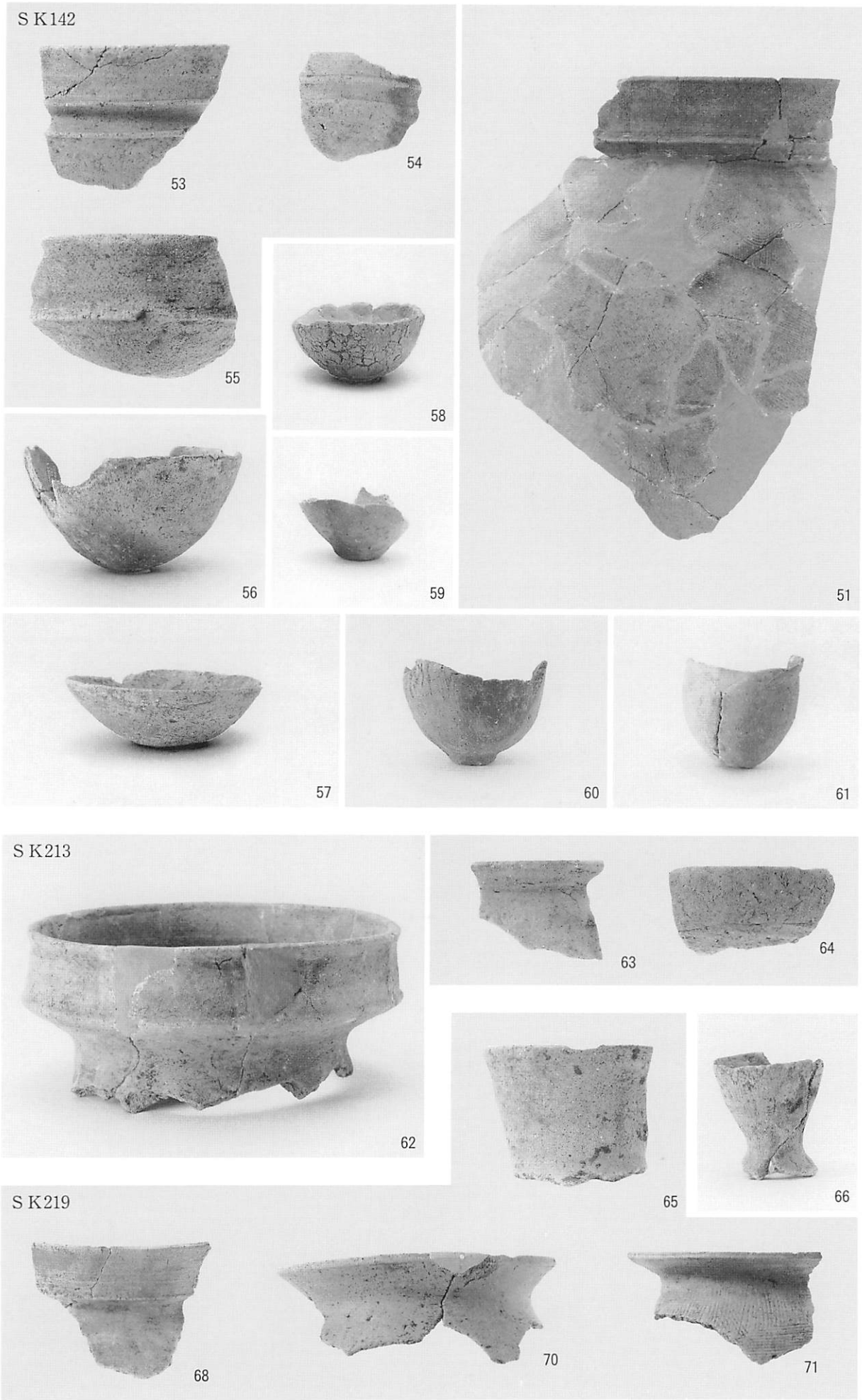


出土遺物１　縄文時代，弥生時代～古墳時代初頭①

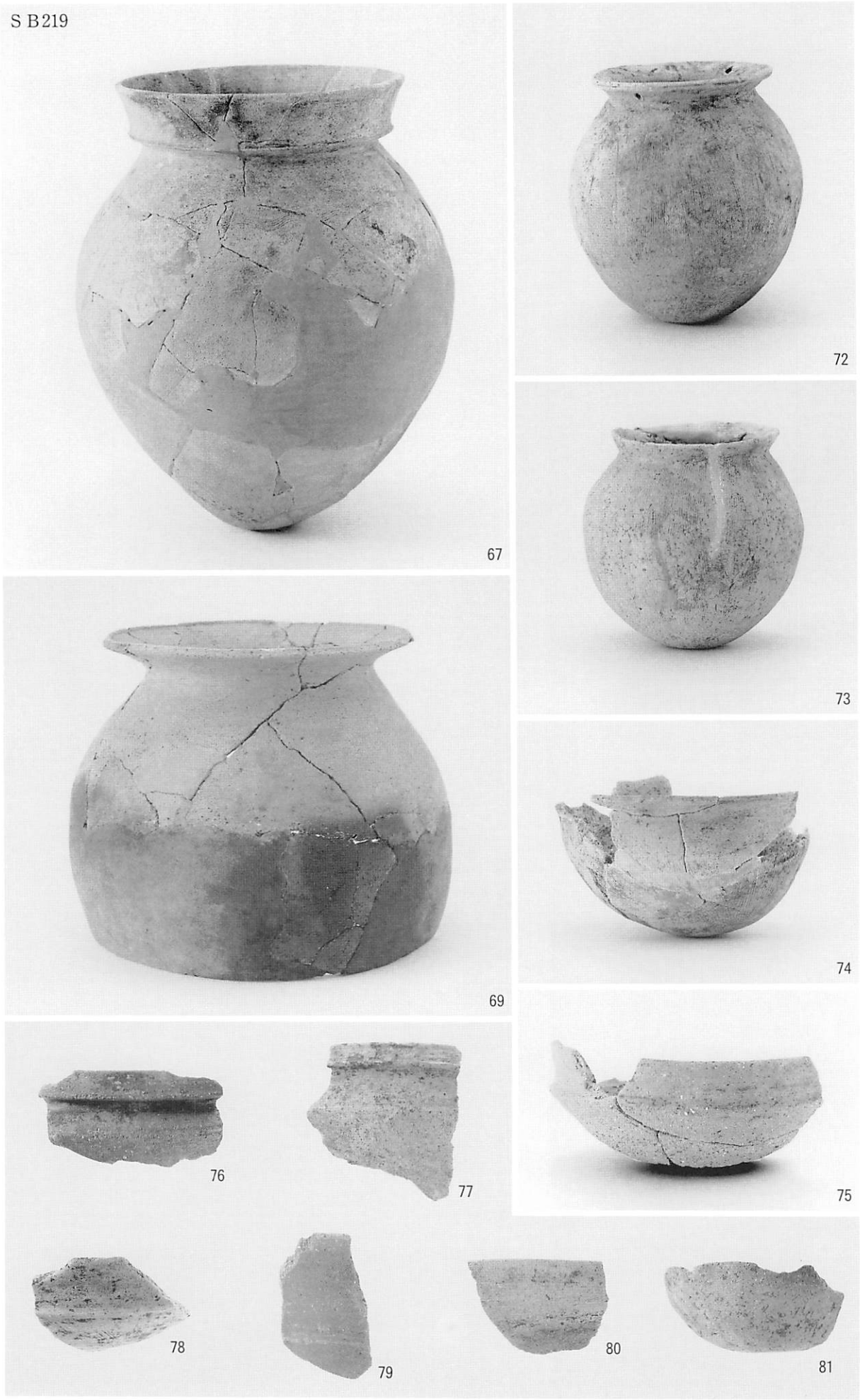




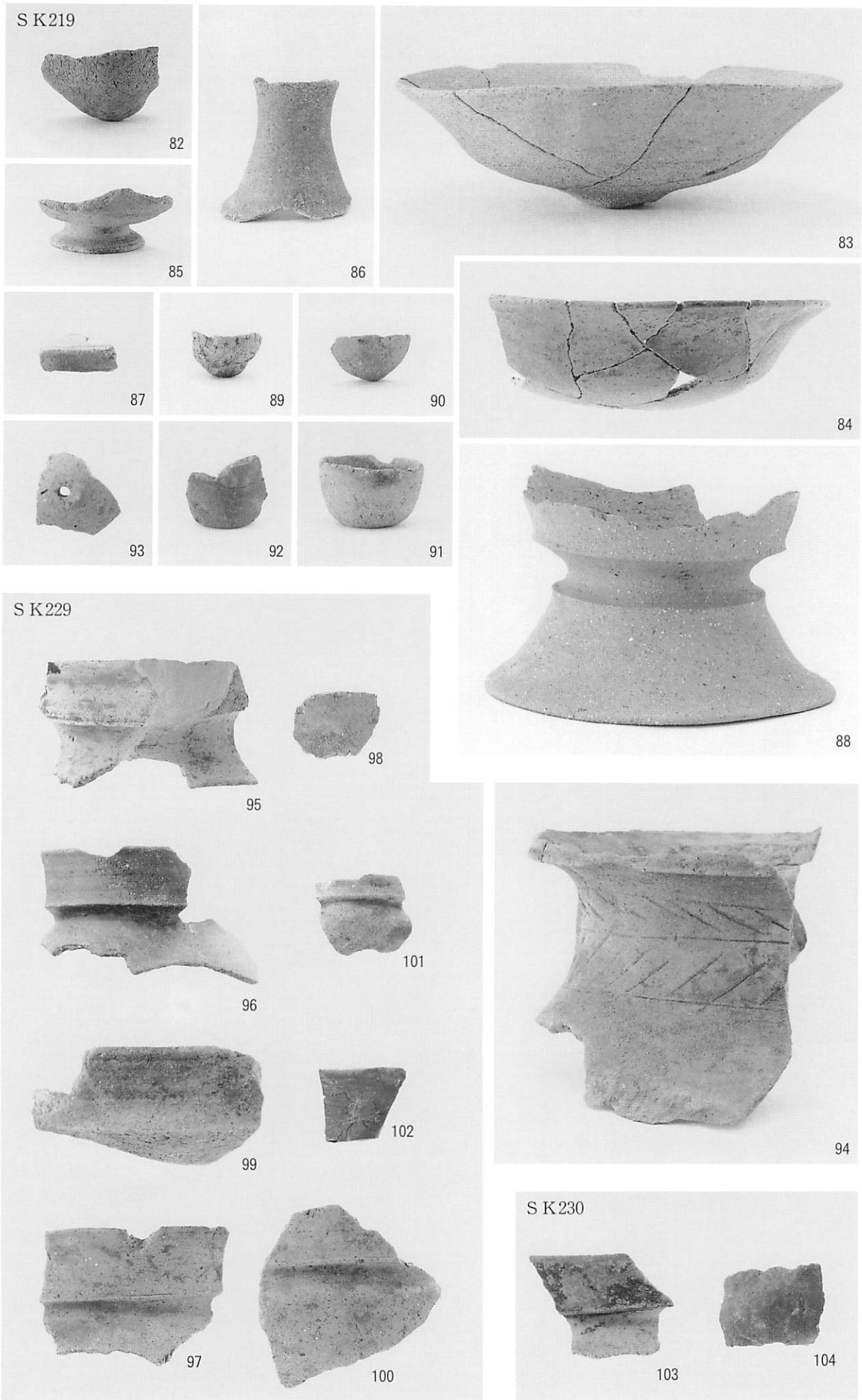
出土遺物２　弥生時代～古墳時代初頭②



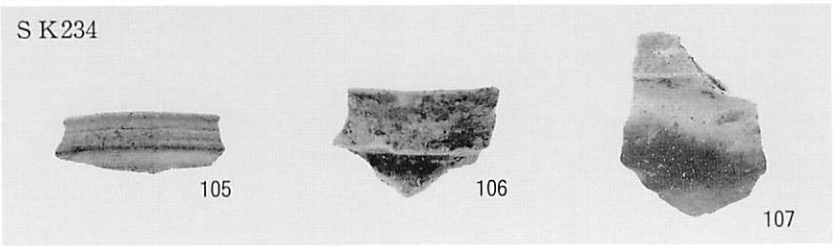
出土遺物３　弥生時代～古墳時代初頭③

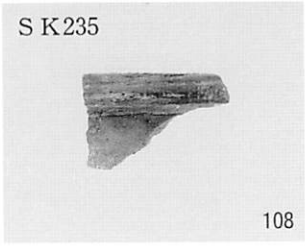


出土遺物４　弥生時代～古墳時代初頭④

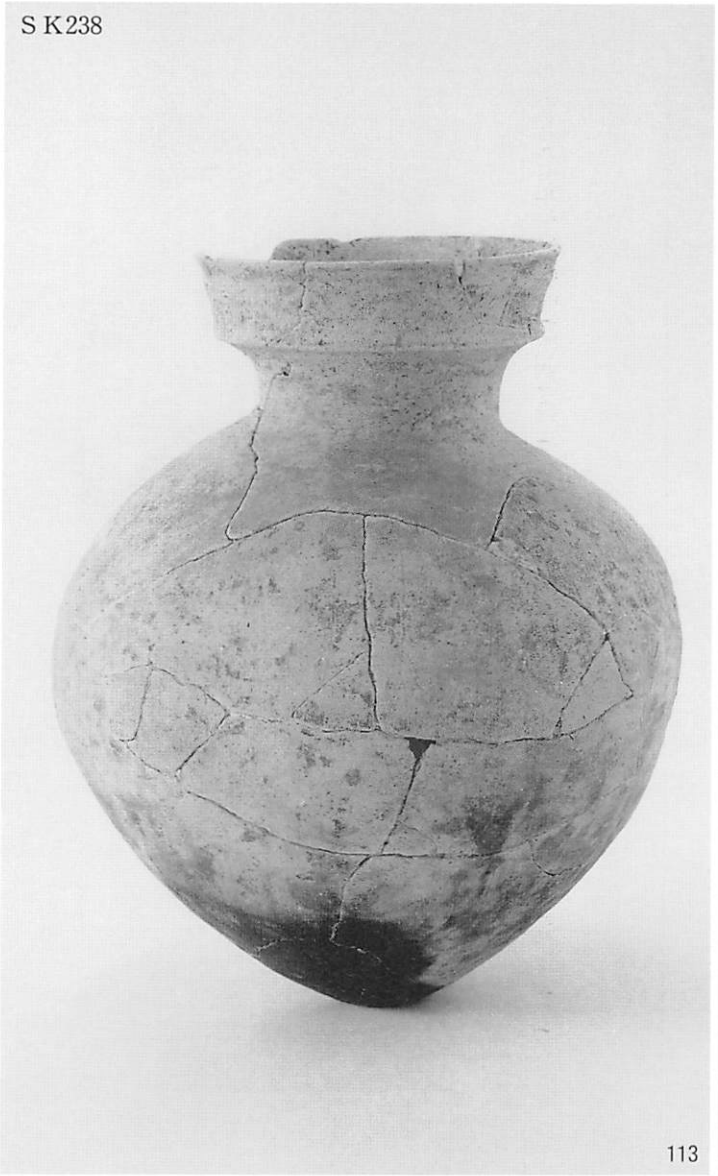


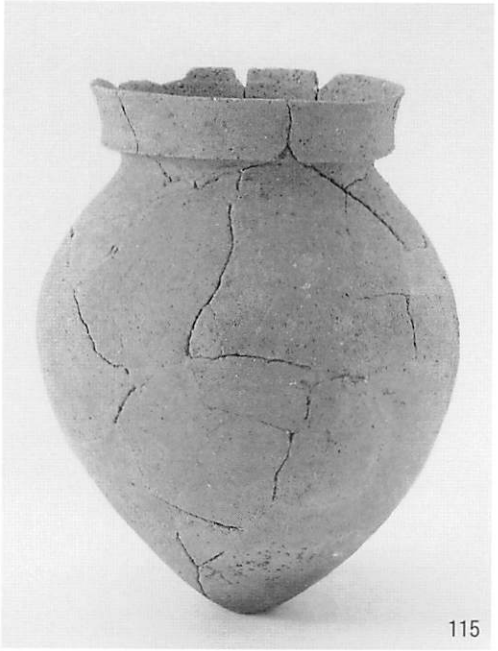
出土遺物５　弥生時代～古墳時代初頭⑤

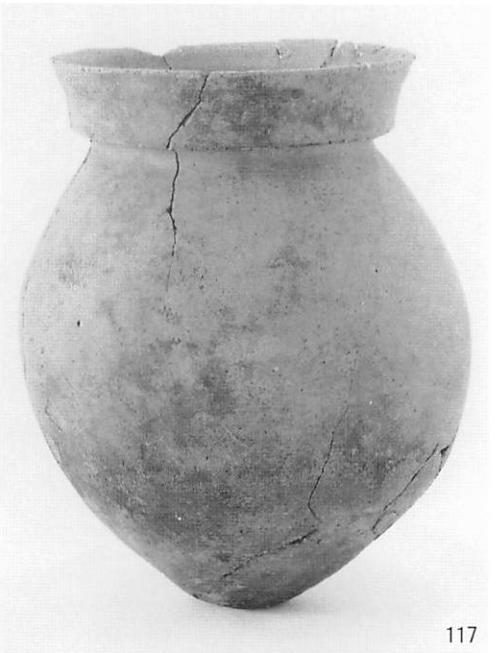




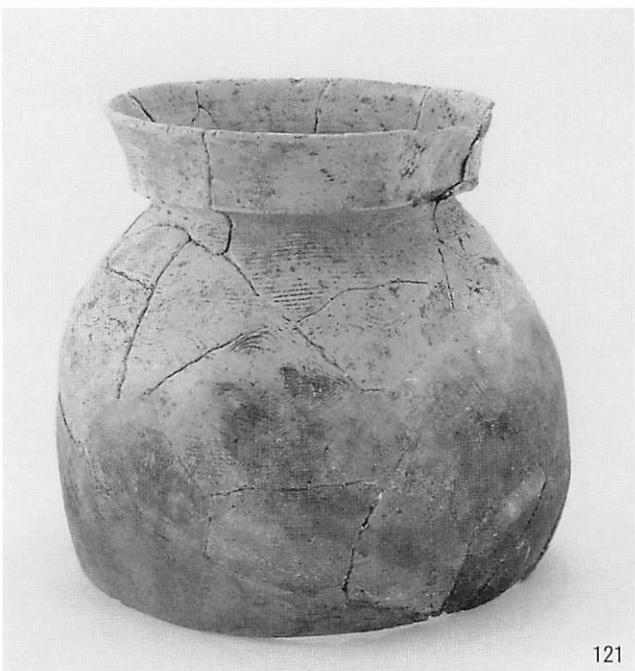
出土遺物６　弥生時代～古墳時代初頭⑥



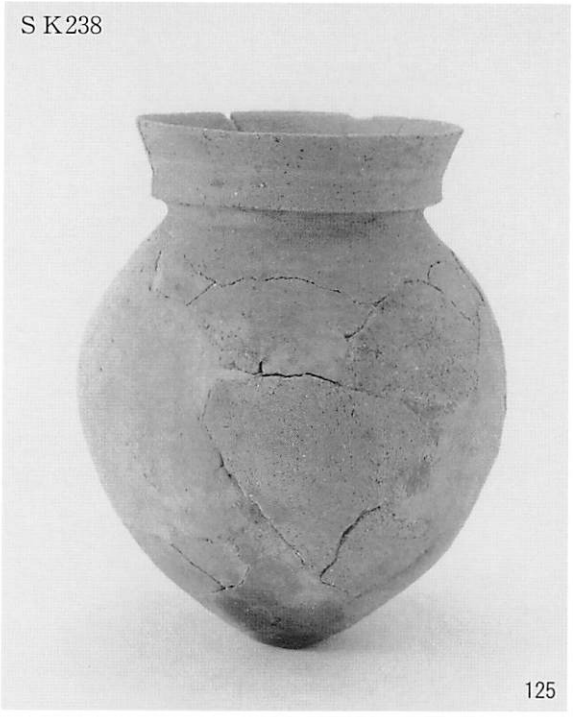




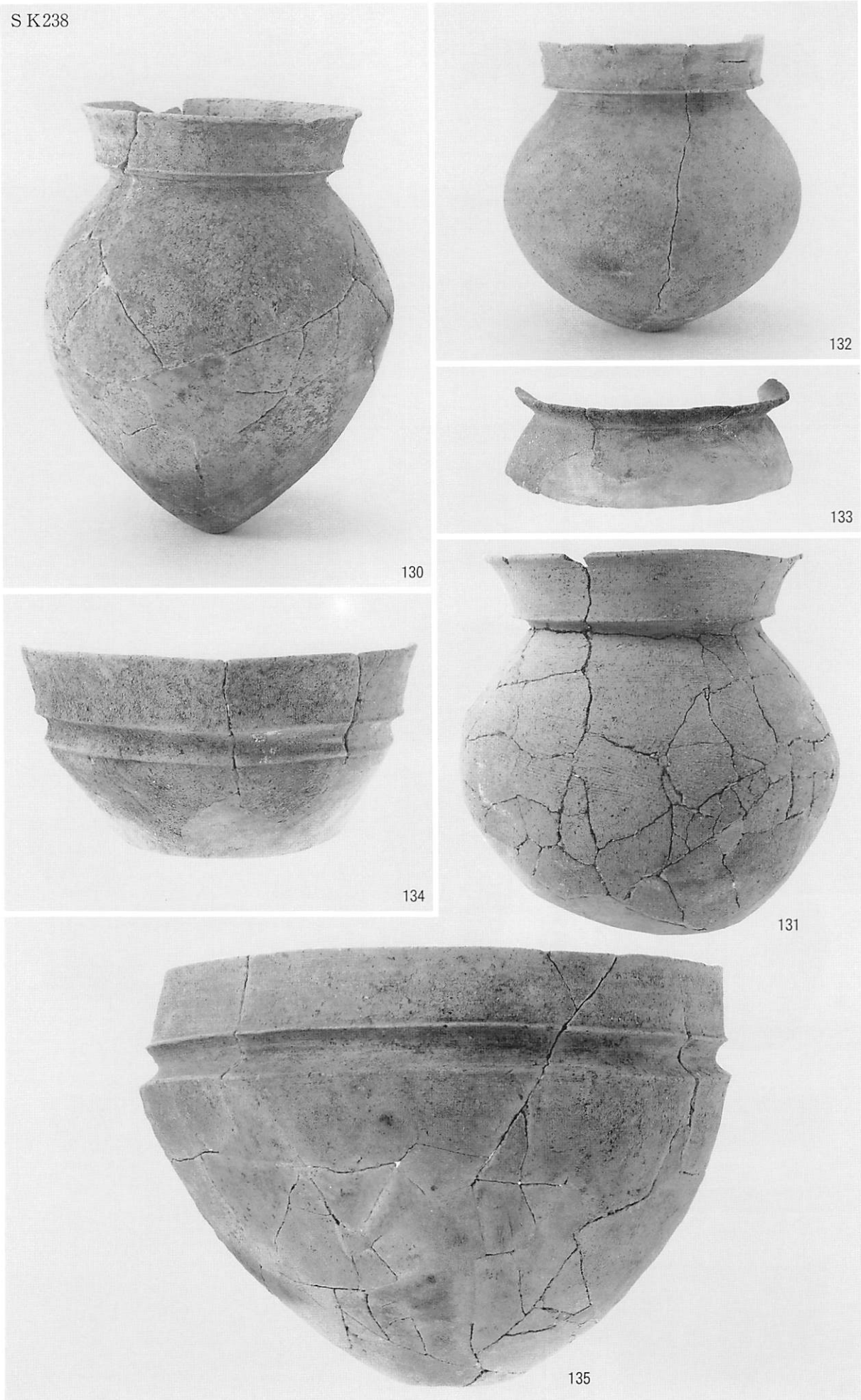
出土遺物７　弥生時代～古墳時代初頭⑦



出土遺物８　弥生時代～古墳時代初頭⑧

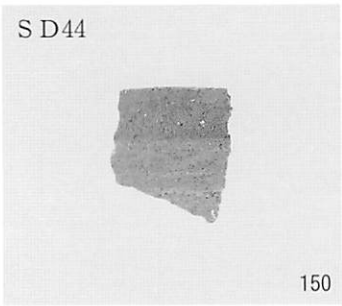


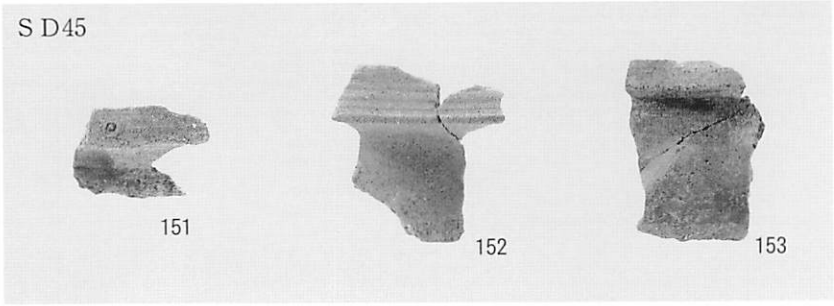
出土遺物９　弥生時代～古墳時代初頭⑨

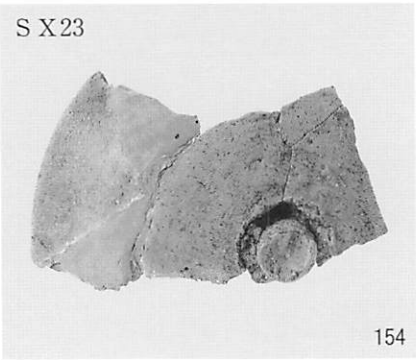


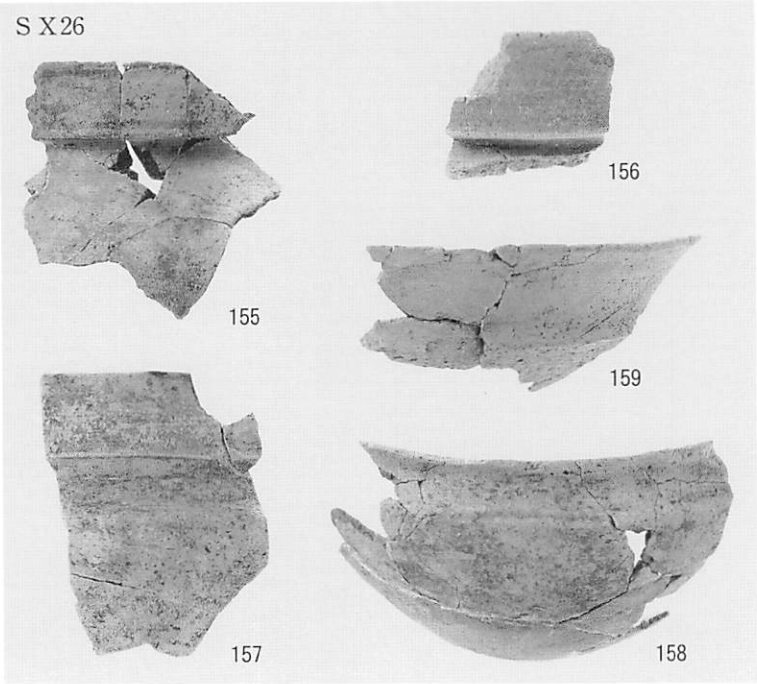
出土遺物10　弥生時代～古墳時代初頭⑩

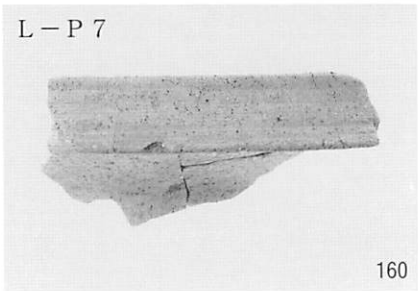
出土遺物11　弥生時代～古墳時代初頭⑪

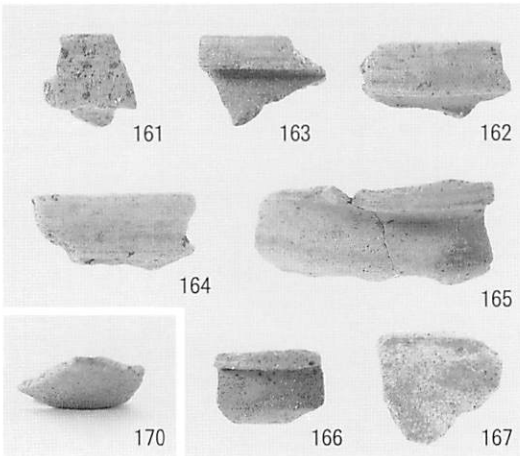


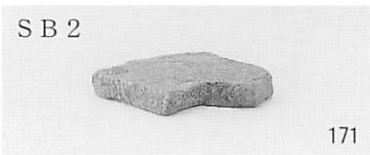


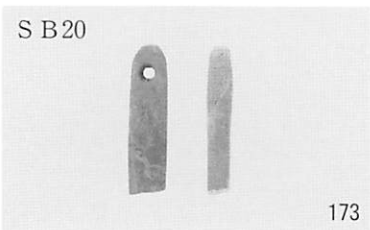




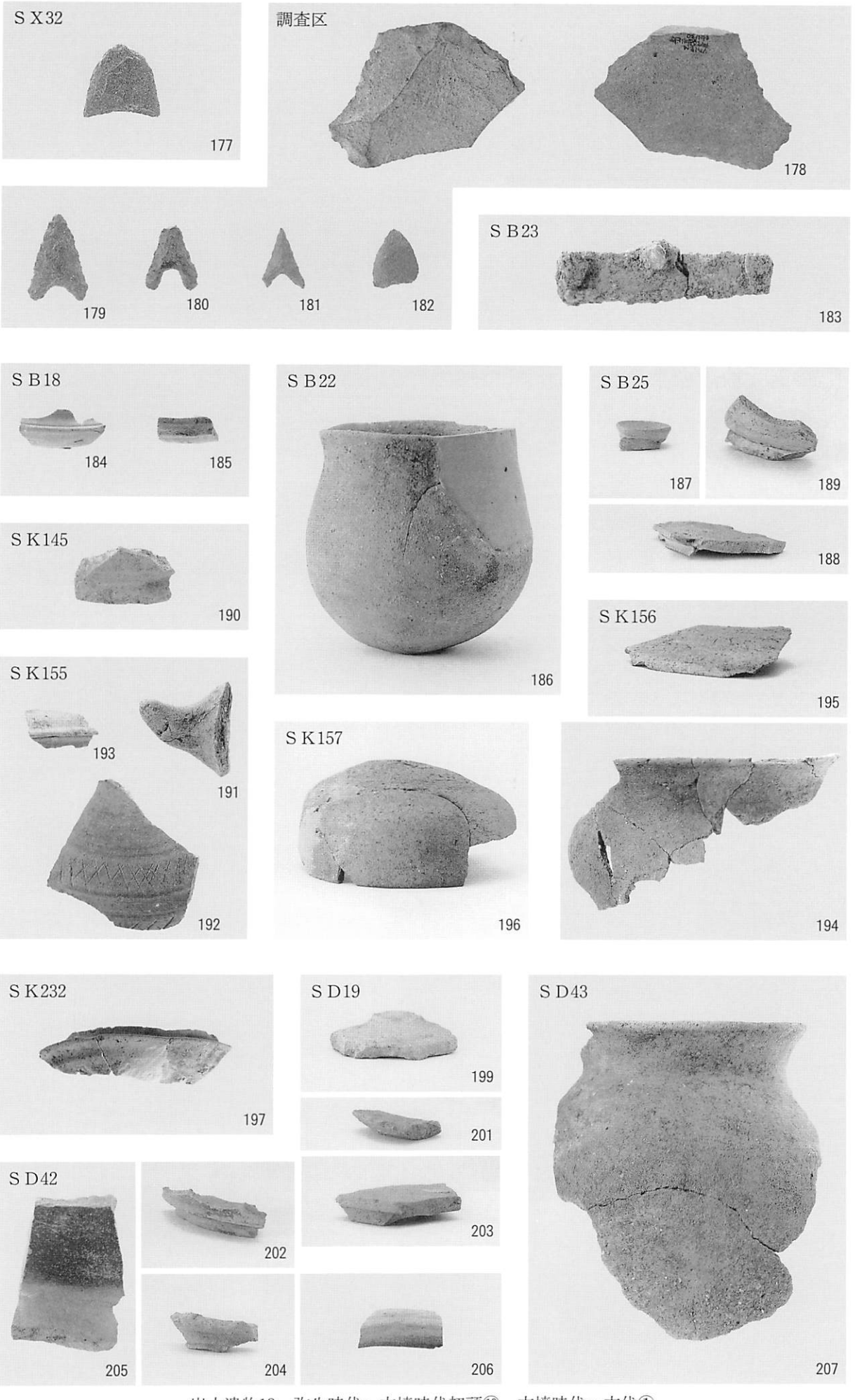




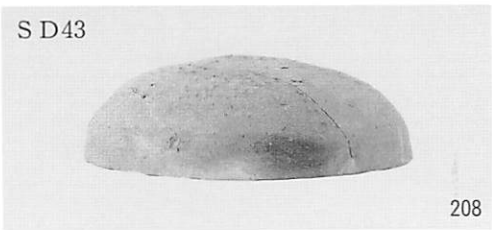


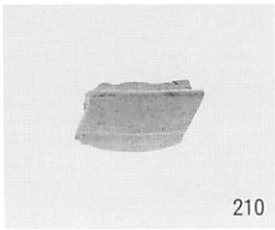


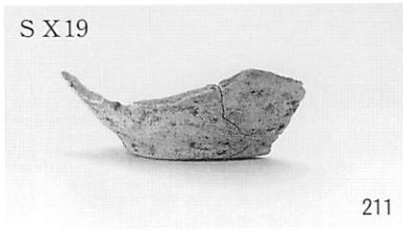
出土遺物12　弥生時代～古墳時代初頭⑫

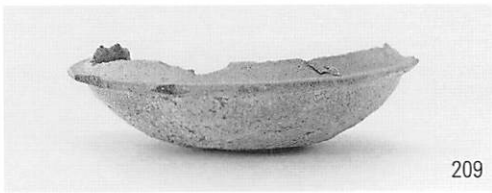


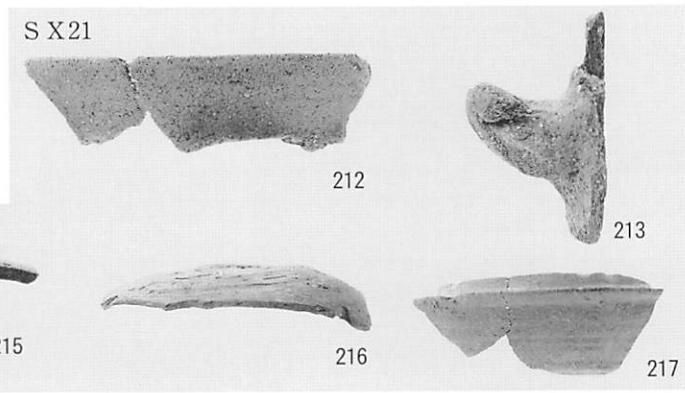
出土遺物13　弥生時代～古墳時代初頭⑬，古墳時代～古代①

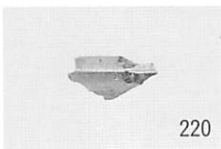


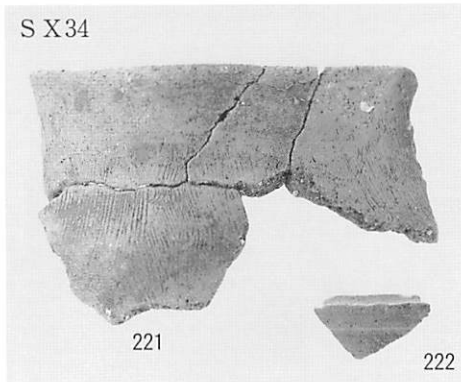


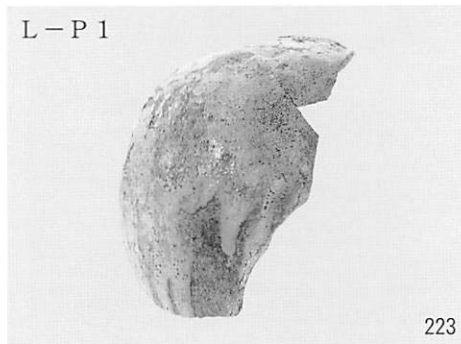


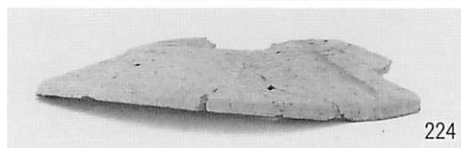


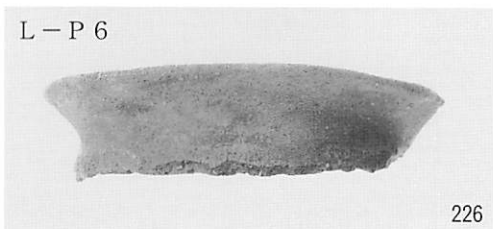


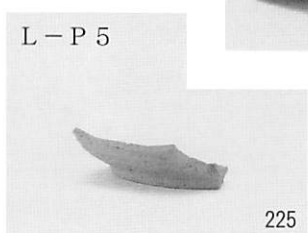


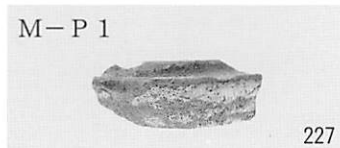










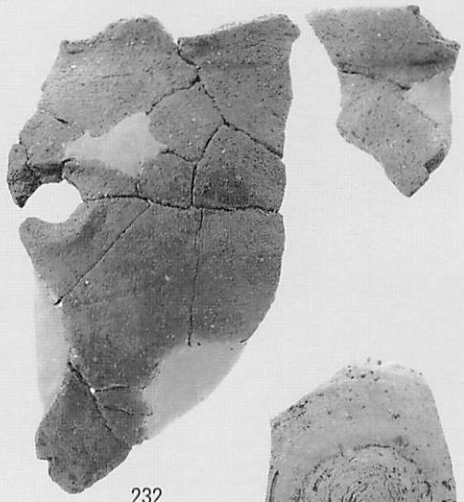


出土遺物14　古墳時代～古代②

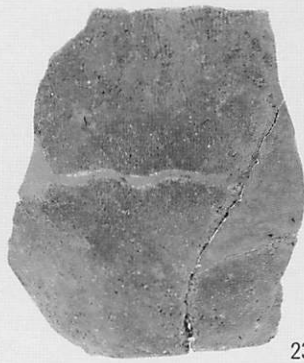
調査区

230

231

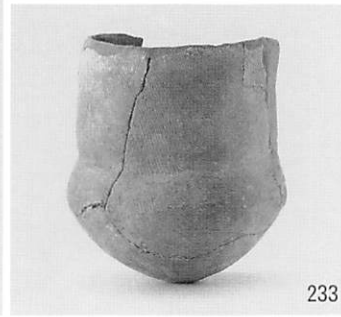

232

237


234

228

229


233

235

S B25

238

S K240

239

S X21

240

調査区

241

243

245

247

S K134

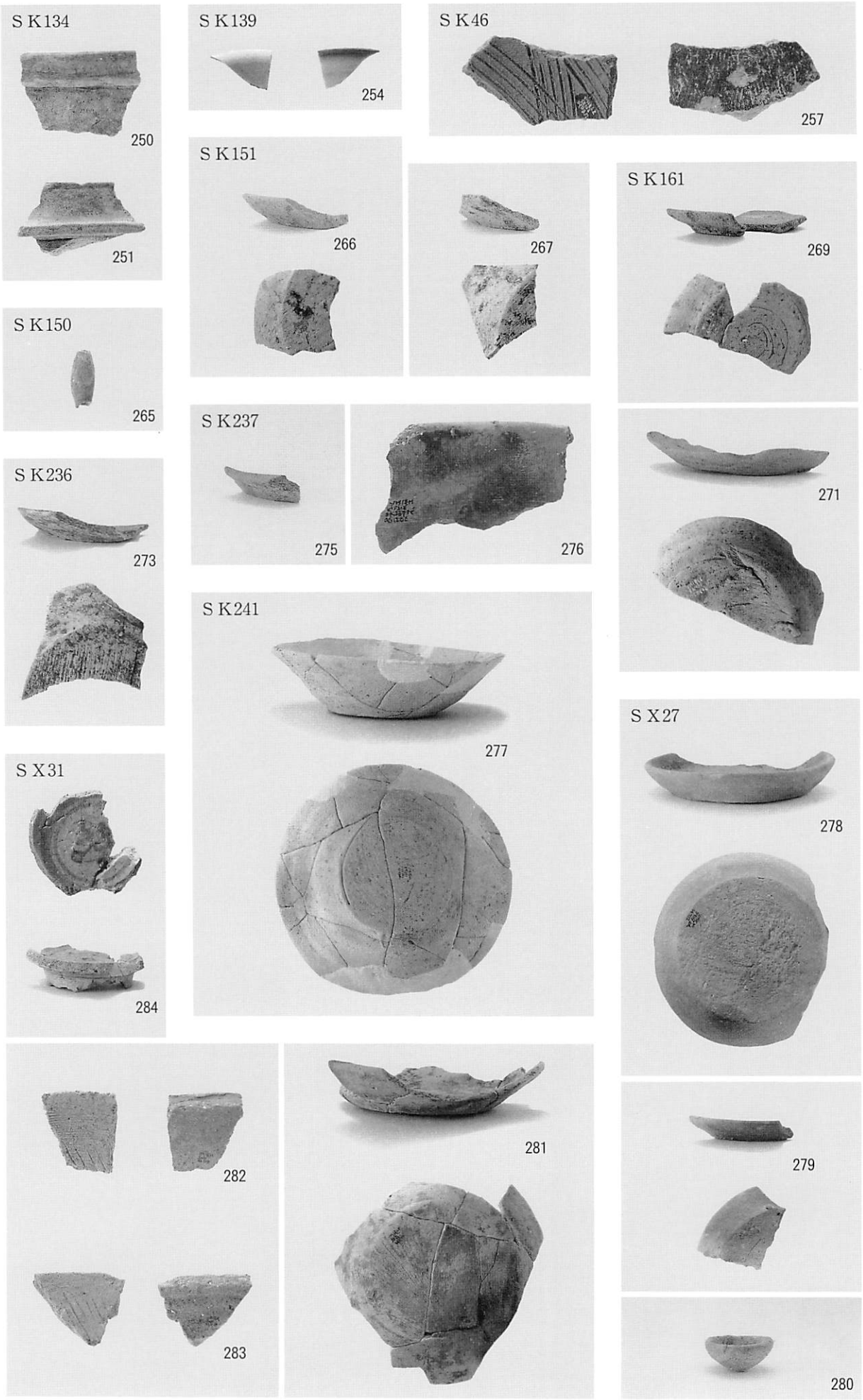
242

244

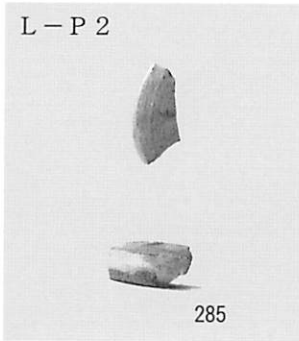
246

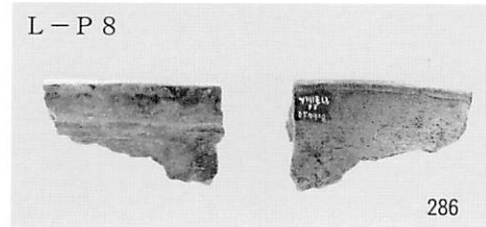
248

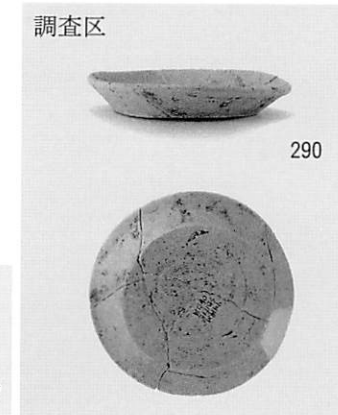
出土遺物15　古墳時代～古代③，中世①


S K134
250
251
S K139
254
S K46
257
S K151
266
267
S K161
269
S K150
265
S K237
275
276
271
S K236
273
S K241
277
S X27
278
S X31
284
282
283
281
279
280

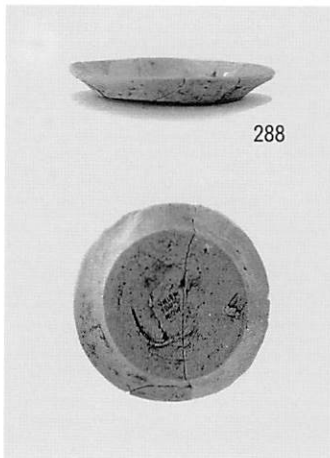
出土遺物16　中世②

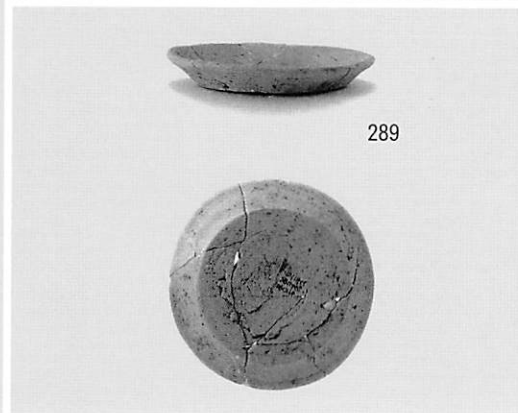

L－P２
285

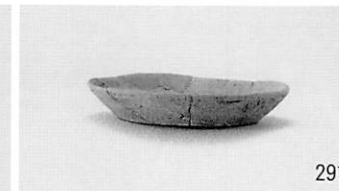

L－P８
286


調査区
290

287

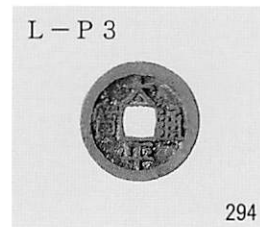

288

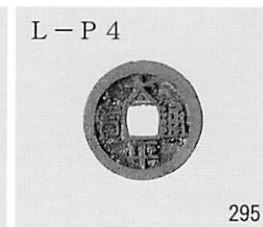

289

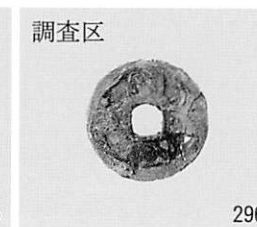

291

292

ＳＫ236
293


L－P３
294


L－P４
295


調査区
296

出土遺物17　中世③

報 告 書 抄 録

ふりがな	そがわいちごういせき（える・えむちく）
書名	曽川１号遺跡（Ｌ・Ｍ地区）
副書名	一般国道486号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第31集
編著者名	岩本正二・古瀬裕子・渡邊昭人
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目８番49号　ＴＥＬ082-295-5751
発行年月日	西暦2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
曽川１号遺跡 （Ｌ・Ｍ地区）	広島県尾道市 御調町大町	34205	34441- 150	34° 31′ 18″	133° 09′ 52″	20050711 ～20051007 ・ 20060915 ～20061222	1,718 （Ｌ地区） ・ 2,251 （Ｍ地区）	一般国道 486号 道路改良工 事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
曽川１号遺跡 （Ｌ・Ｍ地区）	集落跡	縄文～中世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝 性格不明の遺構	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 瓦質土器 陶磁器 石鏃・砥石 摘鎌・鉄斧など	弥生時代後期末葉（庄内式併行期）から古墳時代初頭の貯蔵穴から土器が多量に出土。良好な一括資料。

要約	御調川南岸の南から北へ延びる丘陵裾部に位置する縄文時代から中世，近世から現代にかけて断続的に営まれてきた集落跡。調査の結果，竪穴住居跡22軒，掘立柱建物跡２棟，土坑41基，溝状遺構７条，性格不明の遺構10基のほか多数の柱穴を確認した。竪穴住居跡の時期は弥生時代から古墳時代，掘立柱建物跡の時期は古代と中世，土坑の時期は縄文時代から中世で，溝の時期は古代である。

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第31集

曽川１号遺跡（Ｌ・Ｍ地区）

一般国道486号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日　平成22（2010）年３月31日

編　集　財団法人　広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室

〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目８番49号

ＴＥＬ(082)295-5751　ＦＡＸ(082)291-3951

発　行　財団法人　広島県教育事業団

印刷所　鯉城印刷　株式会社